
機動戦士ガンダム ZEON'S SOLDIER

式本差し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム Z E O N ' S S O L D I E R

【Nコード】

N0929H

【作者名】

式本差し

【あらすじ】

宇宙世紀0079にジオン公国は地球連邦政府に宣戦布告。そのことを機に新兵器モビルスーツを使った戦争が始まった。のちに一年戦争といわれる連邦とジオンの戦争である。これは一年戦争を戦う一人のジオン兵の物語である。

ジオンサイドから見ただけでなく、マニアックなキャラクターやMS満載でお届けする新たな一年戦争を書いていきます。

またこの物語の主人公と交戦した連邦軍のキャラクターの話も書いているので、連邦ファンの方にも少しは楽しんでいただけるかと思

います。

注) 検索によく引つかかるように原作名を変更しました。

実際はゲームやコミック、小説にしか登場しない、もしくは設定し
が存在しない機体、キャラクターが多数登場します。

一年戦争に関する知識を多量に要求することをご了承ください。

プロローグ：開戦に到るまで（前書き）

キャラクター紹介

ローエン・ガルフ（男）

今作の主人公 23歳

常に冷静な性格（？）

しかし仲間思いであり殿軍などには積極的に志願する
他の軍人とは一線を画す発想で連邦軍を翻弄する

プロローグ：開戦に到るまで

人類が宇宙に移民するようになって既に半世紀が経った。

しかしそれは地球で養えなくなった人口を宇宙に放り出すという棄民政策だった。

人々が宇宙に造った人工の土地 スペースコロニー

そこで地球を追い出された人々は生活していた。

しかしコロニーに自治権は無く地球連邦政府から選ばれた人間が統治していた。

そんな生活を改善したいと思うのは人として当然のことでありコロニーの独立運動は激しさを増していた。

そして宇宙世紀0058

地球から最も遠いスペースコロニー群がジオン共和国を名乗り独立を宣言 これに対して地球連邦政府は翌年から経済封鎖などで圧迫両者の関係はより険悪なものとなっていった。

宇宙世紀0068

ジオン独立の父、ジオン・ズム・ダイクンが亡くなる。デギン・ソド・ザビが次期首相に就任

宇宙世紀0069

国号がジオン共和国からジオン公国に改められ、デギン・ソド・ザビが公王となる。

ミノフスキー粒子が発見されたのもこの頃であり、潜在的な戦争は既に始まっていた。

宇宙世紀0078

国家総動員令が発布され、戦争の機運が最高潮に達する。

そして独立宣言から20年余りを経た宇宙世紀0079

ジオン共和国は名をジオン公国と改め地球連邦政府に独立戦争を仕掛けた。

後に『一年戦争』として歴史に名を残す、人類史初のMSを用いた戦争である。

これは一年戦争をMSパイロットとして戦い抜いたジオン公国軍の一人の兵士の物語である。

プロローグ：開戦に到るまで（後書き）

小説初投稿です。あまり叩かないで貰えると嬉しいですよ。意見、リクエスト（どの作品を出してほしい）など良かったらお願いします。

第一話：初陣 ルウム戦役

宇宙世紀0079 1月15日 サイド5 ルウム宙域

コロニー落としによる、地球連邦軍本部『ジャブロー』壊滅作戦、

『ブリティッシュ作戦』が失敗。

ジオン軍は二度目のコロニー落としを敢行すべく、サイド5 ルウム宙域に集結していた。

この情報を受けて、連邦軍艦隊も総力を挙げて出動し両軍の艦隊がぶつかり合うこととなる。

人類史上初の宇宙艦隊決戦が始まるうとしていた。しかしそれは宇宙艦隊決戦とは名ばかりでこの決戦の帰趨を決めるのは優秀な戦闘艦ではなくMSという新兵器であった。

ムサイ級軽巡洋艦『メドガーエバース』 MSパイロット待機所

2人の若い男が、そこで宙を漂っている。

実際は出撃命令を待って待機しているのだが、とてもそうは見えない。

「暇だな、出撃命令はいつ来るのかねえ」

男のうちの1人が、そんな疑問をもう1人の男に投げかける。

しかし、質問された方の男は答えず、独り言のような格好になっってしまう。

質問をした方は少し怒り気味に、

「無視するなよ」

と言い、部屋の壁を蹴って相手に向かう。

男2人が接触するまさにその時、部屋のドアが開いてもう1人の人物が現れる。

その人物は扉が開ききると同時に、彼らが待っていた言葉を発した。

「ローエン・ガルフ軍曹、アーノルド・シュタイン曹長、もうすぐ出撃だ。出撃前の最終ブリーフィングを行う。その後モビルスーツにて待機」

「はっ、了解です」

先ほどの質問に答えなかった青年、ロウは即座に男性の呼びかけに敬礼とともにそう答える。

「了解つす、少尉殿」

ロウに詰め寄った青年、アーノルドは宙に浮いたままダルそうにそう応える。

そして2人は部屋に来た人物と共に、ブリーフィングルームへ向かう。

ロウ達がブリーフィングルームに到着すると、中隊長の「これで全員だな、最終ブリーフィングを始める」という言葉と共に、その場所にある一番大きなモニターに作戦指揮官の顔が映し出される。

ミノフスキー粒子の影響か、傍受している通信を映している画面に砂嵐が入る。

それでも音声は明瞭に聞こえ、それほど問題は無いように感じられた。

「我々は友軍艦隊と交戦中の敵艦隊へ奇襲をかける。連邦の無能どもにモビルスーツの圧倒的な強さを見せ付けてやるのだ！初陣の者は無理をするなよ。訓練通りにやればいい。第1〜第4小隊は敵艦隊を叩け。第5、第6、第7小隊はこれを援護、敵戦闘機部隊を撃滅し作戦を支援せよ。作戦説明は以上だ、健闘を祈る」

矢継ぎ早に繰り返される命令、しかし、ロウ達が事前に聞かされていたものとはほとんど同じだったので、

理解にそれほど時間は要さなかった。

ブリーフィングが終了し3人全員がモビルスーツデッキに向かう。

モビルスーツデッキには先に小隊長が到着していて、彼はロウ達を

気遣って声をかける。

「大丈夫だ、落ち着いてやれば簡単だ。間違っても死ぬんじゃないぞ」

「自分はまだ死ぬ気はありません」

聞く者が聞けば生意気にも聞こえる言葉、だが彼は笑って受け流し、言葉を続ける。

「それでいい。その落ち着きと余裕があれば大丈夫だ。シュタイン曹長も」

「ハイハイ、そういう説教は聞き飽きましたよ」

その短い会話の後、3人ともが各々に割り当てられたモビルスーツに向かつていった。

モビルスーツに搭乗し機体の最終チェックを手早く行い、起動させる。

小隊の全員がモビルスーツに乗り込むとブリッジのオペレーターが口達に出撃命令を伝える。

「第七中隊、第五小隊出撃。1番機から3番機の順に発進してください」

「了解！1番機、ケイス・デイル、出撃する！」

「2番、アーノルド・シュタイン、出るぜ」

「3番機、ローエン・ガルフ、行きます！」

艦隊から多数のモビルスーツ『ザク』が、漆黒の宇宙へと駆けて行った。

モビルスーツ『ザク』 この戦争をどこか未来的でありどこか原始的にした兵器 ミノフスキー粒子という、レーダー波を始めとする電波を無効化する物質の発見により、人類の戦争は有視界戦闘へと先祖返りするとジオン軍は予測し有視界戦闘用の人型兵器 モビルスーツを開発、実戦投入した。機体のカラーリングは緑一色、顔は単眼モリアイといういかにも兵器な風体であった。原始的というのはザクの

武装であり、ドラムマガジンという古い方式のマシンガンと、ヒートホークという斧だった。

（連邦軍も開発していたようだが、実戦投入に間に合わなかったようだ。）

「なあ、ガルフ」

「何でしょう、シユタイン曹長？」

「まず、その呼び方やめる。久々に会った幼馴染だろうが」

ロウとアーノルドは10に満たない幼い頃からお互いを知っていたが、彼らの幼い頃の関係といえば、自分勝手だったアーノルドの暴走をロウが止める、といったもので、当然ロウのほうに良い思い出はあまり無かった。

だからジオン軍で偶然の再会を果たしても、ロウはアーノルドと距離を置くようにしていた。

しかし、作戦中にそんな私情を挟む訳にはいかないと思ったロウは、あくまでジオン軍人、ローエン・ガルフ軍曹として答えた。

「曹長、私語は慎んでください。作戦中です」

「なあ、お前俺のこと忘れてないか？」

「なら昔のよしみで忠告しといてやるが、口数の多い兵士は長生きしないぞ」

昔の関係の時の口調で、アーノルドを窘めるロウ。

対するアーノルドの返答は

「チツ、つまんねー奴」

という、ロウの言葉が意味を為さなかったことを示すものだった

「2番機、私語を慎め。3番機も」

そこに隊長が割って入る。この不毛なやり取りを終わらせたかったロウにとっては渡りに舟であった。

隊長の注意が功を奏したのか、それ以後は戦闘宙域に入るまで誰も何も言わなかった。

(アーノルドは不機嫌そうな顔をしていたが)

数分後

多数のザクが連邦軍艦隊へと到達し、それらに対して攻撃を開始した。

しかし、ロウ達の攻撃目標は大物である連邦軍艦隊ではなく宇宙戦闘機隊である。

ロウの機体の正面モニターに「WARNING」と小さく表示される。ミサイルの接近を示すものだ。

ザクを操作してミサイルを回避し、さらにマシンガンで敵機を撃つ。5発ほど放たれたザクマシンガンの弾丸は1発だけ命中する。が、それで充分だった。

120ミリという、戦闘機相手には大きすぎる弾丸は、敵機にしっかりと致命傷を与えていた。

(1機撃墜！)

ロウは心の中でそうカウントし、初撃墜の喜びに震える。

「セイバーフィッシュなんかで、ザク相手にまともやり合っから！」

ロウは気分を高揚させ、無意識にそんなことを言う。

「油断するな、軍曹」

隊長の言葉でロウは気を取り直し、次の敵機へと自機を向ける。

敵はかなり接近しすれ違いざまにロウのザクに向けてミサイルを撃ってきた。

ロウのザクは飛んできたミサイルをシールドで防ぎ、後ろを向いて敵機を撃つ。しかし外れた。

「なかなかのパイロットだ。しかし、そんなものトリアーエズでは！」

続けて敵の進行方向に向かってマシンガンをばら撒く、その弾丸の

雨を避けきれず爆散してゆく機体。

(2機目、撃墜)

3機目の機体を見つけると同じ様に敵機の進行方向に弾を撃つ。命中弾は無かったようで、敵機は相変わらず直進を続けている。敵機はこちらに気付いていないかのよう進路を変えなかった。

「どうするつもりだ？奇襲に遭った連邦軍艦隊の救援に行くのか。それとも……。どちらにせよ味方を見捨てるような奴にくれてやる慈悲はない！」

そう言うと、ザクを敵機の後ろに付けてマシンガン撃つ。今度はしっかりと命中し、敵機は爆散した。

(これで3機目)

3機目の敵機を撃墜したとき、突然ロウ機の真後ろで爆発がした。

「な…、なんだ！？隊長！」

「後ろからは敵が襲ってこないとも思ったのか？連邦軍はそんなに優しい奴らじゃない！」

隊長がロウ機の後ろから迫っていた敵機を、撃破してくれたのだった。

ロウの機体に当てぬように、MSよりずっと小さい敵の戦闘機だけを撃ち抜く。

隊長にかなりの高等技術を見せられ、思わず息を呑むロウ。あるいは運良く成功しただけか。

「敵を追いすぎだ…、チツ、曹長、後ろだ！」

「うわっつ！すまん隊長」

そんなことをロウが考える前に、隊長はもうひとりのメンバーに指示を出しつつ戦闘を再開していた。

「気をつける、2時方向から新手だ」

「了解」

隊長が示した目標は、固まって編隊行動をとっていた。3機のモビルスーツが横並びになり、マシンガンで一斉射撃を行う。

しかし、全ての敵機を墜とせたわけではなく、後衛だったであろう

部隊がさらに攻撃を仕掛けてきた。

反撃すべく引き金を引く。

カチッ

弾切れの音がザクの腕を伝ってコクピットに、そしてロウの耳に届く。

「こんな時に弾切れか。予備弾装を…、ツッ!!!」

そのことを見計らってか、敵機が多量のミサイルを撃ってきた。

それはロウにとって突然のことだったので対処が遅れ、多くは回避したものの脚部に被弾した。

その間に敵機はロウ機の眼前まで迫っており、それでもなお速度を緩めずに突っ込んできた。

「特攻か！」

(回避行動は間に合いそうに無い)

ロウはそう判断し、咄嗟にザクの右手でヒートホークを抜き、それで質量に任せて敵を叩く。

敵機は撃破されたものの、彼のザクの目の前で大規模な爆発がおきた。

右肩のシールドで防ぐが耐え切れなかったようで、右腕は破壊され推進機器に異常をきたし、彼のザクは行動不能になった。

「おい、軍曹。ガルフ軍曹！」

隊長の言葉を聞きながら、ロウの意識はここで一旦途切れることになる。

その後しばらく、彼は宇宙を漂うことになる。

数分後

ロウは目を覚まして状況を確認する。

どうやら結構な距離を流されたようで、彼の眼は遠くに戦闘の光を

捉えていた。

彼は周囲の確認を行うと、まだザクのコクピットの中であることに気付く。

が、先ほどとは違いモニターの多くが正常に作動していない。続けて彼は、自分自身の体を見る。

軽傷ではあるものの、腕や足など多くの箇所が赤く染まっていた。

「しまったな…、不覚だった。まさか墜とされるとは」

そんなことを言ってる場合ではないと考え、状況の確認を続ける。

連邦軍の艦艇がビームを撃っている光景がザクのコックピットのモニターに映し出される。

(少し遠いか、見えにくいな)

そんなことを思いながら、彼はコクピット内のコンソールを操作する。

すると、モニターの映し出す世界は狭くなり、対照的に映っていた物体は大きくなる。

ザクのカメラの倍率を上がったことで、彼の目にその状況の詳細が映った。

「損傷したマゼラン級と、あれはなんだ？」

ロウの目が捉えたその光景の中には、細長い物体がマゼランと相対するようであった。

直後 細長い物体(大砲だったらしい)から巨大なビームが放たれ、マゼランをえぐるように破壊した。

その瞬間、ロウの脳裏に一匹の大蛇が浮かんだ。

(連邦軍を喰らう大蛇、か。頼もしいな)

ロウはその後、発光弾を持ちながら味方の姿が見えるのを待った。

ロウは近くにいた艦艇に、無事に救助された。

救助された艦隊で作戦成功の報せを聞くと、傷と疲れと安堵感で、その場に倒れこんでしまった。

その後 サイド3 病院内

「へえ、生きてたんだお前。まっ、俺はどっちでもいいけど」

「ガルフ軍曹、すっかり傷は治せよ。まだ戦争は……」

隊長は、何か言いたくないことがあるらしく言いよどむ。が、やがて決意したようにその心中を吐き出す。

「始まったばかりだ」

「始まったばかり、か」

ロウはその言葉を噛みしめるように繰り返し、そして1つの疑問を隊長に投げかける。

「隊長はこの戦いが長く続くと思っているのですか？」

「長くなる。軍部の予想通りに戦争が進むとは、思えないからな」

「ルウムの結果は？」

「連邦軍を完全に撃滅した後、コロニーを落とす手はずになっていたのだが、手違いがあつてコロニーを落とす為のチームが先行しすぎて、戦闘に巻き込まれた」

「それで、コロニーは落とせず仕舞い。何やってんだか」

この後、南極条約という軍事協定が成立する。

しかしロウは、この条約を意外に思っていた。

ロウはルウムでの勝利やコロニー落としを交渉材料として地球連邦政府に降伏を迫るものだと考えていたからだ。

病院暮らして、レビル將軍の『ジオンに兵なし』という演説を聞けなかったロウには、当然の考えだった。

(そうなったとして、自分たち前線の兵にはあまり関係のない話だ)
(連邦にまともな条約を守ろうとする人間などいないだろう。それに、ジオンだって必要なら核兵器を使うことぐらい躊躇しないだろ

う)

そんなことを考えながら、ロウは病院での生活を過ごした。

ロウには退院後、地球降下作戦に参加せよ。との命令が下った。

「また戦いか。地球、重力が全てを狂わせる地獄。そうとしか思えない。何であんな所に……あんなところに何があるというのだ」

第二話：対MS特技兵（前書き）

今回は『重力戦線』が原作です。楽しんでいただけたら幸いです。蛇足とは思いますが前回の原作は『一年戦争秘録』です。書き忘れたので

第二話：対MS特技兵

宇宙世紀0079 4月10日 旧ブダペスト（ハンガリーの首都）

ここヨーロッパ戦線では降下したジオン公国軍と地球連邦軍との戦争が一ヶ月前から続いていた。

その戦線の一端を緑の巨人、否 モビルスーツ ザクが、2機並んで構えた銃を撃ちながら進軍していた。

本来MS一個小隊の編成は3機のはずだった。

が、この小隊に組み込まれていたもう1機のザクは、連邦軍の戦車の砲撃が命中し、戦線離脱を余儀無くされたのだ。

しかも残ったザクの内、1機も補給が間に合わなかったとかで補給部隊が所有していた旧式を宛がわれた。

ザク？と呼ばれる、大分前から生産されていたタイプだ。

MSでも相手にしない限り性能差など誰も気にしないが、それでも旧式機を使わされて喜ぶ人間は多くない。

現在行軍中の彼らには、斥候の任務が与えられていた。

敵である地球連邦軍にモビルスーツに対抗する有効な手段はないと考えていた彼らには、この時、連邦軍に敗北し隊が壊滅状態になるなどと想像できるはずがなかったのだ。

「2輜目撃破。敵部隊、猶も後退」

ロウは連邦軍との戦闘を続けつつ、余裕を持ってそう報告する。

どうやらMSでの戦闘に大分慣れてきたようで、初陣の時と比べる

とずっと落ち着いていた。

それに対し、隊長の返信は

「無理はせんでいいが、できるだけ叩け。しかし、モビルスーツに追われて逃げ回るだけの歩兵や、うろたえ弾しか撃たない戦車が相手では、張り合いがないな」

というものだった。

「隊長、歩兵なんかは無視した方がいいと思います。無駄弾が多くなりすぎます」

珍しく隊長に意見を述べるロウ。しかし、その意見はあっさりと切り捨てられる。

「何時から俺に命令できるようになった？それと歩兵を無視するのは、命を捨てるのと同義だ」

そう言われてロウは、ザクが撃破される原因の多くは、障害物に隠れてザクに接近し、至近距離から対戦車兵器によって攻撃を敢行する歩兵だというデータを思い出す。

「それもそうですね。つまらない事を言ってますいません。それより隊長、今日のノルマはどうなっているのです？」

「50キロ進出して敵を掃除しとけ。だよ」

ロウは命令の内容を少し考え、それから隊長に疑問を投げかける。

「でしたら、目標は既に達成しているのでは？」

「違う。鬱陶しいザクどもを追っ払ったら、もう今日は休むぞ」隊長も今度はロウの言葉に同意し、2人は最後の仕上げにかかる。

ロウのザクが敵戦車に狙いを定め引き金を引く。

敵戦車もそれに応えるように撃ち返してくる。ロウはその砲弾に対し、機体を左にステップさせて回避する。

敵戦車はマシンガンの弾丸が直撃し大破した。

「そんな戦車ではマシンガンをかわずなど不可能だ。当たるか、外れるか、というだけだ」

ロウがそんなことを呟いている間にも、敵の戦車部隊は休むことなく砲撃を続ける。

敵の砲撃でアラートが鳴る。

ロウのザクは回避行動をとるが、敵の射撃は正確であった。左肩のアーマーに砲弾が命中し、崩れ落ちる。

「やってくれる。だが、戦車だけでは！」

その戦車は後退せず、さらにロウのザクを狙って撃ち続けていた。

「静止射撃とは、殿でもやるつもりか？連邦にもなかなか良い心構えを持った奴がいるじゃないか」

ロウのザクは廻り込むように砲撃を避けながら、その戦車に近付き蹴りを叩き込む。

幸い敵戦車はもはや数えるほどしかなく、その砲撃を全て回避しながら接近することも難しくなかった。

「その心意気に免じて逃がしてやる」

ロウが呟いたその言葉が聞こえているはずはないが、彼の思惑通りに蹴り飛ばした戦車から2人の戦車兵が脱出する。

敵戦車は2輛残っていたが、既に砲を失い射撃ができない状態だった。敵は撤退のために煙幕を散布する。

「これで追撃は不可能か。まあいい。砲撃ができない戦車ぐらい、見逃したってどうということもない」

ロウがほとんどの敵を制圧し、そんな独り言を言っていると、隊長から通信が入る。

「チツ、ガルフ軍曹、こっちは多少敵が多くて手こずっている。余裕があれば援護を頼む」

「了解。すぐ向かいます」

ロウはザクのブーストを吹かして、指示通りに隊長機の元へ向かう。

ロウのザクが隊長機を見つけた時、5輛の戦車が左右から「右に2輛、左に3輛」隊長機を包囲し時間差での砲撃で絶間のない攻撃をしていた。

ロウはこの状況では不利と判断し、どうにか現状を打開すべく隊長

に通信を入れる。

「隊長、上から叩きましょう。このままじゃいいいです」

「そのようだな」

隊長も同意見だったようだが、左右に2つの敵戦車部隊が展開していたため、一方を叩いている間にもう一方の隊に撃破されることを懸念し、ロウの到着を待ったのだ。

「行くぞ、左の敵をやれ！」

「了解！」

ロウは条件反射で応えてしまったが、内心では

（隊長として敵の多い方を部下に押し付けるといのは、如何なものか。それは本隊と合流してから、隊長に問い詰めよう。今は敵を叩くことに集中しなければ）
などと考えていた。

2機のザクは同時に空へ飛翔した。そして空中から戦車部隊に向かってそれぞれマシンガンの弾をばら撒く。

「当たれ！」

先頭に行く敵戦車に命中して、爆発が起こる。

（1輜撃破）

そして残る敵に牽制射を加えつつ着地、しかしその牽制射も長くは続かない。

モニターの表示を見ると残弾がゼロになっており、弾倉の交換を促すサインが表示されていた。

しかし敵は砲撃の手を休めることはなく、ロウのザクに『弾倉を交換し、弾を補充する』という選択肢を与えぬようにしていた。

「まずいな。一か八かだ！」

ロウはザクをフルパワーで走らせて敵戦車との間合いを詰め、さつきと同じように前に出ていた戦車に蹴りを入れる。

蹴り飛ばされた1輜は地面を転がりもう1輜いた戦車へと激突する。ロウの咄嗟の思いつきが功を奏し、蹴りの一撃で2輜の戦車を無力

化することに成功した。

(これで3輜。隊長の援護に……)

ロウは自分のノルマをこなし、隊長のほうを向く。

しかし、その行動は取り越し苦労に終わり、空中からの射撃で2輜とも破壊したらしかった。

ロウの到着時には5輜いた戦車のすべてが、無残な鉄の骸と化していた。

「弾切れだ」

隊長が苦笑しながら、自分がかかなり危うい状態にあったことを暴露する。

「こつちもです」

同じく苦笑するロウ。

「運が良かったな、お互いに。それにしても戦車でサッカーとは、そんな高等技術、何処でならった？」

ロウはさっきのことを思い出し、苦笑いの表情を更に強めて言う。
「単なる思い付きと賭けです。こつちも上手くいくとは思ってませんでした」

「普通は謙遜するところだろ。まあいい。いい腕だよ、おまえは。本隊と合流して補給と休養をとる。それまで警戒態勢」

「了解」

2機のザクが、腰に備えてある予備のマガジンを手に取り、マシンガンの弾を補充する。

敵が片付いたようなので、ロウ達はモビルスーツを止めて休憩することにした。

(こうしていると3ヶ月前の初陣を思い出すな)

『赤い彗星』や『黒い三連星』がその名を知らしめたサイド5ルウムの戦闘。

隊長に助けられながら戦ったのに、結局戦闘機4機しか墜とせなか

った。

大した戦果も出せずにザクを失い、負傷して、回収されるまでに見たあの光景。

エネルギーの塊にぶつかり、えぐられるように破壊されたマゼラン級戦艦。

その瞬間、何故か脳裏に刻まれた大蛇。あれはなんだっただろうか。

爆発音

ロウの思考は爆音によって打ち消され、それが戦闘開始の合図となる。しかし敵らしきものは、ザクからは確認できない。

「くそっ！AMSMか！」

「隊長！？」

ロウが見ると隊長のザクが被弾していた。

「対MS特技兵だ。気をつけ……」

言い終わる間もなく、彼のザクに吸い込まれるように数発のミサイルが命中する。隊長機は完全に行動不能となった。

隊長機の援護のためロウのザクがマシンガン撃つ。その弾丸は連邦軍のジープに命中し、人や機材が吹き飛んだ。

敵のミサイルが、今度はロウのザクを目掛けて、再び飛んでくる。

3発のミサイルがザクから確認できたが、ロウは1発目は困だと判断し、最小限の動きで紙一重でかわし、2発目の被害を最小限に抑える。

が、こちらも困だったらしく、3発目のミサイルがロウ機の持っていたマシンガンを破壊する。

（敵の指揮官は優秀だな。隊長を拾って撤退するか……）

ロウは撤退し本隊と合流しようと考え、隊長機に通信を送る。が応答がない。

まさかと思い、横たわる隊長のザクに生命反応を確認する

そのまさかだった。隊長機からは生命反応は確認できない。

(隊長を失うとは……。ならば弔いを！)

ロウは撃破された隊長機のザクからマシンガンを拾い、敵に接近すべくザクを走らせる。

ザクを接近させつつ、逃げ出すジープに対し、容赦無く銃弾を叩き込む。

まずは真っ先に動き出したジープに3発撃つ。着弾の爆風でジープは吹き飛ばされ、残骸が1つ転がる。

次のジープを見つけ、その速度に照準を合わせて、撃つ。

今度もしっかりと直撃し、2つ目のジープの残骸が出来上がる。

「次！」

3台目のジープは後退しつつも車載の機関銃で撃ってきた。しかしモビルスーツ相手では豆鉄砲だ。

相手もそのことは理解しているはずだが、それを撃ってくることに、ロウは強い憤りを覚えた。

「馬鹿にするな！」

そのジープにマシンガンを乱射する。なかなか当たらず、5発使ってやっと撃破した。

さらに乱射したまま別の車両に砲口を向ける。4台目を撃破。

しかし、弔い合戦のつもりでやっていた快進撃も、ガチツという音と共に終わりを告げる。

使用していたザクマシンガンがジャミングを起こし、マシンガンとしての意味をなさなくなっていたのだ。

「今度はジャミングか！ならこれでも！」

動かなくなっただけで役立たずとなったマシンガン、その弾倉を取り外し、逃げ遅れたジープに投げつける。

これに押し潰され、また1台ジープが破壊される。

全ての対MS部隊が撤退を始めたと考えていた自分はここで思わぬ反撃を受ける。

ミサイルにより再びマシンガンを失ったのだ。

残念なことにロウの乗っているザクには、Sマイン（対人兵器）は付いていなかった。

補給部隊から借りてきたのだから、無理からぬことだった。

もはや対抗手段を失くしたロウに撤退以外の選択肢は残されていないかった。

隊長の仇を睨みつつ、その場を去るしかなかった。

本隊へと合流すると、ロウはすぐに司令部に報告に向かった。敵の対MS兵器のこと。隊長を失ったこと。

報告が終わった後、明日は我が身かも知れないと思いつつ、隊長の冥福を祈った。

「隊長を失ってしまった。自分はこれからどうすればいいのか……」

第二話：対MS特技兵（後書き）

出してほしい作品のリクエストとかも受け付けています。知らない作品であつても勉強してなんとか書く所存です。

この主人公、負けてばっかりだな。初白星はいつになるのか。

第三話：対MS特技兵SideEFF（前書き）

今回は前話を連邦軍視点から書いてみました。

重力戦線1話のベン・バーバリー中尉が主人公です。

きつと連邦側のリクエストにはこのような形で応えると思います。

第三話：対MS特技兵 Side E F F

地球連邦軍は敗走を続けていた。

ジオン軍が戦争を仕掛けてきてから、3ヶ月がたった。

しかし、ジオン軍が地球侵略を始めたのは、ほんの1ヶ月前だ。

にも関わらず、ジオン軍は圧倒的なスピードで地球の各所を攻撃、制圧したのだ。

その人類史初の宇宙からの侵略者の主力が新兵器のモビルスーツだ。18mの緑の巨人 ザク 戦車砲並みの威力の弾を連射し、我々の歩兵部隊、戦車部隊を圧倒し、各地で連邦軍を蹂躪していた。

連邦軍はこの状況に手をこまねいているわけにもいかず、対MS戦用の兵器、更には連邦独自のMSの開発が急ピッチで進められていた。

対MS重誘導弾『リジーナ』も対MS用の兵器の1つだ。

普通に手持ちサイズの対戦車兵器でザクを破壊しようとする、足元まで接近しなくてはならず、Sマイン（ザクに装備された対人兵器）の餌食になることが多々あった。

リジーナならば歩兵のMSに対する秘匿性を失うことなく、先制攻撃によりザクを破壊することができる。と説明書には書かれてあった。

が、実際は対戦車ミサイルに少し手を加えただけの物であり、開発室と戦場の理解度の違いが顕著に表れ、使う側は慣れるまでとても苦労するのだった。

運用者には対戦車ミサイルを運用していた部隊が選ばれ、彼らに転化訓練を行うことで、比較的早くに実戦投入できた。

彼らはザク・ハンターと呼ばれ、各地の戦場で戦い、散っていった。

宇宙世紀0079 4月10日

ヨーロッパでの戦局は連邦軍にとって、悪化の一途を辿っていた。戦線縮小を繰り返し、ジオン軍のザクによる攻撃から逃げるたびに戦死者、負傷者を出していた。

良い知らせといえ、偶然ザクを撃破したとかその程度のもだった。

1機撃破するのに四苦八苦する。しかしザクは量産されており、倒してもすぐにまた現れるのだった。

連邦軍の一部隊である第44機械化混成連隊大隊も例外に漏れず、敗走を続けていた。

その敗走の途中、物資輸送を主任務とした車両部隊とはぐれてしまった。

はぐれた部隊は、敵部隊の追撃を受けており早急に助けが必要だという。

第44機械化混成連隊大隊指揮官のコレマツタ少佐は敵の追撃を食い止め、できるだけ多くの兵力、物資、車両、航空機など一切の戦力を、後の反撃の為に温存したいと考えていた。

よって彼らに助けを送らなければならなかった。

しかしMSに対抗できなくては無意味であり、かつその物資に見合った規模の部隊でなくてはならなかった。

そこでバーバリー中尉率いる対MS特技兵小隊に、白羽の矢が立った。

「バーバリー中尉、今日呼び出したのは他でもない。君に新しい任務を与えるためだ」

「やれやれ、次はどんな任務ですかい？少佐殿。ま、だいたい察しは着きますがね」

「一呼吸おいてバーバリーは続ける。」

「我々対MS特技兵は3月中旬からこつち、働き詰めです。味方は全員逃げるばかり、苦し紛れの61式の砲撃も当たりやしない。」

連邦軍もモビルスーツを造ってりゃこんなことにもならなかっただろくに、俺らもこんなに……」

「中尉！」

強引にコレマッタが遮って、バーバリーの言葉に被せるように言葉を紡ぐ。

「中尉、君の愚痴を聞いてやるために呼んだ訳ではない」

地図を眺めながら意味も無く歩き廻っているコレマッタ。

「じゃ、さっさと任務の内容とやらを言ったらどうなんです！」

「相変わらず口の減らん奴だ。まあいい。君の新たなる任務はここから東180キロの地点に戦車部隊三個小隊と展開、そこにいるザク3機を撃破せよ。我々の同胞の救助のために」

「はあ、また味方が逃げるための時間稼ぎか。優しさのない職場だぜ」

そんなバーバリーの文句も気にせず、コレマッタは告げる。

「本日、〇八二〇より出撃し、敵を撃滅せよ。以上だ」

そんなやりとりがあつたのが4時間前、現在、バーバリー中尉率いる対MS特技兵小隊は目標地点に到達し、既に布陣も完了していた。「敵も味方も来ないか。まさか全滅したんじゃないだろうな？」その疑問にバーバリーの部下であるルイス曹長が答える。

「味方からの通信は入ってます。こつちに向かっていると」

「敵の情報は？」

「ザクが2機、内1機はパイプなしのこと」

「旧式か？珍しいな」

その報告とともに、部下に戦闘準備を始めさせる。随伴してきた戦車も命を得、その鼓動がうるさいほどだった。

「こちら第3分隊、味方車両部隊と敵部隊を確認。距離2300」

「わかった。ザクが1機か。全部隊攻撃準備。まだまだ。もっと引き

付けるぞ」

「臆病者は黙って見てな」

戦車部隊から無線経由で横槍が入る。その瞬間全車が色めき立ち、その強大な火力を敵のザクに向けて、叩きこもうとする。

しかし敵は簡単にその砲撃をかわす、もしくはシールドで受け流していた。

敵のザクが反撃にマシンガンを撃ってくる。運の悪かった一輛がその餌食になる。

「あの距離から当ててくるだと！」

戦車部隊の怒声混じりの声や指示が飛び交っていた。

敵に位置を知られるわけにはいかないので、バーバリーは不快な音の流れるそれを切る。

戦車部隊は敵を包囲しようとするが、その間にザクはトラックに銃弾を叩き込んでいた。

4 輛と 3 輛の編隊で、包囲しようとする。3 輛いた内の 1 輛が静止射撃を行う。

ザクは大きくジャンプしこれかわす。

そして、先行した 2 輛に目をつけ、1 輛を空中から撃ち抜き、一輛を着地のクツションにして踏みつけ、破壊した。

4 輛のほうにさつき静止射撃をしていた 1 輛が合流し 5 輛となり、またしても包囲戦を仕掛けた。

ザクは特に反撃もせず、逃げ回っていた。

戦車部隊はそのことについて、反撃の暇を与えていないと考え、止めを刺すために一層砲撃の手を強める。

しかし、バーバリーはそのことに関して楽観できずにいた。

「嫌な予感がする」

バーバリーがそう呟いてすぐに、その予感的中することになる。

もう 1 機のザクが現れたのだ。味方の報告の通り旧式の物だが、彼らにとって脅威であることには違いない。

そして戦車相手の MS の有効性は、たとえ旧式機であっても変わら

ない。

先程までの戦闘が茶番だったかのように、一方的にやられていく戦車たち。

撃たれ、蹴られ、蹂躪されていく。バーバリーが気がついたときには戦車隊は全滅していた。

しかし、悪いことばかりでもなかった。第二分隊から通信が入る。

「敵モビルスーツ、動きを止めました。距離800、チャンスです」

「分かっている。まずパイプのある方に集中砲火。確実に行動不能にする。腕部を狙え。最悪、火器だけでも処理するぞ。第2、第3、第4分隊準備」

「了解！」「了解！」「了解！」

返事を確認しバーバリーは攻撃までのカウントを始める。

「同時弾着。10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、0！」

ゼロカウントと同時に3発のミサイルが放たれる。それらはザクに吸い込まれるようにして、命中した。バーバリーの目論見通りに、ザク？は行動不能となった。

「よし、次の攻撃を行う。各分隊準備。砲手、機関銃手以外は退避。残りも撃ち終わったら、ずらかれ！」

「相手は1機、よく狙え。第2分隊は頭部を、第3分隊は脚部、第4分隊はさつきと同じ要領でマシンガンを破壊しろ」

今度は彼の目論見も功を奏さず、かろうじてマシンガンだけは破壊できたものの、撃破したザクから失った物を取り戻すと、圧倒的な火力で彼の部下たちを蹂躪した。

「ルイス、奴はおそらく俺達に気付いてない。確実に仕留めるぞ！」その声には、怒りの色が滲んでいた。

「了解、距離320、発射！」

またしても、マシンガンを破壊。ザクはその後我々を一瞥した後、すぐにバーニアを吹かして、逃げて行った。戦闘は敵が撤退したことから、終了した。

「ルイス、戦死者の弔いを手伝ってくれ」
ルイス曹長は小さく頷くと、破壊されたジープに駆けていった。
戦車部隊三個小隊全滅、トラックも6台が破壊、さらに彼が率いた
小隊も甚大な被害を受けており勝利とは到底いえなかった。
しかし、バーバリーは生き残っており、これからも戦っていかなく
てはならない。

この戦いで犠牲になった者達の為にも……。

第三話・対MS特技兵SideFFF（後書き）

次回、ホワイト・オーガー登場。

第四話・白き鬼との共闘（前書き）

いろいろ、やっちゃった感があります。

批判は覚悟の上です。後々公式設定との矛盾が発覚すれば、消去するつもりです。

それでも楽しんでいただければ幸いです。原作は『重力戦線』です。

第四話：白き鬼との共闘

宇宙世紀0079 4月下旬

隊長を失い、もう一人の小隊メンバーも戦線復帰不可能と判断され独り身となったロウに、臨時の転属命令が下った。

その小隊は『いわくつき』であり、隊長に問題があるそうだ。

もともと、これはロウが小耳に挟んだ噂であり根拠はなく、実際、問題行動を起こしたなど具体的なものではない。

それどころか、戦績を閲覧すると、それは多くの者が優秀な指揮官と評するであろうものだった。

その指揮官に関する噂、それは『彼には死神が憑いている』というものであった。

(馬鹿らしい。そんな噂は彼の活躍を妬んだ者が当てつけとして流したデマだろう。)

そんな事を思いながら、ロウは自分が配属される小隊の小隊長に会うため、足を進める。

その隊長の名はエルマー・スネル、階級は中尉だった。別名 白き鬼 ホワイト・オーガー

二つ名がつくことでも、その実力の高さが窺えるというものだ。

ロウは転属命令を受理したのち、足早に自分が配属される小隊に向かっていた。

着任の挨拶は早い方がいいと考えたためである。

その小隊に充てられた野営テントの前に立ち、できるだけ声を張り上げ、断りを入れる。

「失礼します。ローエン・ガルフ軍曹、入ります」

その言葉から少し間を置いて、ロウはテントに足を踏み入れる。

入口の向かいに当たる位置に、スネル中尉らしき人物が俯いて座っ

ていた。

スネル中尉と思しき人物が、ロウに向けて呼びかける。

「誰だ、お前は？」

その人は、周囲の空気を凍てつかせるような低い声で、ロウに疑問を投げかける。

「本日よりこの部隊に配属になった、ローエ……」

質問に返答しようとしたロウを、彼は片方の掌をかざすことで制止させる。

「おっと、言うな。言わんでいい」

「は？」

呆気にとられたロウは、つい間抜けな声をあげてしまうが、スネル中尉はそれすらも意に介していないような調子で会話を続ける。

「お前もどうせ死ぬんだ。死ぬ人間のことなど、知りたくはない」
彼の言葉には、言葉では説明できない『重さ』とでも表現するべきものが含まれており、ロウの心を底冷えさせる。

「俺の小隊に配属される部下。それさえ分かればそれで良い」

ロウはその言葉を理解した瞬間、目の前の人物に対しての反抗意識が芽生える。

自分のことを過少評価されているなどと思ったからではない。

彼は仲間の命を軽く見ている。ロウは先ほどまでのやり取りからそう感じ取り、生まれた反抗心はそのことに起因するものだった。

言って通じる相手でもないだろうと考え、止めておく。

そんな彼の様子を見て愉しんでいたスネル中尉が不意に言葉を発する。

「お前、歳は？」

またしても突然のことであったが、今度はロウも若干戸惑ったものの、すぐに答えを返す。

「え？あ、23ですが、それが何か？」

「若いな。なんで戦場（せんじょう）に来たんだ？」

スネル中尉は、ロウとは対照的に、戸惑いも躊躇いも見られない口

調で言葉を紡ぐ。

「決して死ににきた訳ではありません」

そんな彼の態度に触発されたのか、ロウも力強く言い切る。

「そんなこと言ってる奴から死んでゆく。戦場というのは、そういう場所だ」

説得力という言葉では説明し切れない力が、その言葉にはあった。

ロウはその力に言葉を封じられそうになりながら、何とか強がりを変すのが精一杯だった。

「ご心配無く。自分は前の戦いを、隊長を犠牲にして生き延びました。生き残るためにどんなことをしてもいいというのであれば、生き残る自信はあります。貴方も自分に盾として使われないよう気を付けた方がいい」

無論、仲間思いの彼がこんなことを本気で考える筈もなかった。

これは隊長を亡くしたロウ自身の未熟さへの自嘲を含んだ強がりである。

中尉は一瞬だけ呆気にとられていたが、すぐに上機嫌になり、口元を歪ませながらこう言った。

「お前のような厄介者が部下として配属されるのは初めてだ。しかし気に入った。いいねえ、生真面目なだけで役に立たないヒヨッコよりずっといい。今夜は一杯奢ってやる。官姓名は？」

(さっき、聞いておいて言おうとしたのを遮るといっても理不尽なことをやってのけたことを、彼は覚えているのだろうか?)

ロウはそんな疑問を頭に浮かべながらも、そのことが顔に出ないうちに答える。

「ローエン・ガルフ軍曹であります」

奇妙な着任式を終えたあと、ロウは夜まで暇だったこともあって、自分に与えられたMSを見に行くことにした。

ロウがMS待機所に足を向けたその時、基地内にけたたましいサイレンが鳴り響き、呼集がかかる。

「第1、第2MS小隊の隊員は至急MS待機所に集まってください！繰り返します。第1、第2MS小隊の隊員は至急MS待機所に集まってください！」

その声を聞くと同時に、スネル中尉もテントから臨時のMS整備所へと向かっていく。

ロウもその姿を見て、すぐにスネル中尉の後を追った。

ロウがスネル中尉に続いて待機所のテント着に入ると、すぐに作戦^{フリー}説明が始まった。

大隊長が呼び出した全員が揃ったことを確認し、口火を切る。

「敵が戦車隊による攻撃をかけてきた。攻撃を受けている部隊はMSが配備されておらず、戦車戦では一日の長がある連邦軍に苦戦しているようだ。諸君らの任務はこの部隊を支援、敵部隊を撃破することだ。任務の説明は以上だ。健闘を祈る。」

出撃の直前、ロウは自分のMS、『MS 06J ザク?』を見上げた。

その機体は今までのザクとは、見た目こそそれほど変わらないものの、地上で運用する際の性能が向上していた。

ジオン軍が地球侵攻に合わせて製造した最新型である。

この間まで旧型のザク?に乗らされていたロウにとっては、それだけで嬉しいものだった。

ロウが新型機を与えられたことの喜びに浸っている間に、隣のザクのモノアイが光り、一步前へ踏み出す。

スネル中尉の搭乗する機体で、他のザクとは趣が大きく違っていた。ホワイトオーガーの由来になったであろう白いカラーリング、シールドと頭部に描かれたトカゲのマーク。

ロウがその白い機体に見とれていることを知ってか知らずか、中尉に「出撃だ。さっさと乗り込め！」

と怒鳴られてしまった。

ロウ達が戦場に到着したとき、既に助けるべき部隊は隊を成していないかった。

「チツ！散開しろ！味方の前に立って援護するんだ。その後は二機ツーマ一組で行け」
ンゼル

その声が誰のモノかはロウにはわからなかったが、出撃した者の大半がその指示を適切だと判断し、出撃した機体の半分以上が後退する味方と迫ってくる敵の間に立つ。

ロウも例に漏れずに自分の機体を、迫ってくる戦車と味方の間に割り込ませる。

ロウのザクの前に位置する戦車が、間に立ったロウのザくに構わず、後退する味方を撃とうとする。

ロウは砲撃が成される前に敵戦車に対して、狙いも付けずに牽制射を放つ。

命中弾こそ無かったものの、敵を怯ませるには充分効果的だった。

ロウはその隙にザクマシンガンの照準を怯んだ戦車にしっかりと合わせ、一瞬だけ引き金を引く。

彼の意図した通りにザクマシンガンから、1発だけ弾丸が発射され、敵戦車を正面から撃ち抜いた。

(1 輜撃破)

ロウは心中でカウントし、次の獲物となる敵戦車を探す。

すると、ロウは周囲の状況が変化していることに気付いた。ロウ機の少し手前で煙幕が展開されていたのだ。

その煙幕の中で何かが光った。

光の正体をロウが理解する間もなく、ロウ機の隣でマシンガンを撃ち続けていたザクが撃破されていた。

2機1組で行動していた相方を失い、ロウは単機行動を余儀なくされる。

「煙幕の中からだと！」

そう叫ばずにはいられなかった。

煙幕は視界を奪う物であり、そうすることで敵の攻撃を封じる物である。

当然、煙幕を放った側も視界を奪われ攻撃の儘ならない状況になるが、その間に後退なり優位な位置に移動するなりするのがセオリーとなっているため、問題にはならない。

だが、煙幕は決して魔法のバリアーなどではない。

視界を失うのは、放った側も同じこと。

敵は視覚情報に頼れない状況で砲撃を行い、ロウの味方であるザクを撃破した。

レーダーを使用すれば可能だが、時代の産物であるミノフスキー粒子がそれを許さない。

「まずいな……」

そう言いつつロウは煙幕の中にザクの得物を向けて、その引き金を引く。

発射された弾丸が当たった様子はなく、返礼とばかりに正確な射撃がロウのいる場所から僅か1mの位置に着弾する。

ロウはこれをシールドを使って受け流しはしたが、このままでは彼に勝機が訪れることはないだろう。

ロウはそれ以上のことはせず、スネル中尉に応援を要請する。

中尉は既に敵を全て片付けたようで、援軍要請に快く応じ、すぐに駆けつけてくれた。

その頃には煙幕も晴れていて、ザクのモノアイは砂煙を上げて平野を疾走する戦車隊を映していた。

その数は大幅に減っており、僅か6輜を残すのみ。

「敵が退いていく。追げ……」

「逃がすか！」

スネル中尉はロウの言葉を聞かず、敵の61式を追う。

追撃を行う白い一つ目の鬼に対し、敵も自慢の火力を行使して、生き延びるために必死で反撃する。

止められなかったロウ自身を含め、全員が散開して中尉のザクを援

護した。

4つのマシンガンによる追撃を戦車の機動力でかわせる筈もなく、61式は1輜、また1輜と撃破されていくのであった。

最後の1輜が誘爆で履体を破壊され、少し離れた場で行動不能となった。

「敵の殲滅を確認。我々は撤収する」

共に出撃した小隊の隊長は、そう言い残して帰りを急いだ。

スネル中尉は

「生き残りがいないか確認する」

と言い、ザクのモノアイを回し、何かを（おそらくは、生命反応を）探っていた。

そして、最後に破壊した61式に向かっっていく。

その61式からは連邦兵が脱出しようとしていたが、スネル中尉の白いザクを見ると再び破壊された戦車へとすっこんでしまった。

中尉はその戦車に対して降伏勧告を行うのであるとロウは踏んでいたが……。

そんな矢先、事件は起きた。

スネル中尉のザクはその61式を踏み潰したのだ。

ロウは呆気にとられて、何も言えないでいた。

開きっぱなしだったらしい通信回線から、スネル中尉の本音がロウの座るコクピットに流れる。

「怖いかな？怖いだろうな。だが、俺もお前等が怖い。俺は毎日、連邦の61式を相手に戦う夢を見る。悪夢だ。味方はやられていき、ともすれば負けそうになる。結末はわからない。だからこそ怖い！だから俺は今までに出会った戦車兵を全滅させてきた。復讐という恐怖から逃れるために！今回も例外はない。俺に出会っしまった自分の不幸を呪うんだな！」

「す、スネル中尉！それは条約……」

ロウがスネル中尉を止めようとしたとき、既に戦車は踏みつぶされていた。

そこでロウは全ての言葉を失い、代わりに彼の眼前には、大きな銃口が現れていた。

その光景はモニター越しであっても、微塵も迫力を失うことはなく、確実にロウを絶命させられるということを如実に語っていた。

スネル中尉は

「先に戻ってる。俺もすぐに行く」

という短い言葉だけを残し、また生命反応を探し始めた。

彼はその後、少しおどけた口調で、こう付け足した。

「心配するなよ。酒を奢る約束ならちゃんと覚えてる」

(正直、そんな気分ではないのだが)

ロウはそんな思いを口から出ないように呑みこみつつ、これ以上とばっちりを受けることがないように、ザクに基地の方向へと歩かせた。

その日の夜、ロウはスネル中尉との約束通り、酒を飲み酒保へと向かう。

スネル中尉は既にグラスを片手に、顔を赤く染めていた。

彼はアルコールの余韻から抜け出るのに20秒ほどかかっただけから、ようやくロウの姿を見つけたようで、掌を上に向けて指を揃えてせわしなく動かしていた。

ロウが中尉のいる席に到着すると、突然ウォッカの入ったグラスを突き出される。

「飲め、今日は俺の奢りだ。遠慮なくやれ」

ロウがそのグラスを手を取ったことを確認すると、彼はすぐに手を上げてウェイターを呼ぶ。

「上機嫌ですね。何かあったんですか？スネル中尉」

「違う、俺は二時間前からスネル大尉だ」

その言葉が意味するところは1つである。ロウは自然と笑みを作り、出世した上官に祝辞を送る。

「昇進ですか！おめでとうございます！」
その後ロウは、今日見たスネル中尉とは別人のような大尉と、かなり遅くまで陽気に呑み交わしたのだった。
今日ロウが戦場で目撃した真実は、呑んでいる間に陽気な大尉へと上書きされて、アルコールとの相乗効果で恐らく思い出すことはないであろう位置まで追いやられた。

この出来事のあと、すぐにロウには正式な転属命令が下され、ヨーロッパを、スネル大尉の下を離れることになった。

「そういえば……、臨時、だったな……」
寂しさの混じったロウの声が、基地内に消え入った。

第四話・白き鬼との共闘（後書き）

今回はリクエストに応え、ハーマン・ヤンデル中尉メインの話になります。

今回の話を連邦サイドから書く訳だから、察しがつくと思います。

第五話・白き鬼の恐怖（前書き）

重力戦線第二話のとあるシーンがきっかけで書きました。
楽しんでいただけたら、幸いです。

第五話：白き鬼の恐怖

宇宙世紀0079 4月21日

コロツパ戦線

この日を境に1人の男が今までとは違う戦いに、私怨に満ちた戦いに身を投じることになる。

地球連邦軍 第44機械化混成大隊所属のハーマン・ヤンデル中尉である。

この日もまた、ヤンデル中尉にはいつもと変わらぬ、敗走の一日となるはずだった。

戦局はお世辞にも良いとはいえなかった。

元々、第44機械化混成大隊所属の戦車二個中隊としてジオン軍の侵攻を食い止めるつもりだった彼らだが、ジオン軍が開発した人型兵器モビルスーツの圧倒的な力の前に敗走を続けていた。

さらにヤンデル中尉が所属する中隊は、敗走の途中に本隊とはぐれてしまい、補給や整備も受けられない状況になってしまった。

そのような状況下で機関不調や燃料切れで行動不能となる戦車が出てくるのは、自明の理であり、さらに敵の激しい追撃もあって、稼働状態にある戦車はあつという間に少なくなつていった。

本隊とはぐれた時点では25輜あつた戦車も、今では16輜となつていた。

この戦い、ヤンデル中尉の運命を決定付ける戦闘は、そんなときに起こつた。

「ヤンデル中尉、本隊との合流の目処はついたんですか？」

平原に置かれた大きな鉄の騎馬、61式戦車にもたれている男がヤンデルにそんなことを問う。

彼はこの戦争が始まって以来、ヤンデルと共に今もたれている61式を共に操ってきたドライバー、ディルク・ヤン・コップ曹長だ。

「そんな良いことがあったんなら、もう少しマシな表情かおをするさ」
ディルクの言葉に答えるヤンデルは、どこか諦めの色が浮かんでいた。

脱け殻

彼らは敵軍シオンの新型機動兵器、MS ザクの圧倒的な力に戦意や自信を吸い取られた脱け殻と化していた。

この部隊の殆どの人員が、ヤンデルやディルクと同じような『脱け殻』状態だということは、言うに及ばず。

今や前線で戦う連邦軍兵の中に戦意喪失状態の兵士が多いことは、公然の秘密となっていた。

しかし彼らとて、最初からこのような状態だった訳ではない。

去年の彼らは、61式を駆る戦車兵達は、現在からは考えられないほどに自信や希望に溢れていた。

彼らは自身達を練度の高い優秀な戦車兵であると自負していたし、その思いは間違っただけではなかった。

そして事実として、彼らが駆る61式戦車が負けることなどまず無かったため、陸上戦闘において彼らは無敵と言っただけで良かった。

さらにいえば、まったく軍人らしくないことではあるが、『死ぬ』ことすらも彼らにとって非日常的なことだったのだ。

地球から国家という枠組みが壊されて80年になろうとしている時期に、地球の全域を勢力地とする軍隊を相手に戦える組織が

また、その軍が保有する最新の戦車や戦闘機を破壊できる兵器を配備できる組織が、どれほどあったらだろうか。

結果、彼ら戦車兵の主な本業は、負けることのない戦闘（ゲリラの掃討等、散発的で小規模な戦闘）や、負けても死ぬことのない、戦車戦闘訓練などが殆どだった。

それらをこなせば休暇が貰え、故郷に帰っての至福の時間が待っていたし、地球連邦という人類史上最大とあって良い組織に将来も保障され、まさに至れり尽くせりであった。

開戦後、ジオン軍が地球に巨人^{ザク}を連れてくるまでは……

巨人^{ザク}との戦闘は、地獄以外の何物でもなかった。

彼らが手にする銃からばら撒く弾丸、その1発が命中しただけで黄泉へと強制送還。

それでもなお、そんな地獄の中で、戦車兵の誇りを捨てずに戦い続けた者達も少ないながら存在した。

しかし、彼らの多くはザクにその命を蹂躪されてしまった。

ヤンデルはその数少ない生き残りであったが、死に逝く仲間達を見ながら変わってしまった。

（こんな最悪の状況、いつになったら終わるんだ……）

口に出かけたそんな愚痴を、何とか噛み殺すヤンデル。

しかし彼の希望、現在の状況の終わりは、以外に早くやってきた。

さらに悪い状況への変遷という、彼が最も望まない形ではあったが……。

「敵の、ジオンの車両部隊が迫ってる！」

ヤンデルやデイルクが背もたれにしている61式、その向こう側から聞こえてきた悲鳴に似た声を、彼らの耳は捉えた。

「本当か！？総員戦闘準備！出撃できる者から出る！」

間髪入れずに出撃命令を下すのは、現在本隊からはぐれた戦車四個小隊をまとめるリデック大尉だ。

彼の命令を合図に、ただ屯していただけた鉄の騎馬達が次々に咆哮を上げ、生気を失い動くことも難しいように見えた戦車兵達が慌ただしく動き始める。

第一小隊の隊長を務めるヤンデルがその例に漏れるはずもなく、愛車の砲塔に駆け上がると、ヘッドセットを素早く身に着け、怒鳴りつけるように部下達に出撃命令を下す。

「こんな時に……、第一小隊！行くぞ！」

ヤンデル中尉の一声で61式戦車3輦が始動し、残りの1輦も少し遅れて始動する。

敵襲の報せから僅かな時間で出撃準備を整えた第一小隊は、派手に戦端を開くこととなった。

「敵はかなりの部隊です！確認できるだけで7輦……。隊長！」

これまでの敗走の中で、すっかり気が萎え、弱腰になってしまった部下が助けを求めるような通信をヤンデル達が操る戦車へと寄越してくる。

そんな情けない声を出す部下を叱責しようとするヤンデルだが、それ以上にやらねばならぬことは幾らでもある。

まずは、浮足立った彼らを落ち着かせること。

そして、部下達に戦意を取り戻させるため、彼らを鼓舞すること。

「うるたえるな！奴らが地球での戦いなど知るはずも無い！……それに奴らにはMSもないようだ」

そう言うとヤンデルは一番前に展開していたマゼラ・アタックを、立て続けに2輦撃ち抜く。

構造的に脆弱な砲身部を狙い撃ちにしたため、そこでその2輦は動きを止めてしまう。

それらとは別の敵が反撃すべく撃ちかえしてきたときには、その2

輻は爆炎を上げて戦場から消え去った。

「そういうことなら！」

隊長が一気に2輻の敵戦車を撃破したのを見て士気の上がった部下は、敵に対して斜めにすれ違い、後ろから砲弾を叩き込む。

さらに彼は、その砲弾が命中したかどうかを見届けることもなく、砲塔を180度回転し次の敵へと狙いを定める。

後続の戦車部隊も到着し、それらもヤンデルらの活躍を見て士気が上がっているのだろう。果敢に敵部隊に攻撃をかけた。

それからしばらく、連邦軍が主導権を握った戦いが続く。

装甲車から歩兵が降りて対戦車戦闘の布陣を敷こうとする。

が、その陣に対してヤンデルは砲塔部のハッチを開け、装備された機関銃で牽制する。

敵は機関銃での攻撃に本能的に回避行動をとってしまい、構えていた対戦車ランチャーの狙いは完全に外れて、明後日の方向へと飛んでいく。

次弾を装填している最中、側面から迫っていたヤンデル達とは別の61式に踏み潰された。

予想外の連邦の反撃に、ついにジオン軍の車輛部隊も後退を開始する。

しかし、ジオン軍に辛酸を嘗めさせられてきた彼らがこの機会を逃すはずもなく、日頃の憂さを晴らすことも兼ねて、激しい追撃をかけることとなった。

「次の目標、11時方向の大型トレーラー。距離400」

ヤンデルが次なる標的ターゲットを決めディルクにそれを伝えると、ディルクもその獲物を狙いやすいような進行方向へと進路を変える。

ヤンデルが次なる獲物と定めたトレーラーは、小回りが利かず、周りに味方もいるために後退の為の旋回ができないでいた。

「カモめ」

彼はその目標の撃破を確信したが、敵は射撃の直前に普通のトレー

ラーにできないようなことをした。

操縦席のみを取り外し、空へと上がる。操縦席を乗り手ごと潰すはずだった砲弾は、代わりにそのトレーラーの積荷に命中した。

「なにいい！」

突然の出来事に、ヤンデルも一瞬だけ呆気にとられる。

が、積荷の内容がよくなかったらしい、それは砲弾により大爆発を起こし、せつかく脱出した操縦席をも巻き込んでしまった。

本来、空を飛ぶ敵という物は、戦車にとって対抗手段がほとんどない、いわば天敵である。

しかし、今の一瞬の出来事は、彼に厄介な敵が現れたことすらも認識させぬまま、自滅という最悪の幕を引くこととなった。

気を取り直した彼は、先ほど大爆発を起こしたトレーラーと同型の物がもう1台あることに気付き、そちらに注意を払う。

もう1台のトレーラーには、積み荷に、荷台からはみ出しそうな幌が被さっており、その車両が運んでいる物が相当大きいことを示している。

さらに奇妙なことには、それは天井に装備されている機銃を撃つだけで、全く動かなかつた。

(同型の物なら、運転席を飛ばせるはずだが……)

ヤンデルは砲塔を旋回させて、件のトレーラーを照準内に収める。

そして、砲弾を叩き込むべく引き金を絞る、その直前に事は起きた。荷台に掛けられていた巨大な幌がひとりでに立ち上がり、そして重力に従って幌が荷台に落ちると、積み荷はその正体を現した。

「モ、モビルスーツだあ！」

味方の情けない声がヘッドセットから響く。

そして、その声が合図だったかのように、モビルスーツに対して集中砲火が浴びせられる。

ヤンデルから見れば、明らかに怯えていて狙いの定まっていけない射撃だったが、『下手な鉄砲も数撃ち当たる』の言葉通り、ザクの上

半身に1発だけ命中しそのまま倒れた。

「あの位置だとパイロットは絶命したな」

ヤンデルの言葉を裏付けるかのように、モビルスーツが再び立ち上がることは無かった。

大反撃の終わりを告げる言葉は、彼の相棒であるドライバーから伝えられた。

「中尉！11時方向と2時方向にザクが3機ずつ」

デイルク曹長も、敵がMSだと相手が悪いのか、その報告の声には怯えの色が入っていた。

「お出ましか」

ヤンデルは彼とは対照的に動じることなく応じ、冷静に6機のザクを見据える。

「各車、散開しつつ後退！死ぬなよ！」

中隊長を務めるリデック大尉から指示が下される。

そう指令を下したはずの中隊長車だけは、少しも退がることなく静止射撃を続けていた。

「中隊長！」

思わずデイルクが叫ぶが、その叫びが何かを変えることはない。

「部下に道を示す事、それが上官の務めだ。私は軍人の在り方というものを、お前達に見せなければならん。いいか！護るべきものを見捨てて逃げるようなことだけはするな！」

リデック大尉の戦車からドライバーが脱出する。彼は急ぎながらも、時折未だに制止射撃を続ける戦車を見遣りながら後方へと下がる。

「誰か彼を……」

中隊長が最後の言葉を言い終える前に、彼の戦車に120?の弾丸が直撃し、それはスクラップと化した。

「リデック隊長オー……！！！」

中隊長の死を悼む数人の声がかぶる。

が、彼らにとってのザクとの戦闘は始まったばかりであり、感傷に

浸ることはできなかった。

「どうせ、モビルスーツなんて墜とせやしな。助かるはずもない。だったら、一人でも多く道連れにしてやる！」

隊長の死にシヨックを受けて自暴自棄になったのか、1輦の61式が、最早射程外へ出ようとしている車両を狙う。

だがその攻撃は、敵のザクからの攻撃により簡単に阻まれる。

そして、間髪入れずに同じザクからの攻撃を受けて、61式戦車が1輦、爆散した。

同じような行動をしようとしたものがもう1輦、ザク・マシンガンの連射により同じ末路を辿った。

「まずい！これ以上やらせる訳には！」

そう言うとヤンデルの61式に煙幕を展開させ、味方の後退を支援しようとする。

しかしヤンデルの思惑とは裏腹に、敵のザクは煙幕が展開されても、マシンガンを撃つのを止めなかった。

無論煙幕の向こうにいる敵に射撃を当てることなど、並みの腕でできることではなく、発射された弾丸の多くは出鱈目な方向へと飛んでいく。

その敵機がいるであろう位置を見据えていたヤンデルは、あることに気付いた。

(煙幕越しでも発砲炎が見える……)

マシンガンから弾丸が発射される際の発砲炎は、煙幕の中でもその輝きを失わずにいたのだ。

(いけるか!?)

その自問に答えを出す前に、彼は長年の戦車兵のカンと経験で煙幕越しに射撃を敢行する。

その瞬間、すぐ隣にいた戦車を操る車長から通信が入る。

「無駄弾を……！いや、すまなかった中尉。見事だ」

通信を入れてきた車長の反応が急に変わったが、ヤンデルは気に留

めることも返事を返すこともなく戦闘へと集中し直す。

ヤンデルへと通信を入れた彼の反応が、急に変わったのも無理からぬことである。

ヤンデルは他人から見れば無駄弾以外の何でもない射撃で、ザクを撃破したのだから。

ヤンデルの快拳に対する敵方の反応もなかなかのものだった。

そのザクは味方が撃破されて焦っているようで、マシンガンをやンデル達の61式がいた辺りに向けて乱射していた。

無論、既にそこには何もなく、撃ち込まれた弾丸は完全な無駄弾となった。

ヤンデルは一拍置いてから、発砲炎から敵のザクの位置を予測し、同じ要領でもう一度撃つ。

金属と金属が擦れた高い音が響き、少し遅れて爆発音が響く。

「防がれたか。各車、全速で後退！味方も殆ど撤退したはずだ」
ヤンデル中尉の指令を受け、全ての戦車が後退を始める。

が、これほど派手に戦闘を展開したからか、敵も容易に逃してはくればしなかった。

ザクの1機が執拗に追撃してきたのだ。

そのザクは通常とは異なり、白いカラーリングをしていた。

そのザクの射撃により、味方の戦車が1輛、スクラップへと変えられる。

それが合図だったかのように、他のザクも一斉に射撃を始める。

8輛あつた戦車も、ザクの圧倒的な火力と複数の火砲からの砲撃の前に為す術なく、次々と撃ち抜かれていく。

しかし、ヤンデルらの車輜だけは例外で撃ち抜かれることこそなかった。

しかし、近くにザクバズーカの砲弾が着弾した際に動けなくなってしまう。

「どういうことだ？こんな時に故障だとしても……」

言いながらコンソールを操作して、愛車が動かなくなった理由を調

べるヤンデル。

どうやら、先ほど近くに着弾したバズーカに履体を破壊されたようだった。

「クソツ！曹長、脱出するぞ！」

ヤンデルは相棒であるディルク曹長に声をかけるが、返答は無かった。

その意味をすぐに理解すると、自身の脱出を行おうとした。

散っていった仲間の仇打ちを誓いながら。

だが、足を怪我したのか思うように体を動かすことができず、ハツチを開けるまで時間がかかってしまった。

なんとか這い出るようにして外に出た彼の目の前には、白い死神^{ザク}が立っていた。

それから、ヤンデルが気がついたときには、身体のあらゆる箇所に怪我を負った状態で、味方の野戦病院にいた。

どうにかして味方に救助されたいが、その時の記憶は頭に残っていない。

それ以前の記憶は……どうしても思い出す気にはなれなかった。

彼はあまりの恐怖の記憶と傷の深さに、この時は傷痍軍人として除隊し、故郷へと帰る決意を固めていた。

しかし、彼はすぐにまた、戦いを再開する。自身を恐怖という呪縛から解き放つために。

第五話・白き鬼の恐怖（後書き）

感想、批判、リクエスト等々待っています。

第六話：砂漠の悲劇（前書き）

今回は残酷描写があります。

苦手な方は見ない方が…。

原作はIGLOOのヒルドルフのお話。

第六話：砂漠の悲劇

『一年戦争』開戦から既に四ヶ月が経とうとしていた。ジオン軍の勢いは衰えていなかった。少なくとも連邦軍からはそう見えた。

しかし、ジオン軍も実際は余裕などなかった。数度に亘って地球へと降下部隊を送り、地上の連邦軍の拠点を陥落させていったが、地球から最も遠いサイド3からの補給路の確保、手薄になる本国（サイド3）防衛網の強化、局地的に投入された連邦軍の対モビルスーツ兵器など、対処すべき問題は山積していた。さらに連邦軍のモラルを無視したゲリラ的な抵抗も憂慮すべき事態であった。

臨時で『ホワイト・オーガー』、エルマー・スネル大尉の下に配属されていたロウに、転属命令が下った。

彼は、北米から宇宙に上がりソロモンの防衛隊に編入されることになった。

しかし、ロウ自身はあまり乗り気ではなかった。

臨時とはいえ、編入された部隊の居心地は、彼にとって決して悪いものではなかったためである。

隊長のエルマー・スネル大尉とは不思議と馬が合ったし、（彼の敵となった連邦軍はこれ以上なく哀れであったが。）不思議とこれまでロウが犯してきたような失敗もしなくなった。

最新のザク？J型にも乗れて、ロウはこれ以上の環境を望むことはなかった。

それ程に優遇されていると感じていたのだ。

「しょうがねえじゃねえか。命令ならよ」とスネル大尉は言う。

その通りだった。ロウは軍曹であり、コネがある訳でもないので、命令を拒否できる力などない。

ロウはそれ以上はどうしても無駄だと割り切って、世話になった上官に別れの言葉を述べる。

「また逢いましょう、月かサイド3で。その時は一杯奢ってください」

「その時、手持ちに余裕があつたらな」

それがロウと大尉との最後の会話だった。その後彼は、すぐに北米行きの飛行機に乗ったのだ。

ソロモンへのルートはアリゾナの第128物資集積所行きの輸送機に同乗し、そこから陸路でキャリフォルニア・ベースへと向かい、宇宙へと上がる。

ロウはこのルートを知らされた時、ほのかな希望が潰れてがっかりしたことを思い出す。

彼の希望とは、本当にささやかなもので、『一度、ガウに乗ってみたい』というものだった。

しかし、ルートを聞かされた段階でその可能性は無くなってしまふ。何故なら、辺境の物資集積所にガウが着陸できる滑走路や、ガウの機体整備が行える設備などあるはずが無いからだ。

結果として現在ロウは、ファット・アンクルという不格好な輸送機でヨーロッパから北米大陸へと運ばれている。

その不格好な輸送機、ファット・アンクルの中で、補給部隊所属の曹長がロウに話かける。

「どうしたんだ、兄ちゃん？」

如何にも中年といった感じの野太い声がロウの耳に届く。

それは長年仕事に就いた者の発するベテラン特有の声だと直感的に感じた。

「えっと、何がですか？」

適当に言葉を濁して、その場をやり過ぎそうとするロウ。

だが、ロウに話しかけてきた相手は、親身になっているのか、お節介か、はたまた馴れ馴れしいだけなのかは分からないが、ロウが答えるまで問い続けた。

「まあ端的に言うなら、ホームシックというやつです」

しつこく聞かれた末に、渋々ながらといった感じで答えるロウ。

「昨日までいた部隊は、結構居心地が良かったんですけどね。特に隊長は変わっていたけれど、良い人でした」

「それでその隊長さんが恋しくて、ごねてんのかい？」

間髪入れずにロウに突っ込む補給部隊の曹長。

(この人には遠慮というものが無いのだろうか?)

ロウはそんなことを思いつつも、それを面に出すことは避けながら反論する。

「ごねてませんよ。調子は良好、とはいきませんがね」

ロウはなるべく相手の目を見ないようにしながら言う。

「ほう、ホームシックでないなら、そりやまたどうして？」

そんなロウの些細な仕草など気にしない前線のベテラン軍人は、遠慮という言葉を知らないかのようにロウの話したくないようなことまで聞いてくる。

ロウは渋々といった表情で答えを口にする。

「宇宙でモビルスーツに乗るのって、なんか孤独で、嫌いなんです」

「とは言っても、上からの命令なんだから仕方ないだろ」

彼は考えるよりも口に出すことが早いような感じで、間髪入れずに返す。

「そうですね。愚痴聞いてくれて、どうもすみません」

それ以降ロウは、輸送機が物資集積所に着くまで誰とも話さなかった。

(話し相手はこの人しかいないし、こういう人は、苦手なんだよな)

物資集積所はアリゾナの砂漠の中にあつた。

基地から少し離れた場所に歩哨が立っていたが、コロニーとは違う過酷な環境と退屈さに、うんざりしているようだった。

「砂漠か、戦場としては厄介だな。隠れる場所がないから、どうしても戦力差が勝敗に直結する」

それが、輸送機を降りた彼の第一声だった。

(どうやら自分は、自分のいる場所を戦場として観察する癖があるらしい)

(軍人が板についてきた、ということか)

ロウがそんなことを考えていると、続いてこの機体を操る機長が降りてきた。

ヨーロッパからの長旅の疲れを少しでも和らげたいのだろう。

「世話になりました。ありがとうございます」

ロウはすぐにその機長に、今回の旅の礼を述べる。

「気にするな。というか、礼など言わんでいい。我々も本来の仕事のついでに、貴官を運んだだけだ」

ベテランならではの謙虚な姿勢と答えに、ロウは興味を惹かれ、

「そうですk…」

「その若いの、邪魔だ！」

もう少し機長と話そうと思ったロウだったが、会話を横から遮られる。

(最近これが多いような気がする。)

ロウは少し不愉快になりながら、自分を邪魔者扱いした相手に応対する。

「何だつてんです?」

「今からザクを運び出すんだよ。ぼさつとすんな!」

ファット・アंकルの本来の仕事。それは、これから運び出される3機のザクの輸送だった。

ザクを3機も物資集積所で遊ばせておく筈はないから、ここからさらに別の前線部隊へ預けられるのだろう。

ロウはその場をすぐに後にした。

(長く留まっても、いいこともないだろうからな)

ロウはそれから暇を持て余し、誰かと話す訳でもなくただ歩き廻っていた。

ファット・アंकルはザクを降ろすと、その2時間後には離陸していた。

それからさらに1時間後、ザクが2機、近付いてくるのを見た。

ロウは補給を受けにでもきたのだろうと思ったが、何か嫌な胸騒ぎを覚え、ザクの置いてある所に向かった。

その胸騒ぎが気のせいではなかったことを、ロウは、ザクに辿り着いたときに聞こえた1発の砲声で理解した。敵などいなかった。いや、いない筈だった。

しかしそこには、ジオンの象徴を自分達の物として使う、卑劣な敵がいた。

最悪の敵が襲ってきたことで、物資集積所は一瞬でパニックに陥った。

その中で、ザクが全機とも起動テストを行っていたのは、この惨劇の中で最も幸いなことだった。

いち早く状況を理解したロウは、すぐに手近にあったザクに乗り込む。

「敵のザクは2機。やれるか？いや、やらねば多くの同胞が死ぬ！」

敵は一直線にこちらに向かっていた。

「そんな直線的な動き！」

ロウはザクを寝ころばせた状態のまま、近くにあったシュツルム・ファウストを手に取らせる。

ロウはそれをそのまま発射し、反撃など無いであろうと慢心していた鹵獲されたザクのパイロットの生命を奪う。

（1機撃破、もう1機も！）

ロウはシュツルム・ファウストを撃ち終わると命中確認もせず、ザクのバツクパツクのブーストを一瞬全開にして飛翔させ、足のスラスト等で姿勢制御を行いつつ、着地と同時に先ほど撃破されたザクと共に集積所に向かってきた角付きのザクに腰にマウントされていたヒートホークで斬りかかる。

敵は後方に飛びずさり、回避に成功したかに見えたが、持っていたマシンガンに深い傷ができており使い物にならなくなっていった。

そのザクも使えなくなったマシンガンを捨て、ヒートホークを構える。

もう一度斬りかかるが今度はヒートホークで止められ、コンマ何秒かの鏝迫り合いの後、敵機は跳躍し、後ろに回ろうとする。

「させん！」

後ろを取らせぬよう、すかさずロウのザクも敵機のほうを向き直ると、その時だった。

ロウのザクは突然、後ろから砲撃を受けた。その砲撃はザクのバツクパツクに直撃し、ロウから行動の選択肢を奪う。

「なん…だと…！」

振り返ると先ほどまで戦っていた角付き以外にもザクが3機、それと61式戦車が2輛いた。

それらは手を休めることなく、ロウのザクに向かって砲撃を続ける。その砲撃で左腕、右足と次々に破壊され、彼は脱出を余儀なくされ

た。

しかし、彼はザクからは脱出できたものの、地獄からは脱出できなかったようだ。

ロウの目の前には歩哨をザクマシンガンで撃ち、さっきまで斬り合ったザクがいた。

「ここまで、だな。無駄だとは思うが……」

そう言いつつ、手を上げて投降の意思を表す。

しかし、彼の予想は裏切られ、角付きのザクのコックピットハッチが開きパイロットが姿を現す。

左目に眼帯、右頬に大きな傷、予想通り連邦軍の制服に身を包んでいた。

拳銃を構えたままワイヤーで降りてきた。驚いたことに中佐の階級章が制服の肩に付いていた。

「物分かりのいい兄ちゃんだ」

そう言うと、彼は引き金を引き、ロウの右腕を撃った。

「だが、今回だけはサービスで生かして帰してやる」

彼にはその言葉の意味が理解できなかった。

「なら、撃たないで欲しいものだな」

ロウは思ったことを率直に言う。と、相手の拳が鳩尾に入る。彼はその場に倒れこんだ。

「クッ、何をするつもりだ!?!」

「マリオン、戦車ごとこっちに来い!安心しろ、その痛そうな右腕を何とかしてやる」

連邦軍士官の顔に貼りついた下卑た笑いは、とても様になっていた。

それから2日後、ロウは残された左手だけで、集積所に残っていたサウロペルタのハンドルを握り、何とかそれを運転して味方の戦線へと到着した。

その後の彼の顛末は、前線で適当な治療を施され、その10日後に巨大戦車回収の任務を受けた部隊に、ついでにキャリフォルニア・ベースに運んでもらうことになった。

巨大戦車の回収が終了し、キャリフォルニア・ベースに到着した時、ロウは、その戦車が自分たちの仇を討ってくれたと知り、供養に酒を供えた。

（酒が好きかどうかは知らんがな。しかし、これからどうしたものか……）

第六話・砂漠の悲劇（後書き）

また負けてやがるぜ、この主人公。大丈夫か？

第七話：新たなる居場所（前書き）

今回は重くない話です。

多少、ネタらしきものもあります。

今回の原作（？）

機動戦士ガンダム戦記 Lost War Chronicles について、少し。

この話では基本はコミックス版を原作としますが、矛盾しない範囲でノベル版の設定も取り入れたいと思います。

ですので、次回は屍食鬼隊が登場予定です。彼らが出てくるだけで、一気に話が重くなります。

では、本編です。

第七話：新たなる居場所

宇宙世紀0079 6月8日

キャリフォルニア・ベース 大型医療施設

そこでロウは失った腕の代用品を入手し、長い時間の殆どをリハビリに使い、やっと使いこなせるようになっていた。

「コイツが、このマシンが自分の腕だということに、ようやく違和感が無くなってきた。戦列復帰にはどれぐらい掛かると思う？」

ロウが傍らにいるドクターに問う。

彼の治療の場がこのキャリフォルニア・ベースに移ってから主治医で、彼が無茶を言っつて、義手を使いこなせるようになるためのリハビリの期間を短くするよう尽力してくれた人物でもあった。

「諦めた方がよろしい。心中お察しします。利き腕を無くされたことはパイロツ……」

そこでロウは残った左手を前に出して、ドクターの言おうとしていたことを途中で止める。

「誰も同情などは聞いていない。それに腕や足なら代用品スベアがある」

「しかし、自分がここで寝ている間にも、同胞たちの命は失われていくのだ……。その代用品は何処にあるというのだ……」

ロウの言いたいことを察したのか、ドクターもそれに応える。

「すみません。我々の医療技術では、それを用意することは……」

ドクターは顔を少し伏せていたが、ロウの目にはとても悔しそうな感情が露わになったドクターの瞳が映った。

「それはそうだろう。死を人間がそう簡単に越えて良い筈がない」

「人間以外なら……いいんですか？」

ドクターは少し声を荒げていた。

（少し八つ当たりしたい気分なのだろうか）

ロウはそんな風に目の前の人間を分析しながら、自分の考えを相手に伝える。

「構わんさ。他の動物には地球を壊すことも、他の種族を根絶やしにすることもできない。人間でも、例えば子供なら生き返る権利を持つていてもいいとは思わないか？ドクター」

「そうですね。どっちにしる戦争をやってる我々は、そんな権利貰えませんがね」

理解はしても納得はしていないというような、奥歯にものが挟まったような言い方をするドクター。

「そういうことだ」

ロウはそれに気付きつつも、敢えて強引に話を打ち切る。

「ですが准尉、やはりパイロットは……」

「医者慈悲かい？」

解りきつていることを聞くロウ。

彼は、その忠告が医者慈悲ではなく、彼という人間が持っている固有のものだということを解っていた。

それでもロウがその問いを発したのは、彼に考える時間を与えさせないという意味合いが強かった。

「私はできれば、自分が治した人間を戦場に送り返すようなことはしたくないのです。ですから……」

ドクターはロウから目を反らせつつ、言葉を濁して相手に自分の伝えたい、それでいて言いにくいことを理解させようとす。

「傷痍軍人として除隊しろと？」

聡いロウにはそれで通じはしたようであるが……。

「お願いし……」

「断る」

ロウはやはり了解の意は示さず、ドクターが言いきる前に言葉を被せるように言い、自分の強い意志を示す。

「ま、本当に戦争が終わったら考えるさ。それにいくら謙虚だといつても、自分が助けた患者を死人扱いはよろしくない。自分はまだ軍曹だ。今でこそ戦死者扱いで准尉だが」

「ですが……」

「話は終わりだ、ドクター。縁があつたらまた会おう。それと医者達の負担をできるだけ減らすように全力を尽くそう」

「と、言いますと……?」

「人は絶対に死を超えることはできない。だが、死を回避することは時と場合によっては可能なんだよ」

ロウはその言葉を言い残し、医療施設を後にした。

「さてと、どうしたものかな」

このキャリフォルニア・ベースに着くのに大分遅れたため、彼の宇宙行きはキャンセルになっていた。

今まで彼は治療に専念していたため、何処の所属にも充てられていなかった。

「司令部に辞令を貰いにいかなくては。しかし、今更自分が何の役に立つのか」

ロウはそんな独り言を言いながら歩いていると、突然後ろから声を掛けられた。

「どうしたの？オジサン」

彼が振り返ってみると、そこにはさっき声をかけてきたと思しき女性、というか少女が立っていた。

(何故、軍事基地に少女がいるのか?)

(自分に何の用があるのか?)

(何故、23になって半年も経ってない自分が、おじさんと呼ばれているのか?)

ロウの頭には疑問符しか浮かばず、何も言えないでいると

「ねえねえ、オジサンってモビルスーツパイロット?」

ロウが反論なり警告なりをしようとした矢先、言葉に詰まってしまった。

相手の少女は軍服を着ておらず、ロウは相手が何者かを察すること

ができなかったためだ。

そうしている間に、少女はこちらの無反応に腹を立てているようだった。

幼い顔立ちのむくれ顔からは、恐怖など微塵も感じられず、逆に愛らしさがあった。

しかし相手をいつまでも怒らせておく訳にもいかず、

「元々はそうでした。ですが……」

「そうなんだ。何処の所属？」

ロウは少女の態度を馴れ馴れしく感じたが、子供相手に怒っても仕方ないとも思い、素直に答えることにする。

「自分の所属する予定だった部隊はソロモンにあります」

相手の素性が解らない以上、後に面倒なことにならないように敬語で対応するロウ。

「予定だった、ってことは取り消しになったの？」

ロウの触れられたくない部分に無遠慮に首を突っ込む少女に、彼は多少不愉快になっていた。

「まあ、そうです」

ロウは言葉に多少棘を含ませて言ってみるが……

「じゃあ、メイたちに協力してくれる？」

子供ゆえにそういうことには鈍感なのか、全くこたえた様子は無い。

「メイ？失礼ですが貴方は一体？」

「メイ？メイはジオニックス社のエンジニアだけど」

「そうなの……ですか？」

彼は急に態度を変えろというのは、相手の心証を悪くすると思い、寸でのところで敬語に戻した。

「それでちょっと付いてきてほしいの」

「何所に？」

聞いておきながら、彼はこの問いに対する返答が、一瞬で予測できてしまった。

如何にも年頃の少女が好みそうな答えを……。

「ヒ・ミ・ツ！」

彼の予想は見事に的中した。が、予想できてもどうしようも無いこともある。

年頃の乙女の心理とはそういうものだ。このような若さ（というより幼さ）でエンジニアを務めるような天才少女でも、そこは関係ないらしい。

彼女の言う場所に到着したとき、ロウは自身の目を疑った。そこには1機のザクが立っていた。

普通のザクとは多少カラーリングが違っていた。おそらく試作機だからだろう。

今までの機体とは違った趣の右肩部シールド、左肩のスパイクも先端が延ばされ牛の角のように鋭く尖っている。

脚部に機動力強化用と思しきバーニア。ランドセルにはアンテナが付いていた。

「これはMS06-G 陸戦高機動型ザク。今はまだ試作機の段階から出ていない機体なの」

「最新鋭機なのか。特異な形をしている」
率直な感想を言うロウ。

「形だけじゃないよ。機動力もジェネレーター出力も向上してるんだから」

そのロウの言動を誉められたと思って気を良くしたのか、メイは機体の解説を始める。

「肩のスパイクもこれまでの実戦から得られたデータをもとに造られた、破壊力の高い新規設計の物を採用してるし、シールドも避弾径始を取り入れた防弾性能の高い物になったんだよ」

「機動力やシールドなどは見れば分かるが、ジェネレーターまでかすこいな。で、何で自分はここに？」

新型のザクに対する感嘆を述べると共に、素朴な問い掛けをメイに投げかけるロウ。

「決まってるじゃない。テストパイロットよ」

メイはさも当然といったように胸を張って答えた。

「断る。他を当たってくれ」

そう即答するなり、踵を返して歩き出すロウ。

「なんでさ！暇そうに歩いてたじゃない！しかも、無所属なんですよ！」

「自分みたいなモビルスーツを二度も失ったパイロットに、そんな大事なもの預けるな！」

ロウは言い終わってから、メイが泣きそうになっているのに気付いた。

（しまった！怒鳴ったのは流石に……）

「悪かった。怒鳴ったのは少し大袈裟だったな。しかし片腕を失った自分に、最早パイロットとしての適性は無い。そういう訳で……」

ロウは必死に弁解するが、メイは泣き止みそうにない。新型機の整備に当たっていた整備班の人間が視線が多数、ロウに突き刺さる。

客観的に見ればどう見てもロウが悪者で、言い逃れはできそうにない。

幸いなことにロウはこのような場合、どのような策が最も有効かを熟知していた。

「……一度だけだぞ」

もっとも有効な策、それは、諦めて相手の要求を受け入れることだった。

渋々ながらテストパイロットを務めることになったロウは、コックピットに乗り込み、新型機 陸戦高機動型ザクを起動させる。

「手順は変わっていない。操縦系も見慣れた物だ」

慣れた手つきでザクを起動させた後、いつもより大分速い速度でモビルスーツ用の演習場へと移動させた。

「動きが違う。これは……」

ザクが演習場に到着した時には、これに乗ることを反対していたことなど忘れていた。

「位置に着いた。で、演習の内容は？」

ロウは通信を開き、データを取るために待機している実験部隊に連絡をする。

彼に返ってきた答えは、あまりにも酔狂なものだった。

「ザク3機との模擬戦よ」

ロウがモニターに目をやると、その言葉通り3機のザクがフォーメーションを組んで待機していた。

「彼らにはもう開始と伝えてあるから。こつちも準備オツケーだし、いつでも初めていいよ」

一切心の準備ができていなかったロウに、突然伝えられた演習内容。そのことに問題があるとは微塵も思っていない、メイの無邪気な笑顔。

(子どもというのは無邪気さと残酷さを併せ持つというが、ここまですっかり易い形でそれを認識させられたのは初めてだ……)

ロウはそんなことを考えつつ、次の言葉に一縷の希望を託した。

「苦言、反論、一切聞いて貰えそうにないな」

「大丈夫？機体に何かトラブルがあったの？」

ロウの希望は、僅か10秒足らずで潰された。

この状況でさっきの言葉を聞いて、機体の調子を聞いてくるということは、彼女は何が問題なのかを理解していないということだ。

「調子は良好！」

ロウは多少、投げやりにそう言うと、新型のザクを仮想敵である3機編隊に向かって走らせた。

ロウの相手をするのは実戦慣れした部隊らしく、固まりつつも互いの死角をカバーしていた。

1機のザクがこちらを見つければ馴染みの深いマシンガンで攻撃してくる。

マシンガンといっても装填されているのはペイント弾であり、着弾した場所を弾痕の代わりに白い塗料で染めるものだ。

幸い、彼のザクは素早く遮蔽物に隠れたおかげで、何処も白く染まっただけで済んだ。

「見つかったか。ならば、とりあえず奴からだ」

まずロウが取った行動は、結構な距離にも関わらず、模擬戦用のヒートホークを出して相手の反応をみることだった。

距離が開いていれば普通は役に立たない武器であるが、ロウはこのザクの機動性をアテにして素早く接近し、相手に一撃を叩き込む算段だった。

相手のザクのパイロットにはその意図は伝わらなかったようで通常の射撃を続けながら少しずつ接近してくる。

ロウは新型ザクの脚部スラスタが生み出す驚異的な機動力を活かし、回避と接近を同時に行う。

「遅い！」

十分な距離が一瞬で詰められたため、相手は少なからず焦っていたようだが時すでに遅し。

仮想敵機のザクはヒートホークの一撃で、行動不能を表す多少耳障りな音を発した。

今までの攻防の間に、彼の位置はつかまれていたらしい。

残った2機のザクは一瞬の攻防が演じられた場所に向かっていった。

「さあて、どうしたものかな」

ロウはそうは言ったものの、内心勝利を確信していた。

敵機のザクがロウの機体に対してマシンガンで攻撃してくる。

ロウは新型機を遮蔽物に隠して回避するが、全身のスラスタで間髪入れずにその遮蔽物を飛び越えさせる。

相手もそれは予想していなかったのか、ロウのザクが遮蔽物に機体を隠したときに射撃を止めていた。

マシンガンを右の敵機に対して乱射し、マシンガンの砲口が向いた先が白く染められる。

その中にはもちろんザクも存在したため、先ほどのような音が響いた。

「残り1つ！」

その間に左の敵機はヒートホークを構え、ロウのザクに一矢報いるべくに向かってきていた。

ロウは敢えて敵機とは逆方向にモノアイを動かしたりして気付かないような仕草をしつつ、敵機の接近をある程度許す。

そして最後の仮想敵機であるザクがヒートホークを振り上げた瞬間、陸戦高機動型ザクの名に恥じぬ瞬発力と加速力、スピードを活かして左肩のスパイクを使って敵機にタツクルを仕掛ける。

相手のザクのパイロットは全く予想していなかった攻撃に対応できずに、スピードの乗ったタツクルをまともに受けて仰向けに倒れた。ロウは倒れ伏した隙だらけの仮想敵機に自機の右手に装備されたマシンガン向け、倒れた機体のコクピット付近を白く染める。

「演習終了。帰還する」

「すっごいね！あんな風に戦える人、初めて見たよ！」

「性能差だよ。機動性も反応速度もこっちのザクの方が勝ってたからな」

メイの賞賛の声にも心を動かさずに、淡々と答えるロウ。

「それでも、数的にかなり不利だったじゃない！」

「多対一のときは、機動性を活かして各個撃破する、当然のことだ。それよりデータは？」

「バッチリだよ！ありがとう。」

「じゃあ、これで……」

(これで肩の荷が下りて、楽に……)

彼がそう安堵しかけた瞬間……

「うん。メイたちの部隊で正式にテストパイロットとして、一緒に働くことになりました」

メイは子供ゆえの無邪気さで、簡単にその安堵を潰した。

「ああ、そういうこと……じゃないぞ！一度だけだと言ったはずだ！」

一度は納得しかけたロウだったが、騙されることなく抗議の声を上げる。

メイはその抗議には答えず、代わりにロウには一枚の書類が手渡された。

ロウはその書類を受け取ると、最初の一文から読み始める。

が、彼が読むのは最初の一文だけで充分だった。

「転属命令……なんだって！」

「うん。正式な辞令だよ。演習中に転属願を出してて、それが受理されたの。データ班の人達が教えてくれたの」

メイのその言葉を聞いた彼は、先程まで搭乗していたMSの近くで作業をしている者たちを見る。

気まずそうな視線をロウに送る者、ロウに背を向けて小さく震えている者、破顔する整備兵用の服を着用した者など様々だった。

だが、1つだけ確実な事は……

「貴様たちは……！、企んだな！」

手渡された書類には彼の少尉任官と実験部隊への転属命令が記されていた。

「少尉への昇進は今までの戦果と、今回の実戦演習の結果を鑑みてだつて」

「そんなことは聞いてない」

「もういいじゃない、ローエン・ガルフ少尉」

「はあ、もう何を言っても無駄だな」

「分かればよろしい」

「自己紹介まだだったね。メイ・カーウィンです。改めてこれからよろしくね」

「ローエン・ガルフ少尉だ。厄介になる」

ロウは不承不承返答する。

（相手が子供でなければ、思いつく限りの皮肉を浴びせていただろ
うな）

「ロウって呼んでいい？」

「その呼び方は、家族と親友にしかされたことはないが、まあいい
だろう」

こうしてロウは、新たな居場所『対MS戦術・兵器開発実験部隊』
に落ち着くことになった。

「なぜ心理学を一通り学んだ自分が、少女一人にてこずるんだ？ま
さかな……」

第七話：新たな居場所（後書き）

ついでに宇宙、閃光の果てに…はコミックス設定オンリーでいきます。

リクエスト等あれば、よほどのことがない限り書かせていただきます。

批判とか、誤字脱字とかありましたらご一報ください。

第八話：連邦以外の敵（前書き）

ガンダム戦記の小説版より、クローディア少尉とエイダ曹長登場。
文が結構長くなっています。

後々クロード中尉も出すつもりです。

第八話：連邦以外の敵

宇宙世紀0079 8月1日

北米大陸 ポーツマス基地

この基地では現在、新型MSの最終運用試験が行われようとしていた。

試験を担当するのは、遠きカリフォルニア・ベースから大陸を横断してやってきた、『対MS戦術・兵器開発実験部隊』

試験品目は、正に彼らに相応しい、対MS戦を前提に開発されたMS、MS-07 グフ であった。

しかし、今日は多くの災難が重なって試験は中止されることになる。そのことを、そしてその事態を引き起こす災難がどれほどのものか、そして、今日の事態が後々どのような結果へと繋がるのかを、この時はまだ誰も知らなかった。

ロウの目の前のテレビ画面には、彼の信じたくない事実が流されていた。

「……ホワイトオーガーと呼ばれた彼は、その名に違わず強く、勇敢な戦士であった。卑怯にも連邦は、彼を陥れる為に罠を張って待ち構えていた。しかし、彼は連邦に屈することなく最後まで勇敢に戦った。連邦に嵌められた彼の嘆きを晴らすためにも、悲しみを怒りに変え、連邦にぶつけて、スペースノイドの未来を勝ち取るのだ！」

「ジーク・ジオン!!!」

テレビ放送が終わった後、彼は一人でベッドに倒れこんだ。

「自分は死神なのか？スネル大尉に憑いていたのは、自分だったのか？では何故、彼は……」

彼はそのままベッドの中で嘔り泣き、結局、泣き寝入りしてしまった。

「ロウ、どうしたの？」

部屋の外から少女の声が響く。こんな声の持ち主はロウが知る限り一人しかいない。

（メイ……か）

その玉のような声は途切れることなく続く。

「新型機が到着したの。早く見に行こうよ」

メイは扉越しにロウと会話しているため、彼の様子を窺い知ることができないでいた。

「済まないが、一人で行ってくれないか。今日の自分は全く役に立たない」

努めて平静な声で返答するロウだが、そんな内容の言葉を聞いては、天真爛漫なメイといえども心配せざるを得ない。

「どうしたの？」

ロウはメイの声色が心配そうなものに変わっていることに気付きながらも、彼女を慮る余裕を持てなかった。

「精神的にとても参ってる。今日はあまり話しかけないように、皆に伝えてくれ。もしかしたら、八当たりをしてしまうかもしれないから」

普段とは全く違う、余裕を感じさせないロウの言動に、幼いメイは戸惑うばかりだった。

「本当にどうしちゃったのよ。ロウ……、ロウってば！」

その質問にロウは答えなかった。

それからどんなにメイが呼びかけようとも、ロウが応えることはなかった。

それからしばらく後。

ロウが皆のいる休憩所に顔を出すと、全員が心配そうな顔で彼を出迎えてくれた。

データ収集を担当する軍属の人間に、何があったのか、と聞かれるロウ。

彼は隠す必要があるかどうかを逡巡した後、そんな必要はないだろうと思ひ、正直に話す。

「自分の元上官が、お亡くなりになった」

彼の答えを聞いて、皆はあからさまに表情を曇らせていた。

「そう言えば昨日、新型機が届いていたようだが」

ロウは無茶であると自分でも理解しながら、無理矢理気味に話題を変えてみる。

それに呼応したのはカウンターテーブルでグラスを傾けていた整備班長だった。

「ああ、そうだ。お前が使えなかったから、テストができてないんだ。整備だけは済ませておいた。午後からテストを始めるらしい。

準備しとけよ」

ロウを気遣うつもりなどほとんど感じられない、無遠慮な言葉を浴びせる班長。

「やれやれ、傷心を癒せぬまま仕事かい」

それに対してロウは軽口で返す。

その軽口の皮肉っぽさは、そこにいた人々にローエン・ガルフの復活を感じさせるものであった。

「人が生きた、死んだで仕事のできなくなる奴は、うちの隊にはいらねえよ」

それに返すのは、整備班長の厳しい言葉だった。

そこには既に心配そうな表情でロウを見る者はおらず、軍隊の中では休憩所にしか無い、楽しい雰囲気に戻ってきていた。

「すまなかった。それと休ませてくれたことに、感謝する」

「感謝もいらん。仕事をしろ。隊長もお冠だったぞ。ま、あんなお飾りみたいな隊長の言うことなんて、気にする必要は無いがな」

ロウの言葉を予想していたかのように、即座に返す班長。

先ほどの湿っぽい話など無かったかのように、またグラスを傾ける。

「ははっ、相変わらず手厳しい。了解」

「それとお嬢ちゃんが心配してたぞ」

「メイが？」

彼から聞かされた言葉でロウの脳裏に、今朝聞いた心配そうなメイの声が、見ていないはずの表情と共に再生される。

「案外、お前さんに惚れてたりな」

カウンターの方向を向きながら背を向けて話す彼には、ロウの微妙な表情の機微は分からず、そのまま話を続ける。

「まさか。何処がいいんだ？自分の」

「………知るかよ」

整備班長とのそんな会話を終えた後、ロウは休憩所の面々に会釈しながらそこを後にし、モビルスーツデッキへと向かった。

「ローエン・ガルフ殿ですか？」

ロウが声を掛けられたのは、廊下を歩いている最中のことであった。「そうだが、君は？」

掛けられた声は、ロウの聞き慣れないものだったため、自然とそんな疑問が口から出る。

実際には答えを聞く前に、彼の身なりから、どういふ人物かを理解するのだが。

「単なる主計兵はいひびやです。とある人から荷物が届いています」

「誰からだ？」

彼の運んできた見るからに重そうな箱を、ずっと持たせておくのも気の毒だと思い、手で渡すように促す。

「ご確認ください」

そうしてロウに渡された箱は、重量も大きさもかなりあった。

包装も嚴重でありDANGERと書かれた赤いテープで何重にも縛ってあった。

外側には差出人などが書かれたシールが貼ってあり、そこには、既に故人となったスネル大尉の名前があった。

包みの消印は7月28日だった。

「中身は？」

「銃器であります」

ロウに開かれた箱の中には、サブマシンガンとその弾丸、そして火薬臭くなった1通の手紙があった。

手紙の内容は実に素気ないもので、

『今日で悪夢は終わる。』

と書かれているだけだった。

いちいち部屋にマシンガンを置いてくるのも面倒だと思い、物騒な物を隠し持ったまま、MSデッキへと向かうロウ。

(帰りに射撃練習場で試し撃ちをしよう)

などとスネル大尉が亡くなったことから逃げるようなことを考えながら、未だに少し重い足取りを誤魔化すように早足で目的地へと進む。

ロウがモバイルスーツデッキに到着すると、そこには見慣れない機体が直立不動で置かれているのが目についた。

ロウは初見ではカラーリングに目を奪われていたものの、よく見ると形状はザクに似ていることに気付いた。

（頭部や胴体、脚部こそシャープになったものの、形状自体は原型を残している。似ているな）
そんな思いを抱きながら、自身がここに来た本来の目的を思い出し、その目的を果たそうとある人物を探す。
そして、彼の探し人の姿は、彼の想定したよりも容易に見つけることが出来た。

何故なら彼は目的の人を既に視界の端に捉えていたからである。

ロウは彼女へと近づいていく過程で、彼女と一緒にいる者達に違和感を感じる。

それもそのはずで、ロウは彼らのことを一度も見たことがなかったためである。

（一体彼らは何者だ？）

そんな疑問を抱きながら、ロウは彼らの集まっている場所、MS搭乗用リフトへと向かう。

近づいていくにつれて、心理戦に強い彼は、何か剣呑とした雰囲気
が彼女達の間流れているのを察した。

彼はそこに危機感を抱き、少し離れて聞き耳を立てて窺っていると、
どうやら到着したばかりの新型の青いザクのような機体について口
論をしているらしいことを理解した。

整備班の副班長とメイ、そして先程からロウの気に掛かっている見
慣れない少年や少女が数名、会話をしていた。

「ですから、この新型が公国の運命を左右するかもしれないのです。
渡せません！それにこの機体はテストを終えた後、実戦用に多少手
直しをされて他の部隊に配備されるのです。私の一存では……」
普段は決して物腰の強くない副班長が声を荒らげている、それだけ
でロウは事の重大さを十分に理解できた。

（しかし、先程の彼の言葉から察するに連中が新型機の引渡しを要

求してきたようだが……)

ロウの思考や副班長の言葉を遮るように、見慣れぬ少年兵達の代表らしき少女が反論する。

「何を聞いていたのですか？そんな末端の兵士より、キシリア様の特命を受けた我々に優先的に物資が回されるのは当然のこと」

彼女の言葉に同意を示すのは彼女の取り巻き達だけで、他にMSハンガーにいる人員は皆、彼女達を白い目で見るだけだった。

「そんな理屈は通りません！少佐に話を通してから、出直してきてください」

至極真つ当な副班長の意見。

だが、その言葉を聞いた少女の表情が厳しいものに変わる。これ以上話し合いは望めないともいうかのよう。

「私たちは、ザビ家の特令を受けています。現地から装備を徴発することを許されているのは、迅速な行動が必要だからです。これ以上、私たちの行動を妨害するのであれば……」

そう言うと彼女たちは対峙する2人に対し、一斉に拳銃を向けた。

「これ以上は、時間の無駄ですわ」

その言葉とほぼ同時に、モビルスーツデッキ中に銃声が響く。

モビルスーツデッキにいた多くの者が、その音に思考を停止させられる。

少女の構えた拳銃から硝煙が立ち上り、程なくして副班長はその場へと崩れ落ちた。

「副班長！」

メイが一拍遅れて副班長に駆け寄るが、彼は心臓部を撃ち抜かれており、ほぼ即死だった。

(これも自分のせいなのかッ！？やはり自分が死神……)

「かわいそうに、でも心配しなくてもいいわ」

少女の持つ銃の銃口が、今度はメイを捉える。

「もうすぐ、また会えるから」

ロウはその言葉を聞いた瞬間、頭の中で何かが外れるのを感じた。彼は一瞬で思考を手放し、身体的全権を衝動に委ねる。

「メイ！伏せる！」

言うが早いか、ロウは可能な限り素早く先程のマシンガンを抜き、忌まわしき敵達に銃弾をばら撒く。

「ッア！てめえ！よくも！」

その弾丸は少女の手に命中したらしく、少女が右手で構えていた銃は弾け飛び、はるか下方、MSの足元へと落下していく。

あの少女に率いられた者たちも、ロウのマシンガンに全員怯んでいた。

その隙にメイを助けるべく、突撃するロウ。

「悪夢は、終わらせる！」

少女の取り巻きの1人が一瞬遅れながらも、突撃するロウに対して殴りかかってきた。

姿勢を低くして攻撃をかわし、機械となった右腕で鳩尾に一撃叩き込む。

殴られた彼はそのまま狭い通路から落ち、10mほど落下した。

それすらもロウは気に掛けることなく、無駄のない動きでメイを奪い返すと、彼女を抱きかかえたまま近くにあった新型機に乗り込む。

「しまった！クツ、エイダ曹長！こちらもグフを奪うんだ！」

ロウがMSに乗り込んだことでこれまでの余裕を失ったのか、これまでの優雅な言葉遣いとは真逆の言動で、部下に指示を飛ばす少女リーダー格の少女から命令を受けて、別の少女がもう1機の新型機グフに乗り込もうとする。

しかし、ロウは咄嗟にグフの左手で、もう1機の機体へと走る少女を阻もうとする。

結果、グフの左手に装備されていたシールドの先端が少女を押し潰し、肉塊へと変えた。

「駄目か……。役立たずめ……。逃げるよ！」

少女の指示に、事態の展開が早すぎて飲み込めていない部下達は、戸惑いを隠せないでいた。

「クローディア少尉、エイダ曹長が……」

「助かる訳ないだろ、放っておけ！」

残った部下を一喝し、少女は一目散に逃げ出そうとするが、仲間を見捨てて逃げるといふ行動はロウの逆鱗に触れた。

「させん！」

ロウはMSに搭乗するための通路を、MSのマニピュレーターで握りつぶし、彼女の退路を阻む。

彼女の通ってきた方の道は、彼女が方向転換すると同時に逆側の手で破壊する。

「不味い、どうすれば」

進路と退路の両方を破壊され、目の前にはMS。

誰もが手詰まりだということ疑われないような状況に陥った少女は、それでも抵抗を諦めていないのか、悔しそうにロウの乗る新型機を睨んでいる。

「どうもこうも無い。投降しろ！」

「そんなこと！」

「できないと言つのなら、抹殺する」

脅してはならないことを相手に理解させるために、有無を言わさぬ威圧的な口調で警告するロウ。

しかし、彼女には完全に逆効果だったようで、逆上した彼女は、この場の誰もが予想し得ない行動へと及んだ。

「モビルスーツに乗ってるからって、いい気になるなあー！」

「何だ？」

彼女は突然ワイヤーを放ち、それは見事にグフの頭部にあるブレード・アンテナへと引つ掛かった。

彼女はそのワイヤーを頼りに、モビルスーツのコクピット部を蹴つて、モビルスーツを飛び越えた。

「しまった！アンカーガンか！」

そしてそのまま、他の通路に着地し走り去ってしまった。

「逃がしたか!? クソッ!」

ロウの悪態と、MSのコンソールに拳を叩きつける音がコックピット内に反響した。

ほとぼりが冷めた後、ロウはその場に居合わせた整備兵を集めて、彼らから話を聞いた。

「奴らは、キシリア・ザビ閣下の直属の部隊だそうで、その権限で我々のグフを奪おうとしたのです」

ロウはその言葉を聞いて、表には出さなかったもののその心中は舌打ちをしたくらいに波立っていた。

「私兵か。なら、厄介なことになる」

「どういうことです? 少尉」

ロウの言葉に反応し、困惑の表情を浮かべる整備兵達。

「我々が最前線の基地へと移動させられるかも知れん」

「なんですつて!?!」

彼らはロウの言葉を聞いて一様にざわめき始める。

「自分の責任だ。あの女を取り逃してしまったのだからな」

しかし、ロウのその言葉で整備兵達は皆、水を打ったように黙りこんでしまう。

そんな重い沈黙を破ったのは、メイの震える声だった。

「そんなこと、ない…。ロウがいてくれなかったら、メイは……」

未だに恐怖が抜けてないみたいで、声も体も震えていた。

「メイ、おいで。他の者は作業に戻ってくれ」

そう言つて、ロウはメイを廊下に連れ出し、人目に付かないところで抱きしめた。

「大丈夫だ。何も心配しなくていい」

ロウはそつと頭を撫でるが、メイは相変わらず震えたままだった。

メイを安心させ、泣きやませるのに半時間ほどかかった。

「落ち着いたか？」

ロウはいつになく穏やかな、優しい口調でメイに問う。

「うん。でも、もうちょつとだけ、一緒にいて」

泣きやんだばかりのか細い声で、ロウにお願いするメイ。

「分かった。今日いっぱいぐらいは一緒にいよう」

ロウがそれを拒む筈もなく、むしろメイの要求以上のことに応じた。

「ありがとう」

その後、ロウは新型モビルスーツ、グフのテストも、マシンガンの試射も忘れて、（第一、そういう場合ではなかった。）言葉通りにメイと一日を過ごした。

無論、隊長からお叱りを受けることは覚悟の上で。

夜になって、最初にロウを呼び出したのは、今日の騒ぎでパートナ
ーを失った整備班長だった。

彼は酒を飲みつつ、泣いていた。副班長^{パートナ}を失ったのだから、無理もない。

「来たか。まあ、飲め」

ロウは勧められるまま席につき、用意してくれていた酒を胃に流し込む。

「今日のことは、メンバーから大体聞いている。災難だったな」

ロウとは顔を合わせずに言う整備班長。彼の心中を慮ると、ロウも自然と沈痛な面持ちになってしまう。

「済まないと思う。奴らを取り逃してしまった」

「気にするな。お前さんのせいじゃない。とはいえ、やり切れんなあ……」

ロウはその言葉に返すことができず、しばらく場を沈黙が支配した。

また班長は言う。

「よくメイを守ってくれた」

「あんなに若いのに死んでいいはずないだろう。子供が死ぬなどと本来あつてはならん」

「……そうだな」

少しの間を置いて、班長は答える。

また新しく酒をグラスに注ぐ班長。

(これが今日のことを全て忘れられる魔法の薬だったら、どんなにいいだろうか……)

ロウはそんなことを思いながら、班長の注いでくれた酒を煽る。

その酒を一気に飲み下した時、班長はしばらく続いた沈黙を突然破つて、ロウに話を振る。

「なあ、少尉。気付いてるか？」

「？何がだ？」

唐突な質問、しかも何に対しての質問かが明示されていないために、ロウは戸惑いを隠せずにそんな風に返す。

「あの娘、あんたに惚れてるんだ」

普通なら酒に溺れた中年の世迷い言と片付けるであろう言葉。

だが、そうやって済ませるには、ロウには心当たりがありすぎた。

彼は自分なりの本音で、班長の言葉へと応じる。

「自分はそのままで愚鈍な男ではないよ。しかし、その想いに応えることが彼女の為になるとは思えん」

「どういうことだ!？」

酒が回って理性がいつもより少なくなっていた班長は、間髪入れずにロウの言葉に反応して怒鳴る。

「そう怒鳴るな、班長。あの娘は、カーウィン家の御令嬢は、家を継がなければならぬだろう。自分があの娘の側にいたら、そういうことがどうにも難しくなる」

「それぐらい……」

それでもなお食い下がろうとする班長の言葉をロウは手で制し、自身の言葉で説得を続ける。

「それにだ。あの時分の人間は弱いものだ。自分がパイロットである以上、死ぬ可能性は十分に考えられる。これ以上言う必要はないな？」

そこまでロウが言つて、ようやく班長は腹の虫が収まったのだろう。

「そうかい。そこまで考えてるなら、何も言わねえよ」

そうして班長は席を立つ。

「世の中つてのは、どうも上手くいかねえな」

そう言い残して、彼は去っていった。

次にロウを呼び出したのは、『対MS戦術・兵器開発実験部隊』の隊長であるジョン・マクファール少佐だった。

当事者であるロウに対して、今回の事件について説明せよ、と。

「報告書は読んだが、どうも今回の話はしっかりと聞いておかねばならんと思つてな」

少佐は神経質そうに眼鏡を持ち上げて、睨むようにロウを見ながらそう言った。

「それはそうです」

対してロウはそんな視線を気にした風でもなく、おどけたように言葉を返す。

少佐はそれが気に入らなかつたのか、

「簡潔に説明してくれ」

と、さつさと本題に入るように促す。

その意図を敏感に感じ取つたロウは、彼自身の気持ちもあつてすぐに説明を始める。

「ザビ家の特令を受けているという狂言で、我々がテスト予定の新型モビルスーツ　グフを強奪しようとした連中がいたんですよ。そ

れらしき命令書や証拠になるような物品等一切なし。全く信用できないので丁重にお引き取り願ったら、逆上して発砲してきました。これで我が方のメカニック1名、つまりヤン副班長が死亡。よって彼らを敵として認識。今回の戦闘に至ったわけです。この戦闘で敵側3名死亡、他は逃亡しました」

早くこの場から立ち去りたいという意図を込めて、早口で捲し立てるように言うロウ。

「実に簡潔な報告、ありがとう」

皮肉にしか聞こえないような口調で言う少佐。

「それでは失礼しま……」

「まだ話は終わっていない」

ロウは強引に話を切り上げて、部屋を出ようとするが、その試みは少佐に止められて失敗した。

（まだ少佐の声を聞かなければならないのか……）
うんざりした気持ちをなんとか表に出さぬように、ロウは努めて無表情を作っていた。

「少尉、君は今日その事件の後、何をしていた？」

少佐はロウを、非難するような眼で見据えていた。

「我が隊の優秀なシステムエンジニアが心理的外傷を負って仕事ができなくなつては困るので、そうならぬようアフターケアをしてみました。何か問題でも？」

少し皮肉めいた言い方で返すロウ。

隊長と隊員の関係の縮図のような展開が、ここにはある。

「そうか。しかし、それはそんなに大事なことからグフのテストを遅らせてまで、すべきことなのか？」

（これは質問の体裁を装った非難だろう……）

ロウはそんなことを思いながら、なんとか少佐を丸め込もうともう一度早口で捲し立てる。

「あの状況で予定通りテストができるとは誰も思つてませんよ。ならば他に時間を有効活用するのは、当然でしょう。それにカーウイ

ン技師は必要な人材です」

「……まあ、いいだろう。戻っていいぞ」

勢いに気圧されたのか、彼はロウの望む言葉を返した。

言葉とは裏腹に少佐は不服そうな顔をしていたが、ロウがそんなことを気にして部屋から出られるチャンスを逃すはずはなかった。

「では、失礼します」

その言葉を最後にロウは、嫌な空気の立ち込める部屋から退散する。空気が悪いのは換気を怠っているからではないだろう。

ロウはこれからのことを考えながら自身の部屋に向かう最中、メイに出会った。

どうしても彼女のことを気になり、声を掛ける。

「どうした、メイ？眠れないか？」

心配そうにメイへと尋ねるロウ。

「うん。ねえ、ロウ。メイもこの戦争で死んじゃうのかな？」

唐突にそんなことを聞くメイ。

ロウは突然の質問に一瞬、驚きながらも、しっかりと思っていることを伝える。

「……駄目だ。死んではいけない。多くの人が悲しむ」

ロウはメイの両肩を掴み、メイだけを見るようにしながら話す。

「そんなこと……」

「もし何かあったら、ちゃんと守ってやる。安心しろ」

何か言いかけたメイの言葉を遮るように、ロウは言葉を被せる。

「嫌だよ。それでロウまで死んじゃったら、メイは……どうすればいいの？」

メイはいつの間にか泣いていた。

ロウはその問いに答えられず、無理矢理気味に彼女を丸め込む。

「悲観的な想像ばかりは良くない。それともう寝なさい」

駄々をこねる子を諭すように言うロウ。

メイは泣きながら反論しようとしたが、彼は無理に遮って続ける。
「一緒にいてやるから」
彼のその一言でメイはおとなしくなった。

「ねえ、ロウ。今日は何でこんなに優しいの？」

寝床に就いたメイは、上目遣いでロウを見ながら問いかける。

そんなメイに対して、彼は肩を竦ませながらおどけたような口調で
「心外だな。自分は何時でも優しいつもりだが」
と答える。

「そっか」

メイもそれに納得したようで、先程まで泣いていた顔に微笑を浮かべる。

「寝れないなら、子守唄でも歌おうか？」

からかうような声でメイにそんなことを聞くロウ。

今までの重い空気を払拭するための彼なりの軽い冗談だったのだが
……。

「うん、歌って。ロウの歌声、聞いてみたい」

メイの予想外の答えに多少面食らったロウだったが、彼女の未だに
少し哀しみが残る表情を見ると冗談とも言えず、一呼吸おいて歌い
始めた。

「It's long time .

Dear , my close friend .

We're good any time .

You saved us with all your mig

ht .

How do you feel ?

I can't see

But, I want to
be better day tomorrow than
e past.
smile for you

ロウが歌い終わってメイを見てみると、彼女はベッドで呆けていた。
「……メイ？」
呆然としているメイを気付かせるために、彼女の名前を呼ぶロウ。
メイはそう言われて初めて歌が終わったことに気付いたようで、ロウの歌への感想を言う。

「綺麗な声だね、ロウは歌手さんを目指してたの？」
褒められたことが嬉しかったのか、彼女がほんの少しでも笑顔を取り戻したことが嬉しいのか、それを認識することのないままロウは返答する。

「そうではないよ、歌が人の心に与える影響を知りたくて、それで練習してただけだ」

ロウは無意識にメイの頭を撫でながら、彼女に対して慈愛に満ちた眼差しを向ける。

「また、聞かせてくれる？」

「気に入ってくれたようで何よりだ」

こんなやり取りの後メイを寝かせた後、ロウは部屋に戻ったが、結局一睡もできなかった。

その後、彼ら『対MS戦術・兵器開発実験部隊』の多くの者は最前線送りになるかと予想していたが、逆にこの基地での待機を命じられた。

理由は

『新型の水陸両用モビルスーツをそちらに配備する。そのテストを

行え。』

というものだった。

海が近いこの基地の立地に合った任務なので訝しむ者もおらず、さい最
いあくのよそう前線送りを回避できたことに皆安堵していた。

その頃、連邦軍オーガスタ基地でモビルスーツの製造が始まっていることをジオン軍諜報部は掴んでいた。

無論、ポーツマス基地の人間に、その情報が伝えられることはなかった。

第八話：連邦以外の敵（後書き）

次回、ついに連邦VSジオンのモビルスーツ戦闘です。

そんなに期待せず、お待ちください。

しかし、主人公機がマイナー機の極みです。

敵機も知る人ぞ知る機体です。しかし、絆に登場しています。

第九話・対決！連邦の妖精と水陸機のデキソコナイ（前書き）

第九話：対決！連邦の妖精と水陸機のデキソコナイ

宇宙世紀0079 9月21日

北米 ポーツマス基地

「我らジオン軍は悪しき連邦の海軍を殲滅し、制海権を手に入れるため、新型のモビルスーツを開発した。MSM 02 リヴァイアサンである！この新兵器で地球の海にのさばる連邦海軍を徹底的に叩く。と、総司令部は発表した。これで地球の解放は時間の問題となった。」

「そんなこと言って、コンペに落ちたら洒落にならんど。」
テレビに向かつて皮肉をぶつける。当然、変わった様子はない。

「この機体は現在、北米のポーツマス基地で最終試験を行っている。近い将来、大量の連邦軍艦隊の残骸が海に沈むであろう。…」

「……どうなっても、我々の責任じゃないからな。」
我々の部隊は、命令通り新型の水中用モビルスーツをテストしていた。

今、テレビで宣伝されている物である。

しかし我々の士気は低かった。なぜなら、この行動に意味を見出せなかったからだ。

我々の受領したモビルスーツは確かに新型機ではあった。が、その機体はコンペティションで敗色濃厚と噂されるものだったからだ。水陸両用機の先駆けとなったザクマリンタイプ。その域を出ていないであろうことはそのシルエットから容易に想像できる。

全身に装備されたミサイルポッドは火力の高さを伺わせるものの、メガ粒子砲を搭載できなかったため、間に合わせて装備されたものだそうだ。

そんな話を聞くと強力そうな武装も、滑稽に見えてくるから不思議である。

実際、被弾すればあっという間に多量のミサイルが誘爆して命を失

ってしまうのではないかと、今でも疑ってしまうのであった。

陸上でも水中でも中途半端な機動性。こんな機体でも、名目上は開発途上の実験機であり、MSM 02という型式番号こそあるものの、呼び名はなかった。

リヴァイアサンという名は広報部が勝手につけた名前である。宣伝放送に使われる機体が名無しでは、流石に不味かったのだろう。

「こんなモビルスーツで、新規設計されたゴッグに勝てる訳ないだろう。」

そうばやいても、モビルスーツの性能が上がるわけでも、開発中止命令が下されるわけでもないのだが、とにかくほとんどの隊員がこの任務に嫌気がさしていた。

それはメイも例外ではなかったらしく、毎日のようにばやいていた。

「こんなモビルスーツ、開発費の無駄じゃない。もっといい機体を廻してほしかったな。」

「全く同感だ。何故こんな機体を…。」

その時、一つの考えが脳裏を過ぎった。

「第一これ、ツイマッドのじゃない。なんでメイたちが…。ロウ、

どうしたの？ 顔色悪いよ。」

「いや、少し気分が優れない。悪いが先に戻ってる。」

「気を付けてね！。」

その辺にある車から適当なのを見繕い、それを全速力で基地に走らせる。

まさか…と何度も思い直しつつ、足は勝手に指令室に向かって動いていた。

しかし、その考えは全てつじつまがあっていた。

ザビ家の私兵である屍食鬼隊^{グール}とかいう連中の恨みを買いつつ、彼らが我々を敢えて最前線送りにしなかったこと。

不要なモビルスーツで我々をここに留めておいたこと。そして何よりここでテストが行われていることが大規模に広報されていること。

考えれば考えるほど焦りが生まれ、指令室に向かう足が速くなる。終いには自分でも気付かない内に、全力疾走していた。

そんなとき、更にその考えを裏付ける情報が入る。それは基地周辺の哨戒に出ている2機のザクのパイロット達からだった。

「なんか、ミデア輸送機の編隊が飛んでたぜ。で、敵に気付かれなように報告しようと思っただけでその場をやり過ぎそうとしたんだが……」
「ジョンが早まってよお。」

「あの場合はしょうがなかったんだよ。報告には戻ってきたんだからいいだろ。」

「敵は何機だ!？」

「怒鳴ること無いだろ。5機だったが、ジョンが1機落とすたんで4機だ。」

答えを聞くと、また走り出す。目的地は変わらない。

「少佐!！」

「なんだねガルフ少尉。ノックぐらいしたまえ。」

「それどころじゃないんです!ここを脱出する準備を!」

「何故だ?一体何の権限で……」

「だから、そういう場合じゃないんです。我々は見捨てられたんです。おそらく連邦軍が来ます。」

「何の根拠があつて、そんなことを……」

「新型機の宣伝で連邦軍をおびき寄せて、ミサイルが何かで吹き飛ばすんでしよう。屍食鬼隊グールの復讐しやがらせですよ。既に連邦は動いています。」

「この話は他に誰かに知らせたか?」

「いえ、混乱を招くといけませんから。」

「よくやった。さて、すぐに脱出しよう。」

「まさか、お一人で脱出するお積りで?」

「そんなはず無いだろう。必要な人材は連れていくさ。」

「考え直してください。総員に脱出命令を発してください。」

「それでは、作戦は成り立たんだろう。この基地には餌となる生贄

スケープゴート

が必要だ。わかるな、少尉？心配するな。少尉は……」

「部下を見捨てて逃げるのですか！」

「見捨てるのではない、任務を全うしてもらっただけだ。彼らは我が隊の英雄として……」

「貴様、本気で言ってるのか！」

マシンガンを左手で取り出し、少佐に突き付ける。

「自分だけ逃げるといふような無能な指揮官なら、ここで消えていただく。同胞の為、ジオンの為に！」

「わかった。総員に撤退命令を出すから銃を下げてくれ。」

「その指揮権を自分に渡せ。最早貴様は信用できん。」

自分の命ほどかわいい物がない少佐が、指揮権程度渡さないとまずも無かった。

明らかに怯えきつた態度を見ると、司令は自らの保身しか考えていないようだった。

「ロウ、脱出ってどういうこと？」

メイは少し不安そうな口調で問う。メイが疑問に思うのも無理はない。

「敵がもうすぐ来る。君らは帰ってきて早々で済まないが、あのモビルスーツの整備をしてくれ。」

「りょーかい。じゃあロウはどうするの？」

「できるだけ撤退支援を行うから、最後に脱出するよ。ミサイルが大量に搭載されてるあの機体なら、殿にはうってつけた。」

「大丈夫？乗り遅れたりしない？」

メイはまたも不安そうに聞く。

「自分は乗り遅れるほど、モビルスーツの操縦は下手ではないつもりだが？」

「そういうことじゃないの！ちゃんと帰ってきて。その後、大事な話があるから。」

そう言ったきり、メイは整備作業に戻っていった。

「脱出に使える機体は3機か。ガウ1機にファット・アンクル2機。撤退時の防衛に使えるような物はザクが3機にドップが6機、それとあの試作機。どう使ったものかな。」

滑走路では人員の乗り込みや物資の積載が、始まっていた。

「首尾は？」

「順調です。どうやら人員はガウとアンクル1機で何とかなります。」

「積載量に余裕があるのか？」

「とんでもない。人員だけならお釣りが来ますが、この基地の物資全てを持っていけるわけじゃありません。」

「それはそうだろう。で、残していく物資は？」

「食糧、モビルスーツ用のスペアパーツ、マゼラ・アイン空挺戦車。それと少尉のモビルスーツを……」

何故か彼は気不味そうだった。きっとパイロットの機体への愛着を理解しているのだろう。

「構わんよ。自分が殿を務めるつもりだからな。それで一つ頼みがある……」

「何でしょう？」

「弾薬や爆弾なんかは、基地に近いファット・アンクル1機に詰め込んでおいてくれ。」

「な、え？ええええええ！」

咄嗟に手で彼の口を覆う。

（「声大きい。」）

（「ですが、何でそんなことを？」）

（「自分の乗る機体に危険物はいらんだろ。君も変な人だな、自分の乗る機体に危ない物に乗っけないで済むというのに。」）

「モノがモノです。」

「あんな物、できるのなら誰だつて運びたくないんだ。殿を務める自分が、運良く生き残ったら運んでやる。」

「少尉は何故、殿をやることといい、そこまで危険な任務を自分から？」

「久しぶりに、全てを賭けて守りたいものができたんだ。」

「そんなもの、恋人ぐらいしか……。まさか！」

「ははっ、言うなよ。」

物資運搬担当の下士官はすぐに気付いたらしかった。これ以上、問い詰められないように、すぐにその場を後にし、自分のモビルスーツへ向かう。

「整備はできているか？」

「おう、性能はフルに出せるぜ！弾薬、推進剤も満タン。いつでもいけるぞ！」

いつもは少し耳障りな整備班長の声（と言ってもマクファールン少佐ほどではない）が、気持ちよく耳に響いた。

（こいつが、自分の死装束になるとはな。少し不格好だが、メイを守るならそれ以上は要求しない。）

モビルスーツに乗り込み起動させる。ザクとは多少操縦系が違っていたが、それもこの機体のテスト中に大分慣れた。

「ローエン・ガルフ、出撃する！」

格納庫からモビルスーツを出す。そのまま基地の外側へと向かう。

その時点でほとんどの人員が配置を終えていた。

「敵部隊、来ました。フライマンタが8機です。」

オペレーターから情報が入る。すぐさま返答を返す。

「対空ミサイルとバルカンで、できる限り墜とす。」

そう言ってミサイルを発射、これは誘導性能が高く、そのまま撃墜されたのが3機、回避の隙についてバルカンで撃破したのが1機あった。

「あと4機！」

突破された4機に照準を合わせて、すぐに撃つ。1機にミサイルが命中、爆散する。他の1機にバルカンが命中、横に流されるように墜ちる。さらに他の1機を巻き込んで空中接触、最終的には敵機は1機にまで減っていた。

「1機逃した。そちらで仕留めてくれ。」

「了解。飛行機を墜とさせやしねえよ。」

「敵戦車隊接近。ガルフ少尉は予定通り、基地施設を盾にしつつ防衛。」

「了解。」

放棄する基地なので、盾に使うことは許されていた。むしろ奨励されていた。基地施設を連邦軍に使わせないために、破壊した方が良いからである。

盾になっっている基地施設から頭部だけを出し、敵戦車をロックオンし、肩のミサイルを放つ。

地を這い蹲る移動速度の遅い戦車が、ミサイルをかわせる筈もなく全車がスクラップと化した。

「ガルフ少尉、後退してください。」

「了解、ここまでは作戦通りだ。しかし、戦闘機と戦車だけではザクすらもろくに倒せないというのに。」

滑走路まで後退すると、人員は全員乗り込んだ後だった。

後は脱出を残すのみ、というところで訃報が知らされる。

「セイバーフィッシュ接近！数6！」

その時、最も基地に近いファットアングルが垂直離陸を始めた。

「やはりか。にしてもいいタイミングだ。」

「少尉、今何と？」

「ガウを発進させる。ドップもだ。ザクは予定通り1機が搭乗、もう1機が離陸後飛び乗る。いいな？」

「了解。」

敵戦闘機部隊は予想通り、一番近くにいる離陸しようとしているフアット・アングルを狙って群がる。

「餌に食いついたか。なら！」

1発だけミサイルを放つ。連邦軍ではなくフアット・アングルに。その行動の意味するところは明らかだった。弾薬を大量に搭載した機体は、通常では考えられない規模の爆発を起こし、連邦軍機を巻き添えにした。

「貴方は無能だったが、なかなか良い仕事をしてくれました。感謝しますよ、マクファール少佐。」

しかし、戦闘はそこで終わらなかった。最も厄介な敵が現れたのだ。「敵機接近、これは！？連邦のモビルスーツです！」

「数は？」

「1機です。」

「成程、まさか通常兵器だけで仮にも新型モビルスーツを仕留めには来ないと思っただが。しかし、単機だと。」

「冷静に状況分析してる場合か！我々が仕留める。輸送機は早く行けえ！」

ザクのパイロットはそう言って、正体不明の敵機に向かう。

「エイムズ、迂闊だ！出すぎるな！」

敵機の姿が見えた。

戦場では自殺行為ともいえるトリコロールカラー、ジオン軍モビルスーツとは対照的な二つの眼、どう見ても厚いとは言えない装甲、武装も少なそうだった。

突如現れたその機体に向けて、ザクがマシンガンを放つ。が、見事に回避し、凄いスピードでザクに肉薄すると、短剣らしき武器で簡単にザクを切り裂いた。

それらが一瞬のうちに起こったのだった。

「速い！そのための軽装甲か。それにあのダガー、ビーム兵器なのか？」

接近戦では明らかに不利なため、バルカンとミサイルで牽制し、距離を詰めさせないようにする。

当然、相手も機動性を活かした回避行動をとる。命中弾はなかった。この間にも後退を続ける。敵の接近は敗北を意味する。

腕のミサイルを出鱈目に撃つ。これが当たる可能性は無いに等しい。そのことは分かっていたが、全ての腕のミサイルを撃ち尽くした。爆煙で煙幕ができる。これを狙っていたのだ。その煙幕を無駄にすることなく、敵機との距離を置く。

「あの装甲なら、策はある。」

誰に言う訳でもなく呟く。が、そうすることで確信を得たかった。煙幕が晴れる。この状況はとて不味かった。ミサイルは残り僅か。バルカンは充分あったが、敵機をその有効射程まで近付けるのは、三途の川の渡り賃を払うようなものだ。

それでも動かなかった。敵機が距離を詰めてくる。

ついにその剣が自機に襲いかかる。しかし、その腕をしっかりと掴んでこれを防ぐ。

敵の攻撃はミサイルポッドを掠めていたが、ミサイルを撃ち尽くしていたため、誘爆などはしなかった。

逆の腕はバルカンで破壊する。これで相手は反撃手段を失う。さらに空いた手で、敵機の胴に一撃いれる。

軽量化され尽したのである。その機体は、簡単に宙に舞う。

そのまま一本背負いを掛けて、さらにその機体が立ち上がらないうちにバルカンを弾が切れるまで撃つ。

敵機が二度と立ち上がることは無かった。

「さて、また自分だけが死に損なったか。どうしたものか。」
彼は一瞬考えるが、直感的に答えを出す。

（仕方がない。ニューヤークへ向かい、ガルマ・ザビ大佐の部隊と合流しよう。）

ローエン・ガルフの戦いは終わらない。

第九話：対決！連邦の妖精と水陸機のデキソコナイ（後書き）

リヴァイアサンというのは、勝手につけた名前です。

公式設定とか非公式設定とかではないので悪しからず。

ジョンとエイムズって誰が覚えてるんだWWW

今回はファーストガンダムが原作になります。

この展開に誰よりも驚いてるのは、作者だったり。

第十話・白き艦と白い悪魔（前書き）

第6話 ガルマ出撃す が原作となっています。
ガルマぐらいしか出てないですが。

第十話：白き艦と白い悪魔

宇宙世紀0079 9月23日 ニューヨーク

ポーツマス基地から多くの手土産を持って脱出してきた自分は、2日間ろくに休まずにザクで移動し、やっとの思いでニューヨーク基地に到着。したのがほんの30分前。

今は基地司令のガルマ・ザビ大佐に会い、報告を行っていた。

「連邦製モビルスーツの残骸か。コンテナに詰めて、ザクでここまで運んできたらしいじゃないか。」

「そうです。」

「その途中に敵に襲われたら、どうする積りだったんだね。」

「そのリスクを冒してでも、成し遂げるべきことだと考えたのです。敵の情報は、戦争に勝利する為の武器として、何よりも役に立ちますから。」

「それはよく働いてくれた！私の権限で昇進できるように取り計らっておこう。勿論、君の手柄だ。」

「ありがとうございます。しかし自分は、マクファールン少佐をお守りすることができませんでした。」

本当は脱出が決まった時、守るところか抹殺することを決めていたが、大佐にそんな事を言う必要も無い。

「敵の攻撃を事前に察知し、多くの兵の脱出に尽力して、救ってくれたことと、水陸両用モビルスーツのデータを持ち帰ってくれたこともある。」

そこでガルマ大佐の表情が曇る。気の進まない調子でさらに続ける。「上官を守りきれなかったことは辛いだろうが、あまり引きずらない方が良い。」

そうとは知らないガルマ大佐は自分を気遣ってくれる。罪悪感を感じ

じないでもない。

暗い空気を何とかしようと、ガルマ大佐が話題を変える。

「モビルスーツの顔はどうした？」

ガルマ大佐が解析中のエンジンアに問う。その話題の変え方にはかなり無理があると思う。が、黙っておく。

「顔？ 頭部ですか。現在、別の場所で調査中です。比較的損壊が少なかった、というか、ほとんど無傷だったので。」

「そうか、ご苦労。」

連邦のモビルスーツ自体にはあまり興味はなかったのか、モビルスーツデッキ（連邦軍機の残骸は、そこで解析されていた。）を後にした。自分はそこで、エンジン達からそのモビルスーツについて聞いてみることにした。

「このモビルスーツの性能はどうだ？」

「なかなか高性能な機体ですよ。ビーム兵器を標準装備している上に、機動性もかなり高い。どうやら近距離での格闘戦を主眼に置いて開発されたみたいです。」

「確かにザクとは比べ物にならないぐらいに速かったな。機動性で翻弄する設計か。」

「そういうことです。そのかわりに防御力は犠牲になってるようで。」

「コンピューターに何かしらのデータなんかは残ってなかったか？」

「コンピューターは破損が酷くて…、やってはいるんですけど。」
エンジンアとそんなやり取りを何度か行い、出た結論は連邦軍のモビルスーツはかなり高性能だということだった。

「こんな物が量産されたら…。」

「そうなる前に戦争を終わらせる必要があります。ジオン全軍が少尉のように優秀なパイロットで、連邦軍が全員素人であれば、話は別ですがね。」

そんな会話に割って入るように、連絡が入る。

「少尉！ガルマ大佐からです！」

そう聞くと通信機に向かう足が自然と速くなる。

「大佐、どうしました？」

「少尉、至急ガウに乗り込んでくれ！シャア少佐が連邦のモビルスーツを積んだ艦を、この北米大陸に誘い込んだらしい。」

「その艦を討つのですね？しかし、相手の戦力等の情報は？」

「ほとんどないのだ。だから、対モビルスーツ戦を経験したことがある君に協力を願いたい。」

「どうやら大佐は自分を、本当のモビルスーツハンターだと思っているようだ。が、実際は違う。」

自分とて対モビルスーツ戦を行ったことは、数えるほどしかない。

まあジオン軍ではそれでも多い方なのだが…。

「自分に対する過大評価は感謝します。しかし大佐、お言葉ですが、手柄を焦るといいことないですよ。」

「焦る？私がか？」

「ええ。」

「何故そう思う？」

「何となくです。ですから、こういう時は敵の情報をもっと集めないと…」

「敵の事を知るためには、実際に手合わせするのが一番確実だ。ガウを一個中隊出すぞ！」

そこで通信は切られる。様子見にガウ一個中隊もないものだと思う。

「大佐は焦り過ぎてる。自分の力で何とか出来ないものか…」

結局、こうしてガルマ大佐に押し切られる形で、出撃することになった。

ガルマ大佐は自分を高く評価してくれている様子で、下士官にガウを案内してもらっていた。

「とりあえず、格納庫に行きましょう。少尉の機体を見てもらわな

いといけませんから。」

「どんな機体だ？まあ、ザクなんかが妥当だと思うが。」

「いえ、少尉にはモビルスーツは回せません。」

予想できなかったその言葉に、しばらくの間絶句した。気を取り直してその下士官に問う。

「では、自分は何で出撃すればいいのだ？」

言葉に棘を含ませて言う。

この下士官に当たっても仕方ないことだと気づいたのは、その後だった。

しかし、彼は顔色一つ変えずに、その答えを口にする。

「少尉にはドップ一個小隊を預けます。」

彼は一呼吸置く。その一呼吸の時間が永遠であれば、どんなにいいだろうか。

しかし、無情にも彼の言葉は続く。

「『木馬』のモビルスーツを叩いてください。少尉の実績を鑑みての任務です。」

「馬鹿を言うな！我が軍のモビルスーツに対して攻撃を仕掛けた連邦の戦闘機の大半は、無駄死にしているんだぞ！」

ここにきて、彼は挑発としかとれないような言動に転じる。

「自信がないのですか？少尉は2機モビルスーツを墜としたと聞きました、それは嘘なのですか？」

「記録に残ったのは1機だけだ。それに自分が墜としたモノと同じモノが出てくるかはわからんよ。」

「少尉がこんなに小心者、いや臆病者だとは知りませんでした。」

「そう取られても構わんよ。しかし、君の作戦も失敗だな。」

「な……」

彼の動揺が手に取るように分かる。そこでさらに追い打ちをかける。「まず挑発というやり方が駄目だ。こういう無茶な頼みごとをする場合は、挑発するのは賢い選択じゃない。」

「ぐっ……」

「それに、挑発という手段を用いるにしても、やり方が単純過ぎる。挑発は相手に気取られないようにしなければならぬ。」

彼は絞り出すような声で最後の切り札を出してきた。

「しかし、これは大佐の命令です。」

「なぜ最初からそれを言わない？」

「大佐からは『少尉にはこの待遇に納得して出撃してもらおうように。』と、命令を受けました。そのための交渉役が私だったので。」

大佐の気遣いは良くない方へ転んだのだった。

「挑発に乗せて丸め込むのは、納得させるとは言わないだろう。」
それきり、彼は黙ってしまった。

「モビルスーツを持つてくるべきだったな。」

長い沈黙を破った第一声がそれだった。

格納庫に向かう途中にある居住区で、自分はそんな厭味を隠すことなくぶつけていた。

緊急発進したガウには、モビルスーツを搭載する時間的余裕が無かったらしい。

「少尉には、左翼の格納庫のドップ小隊を使わせるように、と、命令を受けています。」

「ドップか。戦闘機はあまり得意ではないのだが、やってみるか。」

『木馬』とやらから、戦闘機が出てこないとも限らん。」

左翼のドップが格納されている所に向かう。

ちょうどその格納庫に着いた頃、ガウの艦橋内では

「『木馬』、レーダーに捉えました！」

「よし、まずはドップ隊から発進！攻撃を掛けて、敵の出方を見る。それとコムサイの回収、忘れるなよ。」

「ドップ隊、全機発進。『木馬』に攻撃をかけます。」
アナウンスが大佐の指示を伝える。

「少尉！」

今まで案内してくれていた下士官が呼びかけてくる。

「了解だ。しかし、一緒に小隊を組む相手のことぐらいは、知っておきたかったがな。」

その呼びかけの意味をすぐに理解し、不平を洩らしつつもドップに乗り込む。

「モビルスーツとは勝手が違うか。当然と言えば、当然なのだが、どうもな。」

「どうもですか？」

「ははっ、言うなよ。ドップ第3小隊、ローエン・ガルフ、出撃する。」

慣れない機体を発進させる。これから未知の敵と戦うということもあって、手が震えていた。

機体を発進させてすぐに、大佐が通信を入れてくる。

「全機、気を抜くなよ。相手はあの『赤い彗星』がジオン十字勲章ものと評したような奴だ。」

「了解。」

さらに僚機から通信

「若いの、無理すんなよ。」

「やれることをやるだけだ。無理するつもりはない。しかし、今まで以上に厄介な敵だろうな。」

「その年で相当な実戦をやってきたようだな。頼もしいぜ。」
「死に損なってるだけだ。腕はあまり期待しない方がいい。」

そのままガウの前面に展開し、『木馬』を目指す。

ガウのレーダーが『木馬』を発見したが、戦闘距離までにまだ間が空いているので、一時的に小隊を組むことになったメンバーに、『木馬』について聞いてみることにする。

「『木馬』か、どんな奴か聞いていないか？」

「モビルスーツを運用するために作られた艦だそうだ。」

「質問が悪かったようだ。武装やスピード等の具体的な情報だ。」

「武装自体は通常の宇宙戦艦とあまり変わらんそう。モビルスーツに接近された時の為に、機銃は多めらしいが。それぐらいしか聞かされてねえ。それすらも噂なんだがな。」

「それで充分だ。」

思ったより多くの情報があった。さらにガウではじき出された予想データが転送されてくる。しかし、そのどれもが、『木馬』がかなり高性能な艦であることを示していた。

（むう、撃破は難しいかもしれないな。）

『木馬』を目視できる距離になって、自分は正直、怖気づいていた。

『木馬』の異様な姿に、とても底知れぬモノを感じた。

真っ白な船体、従来とはかけ離れている艦のフォルム、あらゆる場所に装備された武装。そして、その大きさ。そのどれもが、自分達ジオン公国軍兵士を圧倒するかのようだった。

「あんな物を、墜とすというのか。」

自然とこの作戦に参加したことへの後悔にも似た気持ちがかみ上げてきて、そんな言葉を発してしまう。

「怖気づいたか？若造。」

同小隊のドップのパイロットが声をかけてくる。ベテランパイロットらしく声に余裕が感じられる。

「アレがドップで墜とせる張り子の虎に見えるか？」

「そりゃ分らん。ま、やってみるしかねえだろ。」

「仕方ない、攻撃をかける。」

しかし、その巨体に見合った物凄い弾幕で、接近は困難であった。
「くっ、流石に容易には近付けないか。」

機体を敵戦艦から離し、充分離れたところで反転させる。

「再攻撃、行くぞ！」

「了解！しかし、前面から強引に攻撃することになるけどいいの
か？」

「前面は一番攻めにくい筈だから、相手も油断しているものだ。だ
から実際は一番攻めやすい。」

言いつつ、異様なフォルムの巨大な艦に、自機を向かわせる。一時
的に部下になった二人も付いてくる。

弾幕を回避しつつ、ミサイルを撃つ。大きな艦体に当たらない筈も
ないが、弾幕が自機を掠める。そして、

「クライトン！」

部下が一人、弾幕の餌食になってしまった。

「くっ、一旦退避！おそらく敵はあの山間部に隠れる積りだ。そこ
を急降下爆撃で仕留める。」

「待て！あの山間部に隠れるなら、かなり高度を下げるはずだ。急
降下爆撃なんてしたら……」

「援護は頼んだぞ。」

強引に通信を切って、『木馬』を正面に見据える。さらによく見る
と右のハッチ（敵からすれば左になるか）が開いていた。

「気をつける！モビルスーツが出てくるぞ。」

直感的に出た考えだったが、何故か確信できたそれを、部下に伝え、
注意を促す。

しかし、取越し苦労だったようで、出てきたのは大型の戦車だった。

「戦車ならば……背面から攻撃するぞ！」

「だろっな。援護する！」

その戦車が味方を追って、後ろを晒したところで攻撃にかかる。

「もらった！」

機銃を撃つが、敵も我々に気付いていたらしく、素早く振り向いて

主砲で反撃してきた。

「ジョyson曹長！」

その反撃により、またしても部下を失う。

「火力がかなり高い。あれもモビルスーツなのか？」

その瞬間、あれが戦車だという考えは消える。

どっちにしてもアレの出現により、少しではあるが自軍の被害が大きくなっていった。

「何とか、あのモビルスーツを撃破して、曹長の仇を討てないものか。」

そんな自分の歯痒い思いの前に、マゼラ・アタック隊が出現した。彼らが『木馬』の足を止めてくれるなら、もしくは敵を引きつけてくれたなら、自分のやろうとしていることが、実行できる。

そんな事を考えていると、願っても無いことが起きる。そのモビルスーツがマゼラ・アタック隊に攻撃を集中し始めた。

「ありがたい。仕留める！」

自分はモビルスーツに上方から近付き、攻撃をかける。よく見ると頭部にキャノピーがかかっており、コクピットになってるようだ。

そこを攻撃目標と決め、機銃で攻撃する。

残念ながら攻撃は少しずれ、分厚い装甲に少し傷をつけただけだった。自分が戦闘機に慣れていないことを呪いたくなる。

もう一度攻撃をしようと急いで反転するが、敵の姿は無かった。見ると、『木馬』のハッチが開いているので、収容されたのだろう。

「あの艦もモビルスーツも、ドップでは歯が立たない！マゼラ・アタックの砲撃をあんなに浴びているのに沈まないのか！」

通信機から聞こえてきたそんな声も、至極納得だった。そんな我々にガウから朗報がもたらされる。

「モビルスーツ小隊を発進させました。各部隊はモビルスーツを援護してください。」

3機のザクがこっちに向かってくるのが見える。対する『木馬』もしまっていた戦力を投入してきた。

まず出てきたのは、赤と青に塗装された見慣れない戦闘機だった。士官学校の教科書にもこのような機体は載っていなかったので、おそらく新型機なのだろう。

続いて先ほどの戦車のようなモビルスーツが出てくる。

そして最後に、人型の白いモビルスーツを発進させたようだ。

「自分が仕留めた機体に似ている。」

主に頭部が。しかし、装甲はかなり頑丈そうだったし、射撃兵装もしっかりしたものだだった。

その白いモビルスーツが放った一撃により、またもトップが1機、鉄屑と化す。

射撃兵装にもビーム砲が付いているようだった。

「白いモビルスーツに集中砲火、確実に仕留めるぞ！」

モビルスーツ小隊の隊長が命令し、他2機やマゼラ・アタック隊もそれに従う。モビルスーツに対し、集中砲火が浴びせられるが

「ダメージを受けている様子が無い！総員警戒！」

しかし、最早手遅れだった。痺れを切らしたのか、白いモビルスーツは突然盾と銃を投げ捨て、地面を転がったりして器用に攻撃をかわしつつ突っ込んできた。

さらにそのモビルスーツは、ザクの頭部にあるパイプを掴み、そのまま投げ飛ばし、パイプを引き千切った。

自分も攻撃を仕掛けるが、かなりのスピードで走りまわっているため、全く当たらない。

さらに、例の戦車のようなモビルスーツの支援砲撃もあり、戦闘の主導権を奪われていた。

「総員撤退！」

その声を聞いた時には、最後のザクが撃破されていた。

白いモビルスーツは錯乱しているのか、既に自分で撃破した戦車の残骸や地面を、剣で叩いていた。

撤退し、基地に戻った後、大佐に意外な用件で呼び出されることと

なる。

「なんですって、オデッサへ？」

「ああ、ヨーロッパ方面で連邦軍に不穏な動きがある。それに備えるためにオデッサは戦力を欲しがっているのだ。」

そう言うとき大佐は、モニターを操作し、別の作戦説明用と思しきスクリーンに少し前のヨーロッパ戦線の状況が映し出される。

そのモニターの右上に表示されている日付が変わっていく。

それに伴い、ジオン軍が連邦軍を淘汰していくのが見て取れるが、8月以降、そのスピードは明らかに衰えていた。

それが示すところの意味を理解し、この地に留まることが出来ないことを内心で悟りながら、自分の正直な意見を、大佐にぶつけてみる。

「もう少し大佐のお手伝いがしたかったですけど……」

「手伝ってもらうさ。私が君のような優秀なパイロットを増援に送れば、姉上に対して男が上がる。」

大佐の言っていることに間違いを見出そうとするが、どうにも見つかからない。

「気持ち嬉しいが、君には仲間がいるのだろう？いつまでもその人達を心配させたままという訳にはいかないだろう。」

大佐の言う通りだった。最早、反論の余地は残っていない。

「心配するな。こっちは『赤い彗星』がついている。彼と私で、確実に『木馬』を仕留めてみせるよ。」

何も言うことは無い。黙って命令を受け取る決意をする。

「ローエン・ガルフ少尉、いや、本日付で中尉に昇進した貴官への命令は、オデッサへの配属だ。ガウを1機率いてオデッサへ向かってくれ。健闘を祈る！」

「了解。大佐こそご無事で。」

こうして再びヨーロッパに戻るようになった。

「連邦軍が本格的にモビルスーツを量産し始めたら……この戦争は

負ける。そうなるとして、成すべくまじとは…。」

第十話：白き艦と白い悪魔（後書き）

ロウ君と一緒に戦う!! 死亡フラグ

まあ、そんなことはどうでもいいのです。

感想とかお願いします。

リクエストにも可能な限り、応えるつもりです。

第十一話：嵐の前の静けさ

宇宙世紀0079 10月6日

自分はオデッサ近郊の基地にいた。近々オデッサに対して、連邦軍の総攻撃が行われるらしいので、防衛戦力の増強のために、オデッサ此処に派遣されてきた。

その間に自分は、真に守るべきものを、また一つ失っていた。

自分はとても卑屈な思いで、ただただテレビ画面を見つめていた。そこでは、ジオンの中で最も有名な人間が、猛々しく演説を行っていた。彼は自分よりも悲しみに暮れるべき立場の人間だった。

なんせ、自分の守るべきものとは、彼の弟だったのだから。

「我々はひとりの英雄を失った。しかし、これは敗北を意味するのか!? 否、始まりなのだ！」

地球連邦に比べ我がジオンの国力は30分の1以下である。にもかかわらず、今日まで戦い抜いてこられたのはなぜか？

諸君！ 我がジオン公国の戦争目的が正義だからだ！

ひと握りのエリートが、宇宙にまで膨れ上がった地球連邦を支配して50余年！ 宇宙に住む我々が自由を要求して何度、連邦に踏みじられたかを思い起こすがよい。

ジオン公国の掲げる、人類ひとりひとりの自由のための戦いを神が見捨てるわけがない！

私の弟、諸君らが愛してくれたガルマ・ザビは死んだ！！ なぜだ！？

戦いはやや落ち着いた、諸君らはこの戦争を対岸の火と見過ごしているのではないか。それは、罪深い過ちである。地球連邦は、清雅唯一の地球を汚して生き残ろうとしている。

我々はその愚かさを、地球連邦のエリートどもに教えねばならん

だ。

ガルマは、諸君らの甘い考えを目覚めさせるために死んだ。戦いはこれからである。我々の軍備は、ますます整いつつある。地球連邦もこのままではあるまい。諸君の父も兄も、連邦の無思慮な抵抗の前に死んでいったのだ！

この悲しみも怒りも、忘れてはならない！ それを、ガルマは死をもつて我々に示してくれたのだ！

我々は今、この怒りを結集し連邦にたたきつけて、初めて真の勝利を得ることができる！ この勝利こそ、戦死者すべてへの最大のなぐさめとなる！

国民よ！ 悲しみを怒りに変えて立てよ、国民よ！

ジオンは、諸君らの力を欲しているのだ！

ジーク・ジオン！！」

彼は一国の、いや宇宙移民者の代表だった。だからこそこのように心を鬼にして、弟の死に対する悲しみを隠し、国の為に動かなければならない時もある。

しかし、心理学を学んだ自分から見ても、この兄、ギレン総帥は、弟の死を悲しんでる様には見えなかった。画面越しだからそう見えるのかもしれないが、やはりその印象は拭い切れなかった。

しかし、危険だと分かっていたいながら彼の下を離れた自分に、何も言う権利などないことは、百も承知していた。

「本当の死神だな、自分は。さつさと死んでしまった方がいいのかも知れん。」

翌日、自分は新たな命令を受ける。その命令は書類で届いたのだが……。

「新型モビルスーツの実戦テスト、か。悠長な話だ。それでも実弾を使った演習なんかをやってもらえると、嬉しいのだが。」

そうできれば事故に見せかけて、神の国に向かうこともできるだろうから。

自分は基地の食堂で、任務についての書類に目を通すことにした。

新型機の名は、ドム

型式番号MS 09

ツイマッド社の開発した陸戦用モビルスーツ

火力、装甲、機動性、全てにおいてザクに優っている。

(もつとも、火力は装備している武装の違いに過ぎない。)

特筆すべきは、ツイマッド社の誇る新型エンジンにより、陸上でのホバー走行を実現したことだ。

この機体は『黒い三連星』に配備されるようなことも噂に聞いた。

彼らのフォーメーションは、3機を1機に見せるものだったので、このオデッサに少なくとも新型は3機以上配備されることになる。外見を知るための写真も一緒に貼られてあった。(対比の為にザクと一緒に撮られていた。)

十字架型に配置されたモノアイレール、全体的にザクより大きくなっている、肩部など全体的に丸くなったフォルムが印象に残った。

黒い三連星に合わせたのか、機体色は黒。

コイツと一対一で勝負することになるそうだ。自機はザク

どう見ても不利な状況、というか嫌がらせにしか思えなかった。

(マ・クベ大佐は…、いやキシリア閣下も本気だな。そうまでしてここを守り切りたいか。)

資料に目を通しつつ、そんなことを考えていると、後ろから声を掛けられた。

「よう、死神さん。熱心だな、今度は味方を殺さずに済みそうか?」
自分はその言葉への反応が一瞬、遅れる。その言葉が自分に向けら

れたものだ」と理解すると、反論しようとするが、相手は更に続ける。「『ホワイトオーガー』やガルマ大佐のところまで働いてたんだろ？ そいつらにすまねえと思うなら、もう味方の戦死者は出さないことだな。」

彼は言いたいことだけ言って、さっさと立ち去ろうとする。

すぐに踵を返したせいで、所属や名前は分からなかったが、軍服の種類から戦車兵だということがわかった。

「てめえが連邦の卑怯者どもをつぶしてくれりゃ、ソンネン少佐だって死なずに済んだのに……」

「言いたいことは言い残したかい？」

戦車隊の兵士は、その声の主に気が付いていなかった。声に気付いて前を向きなると、1人の女性に気がついたようだ。

つまり声の主である。

軍服は着崩して腰に巻いており階級、所属などは分からなかった。浅黒い肌にも、軍務により育ったのだろう筋肉が特徴的だった。

「言いたいことだけ言って、さっさと退散しようってのかい。気に入らないね。」

空気を察したのだろう。彼は咄嗟に逃げの体制に入る。が、彼の目の前に立つ人はそれを許さなかった。

その女性から放たれた拳が、彼の体に次々と命中。その強烈さは、彼の体に穴を穿っているようだった。（実際、そんなことはなかったのだが、そう見えた。）

15秒前まで彼を敵視していた自分が、彼に同情の念を抱くのに、そう時間は掛からなかった。

他の戦車兵たちが怒り出すのにも……。

3分後

そこには勝ち誇る女性士官（喧嘩の最中に、腰の軍服に少尉の階級章が付いているのが見えた）が1人と、戦車兵5人の死体があるように見えた。

「う、ううっ…。」

などと、呻き声をあげているので、実際は死んでないようだが。5人も倒されたことに対し、自分達では勝てないと判断したのだろう。他の加勢しようとしていた人達は、人間とは思えないスピードで食堂から逃げだした。

「情けない奴らだ。それでも男かってんだ！」

その女性士官は相手が男かどうかは気にしても、自分が女かどうかは気にしないようだった。

「どうしたんですか？」

異変に気付いた女性士官がまた1人、食堂に入ってくる。白くて長い、そして綺麗な髪が特徴的な、美人と言って差し支えないような人だ。

「今はこれまでの過程より、これからの彼らの身体の方が大切です。負傷者を医務室に連れていかないと…。」

そう言っ、一番怪我の酷そうな軍曹（自分に絡んできた人物）を運ぼうとする。

「グウウアアア！痛い！痛い！」

少し触れただけでこの有り様だった。何とか担架などを使い、全員を医務室に運んだものの、例の戦車隊の軍曹は、両手、両足を骨折。内蔵破裂1名、全員が内出血という凄惨極まりない事態となった。さっきまでの憂鬱な気分も新型のテストの事も、最早頭からすっぽり抜け落ちていた。それほどに衝撃的な光景だったのだ。

廊下に出てみると、ここではさっきの2人の女性士官が話していた。「もう少し手加減とかできなかつたんですか？両手両足骨折じゃ、しばらく戦線復帰はできないんですよ。中尉がすぐに医務室に運んだから、何とか治るらしいけど。」

「手加減して治せる程度にしておいてやったんだよ。それに本はと言え、その中尉様が不甲斐無いのがいけないんですよ！」

本音を言っ、関わりたくなかつたが、収拾がつかそうにないので仲裁に入る。

「そろそろ、やめておかないか。これ以上負傷者を増やしてもらっても困る。」

「あんたがいけないんだろが！まったく最近の若い士官は…、あんなこと言われて腹が立たないのかい!?」

「腹を立てて、あんな風に直情的にそれを表現したら、もっと不味い事態になる。それぐらい分からなかったのか?」

「何をー!」

問題を起こした女性士官は自分の胸倉を掴もうとする。が、それはもう1人の立会人によって阻止される。

「だから、やり過ぎは良くないって言ってるでしょ。中尉、すみませんがこのことは報告しなくてももらえると嬉しいのですが。」

「最初からその気は無いよ。面倒だしな。」

「ありがとうございます。」

その後、2人の女性士官と（1人はまだ言い足りないようだったが無視して）別れ、新型のモビルスーツのテストについて思い出した部屋に戻り、その資料に目を通す。

マ・クベ司令が見に来るといふようなことまで書いてあった。オデッサ防衛の戦力として、この新型機には期待されているようだ。

相手のパイロットはソフィー・フラン少尉 どうやら女性らしい。

概要は把握できたので、資料は機密保持のために処分した。

10月11日

新型機性能試験当日

広い場所にサムソントレーラーが2台留っていた。1台は自分らが乗ってきた物、もう1台については知らないが、まあ今日の予定を知っていれば何を運んできたかぐらいは予想できる。

おそらく新型のモビルスーツ ドムと、そのパイロット ソフィー・フラン少尉だろう。

トレーラーから見ると限りでは、多くの機材がデータ収集の為に配置されていた。まだ、完全には終わってないようで、機材を持って慌

ただしく走り回る作業員が何人もいた。

「データを集めるといっのは、骨が折れるな。前にいた部隊でも、皆忙しそうだった。」

「そんなもんですかい？こんなことは普通のパイロットはやらないと思いますかね。中尉はもしかして、技術試験課か何かの所属ですか。」

独り言のつもりだったのだが、隣の運転手ドライバーが話に乗ってきた。

「普通の部隊に居なかったのさ。そのことも考慮された上で、自分がこの任務に選ばれたのかも知れん。しかし、こういう役回りは初めてだな。」

新型のモビルスーツに乗ることはあっても、相手役を引き受けるのは初めてのことだった。初めてなので不安はあったが、仕事しない訳にはいかなかった。

トレーラーから降り、モビルスーツに架かっている幌を外す。そしてモビルスーツのコクピット付近のスイッチを手動で操作し、コクピットに乗り込む。

相手は自軍の新型モビルスーツ、万全な状態でないと一瞬でやられることもあるだろう。

新型に勝てるなどと最初から思っではいなかったが、それでもやるべきことはやる。正しく性能が評価されないと、友軍の被害に直接繋がることになるからだ。

「機体チェック、良好。各部異常なし。ザク、起動します。」

「了解。そのまま試験開始ポイントへ向かってください、ガルフ中尉。」

管制の指示に従い、機体を所定の位置に持っていく。その位置に就かせるとモニターに以前見た写真と同じ機体を、正面に見据える形となった。

「ルールの最終確認を行います。フィールドはこの峡谷全体を想定しています。ですから、この峡谷からは出ないでください。武器は

全てダミーとペイント弾をう使います。開始は3分後、よろしいですね。」

「了解。」

相手と声が被る。何所かで聞いたことのある声だった。しかし、今の自分にそれを思案する余裕はなかった。何故なら自分の方が大分不利な状況に立たされているからだ。

模擬戦が開始される、と同時に自分は標的機に対し、水平方向にマシンガンのペイント弾をばら撒く。

しかし、相手はそのことを読んでいたかのように、こちらに突進してきた。ペイント弾が紫と黒で彩られた機体の一部を赤く染めるが、特に機体にダメージ判定があるわけではないようだった。

事前に見たデータ通りなら、ザクのマシンガンが数発命中したぐらいではビクともしない造りになっているはずだ。

突進を何とか横跳びで回避し、さらにマシンガンを撃つ。相手は恐るべき機動力で全て避け、バズーカで反撃してくる。

シールドで受けるが、ダメージ判定が予想以上に大きく、右腕が使用不能になった。

「なんとこの威力だ！本当にこの威力や機動性が実戦で出せるなら、かなりの高性能なモビルスーツになるな。」

そんな感心も束の間、バズーカの2発目が飛んでくる。何とか回避した後、マシンガンを腰にマウントし、ダミー・ホークを抜いて、接近してくる相手に対し格闘戦の構えを取る。

こちらの反応を見てか、相手もバズーカを捨ててサーベルを抜き、かなりのスピードでこちらに向かってくる。

お互いが格闘の間合いに入る直前、自分は持っていたダミー・ホークを相手に向かって投げつけた。

相手も虚を突かれたようだが、咄嗟に投げつけられたそれを、瞬時にサーベルで叩き落とす。しかし、それも計算の内だった。

自分は更に距離を詰めて格闘の間合いに入り、パンチを入れようと

する。しかし、相手もサーベルを捨てていることは予想外だった。しかも、相手も掌で戦おうとしているのだ。

相手はそのスピードをそのまま掌の威力に転化しようとしているようだったが…

「させん！」

相手の下半身にスライディングタックルを掛ける。相手の掌が頭部を掠め、少し頭部の装甲とブレードアンテナを持っていかれるが、メインカメラはまだ機能していた。

相手と自分はその場に倒れこむ。自分はザクに、素早くマウントポジションを取らせ、そこからまたしても拳を叩き込もうとするが、こちらが腕を1本しか使えないのに対し、相手は2本使えるためその2本の腕に阻まれていた。

「重力まで使っているのに、なんとというパワーだ！」

このままの状態が続くと反撃を受けるのは時間の問題だと思ったので、すぐに相手から離れる。

その短い間に、相手はサーベルを拾い直し、反撃の準備を整えていた。そのまま自分のザクを串刺しにしようとしているようで、サーベルを構えて全速力で突進してきた。

自分も相手に対して、スパイクシオルダーで突進を仕掛ける。相手はその行動が予想外だったようで、そのまま2機は激突する。

スパイクシオルダーとダミーサーベルがかち合った瞬間、シオルダーはその丸みでサーベルを受け流した。

結果、ドムはスパイクによるタックルをまともに受ける格好となった。

ドムは戦闘時は常にホバリングしているので、ちょっとした衝撃でも後ろに倒れそうになる。これ程の衝撃を受ければ、普通は立つていられないはずだが、相手はかろうじて堪えていた。

バランスを崩して、防御も反撃もままならない状態の相手に、追撃を入れない法はない。

ザクのブーストを一瞬全開にしジャンプさせて、さらに頭頂部に蹴

りを入れる。相手も流石に耐えきれなかったようで、そのまま後ろへと倒れてしまった。

「勝った…のか？」

自分が蹴り倒した新型機ドムを見ても、まだその実感は湧かなかった。というか目の前の光景すら信じられなかった。

倒れたドムのコクピット・ハッチが開き、パイロットが外に出てくる。それは昨日、騒ぎを収めてくれた女性士官だった。長くて綺麗な白い髪は間違えようがなかった。

「降参です。お強いんですね。戦い方はこれ以上なく非常識でしたけど。」

自分もコクピットハッチを開け、相手に応対する。

「非常識な戦い方でもしないと、あの性能差は覆せないだろう。それに非常識な戦い方なら君も負けてはいなかったさ。」

「貴方だったんですか、ザクのパイロットは。」

「あんな破天荒な戦いをするパイロットだったとは、オデッサの女性には恐ろしいな。」

その後、しばらく2人で笑い合った。この後、自分がどうなるかも知らずに…。

10月13日

自分は昨日の性能評価試験のことで、マ・クベ大佐から直接の呼び出しを受けていた。やはり、新型機ドム相手に勝ち星を得ることは遠慮しておいた方がよかつたのだろうか。

そんな不安を胸にマ・クベ大佐のいる司令室の前に着き、扉を叩く。「誰だ？」

「ローエン・ガルフ中尉であります。」

「そうか、君がか。待っていたぞ。入りたまえ。」

「失礼します。」

入って扉を閉める。さすがに司令官の部屋だけあって奥行が広く大きい。随所に大佐の趣味なのか、壺が散見された。

大佐はすぐに本題について話始める。

「一昨日の模擬戦…」

やはりそのことかと思ひ、腹を括る。新型機の性能をアピールする場なのに、あるうことかその機体を蹴り倒してしまったのだ。ただで済むはずがない。

「見事だった。」

「は？」

それしか言えなかった。そして自分の耳を疑った。そんな自分を知ってか知らずか、マ・クベ大佐は構わず続ける。

「流石はガルマ大佐の秘蔵っ子といったところか。私は君をパイロットとして高く評価している。そこで実験部隊の経験もあり高い実力を持つ君に、うってつけの任務がある。」

全く状況が呑み込めなかった。頭が真っ白で、もはや何も聞こえてはいなかった。

特に会話の内容は覚えておらず、書類だけ受け取って司令室を後にした。

自分の部屋に戻り、やっと正気を取り戻す。自然と手に持っていた書類に目が行く。

「新型モビルスーツの実戦試験について…」

テストパイロットの名前が書かれる欄には、自分の名前があった。

第十一話：嵐の前の静けさ（後書き）

原作、ジオニックフロント

今回登場したザクは普通のザクとは少し違うのです（オリジナル設定見て下さい）

次回に何かあるような感じですが、予想できる人はできてしまうと思います

第十二話：砲弾の雨、鉄の嵐（前書き）

ネタばれしてるー！

取り乱してすみません、何でもないです。
オリジナルモビルスーツが登場するかも

第十二話：砲弾の雨、鉄の嵐

宇宙世紀0079 11月6日

自分はガルマ大佐戦死の報を聞いた、あの場所に戻ってきていた。もう半月ほど前のことだ。

そして今、この場所で何をしているのかというと、新型機のテストである。

ただの新型機ではなく、この辺りの総司令官であるマ・クベ大佐から直々に任せられた機体だった。

「このタイプは性能は高いが生産性が低いらしくてな。聞く所によると8機しか生産されておらんようだ。そのうちの1機を君に任すのだ、大事に使ってくれたまえ。」
「そう言われたのが、まるで昨日のことのようだ。」

「今日でこの機体のテストを始めて2週間が経ったことになるのか。早いものだな。」

コクピットに上がるためのリフトに立ち、一人そう呟いていた。

見上げると非常に凛々しく、今まで見たどのモビルスーツよりも精悍な印象を受ける機体

MS-08TX/SS イフリート・マインゴージュ

この機体の系譜は途切れてしまったらしいが、それでもなお評価試験が行われていることが本機の高性能ぶりを雄弁に物語っている。実際、試験目的で敵機として使用されたザクは全く相手にならず、代わりに鹵獲した敵機（GMというらしい）を用いても結果は変わらなかった。

この機体を受領する際、技師とこんな会話をした。

「この機体は地上でのモビルスーツ戦を一変させるものです。増設

されたバーニアは機動力強化だけが目的じゃないんですよ。」

「それは興味深い。どういう機体で？」

「今までのモビルスーツはほとんどが、戦闘中に地上から離れなかった。敵モビルスーツとの格闘戦を意識して造られたグフでさえもね。しかしコイツは違う。地上でも二次元的な運動、攻撃が可能です。後はコイツの性能をフルに出せるパイロットがいるかどうか心配でしたが……」

「自分になら出せると？」

「まさに渡に舟でしたね。中尉のあの動きを見たら開発者の全員が推薦しますよ、この機体のパイロットにね。」

「君達は自分を買い被り過ぎていると思うがな。自分以上のパイロットがこのオデッサにいないはずないだろう？」

「もしそうだとしても、マ・クベ大佐はそんな優秀なパイロットを離したがりませんよ。例外はありますけど。」

「例外？」

「以前のテストパイロットも腕は優秀だったと聞きます。」

彼の引つかかる物言いの意味はよくわかった。おそらく問題行動が多いなど何かあったのだろう。返ってくる答えは予見できたが、一応聞いてみる。

「何が悪かったんだ？そのパイロットは。言っておいてくれれば、自分も気をつけることができるが。」

「こつちの都合に合わせてくれないんですよ。何かにつけて1機しかない大事な試作機を、『こんな高性能な機体、下等なアースノイドを殲滅するために活かさんでどうする！』とか言って実戦に持ち出すような人でした。我々としてはたまったもんじゃありません。」
彼はやれやれといった感じで、その時のことを思い出したのか頭を抱えていた。それは気を付ける以前の問題だと思う。

「それにマ・クベ大佐は貴方を過少評価しているようですね。でも、貴方のようなパイロットを私達は求めていたわけですから、我々にとっては幸運でした。」

「過少評価とはどういうことだ？」

自分はその時、単純に疑問を浮かべていた。新型機を与えてもらい、テスト終了後は部隊まで与えてもらえることになっていたのだから、彼が言った『過少評価』の意味が分からなかった。

他所から来た中尉の待遇としては破格であり、これ以上は高望もいところだと考えていた。

彼は、『しまった！』というような表情で、口を押さえていた。しかし余計なことを言ったからと言って口を塞いでどうにかなるものでもない。発せられた言葉を止める術などないのだ。

「どういふことかな？知っていることを教えてもらおうか。」

彼はしばらく、バツが悪そうに黙っていたがやがて口を開いた。

「私達の部隊は評価試験終了後、モビルスーツの支給やパイロットの補充を受けてオデッサ防衛のためのモビルスーツ遊撃小隊として再編成されます。」

そこまでは聞いていた通りだった。特に気に留めることも無いので、先を促す。彼は続ける。

「ここからは未確認情報ですが、ウルフ・ガー隊に配属予定だった人間がこつちに回されると聞いています。」

「ウルフ・ガー、犯罪者か。」

「体のいい厄介払いですよ。こつちとしてはいい迷惑だ。」

どうやらマ・クベ大佐は実際に自分のことを優秀なパイロットとして見ている訳ではなく、便利屋扱いしているそうだ。

それでも結局、命令には逆らえず、今はこうして実戦に出ることもなく落ち着いて過ごしている。今日も願わくばそんな日であってほしかったのだが…。

その異変は1人のパイロットスーツを着た見慣れない男が格納庫に入ってきたことから始まる。その男は周りの視線を気にせず、真っ直ぐこちらに向かってきた。

近くにいた整備兵の1人が不審に思ったのだろう、彼に声を掛ける。

「あのう、どちら様でしょうか？何か御用ですか？」

気の抜けた声だった、自分も初めて聞く声。もつとも自分も整備兵といえれば班長ぐらいとしか話さないのも、特に不思議なことでもなかったが。

しかしその男は、そんな彼の話も聞かず歩も緩めず、こちらに向かってくる。

「あのう、困りますよあ。部外者に入ってこれちゃあ。」

その呑気な声は、本当に困っているかどうかとても怪しい所だが、今はそれ以上に気にすべきことがある。

最初は遠目でパイロットだということ以外よく分からなかったが、よく見れば非常に整った顔立ちをしている。女性からの人気は高いと思われる。

見た目はかなり若かった。もしかしたら少年兵かも知れない。が、未だ学生を徴兵しているという話は聞いたことがないし、この段階で実戦投入は早すぎると思われる。

パイロットスーツに付いている階級章はその人が中尉であることを表す物、本来ならかなり矛盾しているようなものだ。この年では普通はいくら階級が高くても准尉どまりだろう。

そして肩口には見覚えのある屍食鬼^{ケール}のマーク。

そのマークを目にした次の瞬間、自分は全てを理解し、咄嗟に銃を抜いて目の前の屍食鬼^{ケール}隊の士官に突き付ける。

「屍食鬼^{ケール}隊がこんな所に何の用だ？君たちが相手では、場合によっては射殺することも止む無しだな。」

「おやおや、今回のテストパイロットも無礼な奴だ。ここには碌な奴が回されてこないな。仕方ないか、マ・クベも開発が打ち切られた機体に興味など持てまい。」

「何の用かと聞いている。悪いが自分は忙しい、用が無いのならばとさと帰っていただく。」

「中尉、とりあえず銃を下ろしたまえ。我々の要件はそこにある機体全てだ。」

「整備班のザク1もですか？」

さつき少年を止めようとした整備兵が幾分不安そうな声で問う。しかし、あんまりにも変わり方が乏しかったので、おそらく声の変化に気付いたのは、自分だけだっただろう。

そんな彼は双方とも無視し、自分は明確に彼の要求を却下する。

「それなら命令書の偽造ぐらいやってきたか？特命で動いているから、という狂言だけではモビルスーツは渡せないからな。特に君たちのような無礼な連中にはな。」

自分は挑発するつもりで、表情を少し変えて嘲笑にも似た顔を作る。しかし、彼の自尊心プライドを傷つけたのか、対する少年は苦渋の表情を浮かべる。そして

「私達を敵に回すというのはどういうことか、教えてやる必要があるようだな！」

そう言うとは彼は右手で簡単な合図らしき行動をする。それに合わせて、周囲から人影が現れる。

数は5人と少ないが、全員がマシンガンで武装している。対するこちらは15人程だが武装はしていない。（整備兵だから当然のことである）

さっきの挑発は相手が一人だと踏んでのこと。正当防衛を理由に射殺しようと考えていたが、現在は自分の考えの甘さに首を絞められている。

現在の状況を打開すべく思索していると、こちら側の唯一の人質が口を開く。

「私達もこんなことで血を流させる積もりはない。銃を下ろしてモビルスーツを渡せば、見逃してやらんことも無い。良い条件だと思うが？」

相手の表情が少し余裕になる。彼の部下は戦闘準備を整えているが、彼らの指揮官が自分によって人質に取られているためだろう、まだ動く気配はない。

ビーツ

ここで持っていた携帯端末に唐突に連絡が入る。

（この状況で…、目の前のお客さんといい、もう少し暇なときにしてもらいたいものだ。）

自分はこのような状況でも、余裕ある態度を崩さないようにしていた。弱みを見せれば、そこに付け込まれて負けてしまう。どんな戦いであってもそれは変わらない、そう考えていたからだ。

ならば自分にはまるで弱みなど無いかのように振舞う、そうして自分はここまで来た。

自分はこれを取るべきかどうか迷っていた。今の一触即発の状況でこの端末を取れば、それに気を取られているうちに銃撃されるかもしれない。

しかし、自分はこれこそ利用できないかと考える。そして、5人の武装兵を見据えながら、素早く端末を取る。

「自分だ…。何？敵襲だと!？」

端末の向こうにいる人間が何も言わないうちに、勝手に話を作り上げてしまう。ほとんどの人間がこの言葉に反応した。グール隊の間も例外ではなかった。

それが自分の狙いだった。敵襲という偽情報に気を取られた屍食鬼^{グール}隊にマシンガンを放つ。

銃弾が命中して倒れる者と、予想外の攻撃に怯む者がいた。しかし、こちらに対して反撃を行える者はいなかったようだ。

持っていた端末をさっきまで脅し合いをしていた少年に投げつけ、それに気を取られた彼を銃床で殴りつけ、モバイルスーツのコクピットに乗り込むためのリフトを作動させる。

立ち直った屍食鬼^{グール}共が遅ればせながら反撃してきたので、義手となつた右腕でガードしつつ敵に対し、マシンガンを乱射。さらに怯んだ敵に対し、手近にあった工具類を投げつけて追撃を喰らわせる。

リフトがコクピットハッチの位置まで来ると、すぐにコクピットに乗り込む。ぐずぐずしていると、敵の集中砲火を受ける時間を増やすだけだ。

果たして自分がモビルスーツに乗り込んだ時から、状況は一変した。人間同士の銃撃戦にモビルスーツを持ち込むことが何を意味するのか、屍食鬼達も知っていたらしい。

それも連邦とジオンの戦いのように他の兵器が存在するならまだしも、彼らには対人用の装備しかないのである。

イフリートの頭部バルカンを彼らに照準を合わせて撃つ。元々このバルカンも対車輛用ぐらいの目的で付けられたらしく、人間に当てるほど精密な射撃はできなかった。

だが彼らを脅えさせ、逃げださせるのには十分すぎる効果があった。逃がしてしまつた彼らを確実に亡き者にすべく、管制室に通信を入れる。

「こちら、ガルフ中尉だ、先ほど…」

「ガルフ中尉！なぜまだ出撃していませんか！？」

返ってきたのは、予想外の反撃。何が何だか分からなかった。通信越しでは自分の困惑した態度も伝わらないので、通信先のオペレーターは更に追い打ちをかけてくる。

「今まで何をしていたんですか！？敵は既に、北と西から攻めてきています、今すぐに出撃してください！」

どうやらさっきの独り芝居は事実無根のことでもなかったらしい。

反論すれば更に何か言われかねないので、黙って機体の最低限のチェックだけをして出撃する。

「ローエン・ガルフ、イフリート、出るぞ！」

「ジオン軍の防衛部隊の本隊は敵の囮部隊に捕まってしまった模様です。敵の本命と思われる部隊が司令部に向かっています。中尉は増援部隊と共にこれを撃破してください。」

「増援など待っていたらこの基地は陥ちる。北側のトーチカ部隊に砲撃の準備を。敵部隊を撃破する。」

「敵のモビルスーツは5機もいるんですよ！単機で向かっていった

「やられますよ!」

「そうだったらこの基地は終わりさ、しかし司令にはそうならない時のことを考えてもらう必要がある。」

「しかし…」

ブツッ

強引に通信を切る、これ以上議論している時間も無いのだ。

戦闘は既に始まっていた。敵部隊の殆どはこの機体のテストにも使われていたGMであった。

模擬戦とはいえ幾度も戦闘し、その度に圧倒してきたが、それも1対1で戦闘を行った場合の話である。

今、目の前には確認できるだけで5機のGMがいた。周りには61式戦車の姿も見える。

「トーチ力部隊に告ぐ、砲撃支援を要請する。邪魔な戦車を潰してくれ。」

「了解。」

砲撃支援要請、自分がこの戦場でやるうとしてのことへの布石を済ませた後、行動を開始する。

まずは、それらに対してマシンガンの弾をばら撒くように乱射する。命中したか否かはどちらでもよかった。

味方の砲撃と合わさり、敵は一瞬かなりの砲火に曝される。殆どのGMがその手に持つ大きなシールドで防御する。この攻撃で咄嗟に防御する手段を持たない61式が2輦撃破される。

マシンガンを撃つ手は緩めず、敵部隊に突撃する。今度はGMも反撃してきたが、イフリートの機動性を以てすれば、回避はそれほど難しくなかった。しかも相手はモビルスーツ戦に慣れていないらしく、

2機のGMが壁を作りその後のGMは何もできないでいた。

マシンガンを左手に持ちかえ、さらに接近。2機のGMは未だにその位置を変えずにいた。

「よし、いい子だ。」

ビームダガーを抜き、右のGMに突き刺す。左のGMには至近距離からマシンガンを撃ちこむ。

GM2機を撃破すると他の3機が反撃してきた。1機がビームサーベルを持ち格闘戦を仕掛けようと接近してくる。他の2機もそれを援護すべく、後ろからマシンガンを撃ってきた。これを利用しない手段はない。

そう考え、接近してくるGMが自機と他の敵機との間に位置するよう移動する。

この移動の意味を理解していないのか、GMは向きを変えるだけで真つ直ぐこちらに向かってきた。

しかし、このGMは後ろからの援護を受けられなくなっていた。敵機となる自分の機体イフリートと味方の機体との間に件のGMくだんはいるのである。援護など受けられるはずがない。

イフリートが盾を装備していないことと、剣でのリーチも相手の方が勝っていることもあって油断もあつたのだらう。何にせよこちらにとつては都合が良かった。

ついに敵機の得物の攻撃範囲に入る。ビームサーベルを持ち、大きく振りかぶつたその腕が自機に振り下ろされる。

その行動は既に読めており、やるべきことは決まっていた。サーベルを持った手に対しブーストも使つて全力で蹴りを入れる。

GMは自身のビームサーベルで自身を切り裂いていた。そのままその機体を残り2機の方へ蹴り飛ばす。

2機はそれに巻き込まれ体勢が崩れる。止めを刺そうとマシンガンを構えるが、自分が撃つより先にその2機に砲弾が落ちる。

「砲兵部隊…、優秀だな。」

砲兵はジオン軍では傍流に位置する存在であつた。ルウム戦役ではこのことに関連する悲劇が噂されている。

少しでも多く戦果を挙げて、体面を必死に保とうとしている砲兵かれらを見ていると、自分の戦果を少しぐらいなら渡してもよいと思う。

尤も、さっきの独り言は皮肉に他ならないのだが、砲兵らも彼らな

りに必死だということだ。それ以上の愚痴は飲み込んだ。

「ガルフ中尉より司令部へ、敵部隊撃破。戦況はどうなっている？」

「敵の囀部隊が我方の戦線を突破し、司令部に向かってきます！中尉、お願いです急いでください！」

命乞いにも似た声でオペレーターは嘆願してくる。彼女自身の生命が懸かっているのだから無理もない。

「ツツ…、次から次へと！」

イフリートのスラスタを全開にし、司令部へと向かう。

「計算上は間に合うはずだ。急いでくれよ、イフリート！」

司令部が見えた時、連邦軍との戦闘は既に始まっていた。モビルスーツがあると思っていたのだが、敵は自走砲のような超大型車両が4輜、司令部を守る最後の砦である予備防衛隊と砲火を交えていた。予備防衛隊もマゼラ・アタックとマゼラ・アインが主で、モビルスーツは1機しか確認できなかった。

その機体はザク1であった、見るとその傍らでザク2が撃破されていた。ここで違和感を感じる。

基地には自分とイフリートの相手役を務めていたもう1人のパイロットしかいなかったはずだ。

しかし、彼の愛機は既に撃破されている。つまりあのザク1のパイロットは彼ではない。ということとは…

「そのザク1、誰が乗っている？」

「ふええ〜、中尉〜遅いですよ〜。」

今にも泣き出しそうな声が通信機越しに聞こえてきた。彼には緊張感というものが無いのだろうか。

「話は後だ、敵戦車を撃破する。援護を頼む！」

「えっ、援護ってどうすれば…？？」

「マシンガン撃つてれば良い！」

自機を敵機に向かって前進させる。敵もこちらに気づいたらしく2機がその場に止まりこちらに砲撃を行う。

敵の攻撃は自機のすぐ近くに着弾する、こちらも反撃にマシンガン撃つ。

「火力は高そうだし、スピードも速い。だが抱えた死角は大きそうだ。それに接近戦は考慮されていないな。」

敵の機体を一瞥し、その特性を判断する。その間にもマシンガン撃つ手は緩めない。はずだったが…

「弾切れ…、こんな時に！いや、これは使えるか？」

咄嗟の思いつきが成功するかを自問自答し、やってみる価値はあるとの結論に達する。

次の瞬間には実行に移すべく行動していた。まずは自機を敵戦車のうちの1輛に向かつて飛翔させる。

敵との距離が大分縮まったところで、空中から敵戦車のある箇所に向けてマシンガンを投げつける。

ある箇所とは敵戦車の後部に配置された無限軌道である。キャタピラ

結果、見事にマシンガンはキャタピラに巻き込まれ、そしてその戦車は動かなくなった。否、動けなくなった。

動けない戦車を着地地点と定め、そのままブーストを切る。怯えるように腕(?)の武装で撃ってくるが狙いが甘く当たらない。

着地までの間にビームダガーを抜き、そのまま戦車に突き立てすぐに離れる。敵戦車は轟音とともに爆散した。

「次だ！ん？あれは…」

連邦軍の撤退信号だった。その自分の認識を裏付けるかのように、敵戦車の残り3輛も引き揚げ始めた。

「司令部、戦況は？」

「本隊が敵部隊の殆どを撃破したようです。しかし味方の被害も甚大で、追撃は不可能です。」

「だろうな、基地も外から見た限り放棄するしかなさそうだ。」

そんな会話を他所に、1機のザクが接近してくる。さっきの整備兵の乗るザクだ。

左腕を失っているようだが、モビルスーツの訓練も受けずに出陣して生き残っただけでも大したものである。

戦闘を終え、清々しい気分での後のことすらも忘れていた。そんな時に事は起こった。

ドドォーン！

突然、近辺で爆発が起こった。イフリートが吹き飛ばされるほどの爆発が。

一瞬何が起こったのか全く分からなかったが、目の前の光景で嫌でも理解させられた。

我々がさっきまでいた基地は消滅していた。駐機させられていたGMの首や、折れ曲がった鉄骨。

吹き飛ばされて、逆さまになったマゼラ・ベース。燃え盛る多くの死体。呆気なく倒れた司令塔。

そのどれもが見覚えのあるものだった。

「班長、シュバリエ、ヒューストン、みんな！嘘でしょ、嘘ですよね…。うっ、うわあああー！」

泣き崩れる隣のザクのパイロットが全てを物語っていた。慟哭する彼を他所に自分は状況確認を優先した。

ほとんど本能である。人の死に慣れ過ぎたのか、自分でも驚くぐらいに冷静に対処した。

（これは艦砲射撃だ、ならばこの一度で終わるはずもない。すぐに次が来る！）

ザク1に通信を入れる。彼を連れてすぐにもここを離れないといけない。

「おい！ザクのパイロット聞こえるか？すぐに友軍と合流して、撤退するぞ。」

ザクのパイロットは暫く答えなかったが、やがて口を開いた。

「中尉は行ってください。僕は…ここに残ります。」

「ここで死んだところで何も意味は無いぞ！」

「生きていても意味なんてありませんよ！」

彼の語勢は、ついさっきまでからは想像できないほど強かった。

そう言うとは彼は、機体をあさつての方向に向けて、歩かせ始めた。

連邦軍が展開している方向である。

「生きていれば出来ることもあるだろうに。」

「何が出来るっていうんです!？」

一瞬、その答えを言うべきか迷う。何故ならその選択肢を選ばせることは、彼を人の道から外すことになる。

それでも、彼がここで死ぬよりは…

「仇討ち、いや復讐だ。」

「復讐？」

モニター越しではあるが、彼の眼には少し光が戻っているように見えた。

言い直したのは彼にはっきりと言っておいた方がいいと思ったからである。

「ただ死ぬよりも、ずっと有意義だと思っぞ。生きていても死んでも無意味だというのなら尚更だ。」

彼は自分の言葉を受け入れ、自分についていくと言った。

このあと自分達は、前線を守っていた部隊と合流し、オデッサの本部へと後退した。そこで自分達を待ち受けていたのは更なる苦難であった。

第十二話：砲弾の雨、鉄の嵐（後書き）

整備兵君が叫んでる人の名前は

SEED MSVからとったわけじゃない

かも知れない…

第十三話：復讐前の前哨戦

私達が牢獄から出されて、どれぐらいの時間が経ったのだろう。

宇宙世紀0079

連邦軍の一大反攻作戦、オデッサ作戦の発動に伴い、私達は牢獄から最前線へと移された。

どちらにしろ地獄であることには変わりはないが、最前線には牢獄にはないものがあつた。

私達を陥れ、一生獄中で生活することを強要した男へ、復讐することが出来る。

全ての元凶である奴への復讐が果たせるならば、この命をくれてやっても、一向に構わない。

私も部下も殺しが好きという訳ではないが、全てを許せるほどお人好しでもない。

ほとんどの人間が、私達は特赦を貰う為に戦っていると思っているのだらうが、実際は違う。

奴の所在は掴んだ、奴はオデッサにいる。そして私達もそこに行くことが決まった。

今こそ、この思い果たさん！

同年11月6日 夕刻

これで何度目の部隊転属になるだらうか。そんなことを考えながら、私は乗機を部隊との合流地点に走らせていた。

私達の部隊は、これまで捨て駒いっものこまのような扱いで作戦に参加させられてきた。先駆け殿など、日常茶飯事。

ひどい時には私達だけを囿にし、他の全戦力を司令部防衛と敵基地への奇襲に用いる作戦にも参加した。

それでもこれまで1人も戦死者を出さずに戦ってこれた。これは奇跡に近い。

その奇跡を実現したのは、強い信念、というより執念であった。自分達をこのような惨めな境遇に陥れた奴の最期を見届けるまでは、死んでも死に切れない。という執念。だから、私達は死なない。そう思っていた。この時ばかりは奴への復讐を果たした後、別の人生を生きられると本気で考えていた。

「隊長、もうすぐ合流地点ですぞ。旗艦の姿も見えてきた、しかし、ビッグ・トレーってのはいつ見てもでかいな。」

部下のカルツピ少尉が声をかけてくる。その言葉通り、戦艦のように大きな陸戦艇が見えてきた。

嫌でも目を引く主砲も、戦艦らしさに拍車をかけていた。（厳密には大型陸戦艇という別のカテゴリーらしい）

その傍には、連邦軍がやつとの思いで開発したモビルスーツ『GM』が、10機以上、直立不動で並んでいた。

61式戦車の姿もあった。ビッグ・トレーを防御するつもりなのか、囲むように展開している。

距離が近づくとそれらの周りに、整備や補給で忙しく動き回る人員の姿も確認できた。

彼らはこちらの姿を認めると、忙しくしていた手を一瞬だけ止めるが、すぐにまた作業に没頭する。

気まぐれで集音マイクをつけてみると、男の大声が聞こえてきた。

「俺のGMはまだ届いてないのかよ！」

「ノクト・ガディッシュ少佐のアルバトロスが運んでくるって言うてたけどな。」

「カーっ、男かよ！マチルダ中尉やミルステイン様が運んでくれりゃ、俺だって頑張つてやんのによ。」

明日をも知れぬ戦場で、よく女のことなど考えていられるものだ。付き合っている女でもないだろうに。

戦場に立つたら真つ先に、自分の命の心配をしろ。

そんなことを思っていたが、自分も真つ先に考えたのは命の心配ではなかった。言えた義理ではない。

そんな思考に自嘲気味に苦笑しつつ、適当な場所に機体を止めてビッグ・トレーへと向かう。

ビッグ・トレーに乗り込むと、他の人間が変な目で見てくる。が、そんなことは全く気にしない。

そんなことを気にする人間は私の部隊にはいなかったし、もうその視線も飽きるほど浴びてきたのだ。慣れない方がおかしい。

そのうち、案内を担当するという下士官が現れたので、彼に付いて司令室に向かった。

一際高級感漂う扉の前で、下士官は止まった。おそらくここが司令室なのだろう。

彼はここに私達を連れてくる間、一言も喋らなかった。

やはり目的地はここだったらしく、彼はゆっくりとノックを2回すると、

「失礼します、アリーヌ・ネイズン技術中尉以下、ガンタンク小隊4名を連れてきました。」

と言い、中からの返事を待つようだった。

「入りたまえ」

と中からの返事が聞こえると、彼はすぐに扉を開き、さっきの言葉を復唱した後、持ち場に戻らされた。

持ち場へ戻れと言われてこの部屋を出る瞬間、彼の表情が嬉しそうだったのは、気のせいではないだろう。

下士官のことは特に気にすることでもないので、目の前のこの部隊の司令官と思しき者に挨拶をする。

「アリーヌ・ネイズン技術中尉以下、ガンタンク小隊4名、只今着任いたしました。」

そう言っ、敬礼をする。私の部下もそれに倣い、敬礼をする。

そして司令官も敬礼を返してくる。敬礼をやめると彼はすぐに話に入った。

「君達か、オデッサ作戦発動後、各地で高い戦果を上げているガンタンク小隊というのは。」

何か答えるべきかと迷っていると、部下の一人、クズワヨ曹長が余計なことを言い始めた。

「敵が多すぎたんですよ。それぐらいの戦果を上げないと生還できなかつたから、生きるために必死にやったんです。」

「そうか、それは大変だったな。今日はここの空き部屋を使って休んでくれ。明日は重労働になるからな。」

そう言うと、彼は手元に置いてあつた箱から葉巻を取り出し、吸い始めた。それを一度口から離すと、

「どうだ、君達も一杯やらんかね？」
と私達に勧めてきた。

私は丁重にお断りしようと考えたが、その言葉を発する前に部下の1人がその言葉に食いつく。

「では、お言葉に甘えさせていただきます。」
そう言葉を発したのは、意外にも部下の中で一番生真面目なエルフエス曹長だった。

彼は、性格は生真面目でも趣味は別で、かなりのヘビースモーカーだった。

まさか上官の前でも隠さないほどだったとは…。それとも彼なりに『頂いておく方が得策』と判断したんだらうか。

何にせよ彼は心底嬉しそうに、もらった葉巻に火を点けた。

「それで大佐、作戦の方は…」
この機を逃すと聞きそびれそうなので、さっさと聞いておくことにする。

「そうだったな。」
そう言って司令は机の引き出しを開けて、中からファイルを取り出して机に置いた。

「これが君達の分の指令書だ。作戦の詳細が書いてある。目を通しておけ。」

「了解。」

そうして書類を受け取りに向かおうとしたが、先にエルフェスが机に向かった。どうやら葉巻は吸い終えたようである。

彼は書類を手に取る瞬間、手を滑らせ書類を落としてしまった。

取り繕うように謝罪の言葉を繰り返し、すぐに拾って事なきを得たが、その手には書類以外のモノがあった。

葉巻である。司令室を出る時には、他の2人は呆れ顔だった。無論、私ものだろう。彼が真面目だったのは最早過去のことのようにだ。

司令室を出て、少し歩いたところで私はカルツピに声を掛けられた。

「隊長、今回の任務、どうもキナ臭いと思います。」

「カルツピ、そういう話は廊下（いんげいじょう）でするもんじゃないよ。部屋を貸してもらってるんだ、そこでも……」

「その部屋に盗聴機でもあったらどうするんです？」

「なに？」

思わず間抜けな声でそう返してしまった。しかし、冷静に考えれば囚人兵に対して行動を監視するのは当然のこと。

そうした類のものがあってもおかしくはなかった。突然やってきた機体にそういった装置を設置するよりもずっと確実だろう。

（盗聴機などは発見された時点で意味を成さなくなってしまう。）
部屋を与えられているにも関わらず、モバイルスーツのコクピットで眠るのも不自然である。

そう考えると、カルツピの言うことがだんだん現実味を帯びてくる。このことに気付かずには部屋で話していたら、間違いなく何らかの形で処分されていただろう。

今日ほどカルツピに感謝の念が湧いた日はなかった。

「じゃあ、何処で……？」

クズワヨの発した疑問は尤もであった。私も何処かいい場所はない

かと考える。

そんな中、最も早く結論に到達したのは、エルフェスであった。彼は私達の知らない場所を知っていたのだ。

「ビッグ・トレーにはいい場所がありますよ！」

「確かにいい場所さね。」

私は多少の皮肉をこめてそう言った。エルフェスは前にもビッグ・トレー級の艦に乗ったことがあるらしく、喫煙場所として使っていたそうだ。

「お前、いい度胸してるわ。仮にもここは、滑走路なんだぜ。喫煙つて…一歩間違えば火炎地獄だぞ。」

クズワヨの言う通りであった。滑走路で煙草を吸うなど言語道断、ばれたら軽くても懲戒モノである。

しかし、密談の場所としては悪くない。幸い飛行機は偵察任務に出払っているし、入口も少ない。

盗聴機を仕掛けるような場所でもないし、仕掛けても離着陸の騒音で肝心な部分が聞こえない可能性だつてある。

それに平坦な場所であるが故、盗聴機を見えないように設置する場所もなかった。

安全面はクリアしたと考え、さっきの話を再開することにした。

「本題に入るよ。」

「カルツピ、お前は今回の任務がきな臭いと言ってたが、どうしてだい？」

実際のところ、答えの検討は付いていたが他の二人がわかっていないかもしれない。

私から説明すること自体は一向に構わないが、私の推論が間違っていることも考えてカルツピの口から言わせる事にした。

「なんでつて、司令の態度が丁寧過ぎるからですよ。裏があります、つて自分から言ってるようなものです。」

カルツピのその言葉に他の二人も異論は無いようだった。

「そういえば、今までの部隊の指揮官はもつと横柄でしたね。」

エルフェスのその言葉が追い打ちを掛ける。どうやら我が隊にとつて、これは既に確定事項のようだ。

「そついやあ…、エルフェス、作戦書類を。」

「えつ、あ！どうぞ。」

突然の事でエルフェスも焦りが出たようだが、要求したクズワヨはそんなこと気にせず、作戦書類に目を通す。

「どつちにしろこいつを見りゃ、司令官の腹の内も分かるってもんです。えーつと……」

クズワヨに続いて全員が書類の四辺の位置に就き、作戦の内容を吟味し始める。

それはなかなか単純な作戦、しかし不可解であった。作戦の内容自体は、特に問題があるとは思えない。

だが、大きな問題が一つあった。用兵である。

「先駆けだけならともかく、これは」

流星に全員気付いたらしい。この指令書を見る限り、自分達に一番しゅうじんへい重要な役割を任せていた。基地施設の攻略である。

「囧…か。」

「それ以外、考えられんでしょう。」

私達4人がその結論に納得するのに、時間は必要なかった。それ以上の言葉も私達には必要なかった。

囧役をやらされて生きて還る術は、ここ数日の戦いで十分に学んだからだ。

3人には貸してもらった部屋で休むように言って、解散したが、私は嫌なことを思い出して眠ることができなかった。

翌日 11月7日

「全軍へ。本作戦の総指揮官、ハルトマンだ。今回の戦闘の目的は、

敵基地の攻略にある。

攻略の主力は、ネイズン中尉率いる独立遊撃小隊が果たすことになる。

作戦の成功のため、延いてはオデッサ奪還のため、各員の奮闘を期待する。」

兵の士気を鼓舞するための演説を終えると、大佐は間髪入れずに命令を下した。

「艦砲射撃、用意を成せ！戦端を開く。できるだけ広範囲に拡散して砲撃、地雷原を残すな！」

その号令が掛かって間もなく、ビッグ・トレーの左右の主砲が、目標を粉碎すべく動き出した。

「艦砲射撃、用意宜し！」

「斉射開始！」

けたたましい爆音が、各地から響いてくる。遠くで鳴っているからこの程度で済むものの、外にいる兵達は耳を塞いでいることだろう。爆音が途切れてすぐに、ハルトマン大佐はまた新たな命令を出す。

「ガンタンク小隊出撃、敵陣の突破を優先させ、モビルスーツ部隊を後に続かせる。」

「ガンタンク小隊、先陣は任せたぞ！」

ビッグ・トレーのオペレーターが大佐殿の命令を代弁する。

「隊長、お呼びが架かったようです。」

「また、出撃ですか。ちつとは休ませてくれたって……」

「愚痴っても仕方ありません。行きますよ。」

部下は三者三様の反応を示しながらも、すぐに全員が自分の機体をガンタンク発進させた。

私は何か、出遅れたような感じがしたので、無言のまま自機を発進させた。

ただ愛機を走らせているだけの時間は、そう長くは続かなかった。すぐに敵部隊が現れたからだ。

敵は確認できるだけで右から2機、左から3機向かってきていた。

「敵部隊接近、ザク3、グフ2、別方向からマゼラ4。報告通りだな。行きますよ！」

そう言うとカルツピは機体を変形させ、突撃砲形態で、グフに対して突撃を仕掛けた。

彼のやろうとしていることを読んだエルフェスは、すぐにもう1機のグフに向けてポップガンを乱射、一時的にその足を止めた。

しかし、敵はそれに構わず、ヒートソードを抜き、カルツピのガンタンクに斬りかかった。

敵のその行動に対し、カルツピは至近距離から左腕部に装備された火炎放射機で劫火を浴びせた。

その攻撃で敵機を撃破することはできなかったが、相手を怯ませるには充分だった。その間にカルツピは少し後退する。

敵は数秒の間、歩みを止めていた。無理からぬことであったが、それがいけなかった。

その数秒の間にグフは撃破された。エルフェスの放った220mmキャノンの砲弾によつて

その間、私は3機のザクを相手にしていた。そのうちの1機、先頭の機体が長砲身の火砲で攻撃してくる。

機体を意図的にスピンさせて回避し、自機を敵機の横に付ける。間を置かず主砲で先頭の機体を撃ち抜く。

少し狙いが甘かったのか一撃では撃破できず、砲弾は敵の脚部を破壊するに留まった。

しかし、そのままザクは転倒、さらにそれに連なっていたもう1機のザクも躓いて転倒した。2機のザクが一時的に戦闘不能になる。

残った1機のザクは飛翔する。一瞬の後、飛翔する前の場所に1発の砲弾が落ちる。

「ちいつ、勘のいいヤツだ！」

クズワヨの悔しそうな声が通信機から聞こえてきた。どうやら今の砲撃は彼がやったらしい。

「クズワヨ、マゼラは？」

「スクラップにしてやりました！」

その返事を聞くと、すぐにザクに意識を戻す。見ると脚部を失ったザクのコクピットが開いていた。

どうやらパイロットは脱出したらしい。

「飛び上ったザクは!？」

私はそう言っで、すぐに機体を全速力で後退させる。しかし…

「隊長、危ない！」

遅かったようだ。ヒートホークを振り下ろす敵機^{ザク}の姿が瞼の裏に浮かぶ。次の瞬間、爆発音が響いた。

目を開けば、まだ私はガンタンクのコクピットの中だった。モニタ1には右足を失い、仰向けに横たわるザクが映っている。

案の定、その手にはヒートホークが握られていた。状況が呑み込めないまま、そのザクをポップガンで撃つ。

生存本能による反射の成せる業だった。自分はまだ死んではいけないのだ、あの男を葬るまでは。

そう自分に言い聞かせ、最後に残った1機の方に向き直る。敵はパイロット不在となった木偶人形を盾にマシンガンを撃ってきた。

2,3発被弾するも、厚い装甲で弾きつつ、敵の背後へ廻り込んだ。自機と同質量の盾を持って反応が鈍くならない筈も無く、無防備な背面を砲弾が貫いた。

「貸し1つですぜ、隊長。」

クズワヨのその言葉でようやくさつき起こったことを理解する。上から斬りかかってきたザクに何とか砲弾を当てたらしい。

「すまない。」

それぐらいしか伝える暇はなかった。敵はまだ殲滅された訳ではない。目の前にいる敵に集中しないと、今救われた命を失うような危機に、再び直面することになりかねないからだ。

「ガンタンク小隊、そこはもういい。GM部隊に任せて、進め。」
唐突に司令部から通信が入る。周囲を確認すると、その通信の通りGMが到着し、戦闘を始めていた。

「どうした、ガンタンク小隊？敵防衛戦を突破して、基地施設を攻略しろ。」

「了解。」

少し返事が遅れたぐらいで矢の催促、これが囚人兵の扱いであり、今日の連邦軍の実態であった。

私達は人間としての扱いを受けていない。そのことはこれから向かわされる戦場の状態からも明らかだ。

小隊一つで攻略できるものではない。迂回して東方から攻めるルートを使えば話は別だが、それは私達の役割ではなかった。

私達の役割は囿。他の部隊が東方から攻める間の時間稼ぎが終われば、後はどうなってもいい。というのが司令の考えだろう。

しかし、私達には意地、というより執念があった。こんなところで死ぬ訳にはいかない。

気を取り直して機体を進撃させる。味方の援護もあって、突破はそれほど困難ではなかった。

グフを相手にしていたエルフェスとカルツピも間を置かず合流し、次なる戦場へと向かった。

「隊長、攻略目標から敵の増援部隊が出てきました。数は3、2機はグフのようです。」

「もう1機は？」

「データベースにありません。新型機かも……」

心なしか、エルフェスの声は少し震えているようだった。激励が必要かとも思ったが……。

「しっかりしろ、エルフェス！新型が出てきたぐらいで、うろたえるんじゃない！」

カルツピに先を越されてしまった。しかし、それは部隊としての結束が高まっているということでもあった。

お互いをフォローし合えてこそ、本当に部隊と言えるのだ。

「相手は3機、こっちは4機。数で勝る勝負なんて滅多にできないぜ。」

「そ、そうですね。僕はなんで焦っていたんだ。」

エルフェスも落ち着きを取り戻してきたようだ。これで戦闘再開の準備は整った。

それから間もなく自分達の前に敵機が現れた。実際は私達が移動していたので、敵機の前に私達が現れた形になる。

さっきのエルフェスの報告通りに、グフが2機と、その2機の間に見慣れない機体が1機いた。

青いカラーリング、腰に差した2本の大型の長剣、グフよりも多くなったトゲ。どう見ても接近戦用の機体である。

向こうもこちらに気付いたようで、すぐに青い3機の機体すべてが、それぞれ別方向に動き出した。

「包囲するつもりか！」

敵の3機の格闘戦用モビルスーツは、ブーストを使い、高速でこちらに向かってきていた。

「全員、弾幕を張れ！足が止まったら、私がキャノンで撃つ。」

私の指示に従い、ロケット弾やポップガンでハリネズミのような弾幕が展開される。

しかし、ロケット弾は命中せず、距離があるためポップガンではグフに致命傷を与えることはできなかった。

そんな中、カルツピとクスワヨが相手の意表をついて、1機のグフを2機で攻撃した。

流石に敵の足も一瞬止まり、私はそれを見逃さなかった。そのグフにキャノン砲を叩き込み、グフはその場で力なく横たわった。

「残り2機！」

しかし、一時的に2人は1機の敵に集中したため、1機の敵モビル

スーツがノーマークになっていた。
例の新型機である。

その機体は一瞬の隙を見逃さず、その機動力をもって一気に接近してきた。

慌ててカルツピのガンタンクがその機体をキャノンで撃つが、高速機動をする機体にキャノンが命中する筈もなかった。

そのままカルツピのガンタンクを踏み台にし、ブーストも使って空高く跳躍する。

「隊長がどれに乗ってるか分かってるのか!？」

クズワヨの疑問に答えることなく、長剣を1本抜き、私の機体に向けて投げつけた。

「クツ！」

機体を左に曲がらせて回避しようとしたが、流石に無傷では済まず、機体右に装着されているMLRSと重地雷を破壊された。

そして、私の機体に傷を負わせた相手が目の前に降りてくる。もう1本の剣を左手に構えて…

この機体と自分の命を奪うべく、剣が振り下ろされる。一瞬の出来事であったが、ひどく長い時間のような錯覚に陥った。

しかし、長い時間であったにも関わらず、私はその間何も言えず、何も考えられなかった。

ガツ、ガン

そんな金属同士のぶつかり合う音が響き、私は自分の絶命を悟る。しかし、実際は事態はそれほど悪い状況には向かっていなかった。

私は次の通信でそれを理解した。

「ガンタンク小隊、無事だな。こちら第14MS小隊。ここは自分達に任せて、任務通り基地攻略に向かえ。」

目の前にいた青い悪魔は大きく後退していた。今日2度目の生命の危機は去ってくれたようだ。

しかし、GMが来るなど予想外のことだった。本来ならば私達はここで捨て駒になると考えていたからである。

それが意味するところは少し考えれば理解できた。

(別動隊は失敗したか。自業自得だな、大佐殿。)
私達に頼らざるを得ないと知った大佐の表情を思い浮かべると、自然と笑みがこぼれる。

「隊長、基地攻略に向かいますよ。司令の鼻を明かしてやりましょう!」

エルフェスが気の利いたことを言ってくる。

「分かっている。」

敵の基地施設を視認したとき、おそらく全員が不審に思っただろう。
(敵の戦力が少なすぎる)

敵のモビルスーツはザクが1機、それだけだった。この状況、不審に思わない方がどうかしている。

「畏…、ですかね。」

エルフェスが真っ先に思ったことを口に出す。

「畏だろう、1000\$賭けてもいい。あれぐらいの規模の基地にザクが1機しかないなんて、絶対にありえん。」

カルツピがそれに答える。全員の意見が一致しただろう。今の状況なら聞かなくても分かる。

マゼラアタックなどの戦車は基地の規模に見合った数が出てきたものの、モビルスーツはもう1機ザク1が出てきただけだった。

「たった2機で基地の防衛は無理ですから、畏があるんでしょう。援護頼みます!」

そう言つて、カルツピは敵基地に突撃を仕掛ける。どうやら囿になつて、『畏』を見極めるつもりらしい。

「やめる、カルツピ。早まるんじゃない!」

制止も聞かずに敵陣に向かっていく。敵も彼に気付いたようで、戦車やザクは彼のガンタンクに攻撃を仕掛ける。

しかし、あまりにも予想外なことに『畏』は無かった。私達4人はガンタンクの武装を駆使し、着実に敵戦力を減らしていった。

「ザク2を撃破した。このまま押し切りましょう!」

「いいぞエルフェス、マゼラももう数えるほどしか残ってない。いけるぞ!」

全員が勝利を確信し、戦いが掃討戦の様相を呈してきたときに、異変は起こった。

「東から先ほどの新型と同型の機体が接近してきます!」

「さっきの新型…、こりやまた厄介な。」

しかし、敵の姿を認めるとさっきの機体とは大きく違っていた。

「この型、バリエーションタイプが多いのか? さっきの機体とは違うようだけど…。」

「そんなこと言ってる場合か! 来るぞ!」

エルフェスとカルツピが敵機に対し、静止射撃を行う。

しかし、敵機はさっきの機体と変わらぬ機動性で狙いが定まらないのだろう。放たれた2発の砲弾は当たることはなかった。

敵機がお返しとばかりに、マシンガンで反撃してくる。が、ガンタングの厚い装甲には歯が立たなかった。

しかも敵機のマシンガンは弾切れを起こしたようで、不自然なタイミングで射撃が止む。

「終わりだ、新型!」

エルフェスが敵機との距離を詰める。至近距離から確実に敵機を仕留めようとしたのだろう。

だが、敵機はここで予想外の行動に出る。敵機は飛翔すると、弾切れを起こしたマシンガンをエルフェスの機体に投げつけたのだ。

投げつけられたマシンガンはキャタピラに巻き込まれ、その足を止める。

「なっ、キャタピラが動かない! 助けて下さい!」

エルフェスの悲痛な叫び声が、通信機から機体内に響く。次の瞬間、エルフェスは既に絶命していた。

「エルフェス!」

仲間の死、これまでに無かったことだけに大きな衝撃となり、小隊

全員を襲う。それをゆつくりと受け止める時間は今は無い。

エルフェスを殺めただけでは飽き足らず、まだ私達を狙っている敵が、目の前にいるのだ。

「コイツ、よくもエルフェスを……!!」

クズワヨの、相手に自分の持てる全ての憎悪を叩きつけんとするよ
うな声が、通信機から漏れる。

しかし、連邦軍も戦場も、一個人の感情などに構ってくれるほど優
しい筈がなかった。

それを改めて認識したのは、司令部の命令を伝える花火を見たとき
だった。

「撤退……だと！」

低く、小さい声でカルツピが呟く。エルフェスを失ったことに関し
て、彼も私もクズワヨと同じ心境だった。

そして、その憎悪は目の前のモビルスーツだけでなく、連邦軍と『
ある男』にも向けられていた。

（クライド・ベタニー、お前のせいで、私達はこんなにも苦しんで
いる。近いうちにお前にも同じ苦しみを与えてやる！）

そう決意を改めながら、私達は退くしかなかった。命令に背けば、
私達の本来の目的を果たすこともできなくなる。

撤退中、司令部から通信が入る。エルフェスの仇討ちを邪魔された
こともあり、不愉快ながらも回線を開く。

「アリー又中尉、作戦は失敗だ。戦力の殆どを失った我々には、基
地攻略を続行することはできない。」

大佐の悔しそうな表情がモニターに映し出されている。一呼吸おい
て話を続ける。

「しかし、手ぶらで帰るわけにもいかない。基地施設はできれば確
保したかったが、艦砲で破壊する。」

「了解、位置座標送ります。」

「助かる、これで私の立場も何とか守れる。お礼に君達の転属願が
通るように取り計らっておく。」

撤退が終了し近くにいた味方と合流したとき、戦力は作戦開始時の3割ほどしかなかった。

ジオン軍も被害は甚大で、追撃はできなかったようだ。今回の作戦に従事した部隊は殆どが再編もしくは統合されるらしい。

私の部隊は、以前から転属願を出していた『独立混成第44旅団』に配備されることになった。

『死神旅団』とも呼ばれる、万年人手不足の隊なので、転属は大歓迎だったようだ。

大佐殿も『取り計らう』と言っていたが、実際は何もしていないかもしれない。

そして、その部隊が向かう先には、ヤツがいる。

エルフェスの死を無駄にしないためにも、今度こそ復讐を遂げてみせる！

第十四話：死神の救命（前書き）

やっと投稿できる。三ヶ月も待たせてごめんなさい。

いつも使っているパソコンからはメールすら送れないので、PSP
経由で別のパソコンに移してそこから投稿という、複雑な事情のあ
る……

そんなことはどうでもいいですね。

第十四話：死神の救命

宇宙世紀0079 11月9日 AM5:30

地球連邦軍の一大反攻作戦、『オデッサ作戦』に端を発した『オデッサの戦い』が遂に終局を迎えようとしていた。

オデッサ基地司令であるマ・クベ大佐が宇宙への脱出を図ったことが決定打となり、地球連邦軍の勝利がほぼ確実となった。

対するジオン軍はオデッサ基地からの撤退を余儀なくされた。

ある者はH.L.Vで遠き宇宙^{（ちゆうう）}へと逃げ帰り、

ある者はガウで北米大陸へ、

ある者は陸路で東南アジアへ、

またある者は潜水艦でオーストラリアへと向かった。

しかし、逃げる者がいるということは追う者がいるということである。

『オデッサの戦い』を優勢に進めてきた連邦軍が、この機会に少しでも敵の戦力を削ろうと躍起になって追撃部隊を出撃させたのである。

ロウの部隊はそんな戦局の中、未だに撤退を、開始すらしていないかった。

宇宙へと脱出しようとするH.L.Vを防衛するためである。

これを無事に宇宙へと還すためにローエン・ガルフ中尉率いるMS一個小隊が出撃したのだった。

出撃の8時間前 PM9:30

そもそもジオン軍は彼らに、逃げ道など用意してなかった。

H.L.Vを宇宙へと送るための生贄として最適の人員、死神隊長率い

る犯罪者集団にまで逃げ道を用意する余裕はジオン軍にはなかったのだ。

当然、このことに対してロウは軍上層部に猛抗議した。

「我々にここで玉砕せよと仰るのか!？」

「その言葉の意味が、私には解りかねますね。H L V 打ち上げ終了後は撤退せよと命じてあるはずですが？」

「『独自の判断で撤退せよ。』この命令と逃げ道が用意されてないということを考えれば、これは玉砕に等しい!」

「貴官は、困難な任務を与えられた。それだけのことです。ジオン軍人ならば、その責務を全うすべきではないのですか？」

「自分1人ならば、玉砕も受け入れましょう。しかし、部下までも巻き添えにして死ぬつもりはない。」

「良い心構えです。しかし、命令は撤回しません。貴官率いる……」あまりにも冷たい死刑宣告。ロウはこれ以上話していても無駄だと悟り、通信を強引に切断した。

相手の指揮官の心証はかなり悪くなっただろうが、そんなことは全く気にしていなかった。

（上層部は厄介者の死神と共に、犯罪者を葬るチャンスとでも思っているのだろう。しかし、そんなことをしている余裕は今のジオンには無いというのに!）

彼の部隊には厄介払いと言わんばかりに、犯罪者が多く配属させられていた。（元々はレンジャー部隊、ウルフ・ガー隊への補充要員として本国から送られてきた人員である。同隊が壊滅状態に陥ったため、ガルフ中尉の下へ配属となった。）

そのため、隊の脱出の優先度は自然と下がっていき、結果として、友軍脱出の為の殿軍を務めることとなった。

ロウ自身は元よりそのつもりだったが、脱出できる人員は脱出させるつもりであった。しかし、彼の思惑は大きく外れることとなる。

司令部から通達された命令は、

『第9独立混成小隊は第七打ち上げ場からのH L Vを護衛せよ。H

LV離脱後は、独自の判断にて撤退。撤退後は、独立遊撃部隊として地球各地を転戦されたし。』
というものだった。

HLVに空席があるにも関わらず、部隊としての運用に必要な人員を地上に残し、これからも地上で戦うように命令されたのだ。

（見捨てられたのなら、開き直るまでだ。）

この時点でこの命令を知るのは彼だけであったため、彼はこのことを黙殺し、独自の行動に出る決意を固めた。

「了解……。独自の判断で、撤退させます。宇宙に。」

通信室を出ると、そこには彼を待っていた人物がいた。

「君は…」

「エーリツヒ・フリシユクネヒト臨時整備班長です。ガルフ中尉にお話があります。」

「自分の機体のことか。だったらモビルスーツデッキに行く。機体をよく見ておきたい。」

「わかりました。先に行って待ってます。」

ロウは、モビルスーツデッキに向かわせた青年のことをよく覚えていた。

彼は先日の戦闘で、ロウと共にモビルスーツパイロットとして戦ったのだった。

整備兵ながらもよく戦ったが、奮戦虚しく基地は破壊され、彼は仲間を多くを失ってしまった。

彼は同じ場所にいた仲間を多く失ったことで、自分の無力さを痛感したことだろう。

『護れなかった』

そういう風に彼は思っているのだろう。

その悔しさと無念さは、自分の感じたことの無いものだと言えは考えていた。

仲間を失い、自暴自棄になっていた彼に、ロウは無意識の内に自分

の姿を重ね、彼を救いたいと思った。

だから彼に生きる原動力を与えた。だが、それは『希望』ではない。『希望』というには、あまりにも血生臭い、間違ったものだった。

「仇討ち、いや復讐だ。」

今でも口ウは、そのことを後悔していた。もしかしたら、もっと別の方法が、別に示してやれる道があったのではないかと。

そんなことを思いながらも格納庫に足を進めていると、その途中に思わぬ人物と再会した。

その人物は他2人ぐらいと話をしており、最初に目にしたときは特に気に留めなかったが、よく見ると見覚えのある人物だった。

「アーノルド、か？」

「ん？ああ、隊長さんか。」

アーノルドの言葉に反応し、彼と一緒に話をしていた二人が取り繕うように敬礼をする。

その二人がバツが悪そうにそこを去ったあと、アーノルドは話を続けた。

「随分と偉くなったな。俺の方が階級が上だったのは……、えーと

……」

「今の階級は？」

「……曹長」

その言葉の後一気に、気まずい空気が二人の間に立ちこめた。

その空気は二人に沈黙を強制し、沈黙がさらに空気を悪くする。そんな悪循環がそこにはあった。

この空気をなんとかしようと、アーノルドが話を再開する。

「いや、あの……ちゃんと昇進して少尉になった時もあったんだが

……」

ここに補充要員として送られてきたならば、真っ先に思い付くはずの可能性、軍規違反や命令不服従などで犯罪者と一緒に送られてき

たこと。

その場合は当然、降格処分等が行われるだろうし、それなら全ての辻妻が合う。

ロウは、その可能性に思い至らなかったことに後悔していた。

「もう何も言うな。」

降格した理由など、誰にとっても汚点であることは間違いない。

それをアーノルドに語らせて、更に空気を悪くするつもりは、ロウには全くなかった。

しばしの沈黙の後、ロウが話題を変えようと口を開いた。

「…他に報告すべきことは無いのか？」

これは一種の博打である。これでアーノルドが首を横に振れば、さらに気まずい状態となる。

（考え得る精一杯の状況打開策がこれなのだから、自分が情けなくなる。）

しかし、人の不安を知ってか知らずか、状況は好転したようだった。

「ああ、そういえば…。」

少し間を置いて、アーノルドが話を再開する。

「俺達補充要員と一緒に、新型のモビルスーツが運ばれてたんだ。」

「それだけか…。」

「そのモビルスーツには、狙撃用ユニットが付属しててさ。それが基本的に専用装備なんだけど、結構汎用性高く造ってあって、ザクやグフだったら装備できるそつだ。」

嫌な予感がロウの脳裏を過る。重い空気が改善されたと思っていたロウだったが……

「それで戦闘中に損失ということまで……。」

「くすねてきたんだな……。」

「そゆこと。」

問題がすげ替わっただけらしい。いやむしろ、状況は悪化したかもしれない。

「今、整備の連中に取り付けさせてるよ。」

「なあ、アーノルド……」

「なんだよ？すっかり意気消沈した声出しちゃって。」

「反省っていう言葉を、知っているか？」

所変わってモビルスーツデッキ。

出撃が近いということで、整備兵は誰一人として休むことなく、作業に忙殺されていた。

動いている人間は多く、ほぼ全員が同じ様な服装ということもあって、その中から一人の特定の人物を探し出すのは困難であった。

誰かに聞こうと思ったその時、後ろから声を掛けられる。

「遅かったですね、隊長。」

後ろを振り返ると、そこにはロウが探していた人物、若き整備班長代理が立っていた。

彼もまた、働き詰めで気が立っているのだろう、言葉にも刺々しさを感じられた。

しかし、そのことを差し引いても余りあるほどに、彼は大きく変わっていた。

昨日の『あの時』から……

そんなロウの心中など知らない彼は、すぐに機体についての説明を始めた。

「イフリートの整備は、思ったよりも順調です。予備のパーツが無かったので始めは心配でしたが、ヘンリー・ブーン大尉が同規格の『MS 08TX』を提供してくれました。宇宙ウツに上がるので地上戦用のこの機体は、用済みになったそうです。」

彼の視線の先では、戦闘で傷ついていたロウの愛機が傷を癒していた。殆ど損傷痕は残っておらず、完治も時間の問題のようだ。

「そこからパーツを取って整備しているので時間は掛かりませんが、出撃予定時刻には充分間に合います。」

「それは何よりだ。ああ、それk」

「俺の機体の方はどうなってる？狙撃用ユニットはちゃんと付けてくれたか？」

アーノルドが突然、強引に会話に割り込んでくる。余程、新型の狙撃用装備が気になるらしい。

「え、あ、はい。取り付け作業は既に完了しています。あとは最終調整だけです。」

「仕事速いな、助かるぜ。じゃ、ちよっくら行ってきます。」

アーノルドはそう言うと、小走りで機体へと向かっていった。ふと、走っていったアーノルドの左にあった、サムソントレーラーにロウの目が行く。

それには幌が掛けられていて中身は分からないが、かなり大きな荷物を積載していた。

「班長、アレは何だ？」

「何でしょう？」

問いかけられた相手は、電子手帳のようなチェックリストに目を通しながら、答える。

「サムソンの積み荷……」

「ビームライフルです。」

「そうか。………は？」

ロウは今の単語が、一度も耳にしたことの無い言語のように、理解できなかった。

臨時整備班長を任されていたエーリツヒは、ロウの驚きを理解したようで、すぐに説明を始めた。

「ビームライフルと言っても、鹵獲兵器です。我が軍のモバイルスーツでは、ジェネレーター出力が足りなくて使えなかったので、中破した連邦軍モバイルスーツのジェネレーターを直結しました。」

エーリツヒがロウに歩み寄り、その隣に落ち着くと、説明を再開する。

「だから、サムソンに積まないと移動もままならないような代物と

なつてしまいました。」

「使えるのか？」

「ビームを発射するだけなら、引き金を引くだけですからのモビルスーツでもできます。しかし、命中させるとなると使用するモビルスーツとの調整は不可欠です。」

「有効射程距離は？」

「光学機器の性能に依るところもありますが、ミノフスキー散布下でおおよそ1100m。」

「だったら」

「あの狙撃用ザクに使わせるのがベストでしょうね。光学機器も高性能ですから。」

彼はそう言うと、すぐに見慣れない装備を着けたザクに向かっていった。

彼を見送った後、イフリートのコクピットに入り、自分の機体の最終調整を始める。

同型機をパーツ機とくぐいにしているだけあって、性能の変化は誤差の範囲と言って差し支えないぐらいだった。

リストを見つつ、そこに書かれている項目通りに機体のチェックをこなしていく。

そのチェックリストの中でとある一つの項目に目が行く。

『M B - s y s t e m 』

この機体の性能テストの最中にも何度か目にし、気になっていた項目である。

整備班や技術者達は「無視していい」と言っていたが、結局何なのかは分からず終이었다。

（自分の乗るモビルスーツのことだ、知っていて損はないだろう。それに使える物は多い方がいい。）

そう思い、その項目の詳細を開く。

M i n o v s k y B r a k e s y s t e m

ビーム攪乱膜と共にミノフスキー粒子と反応しやすい物質を展開し

メガ粒子の発生を防ぎ、一時的にビームを発生できなくする。有効範囲、時間ともにかなり限られている（理論値で有効半径50m、有効時間10秒）。
というような説明がなされていた。
ビーム兵器を無効化できる。

それがどういうことか、MS戦をかなりの数こなしてきたロウには、一瞬で理解できた。

この機体の真の意味は『MB-system』にこそ『あつたはずだ』ということだ。

恐らくこのシステムは、何らかの欠陥があるのだろう。

『完全な兵器は無い』とはよくいったもので、ビームを無効化するという強力無比な力を持つていながら使われなくなると、相当な欠陥があるのだろう。

説明から読み取れる範囲だと、効果時間、領域共に有効だとは言いがたい。
難い。

それらは積載量の問題であるにも関わらず、カバーできる範囲が少ないということは、多く搭載することができないということだ。

ミノフスキー粒子と反応する物質が、重量増加を招くほど重いとはいえない。
考えにくい。

（資金面、もしくは稀少物質等の使用で量が用意できない。ということだろう。）

その場は自己完結で済ませていたが、ロウは本当の欠陥に気付かずにいまま、チェックの最終項目を済ませてモビルスーツデッキを後にした。

出撃の5時間前 P M O : 3 0

H L Vを無事に宇宙へと還すために、連邦軍の追撃部隊を撃破ないし撃退すべく、故郷へ帰れる者、帰れない者の区別なく、手を尽くしていた。

工兵隊は地雷を設置し、敵の足を少しでも鈍らせようとしていたり、放棄する基地施設が敵に利用されないように、爆破処分していた。整備兵は、戦車、モビルスーツ、そして最も重要なH L V等、あらゆる機材を可能な限り完璧な状態にしていた。

モビルスーツパイロット達は、基地防衛のための作戦の最終確認を、ブリーフィングルームで行っていた。

「作戦の最終確認だ。まずは防衛目標、知っての通りH L Vとその発射施設である。」

ロウはブリーフィングルームの盤状モニターを操作し、作戦領域を表示する。

「この南方に位置するのが我々の防衛目標、H L V打ち上げ施設だ。この北方はH L V用の冷却材を投入するパイプ等が敷設されている関係で、開けた場所になっている。」

作戦説明を聞く数人の兵士、その中に紛れていたアーノルドが先を促す。

「当然、敵も北方から侵入してくると考えられる。南方は黒海が広がり、東方には敵は確認できておらず、西方は丘陵地となっており、起伏が激しく戦闘部隊の移動には向かない。」

特に誰が返事するでもないので、ロウは確認を取るように全員を見渡してから、続ける。

「念のため、スナイパーのシュタインはH L V打ち上げ施設の傍で待機。高台で北方から来る敵を狙撃して、援護してくれ。」

アーノルドに確認を取ろうと顔をあげると、彼はここにきて初めて口を開いた。

「隊長さん、少し頼みがある。西方に地雷原を敷設してくれ。地雷はリモートで爆破できるタイプがいい。」

「何故？」

「H L Vを狙撃することを考えれば、西方がベストだ。連邦がモビルスーツを使えるというなら、尚更だ。」

戦車等では仰角に限界があるため、宇宙へと上がるH L Vを撃墜す

ることは不可能に近い。

だが、モビルスーツなら可能である。丘陵地帯の移動にそれほど制限が加わるわけでもないため、アーノルドが言うようなことも可能となる。

ロウに申し出を断る理由は無くなった。

「わかった。言う通りにしよう。他に意見具申のある者はいないか？」

「西方の丘陵地帯に観測機器を置いてくれれば助かる。ワツパに乗った機動力のある部隊がいただろ？」

「またしてもアーノルドの意見。」

ロウはその意味を考えて、しばし沈黙する。その間にアーノルドは説明してしまう。

「狙撃の時に、風が吹いて砂が舞ったら、ビームが使えなくなる。

その時に風の影響を受ける実体弾を使わないといけないからな。」

「成程、了解した。手配しよう。他の者は、何か意見はないか？」
全員の表情を窺うが、そこに変化は見られない。皆、口を一字にして黙っている。

「シユタインの護衛に就く者が1人、フィリップに任せる。アンダーソンとレスターの2人は自分と共に小隊を組み、防衛を行う。異議のある者は？」

誰も反応を示さなかったことを確認してから

「では、これにて作戦説明を終了する。解散！」

「言い、部下達を見送ってから臨時指令室に向かった。

「観測班、出撃準備だ。観測地点は西方の丘陵だ。地雷原近くでの作業になるため、ワツパを忘れるな。」

「了解、準備します。今回が、おそらく地球での最後の仕事になりますね。全力でサポートします！」

「頼んだ。」

そう短く言い、片手をあげて見送る。

観測班を率いる分隊長の姿が見えなくなると、すぐに別の下士官にH L Vの状況を確認する。

返ってきた答えはこうだった。

「H L Vは現在、燃料注入率57%、人員は、命に別状がない負傷兵から搭乗させているようです。」

「作業は順調か？」

「予定通りです。」

「よし、自分は少し休む。他のモビルスーツパイロットにも、仮眠をとるなりするように言っておけ。」

そう言うと、略式の敬礼をして

「何かあったらすぐに連絡してくれ。これから3時間半は自室に居る。」

という言葉を残して、その場を去った。

出撃15分前

あれから特に何事も無く、休憩時間が終わり、基地には『いよいよ』という空気が流れていた。

ロウやアーノルド達パイロットはモビルスーツデッキに集合し、殿に志願した3人は、彼らにとっての最後の時間を過ごしていた。

本来なら整備兵達が常時動き回っていて騒がしい場所のだが、今はモビルスーツパイロットが5人いるだけだったので、この時ばかりは静まりかえっていた。

何せ、整備兵は全員H L Vへと向かった後であった。全員が乗り込み終わる予定時刻まであと10分といったところだ。

「墓場みたいに静かだな。これからの俺達の運命を、暗示してるみたいだ。」

アンダーソンのその言葉は、正鵠を得ていた。

ここにいる3人、自分とアンダーソンとレスターは、この作戦の終了時に生き残っていたとしても、程無く何らかの形で死を迎えることだろう。

連邦軍の捕虜となる、あるいは食料が尽きて餓死する。反ジオンのゲリラ活動に遭って、死亡するかもしれない。

それらの事を承知した上で選んだ生き方であり、死に方である。のちに後悔することになるかもしれないが、今更選択し直すことはできない。

アンダーソンとレスターは、自分から殿として志願してきた。

このことはロウの中で、犯罪者は必ずしも悪人という構図を成り立たなくさせていた。

彼らの事をロウはよく知らないが、殿に志願することも厭わないよ
うな、相当な覚悟を持って軍に入ったようだ。

決して、罪状を軽くすることだけが目的ではないだろう。

(無論、どんな罪で有罪判決を受けたのかは知らないが。)

しかし、ロウの思考は途中で遮られる。敵襲の報せによって。

「おっと、お出ませだけ。センサーに感あり！」

アーノルドの言った言葉の意味するところは大きかった。敵にHLVが何時発進するかということが、わかっていたということである。HLVの準備に掛かる時間はおよそ5時間。前回の戦闘が終了したのが9時間ほど前。

(つまり、敵は我々の戦力疲弊を読んでいるということが。疲弊していないなら、地上からの脱出もできたのだがな。)

そんな事を思いながら、ロウはモビルスーツへと向かう。

「全員、モビルスーツに搭乗、出撃するぞ！」

ロウの指示に従い、全員素早く自分のモビルスーツに乗り込み、順次出撃していった。

「シユタインとフィリップは、予定通りにHLV発射場付近で待機。

レスター、アンダーソン、付いて来い！」

言ったが早いか、アーノルド達2人は既に配置に就き、ビームライフルの準備を始めていた。

「隊長、敵機視認！GMが3機です。」

「散開しろっ！包囲して各個撃破だ！」

レスターの報告を聞いて、反射的に指示を出す。広い平原で固まっていることは、撃つて下さいと言ってるようなものだ。

相手は『Vフォーメーション』を崩さずにこちらに向かってきた。隊長機を中心に、僚機が左右の斜め前方に展開し、隊長機が僚機を援護することを考えたフォーメーションだ。

「作戦変更だ。君達は二人一組で左の1機を潰せ。自分は右のヤツをやる。」

そう言うと、ロウは右にいた機体の、さらに真右から目標に接近する。

距離を詰めている間に、腰部に装備されているビームダガーを抜く。ロウに相対するGMもその動きに合わせて、脚部からビームサーベルを取り出し、格闘戦に備える。

ロウは尚も接近し、ビームサーベルのリーチに入る直前で止まる。

GMは予想外の敵機の挙動に、ビームサーベルを空振りしてしまう。その隙を見逃さなかったロウは、腰部にマウントされているショットガンを取り出し、目の前の隙だらけの敵機に撃ち込む。

結果、GMのコクピット付近は蜂の巣になり、頭部は無くなっていた。

ロウは敵機の撃破を確認すると、足を止めずに、すぐに次の敵機を捕捉し、攻撃をかける。

敵機を撃破したらしいアンダーソンの援護を受けて、隊長機と思しき敵機に接近する。

ビームダガーを両手に装備して、切り掛かる。

が、相手は飛翔してこれを回避した。

更に一瞬の隙を点き、蹴りを一撃、イフリートの胴体に叩き込む。その蹴りでイフリートはバランスを崩し、仰向けに転倒する。

「しまった！」

イフリートの正面モニターには、銃口をこちらに向けて立っているGMの姿が写し出されていた。

（まだまだ！H.L.V.が無事に宇宙に上がるまでは、まだ死ねない！）
ロウは、イフリートの全身のスラスターを全開にし、機体を寝かせたまま、後退させた。

それでも避け切れずに脚部に被弾したが、これからの戦闘に支障は無いようだった。

しかし、GMも目の前の敵に気を取られてすぎていたようで、アンダーソンとレスターの2人の集中砲火の前に撃破された。

「隊長、大丈夫ですか？」

アンダーソンの心配そうな声に、「ああ。」とだけ短く答えて、乗機に体制を立て直させる。

「敵の後続がすぐに来ます。隊長は下がった方が……。」

心配そうなのは、レスターも同じようだったが、ロウは、

「2機でここを守りきれる保証は無い。3機でも保証は無いが、だからこそ戦力は多い方がいい。」

「ですが、」

「敵の後続部隊です！数は、角付きが2機！」

尚も食い下がろうとするレスターだが、状況がそれを許さなかった。アンダーソンは報告を終えると、逸早く敵の襲来に対して、牽制射を始めていた。

「無理はせずに撤退だ。H.L.V.打ち上げまでもう少しだから、少し時間を稼げればそれでいい。」

言い終えた瞬間、ロウには敵機の手が光ったように見えた。そして、
「アンダーソン！」

次の瞬間、アンダーソンのザクのコクピット部分には、熱で溶かさ

れたような大穴が開いていた。

「ビーム砲をモビルスーツが装備しているのか？」

「来るぞ！」

ビームライフルを装備したモビルスーツを連邦軍が実戦投入しているのは事前に知っていたが、『百聞は一見に如かず』、実際に相手取ってみると驚きは隠せないようだ。

再び敵機がビーム砲で攻撃してくる。しかし、引き金を引いてからビームが発射されるまで、コマ何秒かのタイムラグがあり、回避は難しいものの不可能ではなかった。

しかし、光速に近い速度のビームを連射されては、いくら優秀なパイロットと機体とはいえ、回避にも限界がある。

そこでロウは、イフリートのショットガンを地面に向かって発砲する。結果、周囲には砂塵が舞い、その塵はビームの威力を減衰させる、即席のビームかく乱幕となった。

しかも、舞い上がった砂塵は煙幕の役割も果たし、レスターのグフはそれを利用して敵機に迫る。

それからの間の15秒間の間に起きたことは、衝撃的であった。

まず、ビームライフルを撃っていたガンダムタイプのモビルスーツが、ビームサーベルに持ちかえ、格闘戦の構えを取る。

レスター機はそのまま敵機の懐に突っ込み、敵機のコクピットに右腕^{アーム}で拳を叩き込む。

しかし、ガンダムのビームサーベルは、グフの下腹部を深く切り裂いていた。

そして、爆発するレスターのグフ。ガンダムタイプのモビルスーツは、その爆発によってその場に倒れ、二度と立ち上がることはなかった。

残った1機が、マシンガンを撃ちながら接近してくる。

今さっきの光景が衝撃的過ぎて、もう1機存在を忘れていたロウは、不覚にも何発か銃撃を受けてしまう。

遅ればせながら回避行動を取ると、すぐにビームダガーを抜いて両

手に装備し、格闘戦に移行する。

格闘の間合いに接近すると、相手のガンダムがビームサーベルを振り下ろす。

それをビームダガーで受け止め、もう一方のビームダガーをガンダムの上半身に突き刺す。

荒野に同じ色、同じ形の残骸が、2つ転がった。

その数秒後、出撃前にセットしていたタイマーが鳴り響く。

「時間か。」

間を置かずして、明るくなる空。空に昇るH L Vの噴射炎が、早朝の薄暗い空を照らしているのだ。

そして、打ち上げられたH L Vは、すぐに視界から大空へと消えていった。

後に残った飛行機雲と砂煙が、任務の完了を告げていた。

任務達成の余韻に浸っていたロウに、通信が入る。

「よう、隊長。生きていたか。」

「アーノルド!?」

アーノルドはフィリップと共に、防衛もそこそこに切り上げて、モビルスーツを乗り捨ててH L Vに乗り込む予定の人員だった。

「どうして……」

「予定通り乗り込んだら、先に乗ってた奴らと心中しそうだったんでな。それにもう1人いるぜ。」

「もう1人って、フィリップか?」

「フィリップは戦死した。そっちも生き残ったのはあんただけみたいだな。」

「とりあえず合流しよう。話はそれからだ。」

「自分の苦勞は、一体なんだったんだ。宇宙そに行くべき人間が、何故ここにいる?」

「仕方なかったんです。H L Vを守るためには、こうするしか。」
ザク1のパイロット、エーリツヒ・フリシユクネヒトは続ける。
「他の人員は、宇宙へと帰りました。隊長達の努力は、無駄ではありませんよ。」

「そうだな。すまない。君達がいてくれなければ、無駄になるところだったんだな。」

「そうだが、感謝しろよ。」

我々は残っていたサムソンで、東に向かうことにした。

「どうして東なんです?」

「アジア方面軍はまだ生きている。おそらく、H L Vもあるはずだ。今度こそ宇宙へ帰してやる。」

「頼むぜ、隊長さん。」

第十四話：死神の救命（後書き）

何故か死神って、連邦軍に多いんですね。

テリー・サンダースJr、ユウ・カジマ、リド・ウォルフ、

『重力戦線』の主人公達

だいぶ時代飛んで、ユカ・マイラスとか（マイナー過ぎ）

次回は、今回の連邦軍視点。主人公はハイメ・カルモナかな？

他の人がいい、とか言う人はご一報ください。

第十五話：世界の違い

宇宙世紀0079 11月

後に『一年戦争』と呼ばれる戦争が、転機を迎えていた。

『オデッサ作戦』の発動である。

これまで防戦一方だったと言っても過言ではない連邦軍が、初めて反撃に出た時期である。

連邦軍がこの戦いに動員した兵力は、戦闘要員約400万人、後方支援要員約370万人。

実に地上兵力の3分の1をこの作戦に投入した。

当然、その中には雑多な人間が含まれており、戦いに出る理由も人それぞれだった。

ある者は、自身の出世へのワンステップにするため。

ある者は、侵略してきた宇宙人から、母なる大地、故郷である地球を取り戻すため。

ある者は、裏切り者に復讐を果たすため。

そんな多くの思惑が入り混じった戦場に、彼、ハイメ・カルモナの姿はあった。

彼もまた、思惑を持って動いており、それは……

オデッサ近郊 地球連邦軍 野戦陣地

この陣地のある一ヶ所に、集団で騒ぐ連邦軍兵士の姿があった。

その中心にテーブルがあり、そこで向かい合う男2人組が、彼らの騒ぐ要因となっていた。

しかし当の本人達は2人とも、お互いを見据えて全く動かない。

彼らのその手には、彼らの運命を決める5枚のカードが握られていた。

「兄ちゃん、降りるチャンスはこれが最後やで。これ以上負けたら、

お前は破綻や。やめとき。」

対峙する2人のうちの、30代半ばぐらいの男が、そんな脅し文句を口にしながら

「いいよ、別に。勝てばいいんだろ？この手札なら、ほぼ確実に負けはねえし」

もう1人の方はその脅しに屈するどころか、逆に自信を見せて、挑発してきた。

その言葉に逆上したのか、少し語調を荒げて男は言う。

「ほんなら、後悔せえや。」

男は手札を勢いよく、テーブルに叩きつけた。

テーブルに、3のカードが2枚と6のカードが3枚出現した。

場に出された札を見て、野次馬の何人かがどよめく声が聞こえた。

「フルハウスや！後悔しても、もう遅いで。さあ、手札を……」

「はいはい。」

男の耳障りな声で紡がれる言葉が終わる前に、相手の男も手札を公開する。

6, 7, 8, 9, 10ときれいに並んだ数字。

片隅に描かれた赤い菱形が、自分達は同じ集団なのだと主張していた。

「ストレートフラッシュ！これでまた、借金返済に近付いたな。」

周囲からは歓声、野次、口笛など様々な音が飛び交い、それはつまり、ゲームの終了を意味していた。

本当に見事な逆転勝利を飾った若き曹長、ハイメ・カルモナ。

彼はモバイルスーパイロットという、言うなればエリートコースに乗っていたのだが、昼休みなどの休憩時間になると、決まってギャンブルに勤しんでいた。

彼は何時でもこのような派手な勝ち方をするような、ギャンブラー気質の人間ではない。

今日はたまたま運が良かっただけで、いつもは常に地味に勝ち、目立つようなことも、他人の反感を買うようなことも無く、収穫と呼

ぶにはあまりにも乏しい小銭を持って帰るだけだった。

それで、それだからこそ彼が、賭けにごく僅かにだが勝ち続けていることを誰もが見逃していた。

だが、今回は違った。

対戦相手の男が席を立ち、大方の予想通り若い男の方に詰め寄る。

次に放たれた言葉も、誰にでも予想がつくものだった。

「ちょっと待てや、兄ちゃん。八百長とはええ度胸しとるやないか。」

「その言葉、そっくりそのまま返していいよな。」

そう言つとハイメは、寄つてきた対戦相手の男を思いきり突き飛ばし、彼の体制を崩す。

突然の事に虚を衝かれた相手は、その場に尻もちをつき、それと同時に何枚かのカードが地面に落ちる。

「これじゃ、言い逃れはできそうにないな。どうする？」

突き倒された男は、慌ててカードを拾い集めるが、時既に遅し。ハイメはそんな男に対して、止めの一撃を放った。

「知ってるか、おっさん？イカサマつてのは、一度ばれたら全部終わりなんだぜ。」

ハイメはそう言い残し、テーブルの上に置かれていた数枚の紙幣を一枚残らず回収し、その場を後にした。

彼が立ち去った場所では、イカサマ被害の糾弾が始まっていた。

そう、ハイメ・カルモナという男は、金の為に戦いに参加する人間だ。

そのことで他人からとやかく言われることもあつたが、全く気にしていない。否、気にする余裕など無い。

モビルスーツという、連邦軍将兵から見れば、海の物とも山の物とも分らないモノに志願したのも、モビルスーツパイロットが高給取りだったからである。

「割に合つてるとは、思えねえけどな。」

誰に言うでもなく、そう呟く。

実際、今日の戦場の矢面に立つのはモビルスーツと相場が決まっております、エリートとは思えない、危険と隣り合わせの過酷な任務であった。

行くあても無く彷徨っていると、1人のとても若い女性、否、少女が声をかけてきた。

「曹長、また賭けごとに行ってたの？私の小隊のイメージが下がるから、やめてほしいんだけど。」

「最前線せんせんでまで評判なんか気にして、小隊長も御苦労様です。」

小隊長相手にも、全く遠慮せずに皮肉をぶつけるハイメ。寧ろその言葉には、誰が聞いても分かるほどの悪意が含まれており、相手の怒りに火を付けるのに充分だった。

「そう思うのなら、貴方も少しは協力したらどうなの！小隊の為に！」

野戦陣地に、少女の高い怒声が響き渡る。しかし……

「あんたの口から出る言葉じゃねえだろう！」

静かな、だが迫力のある声で、ハイメは返す。少女は言い返そうとするが、先にハイメが口火を切る。

「あんたは何のために最前線まで出張ってきたんだ？ジオンから地球ちゆうきうを奪い返すためじゃないだろう？」

言い返す間を与えずに、更に追撃を加える。

「あんたは、まだ士官学校でのんびりとやってりゃいい年だ。俺のように金を稼がなきゃ我が身が危うい訳でもあるまい。」

「貴方に……」

「となれば、良家の人間がやることといえば、派閥争いの準備とかな。」

「貴方に何が分かるって言うの！？」

「わからねえ！何にもわからねえ。だから、わからねえまま使われるのは嫌だっただ！」

本来なら軍人として失格の言動だが、冷静さを失った少女はそのこ

とにすら気付かず、

「言ったところで分かる訳ない！」

と吐き捨てて、その場を去っていった。

「どうして、こつも上手くいかないの？」

今し方、部下である青年に怒りをぶつけたばかりの少女は、泣きそうな声で独り言を呟いた。

その少女、ルシア・リート少尉は、さっきの事を思い返していた。

（どうして、あんな皮肉めいた声の掛け方をしてしまったんだろう。あんな事じゃ嫌われるだけだって充分解ってるはずなのに。）

考えれば考えるほどに憂鬱になっていき、気分はどんどん下降し、それに連動するかのように視線も落ち、いつしか足元を見つめていた。

ルシアは多くの悩みを抱えていた。

連邦軍人としての苦悩や、年相応の少女としての悩みなど様々だったが、そのどれもが解決の目途が立たず、彼女の胸中に重圧をかけていた。

（どうしたらいいの？）

そんな自問自答を何度したことだろうか。しかし、その問いに有用な答えが返ってくることはなかった。

ルシアは一向に答えの出ない問答に見切りをつけ、目の前の問題に取り組むことにする。

解決できない問題を一時的に忘れようとしたというのもあるが、彼女のやらなければならない仕事であるのも事実なので、そのことには目を瞑った。

「ブリーフィングは確か、5時間後だったわね。作戦開始前に少しでも寝ておかないと。」

そう自分に言い聞かせるように言って、割り当てられたテントへと向かう。

その途中、ルシアはさつき怒鳴り合いの喧嘩をした人物と遭遇してしまった。

ルシアは気まずそうに目を逸らしたが、向こうから声を掛けてきた。「隊長、さつきはすまなかった。正直俺も、大人げなかった。」

予想だにできなかった詫びの言葉に少し困惑を覚えつつも、軍人の家系で育ったルシアは、すぐにこの状況を活用できないかと思案する。そして、彼女の出した結論は……

「悪いと思うのなら、ちよつと付き合ってくれない？」
と控えめに頼むことだった。

ルシアは、自分に割り当てられた簡易兵舎に、ハイメを連れてきた。簡易兵舎とは言っても、ベッドは一つしかない上に普通よりも設備が充実している。

個室というだけでも特例なのだが、このような場所を与えられることからルシアのコネクションの大きさを理解させられる。

「それで、俺は何に付き合わされるんだ？隊長。」

ルシアは相変わらずのトーンダウンした声で、用件を伝える。

「……ちよつと話し相手になってほしいの。」

「私の家は、代々の軍人家系なの。女も含めてね。」

「それで？」

いかにも興味が無さそうな、適当な相槌が返ってくるが、ルシアは構わずに話を続ける。

「私は、そんな中でも負けず嫌いだったのよ。それで、士官学校の同期生に負けたくなくて……」

「前線に出てきたのか？」

「そう。でも、出てきたはいいけど、私、全然役に立てなくて。」

ルシアは、申し訳なさからか、それとも別の理由か、泣きそうな声で言葉を紡ぎ続ける。

「いつも貴方に助けて貰ってた。本当は感謝してるの。」
ルシアは遂に泣き崩れてしまう。

「士官学校でも成績は上々だったし、同期の人間でも部隊を率いる人間は片手ほどしかないのよ？」

「その中に選ばれた自信もあつたし、前線でも上手くやっていけると思ってた！なのに……。」

悲痛な叫び声を挙げつづけるルシアに対し、ハイメはそっとルシアの頭を撫でる。

ルシアは自分に優しくしてくれるハイメに甘え、彼の体を抱き寄せ
る。

ハイメもそれを拒まず、結局、ルシアが泣き止むまで好きにさせる
ことにした。

「隊長、ちょっと前に亡くなったお袋が言ってたんだが、他人の前
で弱味を見せられるヤツは、本当は強いヤツなんだつてさ。」

「これからはアンタの事、もうちょっと信頼するよ。」

傍からすれば言いたい放題に聞こえるが、ルシアにはその言葉が嬉
しかった。

(ありがとう。)

ルシアは心中で感謝しながら、ハイメの背中を見送った。

それから数時間後

未だ日は昇らず、草木も眠る時間

もっともオデッサ周辺は砂漠地帯が多く、眠る草木もないのだが……

軍人たちの任務に時間は関係無い。

ミッション・スタート
任務の開始の時間は人間の生活リズムに合わせてられる物ではない。

人間の都合に合わせてくれる戦争なんて無いのだ。

「隊長、おい！起きろ！」

そんな声が、テントの外から響いてくる。

外からはその声以外に、非常事態を告げるけたたましいサイレンが響いていた。

いつの間にかルシアは、机に突っ伏して眠ってしまっていたようだ。いつもなら着替えなどの支度で、15分ぐらいは掛かるところだが、制服のままだったので、適当に制服のシワを伸ばしてすぐに声に應對する。

「どうしたの？カルモナ曹長。状況を説明して。」

その問いに対する返答は

「残念だがそんな暇もない。緊急事態だ。とりあえずモビルスーツに向かわねえと。」

「わかったわ。走りながら話して。」

「無茶を言いやがる。」

そう言うハイメの顔は、少しだけだが笑っていた。

モビルスーツに向かう短い道中、律儀にもハイメは命令を遂行していた。

「上の人間が、ミスったらしい。H L Vの発射時刻はもうちょっと後だと考えてたそつだ。」

ハイメはそんな説明をしつつ、彼の愛機、【RGM-79「G」陸戦型GM】のコクピットへと続くワイヤーロープを掴み、愛機に乗り込む。

ルシアもまた同じ要領で、自分の乗機、【RX-79「G」陸戦型ガンダム】へと搭乗する。

座席に就き、機体に灯を入れ、システムを立ち上げる。

立ち上がったシステムは、瞬時に緊急用回線が通信を受けていることを表示する。

ハイメもルシアも心中では少し動揺しながらも、反射的に通信回線を開く。

そこにはルシアの指揮する小隊ではお馴染みとなったオペレーター

が、いつもより硬い表情で写っていた。

「緊急事態のために簡易ブリーフィングとなります。今回の作戦目的はH L Vの離脱を阻止することです。」
「続いて普段は滅多に顔をあわせることもない大隊長が、モニターに登場する。」

「敵部隊は新型モビルスーツを保有している可能性が高く、これを宇宙に持っていかれると厄介だ。しかし、敵の新型モビルスーツとなれば、確保できるならそれに越したことはない。」
部下の全員が話を理解するために少し間を置き、

「しかし、確保はこの状況では絶望的だろう。欲を出すことはない。H L Vが発進したら、即座に撃破してくれ。もちろん、新型モビルスーツ諸共だ。」

「第2小隊、第3小隊は発進。作戦目的はH L V基地の制圧、および新型モビルスーツの確保もしくは破壊です。」

「了解、第2小隊、出撃する。第3小隊、後続は任せたまぞ。」

第2小隊のGMが3機、膝立ち状態から順番に立ちあがり、統率の取れた動きで目的地に向かう。

「第3小隊、行くわよ。曹長のスナイパーは狙撃予 positioning へ急いで！」

ルシアは焦っているのか、出す必要の無い作戦通りの指令を出す。

「言われなくても解ってますよ。」

少し反抗的ではあったが、以前とは全く異なる態度で、命令を実行するハイメ。さらに

「隊長、そう焦りなさんな。死ぬぞ。」

と、ぶつきらばうだがルシアのことを気遣う態度まで見せた。

「ありがと。貴方も死なないでね。」

(戻ってきたら大事な話があるから。)

ルシアは、危うく言ってしまうそうになったその言葉を喉元で飲み

込みことには成功したが、顔が熱くなるのは止められなかった。それを第2小隊の隊長にからかわれるが、ハイメが別行動をとっているため不在なのが、不幸中の幸いだった。

出撃して18分、攻撃目標がレーダーに表示されるようになった。ミノフスキー粒子は少なくレーダーは有効な情報源となっていた。しかし、それは敵にも同じこと。結果本来は奇襲作戦だったはずが強襲作戦となってしまった。

「敵機視認。これより戦闘に入る。グフが2機と、新型機が1機だ！」

「確認しました。第2小隊、交戦開始します。」

通信で流れるオペレーターの声が、それを傍受した3機のモビルスーツ、そのパイロット達に緊張を走らせる。

「こちらハイメ・カルモナ。目標地点到達。視界良好、狙撃にはもってこいだ。」

「了解しました、次の命令があるまで現地点で待機しててください。」

待機命令を受けたハイメは、ビームスナイパーライフルのスコープを使って、狙撃目標を確認していた。

しかし、そこには面白みの無い岩肌が見えるだけで、本当の狙撃対象のHLVは未だ姿を現していない。

「第3小隊も前進して、第2小隊の援護に回ってください。」
いつでも命令に答えられるようにと、通信回線はオープンにしてあるが、自分への命令は一向にこない。

暇つぶしも兼ねてもう一度、狙撃目標が現れるであろう地点の周囲を、スコープを使って見回す。

「……あれは？」

ハイメは、さつきとは違う光景がスコープの先に広がっていることに気がついた。

「ザクが……2機。指示を仰いだ方がいいか。」
そんな独り言を呟きながら通信機に手を伸ばすが……

刹那、モニターに写るザクが光り、その光は20mほど左にある地面を焼いた。

ハイメは防衛本能が、反射的にビームスナイパーライフルで反撃する。

ザクに向けられた高出力のビームは、その脚部に命中し、それを容易く破壊した。

ただし、ビームで攻撃してきたザクとは別の機体だったが……

「第2小队2番機、3番機、ロストしました。」

開きっぱなしの通信回線から流れてくる音声も、最早ハイメには届いていない。

近くの遮蔽物に愛機を隠し、狙撃戦の恐怖から一時的に逃れ、次なる対決の時まで身を隠すことにした。

「墜ちなさい！」

ルシアの張り上げられた声と共に、破壊の閃光が敵機のいた場所に突き刺さる。

(当たらない！またしても回避された。)

ルシアは相当焦っていた。

H LVに搭載されているはずの敵新型モビルスーツ、それが目の前で、自分よりベテランのパイロットが乗っていたGMをたった5分足らずで撃破した。

GMの性能が低かった訳では無い。

ザクよりも高い性能を持っていることは明らかだし、グフと一対一戦闘になっても勝負は分らない。

自分よりも優れたパイロットの搭乗していたそれを、新型機は損害無しで撃破したのだ。

そのことがルシアに、冷静さを欠かせていた。

(近づけたら不味い。いや、それよりも数を減らして有利な状況に

した方が……)

混乱の只中にあるルシアの脳では結論が出せない。

(どうしてこうも上手くいかないのよ!)

数時間前と同じマイナス思考が頭の中で反響する。

「墜ちろっ!」

そう言っつてビームを撃った直後、ビームが向かった方向から多量の砂煙が発生する。

「やったの?」

そう思ったのも一瞬、敵機撃墜の余韻に浸る間も無く、もう1機の機体、グフが前方から突っ込んでくる。

「墜ちりやいいのよ!」

そう言っつて即座に脚部からビームサーベルを取り出し、敵機に対峙する。

そのまま特に得物を持たないグフに対し、横薙ぎにビームサーベルを振るう。

ビームサーベルは特に何を障害とするでもなく、しっかりとグフの胴体を捉える。

(やった!)

グフの撃破を確認した瞬間、ルシアは歓喜した。

自力での任務の達成、それは彼女にとって初めての体験だった。

今まで経験した任務では部下の力量が大きかったこともあって、ほとんど部下の、特にハイメの功績といった方が正しかった。

だが、今回は違う。

自分の力で敵機を撃破し、殲滅した。それが嬉しかった。

これで『お飾りの隊長』などと言われることも無くなるだろう。

しかし、そんな勝利の余韻に浸れる時間は、あまりにも短かった。

これからのことに思いを馳せようとした彼女の目に映った物は……

とても大きな、青い拳だった。

ルシアは自分の勝利を信じたまま、事実を知らぬままに逝ってしまった。
知らない方が幸せだったかもしれないが、それは彼女自身にしかわからない。

「第3小隊、隊長機、ロスト！」
一際悲痛なオペレーターの声が、通信機からコクピット内に反響する。

「嘘だつ！ちゃんと確認しろ！」
狙撃から逃れるために身を隠していたハイメは、多少落ち着きつつあったが、その報告は取り戻した落ち着きを簡単に破壊した。

「残念ながら……。作戦は失敗です、撤退してください。」
沈みがちな声で、なんとか指示を伝えてくるが、その声は彼には届かなかった。

「……………HLVの発射まで、そんなに時間はないんだろ？」
なんとも場違いな質問をするハイメ。

だが、その眼には大きな意思が宿っていた。

「え？あ……ハイ。間もなく発射されると思われます。」
オペレーターはハイメの意図に気付かぬまま、戸惑いながらも返答する。

「だったら、弔い合戦ぐらいはやってやらないとな。」
ハイメは言い終えると、すぐに通信回線を切断した。

ハイメはそのまま、自分1人の戦争へと身を投じていった。
まずは、ビームスナイパーライフルにエネルギーが充填されていることを確認する。

次に目標であるHLVの位置、そして今し方ビームで狙撃してきたモビルスーツの位置をさっきの状況から推測する。
次にこの状況を攻略する術を考える。

考慮すべき問題は

ビームスナイパーライフルの性能

敵狙撃型モビルスーツの位置

H L Vの発射される時間

妙案はないかと思ひ、ディスプレイを見るとそこにはビームスナイパーライフルのデータが映っていた。

そこでハイメは1つのことに気付く。

(このビームライフル、照射ができるのか。)

ハイメはモビルスーツ乗りとしてはそれなりに場数を踏んでいるものの、本格的なビーム系射撃兵器の使用は今回が初めてだった。

(ビームスプレーガンなんかとは全然違う。これなら、やれるな。)
そう思った瞬間、コクピット内に警報音が響きわたる。

「高エネルギー反応、お出ましか。」

その短い言葉に続くのは轟音、そして光芒。
離昇するH L Vだった。

ハイメは愛機のGMを狙撃ポジションに就かせ、それと同時にザクに狙いをつけてライフルの引き金を絞る。

それから1秒も経たずして、爆発音が響く。

連続した爆発音が……

(連続?爆発は一回のはず……)

その思考に答えを返すように、ハイメの目の前には砂煙が広がっていた。

(ビームかく乱幕にしようってのか、だが相手が使ってたのもビームだったはず……)

ハイメのそんな思考を吹き飛ばすように、大きな衝撃が機体越しに伝わってくる。

それから間もなく二度目の衝撃がハイメと彼の愛機を襲う。

(何が……起こった……?)

左のモニターには、突然現れたディスプレイが左腕の完全消失を示

している。

外の様子を知るためのモニター、そこに映る風景は砂煙でよく見えず、ハイメの状況把握を困難にさせていた。

混乱した頭で現在の状況を知ろうとするハイメの眼に、ぼんやりとした一筋の光が映る。

その光が呆けていたハイメの脳を、一瞬で覚醒させる。

「HLV!!!」

言うが早いか、ハイメは仰向けになっていたGMをバックパックのブーストを使いながら器用に立たせて、そのまま飛翔させる。

直後、下の地面で勢いよく砂煙が巻き起こるが、ハイメは構わずGMをさらに上昇させ、HLVを追う。

遂にライフルの照準が目標と重なり、それを追尾するようになる。

「捉えた！これで！」

ハイメが引き金を引こうとしたその時、彼にとって3度目の衝撃が訪れる。

「なっ、敵機か!？」

下から受けたその衝撃によって、機体はバランスを崩し、銃身が下を向いてしまう。

そこから放たれたビームが、宇宙を目指して上昇するHLVに当たるはずもなく……

彼のGMはそれ以上飛ぶこともできず、重力に従って地面に叩きつけられた。

ハイメは仰向けに倒れたGMから何とか脱出した。

既に彼の愛機は四肢をほとんど失って立つことすらできず、連邦軍の他のモビルスーツなら脱出は不可能だった。

陸戦型GMにそれができる理由は、コクピットハッチが、前面ではなく上面に向かって開くためだった。

脱出したハイメが最初に見た物は、なんとも古めかしいモビルスーツだった。

「旧型のザク……。あれに墜とされたのか。」

ハイメはこの時、現実感を完全に喪失していた。彼にとつて今日の多くの出来事は、それだけのショックを与え得るものだったのだ。

だからだろうか、背中向きとはいえ敵のモビルスーツを見て、即座に行動することを忘れていた。

身を隠さないという愚行を冒した。

しかし、そのザク1は一度も振り向くことなく、無論、後ろからの視線にも気付く事なく、その場を去った。

その後、何事も無かったかのように味方に救助されたハイメだが、幾度となく機体と共に受けた衝撃が後を引いていた。

その傷を治すために4日間療養し、その後に撤退命令を聞かずに独断行動をしたことへの謹慎処分。

その後、所属小隊が壊滅したことによる転属命令。

そんなゴタゴタの中で、ルシアの遺品整理をしていたという人物から渡された物があった。

「……手紙？」

「宛名がアンタになつてたからな。確かに届けたぜ。」

受け取った手紙には、確かに自分の名がしっかりと書かれていた。

部屋に戻つて、中身を確認する。

封筒の口は何度も折り返した様子で、一般のそれと比べても開きやすくなっていた。

手紙の内容は大方、予想通りの物だった。

「こういう大事なことは、もっと早く伝えるべきだろ。」

受け取った手紙を眺めながらも一言

「バカ。」

そんな言葉とは裏腹に、彼は目から溢れるものを止められなかった。「やっぱりアンタは、軍人に向いてなかつたんだよ。自分が死ぬつ

てこと、考えてなかっただろ？」

「俺は絶対にそんなこと考えねえ。生きていたいから、借金返済なんか一生懸命になってるんだ。死んでたまるか。」

「生きてやる、アンタの分まで……な。」

第十五話：世界の違い（後書き）

新規読者と新しい感想を切に願っております。
誤字脱字報告もよろしくお願いします。

第十六話：昨日との再会（前書き）

本作初の前後篇（敵視点篇は、前後篇とは違う扱い）

第十六話：昨日との再会

宇宙世紀0079 11月13日

一年戦争の転機である、オデッサ作戦は地球連邦軍の勝利に終わった。

この戦いに敗北したジオン軍は、地上における最大の拠点を失ったことになり、パワーバランスは地球連邦軍に大きく傾くことになる。敗北したジオン軍は、各地に残る基地に撤退を開始することとなる。しかしジオン軍にとってこれほど大規模な撤退は、経験したことの無いものだった。

故に撤退の方法も様々、というか節操の無いものだった。

ザンジバル、HLV、HOTOL、潜水艦、使える物はなんでも使つてオデッサから脱出したが、それでもその中に入れない者はいる。その中の1つであるローエン・ガルフ率いる部隊は、陸路でオデッサから脱出。

オデッサから比較的近い廃墟都市、シンフェロポリに身を寄せていた。

「み〜らしいの二人に〜」

不利な戦局など関係ないかのように、空気を読まずに絶望的な歌唱力を披露するアーノルド。

「音痴どころの騒ぎじゃないですね。そんなことは連邦が来た時にやってくださいよ。」

戦局が悪いことで疲弊しているのか、普段は無口なエーリツヒが悪態をつく。

「うるさい。こんなご時世、歌でも歌って景気付けなきゃやってられるか！」

そう言つて、あくまで歌うのを止めようとしなないアーノルド

対してエーリツヒは溜息を吐きつつ、MSの脚部間接の点検作業を

続けていた。

「マズイな。どうせ整備作業にしか使われないと思ってたから、あんまりこっちの整備はしてなかったな。」

元々は整備班の機体で、今は自分の愛機となったザク1を見てそう漏らすと、また溜息をついてその場に座り込む。

そうして休憩していると、浮かんでくるのはつい最近のこと。

多くの仲間を失ったのが、1週間前。宇宙へ帰るHLVを蹴ったのが、つい4日前のことだったが、そんな実感は全くなかった。

というか、あまりにも多くのことが一瞬で過ぎ去ったため、時間の感覚が麻痺していた。

(宇宙に帰してやる、か。)

その中でエーリツヒは、つい一昨日に隊長から言われた言葉を思い出す。

(別に、帰りたいと思ってる訳じゃないんだけどな。)

しかし自分と行動を共にする2人ともが、宇宙への帰還を望んでいるため、迂闊に反対意見を述べることもできない。

そのうえ、自分の意見より彼らの意見の方がはるかに正しいことは理解していた。

(そうだよな、できる訳がない。)

彼の思考はそこで自己完結を迎えてしまう。

彼の意見とは、完全に私怨に根差した、言わば自分勝手であった。『仲間を皆殺しにした連邦軍が憎い。』

そんな理由で徹底抗戦を行うなど愚の骨頂だということは、エーリツヒも理解していた。

それでもやはり、連邦軍が憎い。その思いは捨て切れなかった。

(ま、でも…宇宙で連邦軍を潰すのも良いかもな。そっちの方が合理的だし。)

エーリツヒはそんなことを思いつつ、反対側の関節もチェックすべく、行動を再開した。

「補給無しでどこまで行けるか。だな」

2人を率いる部隊長、ローエン・ガルフは彼らから少し離れた場所
で、愛機の肩に乗って、そう呟く。

「実際問題、食料品ならどうにかなるが……。」

その言葉の切れ目で、彼はおもむろに下を向く。

その視界に映るのは、愛機の左手に握られた巨大なマシンガン。そ
れを見て、彼は大きくため息を吐く。

ロウは決してマシンガンの性能に不満がある訳ではなかった。

(もう、弾が無い。)

ロウ達の目下の悩みは、武装等の規格品の消耗のことだった。

特にアーノルドのザクに装備されているスナイパーライフルは、す
ぐにでも弾切れを起こすだろう。

「隊長、どうしたんですか？」

俯いていたロウに、エーリツヒは心配そうに声を掛ける。

「なんでもない、それよりもそろそろ食事の時間じゃないか？」

自分の心配事を隠そうと、ロウは努めて明るい声で話題を変えよう
とする。

「そういえばそうですね。昼食にしますか？」

「俺は……いいや。2人で食つといてくれ。」

「……なっ!?!」

アーノルドが昼食を摂らないということに、2人は些か過剰に反応
するが、

「調子が悪くてな、少し休もうと思う。」

という言葉と、歌っていた(?)ときとはうって変わって真剣な表
情に、それ以上の追求を阻まれてしまった。

昼食中

ロウは意を決して、昼食には似合わない物騒な話題を持ち出そうと
したところで、離れた場所にいるアーノルドが突然、独り言を言う

ように語り始める。

「最近、連邦軍の奴ら、調子に乗ってきてるよな。」
そこで一旦言葉を切ると、アーノルドは両手を左右に広げ、大仰な格好を取る。

それは天を仰いでいるようだった。

「いつからだ？いつから俺たちは、連邦軍に追われるようになった？いつからサイド^{サイド}3へと逃げ帰らなきゃならなかった？」

そして今度は唐突に立ち上がると、今まで以上に語気を強めて言う。
「防戦に入ったら、ジオンに勝ち目は無い！連邦の圧倒的な国力の前に叩き潰されるだけだ！攻撃には防御側の3倍の戦力が必要と言うが、30対1と言われている国力差なのに、3対1の戦力差が作れないはずがない。」

あまりにも突然のことで、誰かが止める暇さえ無かった。

アーノルドは、ひとしきり言いたい事を言い終えると、それきり黙って何処かへ行ってしまった。

残された2人は、味のしなくなつた食事を早々に切り上げ、アーノルドに声を掛けようとするが……。

目的の人は、何処にも見当たらなかった。

「何処に行つたんだ？」

「分かりません、モビルスーツを離れる訳にはいかないのです、そんなに遠くには探しに行けないですし……。」

「どうしたものか……」

ロウは顎に手を当てて考えるが、アーノルドの行きそうな場所は結局分からない

その上、近辺に無数にある廃墟に隠れられては探しようがない。

「戻ってくるのを待つか。エーリツヒ、整備を続けるぞ。」

「了解」

ロウは、自分の機体である『イフリート』のコクピットに乗り込み、機体のOSを立ち上げて問題箇所を探す。

モニターには、イフリートの全体図が映し出され、その一部が赤く点滅している。

「右足首関節に、右肩部か。応急処置だけでもしておくか。」

ロウはすぐにコクピットハッチを開けて外に出て、損傷の具合を確認しようとして愛機の右肩に飛び移る。

見てみると、砕けた装甲の内側に何箇所か電気系統の断線がみられた。

悪戦苦闘しながらも、修繕を試みるロウ、それで結局15分ほどかかってしまった。

右肩の応急処置を終えて、愛機の肩の上で少し休憩に入るロウ。

彼はそこで少しの間、何も考えずに呆けていると……あることを思いついた。

思いつきが正しいのかどうか、それを確かめようとコクピットに向かう。

コクピットに入ると、すぐに正面のモニターに機体のカメラからの情報を表示させる。

(自分の考えが正しければ……)

ロウは考えながらも機体を操作し、一步前に進めると、視界を動かしてあるものを探す。

そして付近にある高層ビルだった物に目を留め、その頂点にズームをかける。

(やっぱりか……)

ロウは安堵の溜息を洩らすと、自分の見たものが見間違いで無いことを確認する。

先ほど見た光景と変わらずに、確かに『彼』はそこにいた。

それを確認するとロウは、そのビルに向かって機体を発進させる。

足首関節をこれ以上傷めないように気を遣いながら、ゆっくりと機体をビルに進める。

『彼』は機体から発される振動でこちらに気付いたのか、立ち上がってこちらを向く。

「大層な出迎えだな、隊長さん。」

機体に付けられた集音マイクが、彼の言っていることをロウに伝える。外部マイクを入れて、ロウは彼に返答する。

「別にこれで出迎えに来たかった訳じゃない。お前の居る場所に行くにはこっちの方が手っ取り早かったただけだ。」

「まるで俺がここにいることを、最初から知ってたみたいだな。」その言葉に対しロウは、相手には決して見えない苦笑を浮かべながら応える。

「お前ほど分かりやすい人間だったら、そりゃ分かるよ、アーノルド。ナーバスな気分になったら高い場所って、どれだけお約束だと思ってるんだ？」

「だったらもつと早く来い。」

アーノルドは不貞腐れたように、舌打ちの音をコクピット内に響かせる。

3分後

ロウは機体を降りて、アーノルドの隣に座っていた。

「何か見えるか？」

そう尋ねるロウに対し、アーノルドはぶっきらぼうに答える。

「そりゃ何も見えないってことは無い。俺らがこっちに来る時に使った幹線道路とかな。」

「そういうことを言ってるんじゃない。」

ロウは少し語尾を怒らせて言うが、アーノルドは特に反応を示すこともなく視線を一ヶ所に固めている。

ロウはそんなアーノルドに対して、間を持たせる話は不要と断じ、意を決して本題を語り始める。

「なあ、アーノルド。君の、この戦争についての考えを聞かせてくれないか？」

「は？何だよ、藪から棒に。」

アーノルドはこっちを向いて、不思議そうに聞き返す。

「お前がさつき騒いでたことだろう。」

「そうだったけ？俺、都合の悪いことはすぐに忘れる主義だから。」
アーノルドは全く悪びれずに苦笑しながら、のうのうとそんなことを言う。

しばらく経った後、アーノルドが真剣な表情をし、独り言を言うようにロウからの質問に答え始める。

「ジオンは、負けるんじゃないかな。こうなった以上。」

アーノルドは25mほど下にある地面を見ながら、言葉を続ける。

「連邦に対してジオンが優ってる点は、コロニーの自治独立っていう主張の正しさぐらいなモノだ。」

「国力と戦歴では惨敗してるし、国力差を覆すためのモビルスーツというアドバンテージも、もう無い。」

「ジオンの負けは、少なくとも連邦のホームグラウンドである地球^{こゝ}では、決まったようなもんだろ。」

言い終わるとアーノルドは、今日一番大きな溜息を吐き、またもや無表情で遠くを眺めていた。

「お前の主張はよく分かった。」

ロウは、その言葉と共に突然立ち上がり、アーノルドに対して道を示す。

「だったら、負け戦となった地球に、いつまでも留まっていたは駄目だな。」

アーノルドはその言葉に反応し、即座にロウの方に向き直る。

「一刻も早く、宇宙に上がるぞ！」

「……ああ！」

アーノルドの顔に活気が戻り、表情が明るくなる。

彼はそれと同時に立ち上がり、さっきとは真逆の心境で同じ景色を見る。

しかし、それも束の間、すぐに彼の表情は険しいものとなる。

「どうした？」

ロウは訝しげに思って、率直にそう尋ねる。

その問いに対して、最悪の答えが返ってくる。

「敵…、連邦軍だ！」

「は？何処に？」

ロウの眼にはそのような光景は映っておらず、アーノルドの言葉を信じられなかった。

「お前には見えてないのか！？」

アーノルドは真剣そのものな表情で、ロウを怒鳴りつける。

それでロウはアーノルドの言葉を信じる。

「自分には見えないが……、分かった、行こう。」

2人はすぐにロウの愛機イフリートに向かって駆け出し、1人はその掌に、もう1人はコクピットに飛び乗る。

「他の味方部隊が交戦していた、急いでくれ！」

「急がない訳ないだろ！」

ロウは足首関節のことも忘れて機体を走らせながら、エーリツヒに通信を入れる。

通信に選んだ相手も、既にモビルスーツに乗っていたらしく通信は問題なく繋がる。

「エーリツヒ、近くで戦闘が起こってるらしいが、確認できるか。」

「ええ、しかしかなり距離は遠く、こちらにはまだ気づいていないようですので、このままやり過ぎせないかと考えているのですが…。」

「ロウは単純な予測と、若干の希望的観測の混じった言葉を即座に口に出す。」

「無理だな。すぐに合流するから、それから3機で味方の援護に向かう。」

「了解。」

「くっ、連邦軍め！なんでこんな辺境にこれほどの戦力を！」

アーノルドが見つけた部隊の隊長、ケン・ビーダーシュタットは、あまりにも悪い現在の戦況に思わず悪態をつく。

「こちらジェイク、1機処理した。だけど、今日は多すぎるぜ！こっちは全部片付けたから、援護に向かった方が良いか？」

部下の1人がそう伝えてくるが、敵機殲滅の報告にも関わらず、その声は苦々しかった。

その報告を聞いているうちにも、敵機は迫ってくる。

「隊長、後ろだ！」

通信回線から入ってきたその声を聞き、ケンは己の勘に従って機体を左にステップさせる。

直後、さっきまで彼の機体があった場所に、多数の弾痕が刻みつけられる。

「助かった、ガースキー。」

ケンはそう言いつつ後ろを振り返り、迫っていたGMの1機を『ビーム・ナギナタ』で串刺しにする。

「ユウキ、敵機はあと何機だ？」

「正確な数は分かりませんが、少なくとも5機以上はいるようです！」

「くそっ！ジェイク、司令部サムソンの側を離れるな！」

「……分かったよ。」

ジェイクは援護に行けないことが歯痒いらしく、歯切れの悪い返事を返してくる。

「ちっ、弾切れだ！隊長、援護を頼む。」

右のモニターに、ヒートホークを構えて敵機に対峙する僚機のザクが映る。

見ると鏢迫り合いになっており、もはや一刻の猶予も無い状態であった。

そしてその鏢迫り合いから間もなく、敵機のGMがガースキーの乗るザクを蹴り飛ばす。

GMよりパワーの低いザクは、そのまま後ろに、仰向けに倒れてしまう。

作用反作用の法則が働き、GMも後ろ向き力を受けるが、バックパックのブーストを吹かすことでこれを打ち消して、そのまま蹴り倒したザクに迫る。

「ガースキー！」

ケンの叫びも虚しく、ガースキー機に止めの一撃が振り下ろされようとしたとき、

さつきは倒れなかったGMが、突然、仰向けに地面に叩きつけられる。

直後、低く鈍い音が響き、周囲の動きを一瞬止める。

「なんだ？」

ケンは驚きの表情を浮かべたままで、そのGMを見る。

倒れたGMはコクピットのある辺りの場所に、穴が穿たれていた。

ケンはそれを見て、1つの結論に達する。

「狙撃？味方がいるのか？」

狙撃で凍りついた空気の中、一番早く動き出したのは、ガースキーのザクだった。

彼は倒れたままのザクを操り、まずは先程狙撃で撃破された敵機からマシンガンを徴収する。

まだこちらには気付いていない様子の敵部隊、その中の比較的近くにいたGMに、ゆっくりとマシンガンの銃口を向ける。

狙撃に気を取られている敵部隊のGMに、容赦なく銃弾を叩き込む。照準を合わせるのに十分な時間があったためか、致命傷となる位置に正確に命中し、たった1発の銃弾を受けただけでGMはその場に崩れ落ちる。

「残り4機、か。」

言葉こそ相手を値踏みするものだったが、ガースキーの声には疲弊の色が滲み出ていた。

連邦軍部隊は相手が疲弊している今こそ、畳み掛けるべきか。

若しくは予想外の損害を被ったことで、撤退すべきかを迷っていた。しかしどちらの選択をするにしても、その『迷い』は良くなかった。一時的とはいえ、部隊の動きを止め、相手に時間を与えてしまったのである。

「もう少しで味方が来る、それまで何としても持ち堪えるんだ！」

「了解！」

そのやり取りが終わると同時に、止まっていた時間が動き出す。

ガースキーは自機の体勢を立て直すと、すぐさまGM部隊に向けて攻撃を再開。

ケンのゲルググもそれに続き、ビームライフルで応戦する。

GM隊はシールドを構えてガードし、もう片方の手でマシンガンを撃ち、反撃する。

またしてもケン達が数で劣る戦いが始まったかのようだった。

が、その流れはすぐに断ち切られることになる。

ズバシュツッ！

何かが切れる音はその戦場に響くが、そこにいる人間のほとんどが、その音が何を意味するのか、瞬時には理解できなかった。

状況を理解できていない者達にもたらされた情報は、

一刀両断にされたGM

GM1機を一刀両断にしたのと同じ刃、同じ一振りの切っ先に、コクピットを潰されたGM

大振りの剣を持つ1機の見慣れないモビルスーツ

という視覚情報だった。

「真打登場、といったところかな。」

突然、交戦の中にイフリートで割って入ったロウは、コクピット内でそんな独り言を呟く。

そして、愛機に剣を構え直させ、残る2機のGMと対峙する。

しかし残った2機のGMは、ロウの機体がジオン軍の物だと判断すると、足早に撤退してしまう。

連邦軍も、2対3という数的に不利な戦い、さらに相手はスナイパーの援護も受けられるという、勝ち目のあまりにも薄い戦いに、命を散らすような愚かなことはしなかった。

「残弾に余裕があれば追っているのだがな。」

ロウはそう漏らしながら、2機のGMの背中を見送る。

GMの背中が見えなくなったところで、ロウは友軍機に通信を入れる。

「どうやら間に合ったようだな。無事か？負傷などは無いか？」

ケンはやっと状況を理解し、疲れ切った声で何とか返答する。

「ああ、大丈夫だ。援護と気遣いに感謝する。」

その後、自然な流れでケンの部隊であるMS特務遊撃隊と、ロウの率いる独立遊撃MS小隊は合流することとなる。

勿論、指揮官格の人間同士での話し合いも行われる。

ロウはその話し合いに出向くために、こちらの要請を記した書類と共に、指定された場所に向かう。

そこは廃ビルのうちの一部屋で、まだ十分に本来の用途で使えるような、比較的まとまなオフィスのような場所だった。

「失礼します。ローエン・ガルフ中尉、入ります。」

「ああ、入ってくれ。」

そこには3人の人物がいた。

老紳士という表現が似合いそうな、いかにも階級が高そうな髭を蓄

えた指揮官らしき人物。
金色の髪が眩しい、見ただけで有能だと察せられるような、女性秘書官。

それに先ほど交信した、ケン・ビーダーシュタット少尉。
最初に言葉を発したのは、おそらくこの場の最高階級者であろう老紳士だった。

「私は、ダグラス・ローデン大佐だ。察しの通り、MS特務遊撃隊をあずかっている。」
大佐は軽く自己紹介だけを済ますと、すぐに真剣な表情を作って話を切り出す。

「世間話をしに来た訳でもあるまい。早速本題に入ろう。」

「まず君は、我々MS特務遊撃隊が、『外人部隊』と呼ばれていることを知っているかね？」

「外人部隊、ですか。それは、何と言いますか……。」

『外人部隊』 その言葉はロウも聞き覚えがあった。
サイド3以外の出身の人間で構成される部隊で、正規部隊からは低く見られている部隊だ。

報酬目的の傭兵部隊だと噂では聞いていたが、そうではないことをロウは感じ取る。

（新型MSが1機と、ザクが2機か。金の回る部隊にしては装備が貧弱だな。）

もしも報酬が目的ならば、自身の生存を優先する必要がある、つまり装備はできるだけ強化しないといけない。

戦場で死亡しては、稼いだ金額が無駄になってしまうからである。
もっとも、己より家族を優先して、稼いだ金額を全て家族に送っている人間も居るかもしれないが……。

（どっちにしろ、部隊の規模が小さい。大佐の下にもう一小隊ぐらいは配備されていて良いはずだが……）

(ということは、噂はデマか。)

「まあ知つての通り、ジオン軍では日蔭者なので、宇宙への脱出者リストからは漏れてしまつたわけだ。」

大佐は特に感情の起伏を見せずに語つたが、心中ではとても苦しんでいることは察せられた。

「私が、積極的にザビ家にすり寄っていれば、隊員達ももっと早く宇宙へと帰れたかもしれない。」

「それは違つと思ひますが……。」

ロウは即座に否定の言葉を返す。

「大佐がザビ家に近いポジションにいた場合、この部隊の指揮官という職は与えられなかつたはずです。」

(外人部隊は、どうしても居残り組にされるだらうからな……。)

流石にそんな風に事の子細を話すのは躊躇われたので、また、少し指摘すればローデン大佐なら理解してくれると思つたため、適当に言葉を濁す。

「問題なのはジオン軍の体系であつて、大佐の責任ではありませんよ。」

ロウはそう言いきると、しっかりとローデン大佐と目を合わせ、。

「御自分をお責めになりたい気持ちは分かりますが…、何しろ、自分も同じ気持ちを感じたことはありませんから。」

部屋に重い空気が立ち込めていく中、ロウはさらに言葉を続ける。

「部下を救うことができなかつた悲しみと悔しさは、自分も理解しているつもりです。」

沈黙、長い沈黙が場を支配する。

客観的な時間に換算すれば1分に満たない時間だつたが、時間の流れの感じ方は主観で大きく変化する。

テーブルを挟んで対話する2人の士官には、その時間はとても長く感じられた。

ロウは、1分未満の長い沈黙を破つて、また言葉を紡ぐ。

「しかし大佐の下には、導きを必要とする人が大勢いるんです。誰も貴方を恨んだりはしていません。」

「でしたら、大佐の為すべきことは、後悔でも反省でもない……。少なくとも、それ以上に優先すべきことがあるはずです。」

ローデン大佐は、終始無言のままローウの話聞いていた。

が、ローウの話が終わってしばらくした後、突如として腹を抱えて笑い出し、それが治まるところ言った。

「僕も50年生きたが、自分の半分以下の人生しか送つたらん若造に説教されるのは初めてだ。」

しかし楽しそうに笑っていた表情は何処へやら、一転してローデン大佐の表情が曇る。

「逆に言えばこの戦争は、若人にそれだけの負担を強いているということだ。」

ローデン大佐は、この場にいる自分以外の3人を一瞥すると、嘆かわしいといったように大きく溜息をついた。

「現状を嘆いたところでどうしようもありませんよ。それよりも……」

「そうだったな。ま、今となってはさっきの話も意味の無いものだ。」

ローデン大佐はローウが持ってきた書類を取ると、素早く内容を確認する。

「君達の要求は、推進剤の補給か。それぐらいなら受けよう。それに関しては、こちらもそれほど困ってる訳ではないからな。その代わり……。」

ローデン大佐は別の書類を取り出してローウに提示する。

「残っているザク・マシンガンの弾薬全と、食料を一部、ですか。了解です。」

ローウは既に、ザク・マシンガンの使用を諦めていた。

これから補給を受けられるかどうか分からないし、代替装備の調達も今回のことでなんとかできると考えたからだ。

「それともう一つ……。我々と共に来ないか？ バイコヌール宇宙基

地からなら、確実に帰れるぞ。」

「部下と相談しておきます。万が一部下に不満があった場合、ややこしいことになりますから。」

その後、少しの情報交換を経て、2つの部隊の士官達は別れた。

ロウは2人の部下のところに戻ろうとすると、そこにはロウの予想より些か多い人影があった。

「だーかーらー、ガキに触らせる機体なんか、うちの部隊には配備されてねえんだよ！」

アーノルドの怒声が、ロウの耳に大きく響く。

「曹長、止めてください。機体の整備をやるのは僕の仕事なんですから、この人たちの手を借りるかは僕が決めます。」

エーリツヒがアーノルドを諫めようとするが、どうにもアーノルドは止まらない。

何とか止めようとするエーリツヒを助けようとして、ロウは声のする方へ小走りで向かう。

が、人影の数がはつきりと分かる距離になって、ロウはその足を止めてしまう。

ロウが見たのは、行動を共にする部下の2名と整備兵の井出達をした知らぬ男が2名。

それから動き易い格好をしているものの、戦場にはとても似合わないような少女がいた。

「あ、隊長。ちょっと来て下さい。」

ロウが戻ってきたことに気付いたエーリツヒが、助けを求める視線とともに声を掛けてくる。

しかしロウは、見覚えのありすぎる少女に目を奪われ、エーリツヒの言葉など届いていない。

「メイ……。」

気がつくときロウは、その少女の名を呼んでいた。

メイは、自分の名前を呼ぶ懐かしい声に振り向き、そこに予想通り、希望通りの人を見つける。

「ロウ！」

言うが早いのか、彼女はまるで長年待ちわびた恋人にするように、ロウの胸に勢いよく飛び込む。

少しだけ困惑するロウだったが、特にメイを止めるようなことはせずに、彼女の希望通りにさせてやる。

「良かった…、ロウが生きてた！本当に…、良かった。」

メイは、ロウのことを気にする余裕など既に無く、彼の胸に涙で濡れた顔を押しつけるだけだった。

「まったく呑気な連中だ。そうは思わないかクローディア？」

ロウの率いる部隊と外人部隊が陣取る廃墟都市の一角

そこから少し離れたビルから、彼らを観察する人影の1つがそんな問いを発する。

「うん、お兄ちゃん。でもアイツら、ずる賢さだけはあるか…」

不自然なところで、クローディアと呼ばれた少女の言葉が途切れる。それは彼の兄であるクロードが、彼女の喉を掴んで、持ち上げたことに起因する。

「か…ハッ…」

彼女には窒息の時間が刻々と迫るが、兄はそれでも妹を下ろさない。

「うん、じゃないだろうクローディア。こういう時には、『はい、クロード中尉。』と応えろと何度も言ったじゃないか。」

言い終わるとクロードは、やっと妹を地面に投げ捨てるように開放した。

クローディアは窒息しかけていただけあって、苦しそくに咳込んでいたが、クロードは気にせず話を続ける。

「流石に無能な連邦軍では、我々ジオンの作った最新鋭高性能機は荷が重過ぎたか。」

少し間を開けて、クロードは言う。

「外人部隊だの、『上官殺しの死神』なんかが使っていても、流石は高性能機といったところだな。」

クロードの独り言が終わったところ、クローディアはやっと苦しみを乗り越えることができていた。

「しかし、あんな無法者共に使わせて良い物ではない。そうだろ、クローディア。」

「はい、クロード中尉。」

明らかに怯えの色が表れている声が、クロードに同意する。

「だったら、本来使うべき者の手に、我々の下に移さなければならぬ。早急にだ。」

クロードは妹を始めとする他の部下達の方を向き、彼らに隊長としての命令を告げる。

「何としても、我々屍食鬼隊の名に泥を塗った『奴』を始末し、高性能モビルスーツを手に入れるぞ。」

そのクロードの隊員達への命令が、高性能モビルスーツを巡る戦い、その始まりを告げる狼煙となった。

第十七話：決着と決別（前書き）

えっと、今回で《読者に優しくない》というタグの意味を理解していただけたと思います。

今まで一定のペースで書いてたのに、今回は今までの2倍ぐらいの長さになってしまいました。すいません。

誤字脱字も多いかもしれませんが、報告いただけると嬉しいです。

第十七話：決着と決別

宇宙世紀0079 11月16日

シンフェロポリ ジオン軍仮設陣地（廃墟都市） 倉庫内

そこでは、度重なる撤退戦で疲弊していた2つの部隊が合流し、少しでもだけ活気づいていた。

合流当初は『MS特務遊撃隊』の面々は友軍との接触に、少し懸念があった。

これまでに正規のジオン軍と関わった際に、『外人部隊』と呼ばれて不当な扱いを受けたことが多々あったからだ。

そんな経緯があり、合流した後にトラブルが頻発する事態を多くの者が想像したが、

全員で3人しか部隊がおらず、正規軍だということを傘に着ようとしても、数的関係からそれができないであろうという打算。

相手方の部隊長が、外人部隊だろうと正規軍だろうと分け隔てなく接する人物だったこと。

合流してから分かったことだが、そもそも相手方も正規軍とは言い難い部隊だったことなどから合流することになった。

今ではお互いに協力しあって、MSの整備なども行うようになっていた。

そんな場所、一時的ではあるが軍事施設となった場所に、不似合いな声が響く。

「ねえ、ロウ。ロウってば！」

軍事施設には場違いな、年端のゆかぬ少女の声。

戦争という状況では、そのような少年少女が戦場に送られることも多々あるのだが、それにしてもその少女は若すぎた。

「ロウ、ちょっと聞いているの?」

彼女はそのことに気付いていないのか、天真爛漫な声をその場に響かせる。

「ん!?! ああ……どうした? メイ。」

呼ばれていた相手はしばらく気付かなかったようで、慌てた様子で少女に対応する。

「やっぱり話聞いてなかったあー! もういいもん!」

メイと呼ばれた少女は唇を尖らせ、ロウに背を向ける。

「すまない、少し考えることが多くてな。」

真摯に謝るロウの態度を見て、メイはさっきの態度をコロリと変えて、向き直る。

「しょうがないよ。ロウは隊長さんなんだもんね。」

そう言うメイの顔には、溢れんばかりの笑顔が輝いている。

だがその表情は、どこか一抹の寂しさを感じさせた。

本当に微かな表情の変調。ほとんどの者は気付かないであろう変化で、見逃しても責任は無いであろう……

が、心理学に長け、尚且つ目聡いロウは見逃さなかった。尤もそれは、そんな経験よりも直感で判断したことだったが。

その表情の意味するところを理解すると、メイの体を強く抱き寄せ

る。

「ロウ?」

急に抱きしめられたことに驚いて、疑問の声を上げるメイ。

「大丈夫か? なんだか無理しているようだったから。」

回答と疑問が混ざった言葉。メイが疑問の部分に返答しようとする

が……。

「と聞かれれば、大体の人間が大丈夫だと答えるだろうが、こうやって先を制しておいたら、本当の答えを聞かせてくれるかな。と思

ってね。」

その先回りに虚を突かれたメイは、何か言わなくてはと口をパクパクさせている。

そんな彼女に対しロウは、そつと頭を撫でてやる。

「無理は、しないでほしい。心配だから、な。」

「ロウ！」

メイはその言葉を聞いて我慢できなくなったのか、ロウに飛びつくように抱きついた。

先刻のロウよりも、強く、強く。

陣地にある廃ビル内

「ゲルググ、か。凄いなコイツは。」

『MS特務遊撃隊』の保有する新型機、『ゲルググ』の整備を手伝っていたエーリツヒが、思わずそんな声をあげる。

「ビーム兵器標準装備でかなりの火力がある上に、機動性も高い。これなら、連邦の白い悪魔ガンダムにも勝てそうじゃないか。」

エーリツヒは独り言のつもりで言ったが、その言葉に返答が返ってくる。

「そいつはどうか？」

そう返したのは、いつの間にかやって来たアーノルドだった。

「外人部隊の人間にそんな高性能機が使いこなせるものか。そんな高性能機なら、GMが何機いたって敵じゃないだろうに……。」

「馬鹿なこと言ってないで、暇なら整備でも手伝ってください。」

アーノルドの話が長くなるだろうと判断したエーリツヒは、アーノルドの言葉を強引に遮って仕事をするように促す。

アーノルドは面白くなさそうに舌打ちをしてその場を去り、残されたエーリツヒは何事もなかったかのように整備を続ける。

それから数分後、アーノルドと入れ替わるように、1人の人物が現れる。

その人は、このゲルググのパイロット、ケン少尉だった。

先に相手の姿を見つけたケンは、ほとんど関わったことのない初対面にも等しい相手に、どう声を掛けるべきか迷っていた。

対してエーリツヒは整備に没頭しており、こちらに気付く気配は一向に無い。

ケンは、数分の間直立不動で思索した結論として、整備しとの邪魔をする訳にもいかないと考えてその場を後にすることにした。

無論、それはこの場を逃れるための言い訳でもあったのだが……。言い訳を考えた時間は、あっさりと水泡に帰すことになる。

整備に集中していたエーリツヒが、手元に無い工具を取りに外に目を向けた際に、ケンと目が合ってしまったのだ。

「や、やあ」

「ケン少尉、ご苦労様です。」

少しうるたえ気味のケンに対し、エーリツヒは全く動じていない。

突然の対面にも反応が無いことを不思議に思いつつ、ケンはとりあえず礼の1つでも述べようと口を開く。

「機体の整備をしてくれていたのだろうか？邪魔をしてすまない。」

「いえ、気にしていません。こちらこそ、勝手に機体を触ったことを謝罪します。」

あまり変調のない、感情の薄い声で話すエーリツヒ。

ケンはその会話で、エーリツヒが感情の薄い人間なのだと理解する。(さつき、突然顔を合わせた時も、全然驚かなかつたしな。)

そんなことを思いつつ、それでも沈黙は気まずいと考え、この場を離れるのも逃げるようで相手に失礼だと思い、何か話題を供すべく再び口を開く。

「そういえば、君達の隊長は俺たちが『外人部隊』だと知っても、顔色一つ変えなかつたな。」

ケンはエーリツヒに向けて話しかけたつもりなのだが、エーリツヒは黙々と作業を続けており、聞こえているのかどうかも疑わしくなるほどだった。

「何か、そのことについて知らないか？」

やはり反応が返ってくることはなく、ケンの声が虚しくビル内に響く。

ケンはこれ以上話していても無駄だと判断し、その場を立ち去ろうとした時だった。

「隊長の理由は知りませんが、僕の理由で良ければ。」

それから彼は、整備作業を中断して自分の理由について語り始めた。「最近思い出したことなんですが、僕もいわゆる『外人』なんですよ。」

「思い出した？」

自分も外人であるという出自より、そちらの方が気になったケンは、素直に疑問の声をあげる。

「最近まで、記憶喪失だったんです。子どもの頃のことかどうしても思い出せなくて……。」

明らかに作り笑いだと分かる薄い笑顔を、顔に張り付けて言った。「思い出せない頃はずっと気になってて、どうしても知りたかったのに。」

あまり表情は変わっていないはずなのに、どこか悲しそうな笑顔を湛えているエーリツヒ。

「知ってしまったら、知らなかった頃の自分が羨ましくなりましたよ。」

ケンは咄嗟に

「辛い過去なら、無理に言うな。」

と言ってエーリツヒを止めようとしたが、その言葉は逆に、彼に過去を語る決意を固めさせてしまった。

「いえ、言わせてください。聞いてもらわなくても結構ですから。エーリツヒはケンが見た中で、一番強い感情を見せていた。」

最早彼を止めることはできないだろうと確信したケンは、何も言わなかった。

「聞きたくなければ、ここから立ち去ることをお勧めします。」

ケンはその言葉を聞いて立ち去るところか、エーリツヒの方に向き直って視線を固定する。

「僕は、サイド6の施設の出身なんですよ……」

同刻

シンフェロポリ郊外のゴーストタウン

「奴らはまだ、あの場所から動いていないようだな。」

屍食鬼隊^{グール}を率いる隊長、クロード中尉は、不敵な笑みを浮かべながら言う。

「そのようです、クロード中尉。彼らはMSの整備に手間取っている模様です。」

クロード中尉の実妹であるクローディア少尉は、畏敬の念を意図せずに入れて、そう報告する。

「どうしたんだいクローディア。僕達は実の兄妹じゃないか。どうしてそんな他人行儀なんだい？」

クローディアはその質問には答えずに、体はクロードに向けたまま俯いてしまう。

その様子を見てクロードは、「まあいい」とだけ言って、腕を組んで黙りこんでしまった。

しばらく黙って、何かを考え込んでいたクロードだったが、突然立ち上がって早々にどこかへ向かおうとする。

「どこに行くんですか、クロード中尉？」

クローディアのその言葉に、クロードは立ち止った。止めてしまった。

クローディアは兄を引き止めたことをひどく後悔したが、クロードはそんな妹の様子にすら構っていられないといった風に、短い返事を返すだけだった。

「MSを整備させている連中のところだ。」

クロードはMSの置場所に向かって急いでおり、クローディアも雰囲気を押されてついて行っていた。

（お兄ちゃんは、どうしてあんなに急いでいるんだろう。）
内心そう思っている、聞くことができない。

今のような状態のクロードに話しかけるのは、非常な危険を伴うからだ。

先程は運が良かっただけで、本来ならば先日のように絞め上げられてもおかしくない。

クローディアはそう理解していたし、実際その通りだった。

しかし、目的地に向かう道すがらにすれ違った、クロードの状態を察することのできなかった哀れな隊員が、クロードに声を掛ける。

「あ、クロード中尉。」

クロードに声を掛けた隊員は、1秒足らずで首を掴まれて、背中を壁に叩きつけられる。

「グアツ」と、短い呻き声をあげ、何が起こったか理解できていないように目を瞬かせる隊員。

そんなことには一切構わずに、クロードは自身の苛立ちをぶつける。「私は今、非常に機嫌が悪い。それぐらいのこと、見ただけで察してほしいものだ。」

そう言いながらクロードは、首を掴む右手に徐々に力を込め始める。

「そんなことも分からないような無能は、わが屍食鬼隊^{ゲール}には必要ないと思うのだがどうか？」

「ず…いませ…、…かし、どう…して…も、伝え…。」
首を絞められ、呼吸困難となった喉で、何とか言葉を伝えようとする隊員。

「ほう…、…なんだ？言ってみる。」
そう言いながらも首を絞める力は緩めずに、話すための力さえ徐々に奪っていく。

その力が完全に失われる時が、彼にとってのタイムリミットである。

彼がそれを理解しているのかは分からないが、それでも彼は伝えようとしていたことを話し始める。

「モビ…スー……の整…が、完了し……。」

そこまで言ったところで、彼は突然床に放り出される。朦朧とした意識の彼と、クローディアが見たモノは

口元を大きく歪ませたクローディアの姿だった。

「そういう大事なことは、もっと早く言い給え。」

それからクローディアの決断は早かった。

彼は、自らの頭の中で描いた作戦を実行に移すべく、クローディアに指示を出す。

「クローディア、パイロットを集める。出撃する。それと」

突然、自分の名前を呼ばれたことにビクリと肩を震わせるクローディア。

彼女に背を向けて話すクローディアは、それに気付かず、また気付いていたとしても無視したであろう。

彼にとって、妹の都合などは取るに足らないことなのだ。

そして彼は、もう一つ重要な指示を出す。

「例の情報も、『彼ら』に忘れずに伝えておいてくれ。」

その有無を言わさぬ迫力を伴った言葉にクローディアは、「了解。」と短く答えることしかできなかった。

時は少し流れ

ゴーストタウン内にある倉庫群

パン、パン

そんな乾いた音の音源が、屋根の破れた大部屋に何度かの破壊を引き起こす。

「ガウアッ、グッ……。」

そして、その破壊の被害を被った者がまた1人、目覚めることの無い眠りに就く。

「なんで…、約束が違っじゃないか!」

破壊の最後の標的になるであろう人物が、悲鳴のような、懇願とも非難ともとれる言葉を投げる。

「約束したのは、私ではないからな。私が守るべき約束など、君との間には存在しない。」

懇願の言葉を投げられた相手は、無慈悲にもそれを払いのけて、お返しをするべく手に握った物を使用する。

再び先ほどと同じような音が響き、そして、一時的に一切の音がなくなる。

その静寂を破ったのは、最後の音を作った人物だった。

「アースノイドはやはり情弱だな。少し拷問をした後で『命を助けてやる』と言えば、誰にでも尻尾を振るのだからな。」

彼は目の前に転がる数人の作業着姿の死体を見る。

「ま、我々の機体が整備できただけでも、『道具』としては十分か。」

作業着姿の元人間達は、もともと今立っている者たちとは敵対関係にあった地球連邦軍の者たちだった。

しかし運の悪いことに、今立っている者たち、『屍食鬼隊』に捕虜として捕らえられてしまったのだ。

運の悪い、とは、彼らには常識というものが全く通用しなかったことである。

結果、脅迫と拷問を経て、強制労働（MSの整備）をさせられることになった。

MSと言っても、彼らが所属していた地球連邦軍の機体と、ジオン公国軍の機体では勝手が違った。

そのことで悪戦苦闘しながらも、生きるために必死に作業をこなしたのだった。

MSを奪うことも考えたが、流石に彼らはそんな隙を与えることは

なかった。

そして、現在の状況が、事の顛末であった。

そんなことには全く興味が無い屍食鬼隊の隊長、クロードは、未だ銃口から煙の漏れている拳銃をしまつて整備の終わった機体へと歩みを進める。

「さて、完全に直ったかな？私のイフリートは。」
そうやって彼は、自分の機体へと乗り込む。

コクピットに入り、手元にある数々のコンソールを慣れた手つきでいじっていく。

「推進システム、火器管制、問題なし。ジェネレーター出力配分通常通り。ジャミングシステム正常稼働。アースノイドにしては良くやったものだ。」

クロードは機体の状態が良いことに満足し、次に確認することがあったので、通信装置の調子の確認がてら僚機に通信を入れる。

「クロードディア、そっちのドムはどうだ。」

「いい調子だよ、おにい…！問題ありません、クロード中尉。」

クロードディアはMSに乗れたことが嬉しくて、つい素の自分が出てしまったのだらう。

クロードはそれを理解していながら、妹の失言を後で追及することを決め、もう1機の僚機にも機体の状態を尋ねる。

「こつちも問題ありません。」

その感情が最低限に抑えられた声を聞いて、クロードは準備を全て終え、これからの事を想像して顔を綻ばせる。

それは決して無邪気な笑顔ではなく、邪気や悪意の類をそのまま顔面に貼り付けたような笑みだった。

「さてと、我が軍の新型機、ゲルググとイフリートを返してもらいに行くか。2,3番機、私に続け！」

屍食鬼の魔の手が迫っていることを、ロウ達は知る由もなかった。

再び

シンフェロポリ ジオン軍仮設陣地（廃墟都市）

「リーダーに反応あり。敵MS部隊です！」

MS特務遊撃隊のオペレーター、ユウキ伍長の声が隊舎内に響く。その一言で隊舎内は静まり返り、続いて指揮官であるダグラス大佐が動き始める。

「敵の戦力は？」

「数は4機。GMタイプが2機と量産型のガンダムタイプが1機。それと、ガンダムに酷似した機体が1機です。」
それからの大佐の指示は、迅速で、的確だった。

「総員、第一級戦闘準備。哨戒に出ているジノビエフ曹長とガンス軍曹に応戦させる。我々は撤退行動に入る。」

「了解です。ガースキー曹長、ジエイク軍曹聞こえますか？……」

『総員第一級戦闘配備。非戦闘要員は撤退行動に入ってください。繰り返します、総員……』

その言葉は陣地にいる多くの者の耳に届き、一瞬で陣地内を慌ただしくさせる。

たとえば廃ビル内

「ケン少尉、ゲルググの整備は終わってます！僕もザクで出ますから。御武運を！」

「お互いな！」

エーリツヒは自分のザク？の置いてある場所に向かい、ケンはそのままゲルググに乗り込もうとした。

だが……。

あるいはとある倉庫で

「メイ、イフリートは出せるのか？」

「勿論だよ！結構苦勞させられたけど、ちゃんと直したよ。ロウの為に。」

「ありがとう、流石はメイだ。」

そう言うとロウは、メイを抱きしめる。それから頭を撫でてやってから、自分のMSに向かう。

「ロウ、ちゃんと帰ってきてよ。」

心配そうに呟かれたその言葉は、イフリートの歩行音に掻き消され、ロウに届くことはなかった。

そして、非戦闘員の多く集まる指揮所にほど近い開けた一角

「俺のザクは出れるのかよ？」

連邦軍の機体から奪ったマシンガン^{シム}を装備した愛機を見て、不安そうに呟くアーノルド。

その疑問に答えたのは、MS特務遊撃隊所属の若い女性だった。

「射撃ソフトは改善済み、機体整備はできる範囲でやらせてもらいました。戦闘は可能です。」

「そんなこと言われてもなあ。」

なおも出撃を渋るアーノルドに対し、その女性は凄味を効かせて説得しようとする。

「我が隊のメカニック達に御不満でも？」

「いえ、そういう訳じゃ……。」

彼女はしびれを切らしたのか、ついにとんでもない発言をした。

「分かりました、軍曹はここで休んでいて。でも今は機体を遊ばせておける状況じゃないから、私が出撃します。」

「冗談キツイすよ、秘書官様。」

アーノルドはその言葉を冗談と受け取り、彼女がMSに乗り込むためのワイヤーに足を掛けても止めなかった。

「軍曹は知らないかもしれないけど、秘書官にはMS操縦の課程も課されているのよ。」
アーノルドがその言葉を聞いて、彼女が本気だと理解した時には、既に彼の愛機は発進していた。

「各機へ、ミノフスキー粒子は確認されていません。レーダーが使用可能ですが、それは敵も同様なので、いつも以上に位置関係に注意してください。」

MS特務遊撃隊のオペレーター、ユウキ・ナカサト伍長の指示が各機に伝えられる。

「了解。」という声が幾つも返ってくるが、ユウキはその声に違和感を感じた。

聞き慣れない声が2つほど混じっていたのは、恐らく合流した友軍だろうと納得できたが、どこかで聞いたような女性の声が含まれていたこと。

合流した部隊には女性はいなかったし、自分の所属する隊にも女性のパイロットはいなかったはずだ。

しかし、その違和感よりも強烈に頭に焼きついたのは、自分達の隊長の声が含まれていなかったことだ。

数分前

廃ビル内

そこに1機のMSが、人間を右手に乗せて現れた。

ザクやドムの類ではなく、ゲルググでもないその機体。その場に居合わせたエーリツヒには、見知った機体だった。

「イフリート……、誰の機体だ？」

彼の知っているイフリオートのパイロットは、ローエン・ガルフただ1人。

だが、現在彼の前にあるのは、彼の知らないイフリートだった。形状からイフリートタイプの機体だと分かるが、ロウの機体とは異なり、夜に紛れるような色で塗装されたその機体。

全身の様々な箇所に、小さな銀色の刃を装備したそれは、右手をケンのゲルググのコクピットに近づける。

そこから機体の手に乗っていた人間が、コクピットに飛び移り、ゲルググに乗り込んだ。

「なっ……!!」

「奪われた!? 友軍じゃないのか?!」

その問いに答えが返ってくることはなく、まずイフリートがケン達を一瞥して去っていき、ゲルググがそれを慌てて追っていた。

そして、時は元の時間となり、ユウキが異常に気付いた頃。

「クロード中尉、良かったのですか？ 奴らを生かしておいて。」

クロードの乗るイフリートに、奪ったゲルググから通信が入る。

「構わんさ。後始末は連邦軍がやってくれるだろう。それよりも、

我々にはもつと重要な任務がある。」

「ゲルググ以上に重要な任務ですか？」

「そうだ。」

クロードは間髪いれずにそう答え、決意の固さを見せる。

「我々、屍食鬼隊ゲルの沽券ゲルに関わる問題だ。絶対に処理しておかなければならない。」

ゲルググに乗る彼は、通信越しに見える彼の表情を見て思う。

(これは、絶対に私怨が入っているな……。)

その思いは心に押しとどめ、今はただ『奪還』したゲルググを味方との合流地点に向かわせる。

「隊長、ケン隊長！応答してください！」

ユウキはゲルググに向かって必死で呼びかけるが、一向に呼びかけに応じる気配はない。

「無駄でしょう、ユウキ伍長。ゲルググがどうなっているかは、私
が確認します。」

その科白を発するのは、先程も聞いた女の人の声。ユウキはその正
体に、はたと思い当たってその推測を口に出してみる。

「コンティ大尉？」

「そうよ。とにかく、ゲルググは私に任せて。」

「りよ、了解です。」

同じ頃

シンフェロポリ北西部

ガースキーとジェイクは、敵MSに苦戦していた。

いつもならば、連邦軍のMS部隊相手に手こずることなど滅多にな
い2人だが、今回はいつもと違った。

「クソツ、後退する。性能でも劣っているし、腕も連邦軍にしちゃ
悪くない。分が悪いのは確かだ。戻るぞ、ジェイク。」

苦虫を噛み潰すように紡がれたガースキーの言葉。

ジェイクは不本意ながらも、現在の状況では致し方ないといった感
じでガースキーに続いて後退する。

一時撤退を決意した2人に対し、ユウキから朗報がもたらされる。

「ガルフ中尉が、後退を支援してくれるそうです。」

しかしその報せも、追ってくる強力な敵機を目前にした2人には、
あまり良い報せに聞こえない。

「あんな若造、頼りになるのかよ？」

そう話してる間にも、敵機は距離を詰めてくる。

敵機はGMとそう変わらない機体のはずだが、その機動力はGMと
比較してだいぶ速いような錯覚に囚われる。

「追い付かれる！」

ジェイクのザクはマシンガンで迎撃しようとするが、それに迫るGMは高い機動力とパイロットの技術で全ての弾を回避し、ジェイク機に肉薄する。

そして、ザクの右腕を、持っていたマシンガンごとビームサーベルで切り落とした。

「ジェイク！」

ガースキー機がそのGMをマシンガンで撃つが、GMは後方に大きく跳躍、やはり全弾を回避する。

「ジェイク、脱出しろ！」

ジェイクに脱出を勧めるガースキーだったが、ジェイクはそれを無視して残った左腕にヒートホークを持たせて、敵機に対峙する。

「1人では相手しきれない！せめて、中尉殿が到着するまで……。」

「もう着いてる。」

その声と共に、数発の弾丸が敵機の近くに着弾し、敵は近くにある建造物の陰に隠れる。

「大丈夫か？」

その問いに、ジェイクは多少不機嫌な声で返す。

「大丈夫に見えるのかよ？」

「声から判断してパイロットは無事そうだな。だったら、自分と曹長あのGMを撃破するから、その間に撤退してくれ。」

「勝手に決め……。」

ジェイクが何か文句を言いかけたところで、先ほどのGMが再度攻撃にかかってきた。

ロウは、すぐに応戦、撃破すべく機体を相対させる。

そして腰部からビームダガーを2本抜き、敵機に接近する。

相手もビームサーベルで応戦するが、ロウのイフリートは一撃目を回避すると片方のビームダガーで相手のビームサーベルを抑え込み、そのままもう一方のダガーで突き刺そうとする。

敵のGMは間一髪でビームサーベルを捨て、後ろに跳んでその突き

を回避する。

ロウはすかさず後退するGMに、頭部のバルカンで追い打ちをかける。

ガースキー機もその追い打ちに合わせるように、ザクマシンガンで敵機を撃つ。

ガースキーはその攻撃で敵機を撃破できるとは思っていなかったが、放たれたザクマシンガンの弾丸は敵機に吸い込まれるように命中、その装甲を貫通し、GMを撃破した。

そのことを最初に疑問に思ったのは、勿論ガースキーだった。

「あれ？GMの装甲ってもっと硬かったような……。」

「当たり所が悪かったんじゃないのか。」

そんなことを考えている暇などないともいうように、ユウキからすぐに戦闘を再開しなければならぬことが知らされる。

『敵の増援を確認。GMタイプが2機です。』

続けてロウ達の前に現れた2機のGMは、先ほど撃破したGMと比べ、明らかに劣る相手であった。

GMが1機、ロウのイフリートに対してマシンガンを乱射しながら突進してくる。

その行動は非常に稚拙であり、ロウがマシンガンを回避するのに合わせて、片腕の無いジェイクのザクが後ろに回り込むと、GMは全く対応できずにその身にヒートホークを喰らって崩れ落ちた。

相方があまりにも呆気なく撃破されたことで、もう1機のGMは戦闘を行わずに撤退しようとする。

「逃がすか！」

片腕を失ったザクで、敵機を追撃しようとするジェイク。すかさずロウが「深追いはするな！」と言って制止する。

「なんでだよ！？他の部隊と合流されたら厄介だろ！」

ジェイクは深く考えることをせずに、ロウに反抗する。

そんなジェイクに対してロウは、努めて穏やかな口調で諭そうとす

る。

「よく考える。数で劣る我々が、敵方に有利になるような戦場へ行ってまで墜すべき相手か？」

ジェイクは、信頼を寄せる先輩、ガースキーに意見を求めるが、ガースキーはただ無言で頷くだけだった。

ガースキーの返答の意味と、自分が冷静な判断を欠いていることを理解したジェイクは、ただ一言。

「分かったよ、アンタの指示に従う。」

その言葉を聞いて、ロウは少し安心したようで、軽く溜息を吐く。しかしそれも束の間、次のユウキの報告で空気は一変することとなる。

『ガンダムタイプのMSが接近中！GMを連れて向かってきます！』
ロウはその報告に対して、しばし考えた後に、返答する。

「了解した。司令部付近を通り、コンティ大尉達と合流する。」

沈黙が、正確には凍りついた空気が、通信で繋がれた者達の間を支配する。

その沈黙も含めて、全てを予想していたのはロウだけだった。

シンフェロポリ東部 屍食鬼隊集合地点^{ゲール}

そこには、屍食鬼隊の戦力のほとんどが結集していた。

隊長のクロードが駆るイフリートに、先ほど奪取したゲルググ。待機していたドムが2機。

しかしかなりの戦力を保有する部隊である彼らは、全く動きを見せない。

近くで友軍が苦戦しているにも関わらず、全く動かなかった。

「戦況はどうなってる？」

隊長のクロード中尉は淡々とした言葉で、誰ともなく尋ねる。

「連邦側のMSが1機撃破されたそうです。それに伴い、連邦軍は

2機のMSを増援に出したみたいです。」

「そうか。ならば、まだ動くべきではないな。どちらかが全滅したら伝える。」

そう言つて視線を自分の機体に移し、その顔に笑顔を貼り付ける。

(やはり私のイフリートは良い、他の機体とは違う。)

「中尉、クロード中尉!」

その声で思考を中断させられ、不愉快になつた彼は、あからさまに眉を顰めて「なんだ?」とただ一言。

彼を呼んだ隊員は、その表情に怯みながらも報告を行う。

「ザクが2機、接近してきます。恐らく、我々のゲルググを追つてきたものだと思います。」

「チツ、面倒な。」

クロードは軽く舌打ちをすると、自分の機体に乗り込むべく、ワイヤーに足をかける。

コクピットに乗り込み、MSを起動すると突然、前面モニター中央に小さく表示された文字が目がいく。

《LOCK ON WARNING!》

という赤い文字が点滅しており、緊急性が高いことを示していた。

クロードがその表示を見て間もなく、どこからか通信が入る。

彼は、恐らくは自分の機体をロックオンしている相手だろうと踏み、その通信を受けることにする。

その予想は的中していたが、同時にクロードにとっては予想外の相手であつた。

「ジェーン・コンティ……!」

「久しいわね、クロード。」

ジェーンの親しげな言葉とは裏腹に、その言動には氷のような冷たさが込められていた。

まるで、二度と会いたくなかつた相手に会ってしまったような……、そんな冷たさだつた。

そしてジェーンは、それが間違いではないということを実証するかのように、少しでも早く話を終わらせたいといった感じで、言葉を紡ぐ。

「単刀直入に言うわ。ゲルググを返しなさい。」

「断る。我々に何のメリットがある？……」

ジェーンとクロードが剣呑とした交渉(?)を続けている間、ジェーンに同行し、そのまま周辺警戒にあたることになったエーリツヒのザク1。

その機体のコクピット内では、また別の会話が繰り広げられていた。「司令部の近くを通るだど？味方を、俺達の仲間を危険に曝す気か！？」

『作戦のうちだ。実際、そうするのが作戦上、最も都合が良い。』
通信機越しのロウと口論をしているのは、エーリツヒ、ではなく彼のザクに同乗しているケンだった。

『ロウ君、準備は整った。我々はジェイク軍曹に護衛に就いてもらい、撤退する。』

「ダグラス大佐！？どういう……」

『我々は先に撤退する。これからは情報支援の無い戦闘となる。だが、必ず生き残れ。』

ケンの言葉を強引に遮って続けるダグラス大佐。

『いいか、よく聞けケン少尉。恐らくロウ君は彼らを巻き込んで乱戦に持ち込むつもりだ。』

「彼らって？」

「屍食鬼隊です。」

同乗していたエーリツヒも、ロウの意図を読んだのか、ケンの誰ともない問いかけに即答する。

「彼らはもはや人間ですらない、本当の屍食鬼^{ゲール}です。彼らの被害など気にする必要はない。」

ケンはさつき接した時には少しも感じなかった残酷さを、エーリツヒの中に感じ取る。

そして、ケンは見てしまった。その時のエーリツヒの目を。何の感情の色も無い、無機物のような瞳を。

「その言葉は、君が思い出した過去が言わせているのか？」

ケンは咄嗟にそんなことを聞いてしまい、自分の迂闊な発言を後悔する。

しかし、ケンの思いとは裏腹に、エーリツヒは嫌な顔をすることも無く、ケンに視線を移すことすらせずに答える。

それが怒っているということではないというのは、次に発せられた言葉の調子で判断できた。

「そうですね。正確に言えば、その中に含まれる彼らの情報です。現在の彼らを含めてね。」

まるで世間話の一環のような調子で紡がれる、重い問いに対する返答。

彼の言葉は、先ほどの見た彼の瞳と共に、ケンに1つの想像を抱かせる。

(コイツ、もしかしてもう感情というものが無いのかもしれない。) ケンが、その想像のほぼ10割が正解だということに気付くことなく、もう1つの疑問を口にする。

「現在の彼ら、とは？」

「新型機を、多く手中に収めているということですよ。イフリートタイプにゲルググ、ドムだって実験に使える機体は多い方が良い。」

『その通りだ。先日、連邦軍のMSによる大部隊と戦闘になったのも、恐らくは我々がゲルググを保有していたからだろう。』

「だから……、彼らが屍食鬼隊であり、新型機を持っているからこそ、問題なくこの作戦が実行できるんです。」

シンフェロポリ中央部

入り組んだ市街地を、ロウのイフリートとガースキーのザクが疾走する。

それを追いながら攻撃を加えるのは、やはり2機のMS。

追う側のMSは黒いガンダムタイプのMSと、オレンジを基調とするカラーリングのGMタイプの機体で、どちらも機動力の高い機体だった。

イフリートは彼らの機体に引けを取らない機動力を持っていたが、この時期には旧式と化していたガースキーのザクは、今にも追い付かれそうになっていた。

そして、万が一追い付かれた場合に援護ができるように、ロウもガースキー機と一定以上距離が開かないように動いていた。

そんな中ガースキーが口を開き、諦観と覚悟の籠った口調でロウに言う。

「中尉さんよ。俺に構わずに……アンタの機体だけならもっと速く逃げれるはずだ。」

ロウはその声を聞いて反射的に言い返しそうになったが、彼の頭の中に別の思考が浮かび、その声を押し止める。

（自分だけで逃げる？ 奴らの狙いが新型機の確保だったら、その方が良いか。）

「分かった、二手に分かれよう。援護するから、その間に別の方向に逃げる。」

それからロウは、その問いに対する答えも聞かずに、機体を反転させて敵機の方を向かせる。

連邦軍のMS部隊との戦闘が開始されるのは、ロウのイフリートが反転するのとはほぼ同時だった。

一条の閃光がイフリートの少し右に落ちる。ロウにとっては幸運な

ことに、敵の初弾は外れたようだ。

ロウは反撃にイフリートの右手にあるマシンガンで敵機を撃つ。追ってきた敵機が2機とも同じ方向にいたため、自然と両方の機体が、それぞれの反応を示す。

GMタイプの機体はシールドを持っていなかったため、近くのビルに隠れ、ガンダムはイフリートの放つ銃弾をシールドで防ぎつつも、前進する。

イフリートは背中からヒートサーベルを左手で取りだし、近づいてくる相手ガンダムに応えるように自らも距離を詰める。

横薙ぎにヒートサーベルが振るわれ、ガンダムの持っていたシールドが一刀両断にされる。

そしてそのことに対する返礼として、ガンダムの右手にあった物が、イフリートの左腕を吹き飛ばすべく光を灯す。

ヒートサーベルを持った左手が、その銃身を僅かに持ち上げて、銃身が本来の狙いから微妙に外れる。

それでもその銃から発射されたビームは、イフリートの肩を翳めて、その部分の装甲を溶かす。

イフリートは、負けじと肩へのダメージを与えたビームライフルを、ヒートサーベルで振り払う。

敵機の射撃武装を破壊したことを確認すると、イフリートはすぐに後ろに跳び退く。

そしてガンダムへの牽制射と共に後退を続けるが、突然、イフリートに対して右斜め前方から攻撃が加えられる。

ビームによるその攻撃は運悪くマシンガンに当たり、その銃口付近を溶かして、使い物にならない状態にした。

「クツ……。こんな物、どうせ連邦軍製なんて、大して使えた物じゃない！」

ロウはそう言って、先ほどからこちらに向かってビームを撃ち続けるGMを一瞥し、そのメインカメラを目掛けて、マシンガンだった物を投げつける。

GMは右腕で投げられた物からメインカメラを守る。

「確かに返したぞ。それから！」

ロウは、自らの腕で視界を覆うGMに、更に左手に持つ得物も投げつける。

それはGMの下半身部分に直撃し、一足歩行を完全に不可能にさせた。

「そいつは利子だ。受け取っておけ。」

再び

シンフェロポリ東部 屍食鬼隊集合地点^{ケール}

「連邦軍のMS。コンティ大尉、来ました！」

エーリツヒの発した言葉が、その場所での状況を一変させる。

「計画通りね。」

ジエーンはその言葉に、クロードとの舌戦を強制終了し、エーリツヒの機体を引き連れて市街地の中央へと向かう。

それを見てクロードは、大きく顔を歪ませる。

「連邦軍を利用して、我々にぶつけようというのか。愚か者の考えそんなことだ。しかし……」

クロードの考えは一瞬で纏まり、この付近にいる自分たち以外を一掃すべく、部下に指示を出す。

「向かってくるMSは1機だけか。クローディア、ミハエルを連れてあのMSを撃破しろ。」

「了解です、クロード中尉。」

「私とリックは、『敵前逃亡者』共を始末してくる。行くぞ、リック軍曹。」

「了解。」

屍食鬼隊のパイロット達は、そのクロードの言葉に従って、それぞれの役割を果たそうと行動を開始する。

クロードの乗るイフリートはゲルググを連れて、この場を去った2機のザクを追う。

残された2機のドムは、向かってくる連邦軍の機体を迎撃すべく動き出していた。

シンフェロポリの中心に向かう2機のザク、その背後を追うゲルググとイフリート。

その機動力の差は大きく開いており、追逃劇が始まった時点での距離の差が完全に埋まるのも、時間の問題だろう。

今にも敵に追いつかれそうなザク？、そのパイロットであるエーリツヒは、背後に存在する危機的な状況を知りつつも、至極落ち着いていた。

否、完全に感情を失っていた。

「隊長、そちらの首尾はどうですか？」

後ろの危機に全く動じることなく、ロウのイフリートに通信を入れるエーリツヒ。

『問題ない。お客さんの案内は任せておけ。』

それに応じるロウは、対照的に少し楽しそうだった。

エーリツヒはそのような良い返事をもらっても、「そうですね。」と無感情に答えるだけだった。

「ケン少尉、そろそろやりますよ。」

突然、脈絡もなくそんなことを言うエーリツヒに、ケンは戸惑うだけだった。

「何をするんだ？」

疑問に思っでごく当然のことを、ケンは問い

そして返ってきたのは、とんでもない答えだった。

「ゲルググを、奪い返します。」

「よし、そのままついてこいよ、ガンダム。」

ロウは、他に誰もいないイフリートのコクピットで、相手に届くことのない言葉を呟く。

「合流予定地点まで、もう少し。いける。」

1人なのに、いつもの戦闘より口数が多いロウ。それは、ガンダムという強大な敵を目の前にした恐怖からなのか。

いつものロウならそんなことも考えるのだが、それすらも忘れて、今はただ計画を成功させることに集中する。

そして……彼のイフリートが、目的地に到着する。

「ここにも、連邦軍か。」

クロードが苦々しい声で呟く。

彼の眼に映っているのは、1機のMS。

「クロード中尉、あ、あれは…ガンダム……！」

「うるたえるな。ガンダムといえども単機だ。」

ゲルググを操る部下を叱責し、自身は自機のカメラを操作して周辺を見回し、情報を集める。

そこには彼らの追ってきたザクが2機とガンダム、そして……

「見つけたぞ、《死神》ローエン・ガルフ！」

彼にとつての仇敵であるロウの乗機、もう1機のイフリートがあった。

「リック、お前はザク1とガンダムを相手しておけ。戻るまでにザクも破壊できていないようなら……」

クロードは、その先の言葉を言わない。

だが、それで充分だった。

ゲルググの右手のビームライフルが動き、銃口をエーリツヒの乗るザク1に合わせたのだ。

エーリツヒのザクはそれより一瞬早く射線から離れ、何も無い場所をビームが通過する。

それが、乱戦の始まるきっかけだった。

次に動き出したのは、クロードのイフリートだった。

イフリートは、体の各部に備え付けられた小さな銀色の刃を右手に、刃を意識して作られたと思われる大ぶりな得物を左手に取らせ、ジエーンに乗るザクへと迫る。

格闘戦用の武装を装備していないジエーンのザクは、イフリートの接近を妨害するためにマシンガンを撃つ。

しかし、ジエーンが撃った弾の多くは回避され、命中した弾もイフリートの装甲に軽い傷をつけるだけだった。

結果、イフリートは速度を緩めることなく、簡単にザクの懐に入った。

「大尉！」

ロウが叫ぶのも空しく、金属の擦れる音が響き、ザクの右腕が切り落とされる。

切り落とされた腕が地面に落ちるとほぼ同時に、ジエーンのザクは後ろに下がる。

「逃がさん。」

クロードは怨嗟を込めた口調で言い、その後を追って執拗に攻撃を繰り返す。

「ツツ！これ以上は……！」

MS特務遊撃隊で最も腕の立つパイロットであるジエーン・コンテイ大尉にも、ザクとイフリートの性能差を埋めるのは流石に無理だったようだ。

右肩に装備された大型レーダードームは破損し、次に左脚部が破壊

される。

その破壊の手がコクピットに迫ろうとした時、ジェーンは残った推力でイフリートに対し、前のめりに倒れるように突撃する。

「こんのお！」

その行動がクロードの逆鱗に触れ、右手の刃で開いているコクピットを刺し貫く。

「なっ!？」

当然、既に刃が貫いた場所には、ジェーンの姿はなかった。

クロードは憎きジェーンを仕留め損なったことを悟ると、すぐに機体を飛翔させる。

イフリートが飛翔のために蹴った場所を、ザクマシンガンの弾丸が通り抜ける。

それに触発されて、今まで部外者扱いだったガンダムも動きだす。手にしていたビームガンで、何を思ったのか、今まで全く関わらなかったゲルググを撃つ。

当然、ゲルググはそれを回避し、反撃にビームを撃つ。

ガンダムのパイロットも予想していたのか、素早く反応してサイドステップで回避する。

(ゲルググの注意が逸れた。今だ！)

ガンダムとゲルググが1発ずつ撃ち合つてすぐに、エーリツヒのザクは市街地の更に奥に向かう。

その動きに、その場の全員が気を取られる。

最初に動きだしたのは、ゲルググだった。ゲルググは少し反応が遅れ、2秒ほど間をおいた後、思い出したようにザクを追い始める。いや、実際に彼は『クロードの命令』を思い出したからこそ、ザクを追ったのだ。

この状況では、少しでも戦力を集中して動いた方が良い。故にクロードと共に行動するべき。

そんな常識のような判断さえ失われるほど、屍食鬼隊にとって『ク

ロードの命令』は絶対だった。

「リックの馬鹿め。マニュアル人間にも程がある。」
クロードは口ではそう言っていたものの、彼の口からは同時に笑みがこぼれていた。

「しかし、これで邪魔者はいなくなったわけか。まあいい。」
2機のMSが場を離れたことにより、三つ巴の関係ができあがり、3機とも下手に動くことができなくなった。
数分間、膠着状態が続く、永遠に誰も動こうとしないような空気が流れていた中、最初に動きだしたMSは…

ロウのイフリートだった。

ロウのイフリートは、頭部のバルカンの弾をばら撒きつつ、エーリツヒのザクやゲルググが向かった方向へと飛ぶ。

飛んでいる間も、敵機に背中を見せることなく、バルカンを撃ち続けたままだった。

制動や着地にかなりの危険が伴うが、ロウはそれを知った上で、状況打開策としてこれ以外に方法はないと考えたのだ。

その行動に対しクロードは、ガンダムに自機の背を向けないように廻り込むようにして、ロウの後を追う。

残されたガンダムも、自然な流れとしてその後を追った。

「よし、もう少しで追いつく。」
イフリートのコクピットで、レーダーの表示を見ながらそう呟くロウ。

レーダーに映る反応は2つ、おそらくザク？とゲルググだろう。
自機との距離が、だんだんと縮まっていくのが分かる。

そして、唐突にレーザーに映っていた反応が1つ消える。

「何、だと、間に合わなかったか……。」

しかし、ロウに感傷に浸る暇はなかった。突如として機体に衝撃が走る。

「グアツ！なっ！」

ロウは、イフリートのモノアイを衝撃が走った方向に向けて、その正体を確認する。

そこには見覚えのある忌まわしい機体、クロードの駆るイフリートが立っていた。

「驚いたか、ローエン・ガルフ。」

クロードは、無表情になるよう努めていたが、実際に彼の顔にあるのは、溢れる余裕と歓喜が抑えられていない笑みだった。

「馬鹿な……。レーザーは明瞭に映っていた。何故……。」

その問いが発せられる事を、クロードは予想していた。間髪入れずに解答を示す。

「貴様への死土産だ。このイフリート・ナハトには、レーザーに映らないようにするジャミングシステムが搭載されているのだよ。納得したか？」

ロウは徐々に落ち着きを取り戻し、今回、屍食鬼隊が出てきた理由を思い出す。

「そうか。ゲルググがこうも簡単に奪われたのも、そのMSの能力か。」

「今更、分かったところで。」
その言葉を最後に、クロードはロウのイフリートに、止めを刺そうとする。

しかし、その場に1機のMSが向かってくる。

モニター越しに目視できたその機体は、ゲルググだった。

恐らくはロウのイフリートの反応を見つけて、こちらに来たのだろう。

その右手には、ザク？の頭部が握られていて、到着と同時にクロードの方を向いてそれを高く掲げた。

「フン、その程度、自慢になるものか。」

クロードがつまらなさそうに言うと、ゲルググはザクの頭を投げ捨てて、ロウのイフリートの前に立つ。

そして、腰からビーム・ナギナタを抜くと、その刃をロウのイフリートに向ける。

「待て、リック。私が止めを刺す。」

ゲルググはクロードのその言葉を、聞こえていなかったかのように無視し、イフリートの上半身にナギナタを勢いよく突き立てた。

数分前

「ケン少尉、そろそろやりますよ。」

ザク？の、決して広くはないコクピットの中で、エーリツヒが呟く。

「分かっている。」

ケンはアンカーガンと拳銃を持って、彼の言葉に同意する。

「次の通りを左に曲がったところで、やりますから。手筈どおりに頑張ってください。」

エーリツヒのその言葉に、ケンは手にしたアンカーガンを見て、溜息混じりでこう話す。

「最初にゲルググを手に入れた時も、こんなことをやったような気がする。」

「慣れっというのは、大概の場合アドバンテージになります。良かったですね。」

やはり感情を表わさずに淡々と語るエーリツヒ。

そして、会話を交わしている間に予定の場所に到着する。

「御武運を。」

エーリツヒはそう言ってコクピットハッチを開き、ケンを送り出す。

「なんだ？」

ゲルググのパイロットは、ザクを追って別の通りに入ったのだが、そこで直立不動のザクを見つけた。

そのザクの足元を拡大表示で見ると、彼の思った通りにそこにはパイロットらしきジオン軍の制服を着た士官が、両手を上げて立っている。

「残念だけど、捕虜を受け入れる余裕はなくてね。そのザクは貰ってあげるよ。」

そう言つて彼は、ゲルググの前で手を上げる人物に、ビームライフルの照準を合わせる。

ケンは、ビームライフルを向けられた瞬間に、行動を開始した。アンカーガンの狙いをコクピット付近に合わせて撃つ。アンカーは見事にコクピットあたりに吸着し、固定される。

「今だ！」

ケンが叫ぶと同時にザクが動き、ゲルググに肘打ちを喰らわせる。パイロットが降りていると思つて油断していたパイロットは、成す術なく機体を転倒させられてしまう。

そして、ケンはアンカーガンの巻き取りを転倒するゲルググに合わせ、横つ跳びのような形でコクピット付近に迫る。

機体に体をぶつけることなく、コクピットハッチの前まで来ると、そこにあるコンソールを手早く操作し、コクピットを開放する。

開かれたハッチの中にいたのは、まだ若い少年兵だった。

ケンは少年に持っていた拳銃を突きつけて、1つだけ指示を出した。「ベルトを外せ。」

と、簡潔な指示を。

少年兵が言つたとおりにベルトを外すと、ケンは少年の胸倉を掴み上

げて、そのまま機外へと放り出した。

ケンがゲルググに乗り込み、横たわった機体を立たせると、エーリツヒのザク？がゲルググの肩に触れる。

「僕のザクを破壊して、その頭を持って行ってください。」

ケンはその言葉の意味を理解しつつ、意図を理解できないで混乱する。

思わず「何だつて？」と反射的に聞き返してしまった。

エーリツヒは「言葉を飛ばしすぎたか。」と小声で言い、改めてケンに説明する。

「僕のザクを破壊して、反応が消えたことを向こうが確認できれば、こちらを仲間だと誤認してくれるはずです。」

ケンは半ば呆れたように、

「MSを使った戦闘で、騙し合いをするなんてなあ。」

と、呟く。

エーリツヒは、それに応えて

「うちの部隊は、戦闘能力が高いわけではありませんから。」

一瞬の間を置き、さらに言葉を付け加える

「でも、騙し合いなら……負けませんよ。」

と、やはり無表情で言う。

が、ケンにはその表情がなんとなく、笑っているように見えた。

時は戻り、ゲルググがクロードのイフリートを撃破した直後

「中尉、無事だったか！」

ゲルググのkokopittから登場したケンが、ロウに言う。

「ケン少尉か、どうやってゲルググを奪回したんだ？」

ロウも当然の疑問として、そのことを聞いてみる。

「色々あってな。」

と、ケンは茶を濁すような言葉で返す。

「とりあえず、今は皆と合流しよう。」
と言い、ゲルググのコクピットへと戻ってゆく。
その時だった。

ジオン兵を震撼させる、2本の角を持つMSが現れたのは。

ガンダムはランドセルからビームサーベルを抜き、ケンのゲルググに向かう。

（間に合わない！）

そう判断したロウは、イフリートを2機の間躍らせる。

ビームダガーを抜き放ち、ガンダムのビームサーベルと鏢迫り合いをする。

しかし、使いすぎてオーバーヒートを起こしたのか、ビームダガーの刃は迫り合っすぎてすぐに消えてしまう。

「不味い……！」

ロウは周囲を見て、代わりに武器になりそうな物を探す。

しかし、見えるのは周囲に広がるビル街だけだった。

（あとは、イフリートの残骸。ケン少尉はコクピットだけを刺し貫いていたから、恐らく武器の1つぐらいは残ってるはず。）

そう考えて、撃破されたイフリートにカメラを向ける。

ロウの考え通り、そこには日本刀のような大振りな剣を握ったまま、仰向けに倒れる機体があった。

ロウは自機をその機体に素早く接近させて、武器を手に入れる。

その手に握られていた刀を左手に、その体に備え付けられていた小さなナイフのような刃を右手に取って敵機に対峙する。

（一か八か、だな。）

ケンのゲルググが、ビームライフルで撃とうとするが、ガンダムはそれを持っていたシールドを投げ付けることで妨げ、その間にイフリートを撃破せんとその身を躍らせる。

ガンダムとイフリート、お互いがブーストを使って接近し合い、その距離が0になったところで、それぞれ得物を振るう。

ビームサーベルとコールドブレードがぶつかり合い、激しく火花を散らす。

イフリートが鏝ぜり合いの最中にも関わらず、右手の小さな刃物でガンダムの脇腹を刺そうとする。

ガンダムもその行動を阻止すべく、咄嗟に左腕でガードする。

ガンダムは手でイフリートの上腕部を押さえ、イフリートの右手に握られた凶器は、ガンダムにあと一步のところまで届かない。

はずだった。

しかし、それはイフリートの手から離れて、しっかりとガンダムの鳩尾に突き刺さった。

ロウは、イフリートの腕を掴まれた時点で、ナイフ代わりに使ったクナイを放した。

クナイは、投擲に適した武器だったこともあり、下手投げの要領で投げだされて、ガンダムのコクピットを潰したのだ。

(相手のパイロットは、何が起こったか理解できなかつたろうな。)
戦いを終えたロウは、そんなことを考えながら撃破したガンダムを見る。

「凄いいじゃないか、ガンダムを撃破するなんて。」

通信機から、若干興奮している様子のケンの声が、ロウの耳に届く。ロウは満更でもないように、

「ガンダムだつてMSなんだ。神や悪魔じゃあるまいし、壊れないなんてことはない。」
と答える。

ロウの言葉にケンは沈黙し、しばらくしてから、その沈黙を破るように別の声が通信機から流れる。

「隊長！」

その声と共に、1機のザク?が現れる。左腕のシールドに2本のラ

インが書かれているそれは、ダグラス大佐率いるMS特務遊撃隊の所属であることを表すものだった。

「ガースキー！無事だったか。」

「ええ、コンティ大尉もいますよ。」

彼らはお互いの無事を喜びあった後、色々な事を話し合っ

た。ロウがガンダムを撃破したことには、2人からも惜しみない賞賛が贈られた。

それから、ロウは彼らMS特務遊撃隊の人員との同行を、辞退した。彼らが目指すバイコヌールは遠く、そこまでの道程の分の食料はなかった。

それと可能な限り早く、宇宙へ上がりたいことを理由に、彼らと袂を分かつことを告げたのだった。

ケンとジェーンは残念そうな顔をしたが、それでもロウの答えは変わらない。

「また、サイド3で会おう。」

「ああ。メイによろしく伝えておいてくれ。」

という短い挨拶を最後に、彼らは別れた。

別れた後に、彼はイフリートである場所へと向かう。

シンフェロポリ（廃墟都市） 倉庫内

そこには、自分達の使っていたサムソンが1台、残っているだけだった。

（もう、4、5日ぐらい置きっぱなしか。）

そんなことを思いながら、イフリートをその荷台に載せようとした時倉庫の入り口から、人影が現れる。

「エーリッヒ。どこに行っていた？」

「^{ゲール}屍食鬼隊が集まっていた場所です。少し良いものを見つけてまし
ね。」

結局、エーリツヒに付き合わされて、良いものの回収を手伝うことになる。

「量産型のガンダム。修理すれば、動きそうです。これぐらいなら僕1人でも、何とかなりそうですよ。」

その言葉に、ロウはあることを思い出す。

「修理用の部品なら、向こうにそのまま残っていたはずだ。」

それから2人は、そのガンダムをサムソンに載せて、シンフェロポリ中央部に向かう。

そこにあつた『修理用の部品』を見て、エーリツヒは久々に微笑む。

「これなら、直せる！」

結果、出来上がったのは、ガンダムとイフリートを運用する2人だけの部隊だった。

その部隊が今後、どのように戦火の中を駆け抜けるのか。今はまだ、誰も知らない。

「なあ、お前さ。本当に良かったのか？」

シンフェロポリから離れる1台のトレーラー、それを運転するジエイクが隣にいる男に話しかける。

「仕方ないだろ。あいつらが戻ってくる確証はなかったんだからさ。不可抗力だよ。」

男は少しバツが悪そうにそう答える。

その男の右側から、今度はメイが彼に話を振る。

「ねえ、ロウって隊長やつてる時はどんな人だったの？」

男は楽しそうに、その質問に答える。

「あいつか？あいつとは、実は小さい頃からの知り合いでな。この戦争でも、ルウムと一緒に初陣を飾った仲だ。ま、道中色々話してやるよ。」

第十八話：追撃、精鋭部隊！

両親が離婚した日、俺は家を出た。

格好良い連邦軍の軍人である父さんと、外で遊んではかりいる母さん。

俺は尊敬していた父さんについて行くつもりだった。

でも、裁判で俺の親権は母さんに移った。

軍人が男手1つで子どもを育てるのは困難だと判断されたいらしい。

大人の事情に振り回されるのも、母さんとこれ以上一緒にいるのも嫌だった俺にとって、家を出る以外の選択肢は思い浮かばなかった。

でも、行き先なんてない。

なんとか父さんの住処を探して訪ねても、また元の家に帰された。

何度目に訪ねた時のことだったか、僕は父さんに嘘をついた。

『軍人になりたい』

実は嘘じゃなかったかもしれないが、今となってはどちらでもいい。父さんのような軍人に、なれるものならなってみたいという気持ちもあつた。

でも、それよりも『父さんと一緒に暮らしたい』という気持ちの方がかなり大きかったから、やっぱり嘘になるのかな？

それでなんとか僕の望み通り、父さんとの生活が始まった。

僕の望み通りじゃない、父さんとの生活が。

父さんは、『軍人』以外の顔を持っていなかった。

僕が望んだ『父親』の顔も、『スオン・セード』という個人の顔も。

そんな生活で、僕の求めていた欲求が満たされる筈もなく、ただただ失望感だけが残った。

そのまま軍人になった僕は、人を探すことにした。

父さんでも、ましてや母さんでもない、僕の家族を、家族になってくれる人を。

あまり呼ばれたことのない、僕の『ミューロ』っていう名前を、愛情をこめて呼んでくれる人を。

U・C0078 11/16

日付を記した意味は、あんまりなかったかも。

宇宙世紀0079 11月16日

連邦軍仮設野戦基地

3日前、そこには地球連邦軍にとっての最新兵器【GM】が配備されていた。

現在、ジオン軍の主力であるMSに対して、同じMSとして対抗できる数少ない兵器であった。

それ故に単機で配備されることも珍しいことではなかったのだが…

…。
そこに配備されていたのは1機や2機ではなく、10機のGMという大戦力が配備されていた。

しかし、それはあくまで3日前の話。

現在、この基地に現存するGMは2機のみであった。

他の8機は、ジオン軍との戦闘で例外なく破壊されたのだった。

敵の戦力が過大だったのか、それとも、扱ったパイロットの実力に問題があったのか。

結論から言えば、どちらでもなかった。

パイロットは連邦軍から精鋭が集められたし、数的問題からいえば彼我の戦力は約1対2であった。

にも関わらず、連邦軍部隊は戦力の8割を失ってしまった。

基地に配備されていたGMは、全ての機体があるとある作戦に従事していた。

その作戦とは、ジオン軍の新型モビルスーツの鹵獲作戦。

新型モビルスーツを擁する敵部隊、MS一個小隊に対し過剰ともいえる戦力で作戦に臨んだのだが、数々の誤算が重なって、惨敗という結果に終わった。

1つ目の誤算は、敵部隊がゲリラ戦を熟知していたこと。

結果として連邦軍の戦力は分散させられ、数の有利を活かせないまま、各個撃破された機体が幾つかあった。

2つ目は、『精鋭のGMパイロット』についてだった。

確かに彼らは精鋭だった、連邦軍という枠の中では。

だが、開戦初期から戦っているジオン軍のMSパイロットと比較して、どうしても実戦経験で劣ることは否めなかった。

敵のゲリラ戦術に掛かって1対1戦闘に持ち込まれた際に、その弱点は致命的だった。

彼らが、GMの性能はジオン軍の主力機のザクよりも高いと知っていたことも敗因の一端かもしれない。

敵部隊の僚機であるザクと1対1になったとしても、『勝てる』と思ってしまう。ということも考えられる事態である。

そして最後に、敵の戦力を見誤ったこと。伏兵が存在したことである。

敵部隊の逃走先に、新たなMS小隊が存在した。

これだけで脅威となるのには十分だが、その部隊もまた、新型MSを擁していたのである。

生還したGMのパイロットの報告では、そのMSは、剣の一振りです
GM2機を撃破したという。
つまり新型機を操るパイロットは、相当な腕前を持っているとい
うことである。

この連邦軍部隊の指揮官、ベルナルド大尉は、これだけ不利な状況
を報告したにも関わらず、上層部からの通達は『作戦続行』という
無情なものだった。

どうやら上層部は、ジオン軍の新型MSの性能に甚く興味を示した
ようで、『増援を送る』という文も一緒に返ってきた。

それならばと、新型MSに対してのリベンジに意気込むベルナルド。
彼は、上層部がGM10機にも優る戦力を投入するものと確信して
いた。

そんなことがあったのが、一昨日。

今日は、その上層部の言っていた『増援』が、到着するはずの日。
GM10機を上回る戦力が来ることを期待し、そのことで胸を躍ら
せていた彼は、『増援』の到着時刻にわざわざ外に出て、来るべき
友軍を迎えるつもりなのである。

現在、彼は仮設基地近くの開けた平野に出向いて『増援』の到着を
待っている。

「まだなのか、本部からの援軍ジャブローというのは？」

今か今かと待ちかねている状態の彼は、ドライバーをさせている部
下にそう問いかける。

「そんなに焦らなくても、すぐに来ますって。エリートさんなん
でしょ？」

その言葉に彼は、嬉しそうに頷き

「そりゃあ、ジャブローから来るんだぞ。凄腕で、品行方正で、ジ
オンなんぞ相手にならないような奴に決まってる」

と返した。

その言葉で、すぐ隣にいるドライバーの表情は、ウンザリしている人のソレに変わったが、彼は自分の妄想に酔っているのか全く気付かない。

しかし、気流を切り裂くジェットノ轟音が、妄想に耽る彼を現実へと引き戻す。

「なんだ、遂に来たのか？」

そう言ってベルナルド大尉は、周りを見回して、期待の『増援』の姿を探す。

そして彼は、視界の隅にそれを認める。

「ガンペリーですね。やはり増援はMSなんですね」

ドライバーの男がそう言うと、ベルナルド大尉は顔を悪人の笑顔で歪ませ、

「当然だ、GM10機を超える戦力だぞ。MS以外に考えられん」と自信満々に答えた。

しかし、その自信に溢れた表情も、すぐに崩れることになる。

それはガンペリーが着陸すべく、この場所に向かってきた時である。

「ん？2機？」

「たった2機ですか？」

こちらに向かつてくるガンペリーは2機。1機のガンペリーには、2機までしかMSは積めないため、多くても4機しか送られてこなかったということだ。

予想外の事態にベルナルドは開いた口が塞がらず、ただ目の前に着陸したガンペリー2機を見つめるだけだった。

その機体がどのようなモノを運んできたかも知らずに。

ガンペリーが着陸して数分後、連邦軍の制服を着た男が2人、ベルナルドの方へと向かってきた。

1人は精悍な顔つきをした40代前半の如何にもベテラン軍人といった風体の漢。

喧嘩向きの体格で、目つきと服装さえ変えれば、マフィアの一員で通りそうなものだが、彼の実直な性格を表すような真っ直ぐな瞳がそれを不可能にしている。

まさに現在の人材不足に喘ぐ連邦軍が、最も必要としているタイプの人間であり、ベルナルドの想像通りの人物に思えた。

もう1人は、爬虫類のような目と鷲鼻、少し後退した生え際が特徴の男だった。

「あなたが、ベルナルド大尉ですか」

軍人の鑑といった男が、ベルナルドとドライバーの方を向いて問いかける。

「ええ、そうです」

「SRT - Unit 2の隊長、スオン・セード少佐です」

少佐は軽く自己紹介をすると、多少暑苦しいような、しかしながら好感の持てる笑顔と共に右手を差し出す。

ベルナルドは迷うことなくその手をしっかりと握り、彼と握手を交わした瞬間、ベルナルドの脳裏には『今回の作戦は成功だな』という確信が芽生えた。

そんなベルナルドの心中を知ってか知らずか、セード少佐は遠慮がちに次の言葉を紡ぐ。

「出迎えまでしていただいて非常に心苦しいのですが、彼をあなた方の基地へと案内していただけませんか？」

ベルナルドの方も特に断る理由など無く、二つ返事で了承した。

それから数十分後

連邦軍仮設野戦基地

ベルナルドは、この近くの平野に着陸したガンペリーから降りてきた1人の男を連れて、自分の指揮する部隊の基地に戻っていた。

「ここが我々の前線基地だ、現在の戦力はGMが2機のみ」
連れてくる男に現在の状況を告げながら、野戦基地を歩く。

「お世辞にも良い場所とは言えんが、まあそれもすぐに終わる。何

せ、ジャブローから援軍が来たんだからな」

ベルナルドは隣を歩く人物に対して話しかけたつもりだったが、その人物からの反応は無い。

そうして返事を待ちながら歩く間に、2人は目的地に到着していた。

「ここが司令室だ。入りたまえ」

連れてきた中尉に手近な椅子を勧め、中にいた部下に飲み物を用意させる。

そんな風に客人をもてなして、待つこと10数分。

「大尉、ベルナルド大尉！」

連邦軍の通信担当の兵が、大声で部隊指揮官の名を呼ぶ。

対して、名前を呼ばれたベルナルドの方は、冷静にただ一言

「何があつた？」と問い返す。

「ジオン軍の通信を傍受しました。暗号通信で、まだ解読はできておりませんが……」

「ターゲットがいるつてのは、間違いない訳か」

そう言ったのはベルナルドではなく、ましてや通信兵の彼でもない、第三者だった。

「中尉」

ベルナルドは、通信兵がいる方向とは逆の方を向いて言い、状況を報告してきた通信兵も自然とそちらに注目する。

「場所は何？」

呼ばれた中尉はベルナルドには視線を向けず、報告をもたらした通信兵に簡潔に問う。

「旧シンフェロポリ中央都市部であります」

問われた兵は淀みない声で即答する。

「ま、どこに居ようがこつちには『ガンダム』があるんだ。楽勝だな」

そう言うと彼は徐に立ち上がり、彼が乗ってきたガンペリーの方向へと向かう。

「中尉、どこへ行く。まだ出撃命令は……」

ベルナルドは、突然動き出した彼を止めようとするが……。

「あんたみてえな無能そうな指揮官に付き合うつもりは無いんだよ」と言い、懐から茶封筒を取り出して、さらにそれを粗い手つきで破って中の書類をベルナルドに突き付ける。

ベルナルドは通信兵共々しばらく呆気に取られていたが、言われたことの意味を理解してすぐに、怒りに体を震わせる。

「…貴様！」

反論しようとしたベルナルドだが、彼の眼前にあったのは反論する相手ではなく、突き付けられた書類だった。

仕方なく反論を後回しにし、中尉を睨みつつその書類を引っ手繰って内容に目を通す。

その内容を見て彼は顔を赤くし、両手に力を込めて書類を握りしめる。

彼の行動が全て『怒り』という感情に起因することは、その場の誰もが瞬時に理解した。

中尉はベルナルドの表情の変貌から、彼が書類の内容を理解したものと判断し、止めの言葉を放つ。

「つゝまゝり、あんたはもう用済みって訳だ。お偉方も、もうあなたに期待することは何も無いってこった」

中尉はその言葉を最後に、その場を後にした。

「大口を叩くのなら、それなりの仕事をしてもらわんとな」

ベルナルドは、先ほど引っ手繰った、彼の部隊が中尉の所属する部隊に統合されることと、作戦を支援するように書かれた命令書を手に、負け惜しみとも取れる言葉を吐き出した。

しかし、それが中尉に聞こえたかどうかは定かではない。

中尉がガンペリーの着陸した平原に戻った時、既にガンペリーからMSが降ろされており、4機のMSが直立状態で暖気を行っていた。

「中尉、遅いぞ。情報収集に何を手間取っている」
直立する機体の内の1機、そのコクピットから、そんな声が掛けられる。

「もう少しゆっくりしましよや。セード少佐は頭堅いんですって。そんなだから石頭ならぬ『鉄頭』呼ばわりされるんですぜ」

「そんな名で呼んでるのはお前だけだ」

中尉からセード少佐と呼ばれた男は的確なツツコミを返すが、中尉はそんなことは関係ないとばかりに第2波を放つ。

「どうせ堅いなら、ダイヤモンドぐらいまでいってほしいもんですな。鉄じゃ価値は知れてます」

その言葉で、少佐は切り札を使うことを決めた。

「始末書地獄に堕ちるか？俺の記憶では、溜まっていた量は確か32カウントだったか……」

「すいませんでした」

それは彼にとつて最高の脅し文句らしく、あれだけ憎まれ口を叩いていた中尉が、あっさりと頭を垂れた。

「馬鹿やってないで、装備の確認でもしろ。装備とMSの点検が終了次第、出撃する」

しかし彼はまだ懲りていないのか、正当とは言えない抗議の声を上げる。

「装備の確認なんて、今からしてたんじゃ間に合いませんよ」
この迂闊な発言にも、的確なツツコミが返ってくる。

しかも、彼より年齢も経験も重ねていない者達から。

「今から始めるのは、中尉だけです。我々は、輸送機が降り立ってすぐに装備確認を始めました」

「ま、いいけどな。あんたにこういうことを期待するのは無駄だっていうのは前から知ってるし、今回も期待してなかったしな」

上、10mほど上方からの声。

一般人ならどこから声を掛けられたかをしばらくの間探し回るところだが、中尉はすぐに声の主達を見つける。

「なん……、てめえら！」

その2人に何か言い返そうと思ったが、咄嗟に言葉が思いつかず、しかも相手の言っていることも間違っているなどいないたため反論できなかった。

つい先ほど階級も年齢も上である基地司令官、ベルナルド大尉に好きな事ばかり言っていた中尉が、今度は完全に反対の立場となっている。

そこから1対2の言い争いへと発展するが……

舌戦に弱い中尉が勝てるはずもなかった。

挙げ句の果てに出てきた言葉は、

「てめえら、ガンダムのパイロットに選ばれなかったからって、ひがんでいるんじゃないだろうな」

というもの。

そんな言いがかりとしか言えない言葉に対して、いい答えが返ってくるはずは無く、返ってきたのは辛辣な言葉だった。

「いい加減、もうちょっとマシな思考できませんかね？」

「お前からガンダム取ったら、何も残んねえじゃねえか。ハハッ！
！」

「先輩に対しての礼儀や敬意ってモンは無いのか！」

「尊敬できるような先輩になったら、考えます」

「無理な方に30000ドル賭けるぜ」

そんな不毛なやり取りがいつまでも続くかと思われたが……。

「お前ら、無駄口叩いてないで、そろそろ出撃するぞ。それと今回の装備確認の件については、中尉に責任は無い。今回はな」

不意に掛けられたセード少佐の鶴の一声。その言葉で、一瞬で言い争いが収束する。

そして、それまで言い合っていた3人がすぐに各々の居るべきコク

ピットに乗り込み、ハッチを閉める。

直後、3体の巨人の目に光が宿り、武骨で機械的な機動音を立てて動き出す。

巨人は無駄のない動きでその手に武器を取ると、即座に向きを変えて目的地、戦場へと向かった。

装備確認の終わっていない中尉の乗機、黒を基調としたカラーリングのガンダムを残して。

長大な砲身を持つキャノン砲を手にした巨大な人型が、市街地の一角へと接近する。

その基部にはワイヤーでマシンガンが巻きつけられており、背負ったコンテナや腕に装備されたシールドと共に、この機体が部隊の中で担う支援という役割を物語っている。

その人型の鳩尾の辺りに座る本物の人間が、状況確認として部下に伝えるように言う。

「ミノフスキー粒子が無いのか、レーダーで敵の位置がよく分かる。狙撃に気をつける」

人型の後ろから追従するもう1つの人型、それを操る人間が答えを返す。

言葉を発した彼が望んでいない形で。

「好都合だ。位置が分かかって困るのは相手だけだしな」

「ミューロ曹長、私語は慎め」

少佐が下した、軍人としては当然の命令

しかし、少佐は軍人としてだけでなく、スオン・セード個人としてもこの言葉を言わずにはいられなかった。

(嫌な予感がする)

その嫌な予感が的中するのは、その思案の直後だった。

「分かったよ、私語は慎みますよ、隊長。それじゃ報告！任務の一环として、斥候と思しき2機の敵機を撃破してきます！」

早口でまくし立てられたその言葉に、言われた方は理解が遅れる。その間に言葉を放った方は、その乗機である『GM・ライトアーマー』を敵の反応がある方角へと向かわせた。

「ミューロ！」

止めようとして叫んだセード少佐の言葉も、ミューロは聴き入れなかった。

「ツツ……！ あのじゃじゃ馬は！」

少佐の機体の正面モニターに表示されるのは、高速機動をかける部下の乗るMSの姿。

そして、その脇に映るもう1人の部下の顔。

「追いますか？」

モニターに映る顔は、必要最低限に口を動かし、セード少佐に指示を仰いでいる。

「奴1人のために部隊を危険に曝す訳にはいかん。それに、2機程度ならば奴にとって問題になることも無いだろう」

「了解しました」

ミューロが独断行動を起こした後、セードとハーメルは敵陣に向けて行軍を続けていた。

（敵部隊は恐らく、2機のザクでこちらをおびき出して、虎の子の新型で一網打尽にするつもりだろうな）

セード少佐は自機を進めながら考える。ならばどうすれば良いのか。（新型機は複数あるらしい。ならば、多くの機体を展開して優位になるような開けた場所……）

セードはコクピットに備え付けられたキーボードを操作し、側面モニターに近辺の地図を表示させる。

そして、彼は条件に該当するような場所をすぐに探し始める。結果、条件に適合する場所は3カ所存在した。

（しかし、奴らの陣地は中央にあるはずだ。だとすれば……）
部下がもたらしてくれた情報をもとに、さらに場所を絞り込むセー

ド少佐。

それでも候補は2つ残り、彼の頭を悩ませる。

それから彼は敵の動きにヒントを得ようとし、レーダー表示が映る正面モニターを見る。

彼が注目したのは、ミューロが向かった先にいるはずの2機のザク。しかし、それらは少佐の期待に反して、最初に陣取っていた場所から動いていなかった。

その付近に映るもう1機のMS、ミューロのGMとの位置関係から判断して、戦闘に突入したようだ。

「ん？」

しばらくレーダーを見ながら機体を戦場へと向かわせていたセード少佐だったが、そのモニターは一つの異変を映していた。

「敵の反応が増えたな……」

無意識に口から出た独り言のような言葉だったが、彼と行動をともにする部下は、律儀にも返事を寄越してくる。

「そうですね。しかし、ミューロ曹長の方に向かったのは1機だけです。ザクが1機増えたぐらい、トリエル曹長にはどうということもないでしょう」

特に感慨も無く話すハーマル、彼の気は別のところにあった。

「それよりも、他の機体の動きが気になります。撤退だとすれば新型機がこの中に含まれている可能性も……」

「ハーマル曹長、違うぞ」

ハーマルの言葉を黙って聞いていたセード少佐だったが、ここにきて部下の言葉の訂正を始めた。

「この新たに現れた敵機はザクじゃない。このスピードは、少なくともグフよりも速い」

「ドムですか？」

彼の言葉にハーマルは、即座に自然な反応、すなわちジオン軍が保有するMSの中で、条件に該当する機体を挙げるが、それもやはり

否定される。

「いや、そこまでのスピードじゃないな。ところで曹長、今回の任務の内容は？」

突然投げかけられた質問であったが、ハーメルがその意図を理解するのに時間は必要なかった。

「新型……ですか？」

「その可能性は充分にあると思う。それに、もしそうだったらミューー口でも荷が重いだらうな」

そこでセードは言葉を切り、再び思案に耽る。

思案に掛けられる時間があまりにも少ないことは彼もよく分かっていたが、無策で動ける時間は少ない以前に無い。

戦場において、無策で動くことほど愚かしいことはない。

ましてや指揮官が無策などと、とても考えられないことである。少なくとも彼はそう考えていた。

行動のための『策』を頭の中で必死に探すセード。

既に彼の中には、2つのケースを想定した策は幾つか練られている。問題はその2つのケースのどちらが現状なのか、その判断が付かないことだった。

(敵の拠点はどちらに位置するのか、それさえ分かれば……)

「隊長、セード隊長！」

下を向いて思考の深みに入ろうとしていたセードが、部下の声によって現実に引き戻される。

そんな上官の様子など知らないハーメルは、報告のための言葉を続ける。

「トリエル曹長のGMが撃墜されたようです！」

現実に帰ったばかりの彼には、言葉の意味が全く理解できなかった。それでも、ハーメルの言葉は続く。

「レーダーから彼の機体の反応が消えました、しかし、敵機の反応は消えていませんからミノフスキー粒子の影響とも思えませんし……」

……

セードの頭にハーメルの言葉が響くが、響くだけで彼の頭は言葉の意味をなかなか理解してくれない。

数秒ほどかけて、彼の脳がその言葉の意味を咀嚼したとき、真つ先に動いたのは軍人としてのセード少佐だった。

「ハーメル曹長、イーハ中尉と合流して、新型機を追え。私は先回りして、お前達をバックアップする。」

いつも通りの冷静な言葉。

「りよ……了解です」

だが、ハーメルはその言葉がいつもと違って得体の知れない感情が籠っているように感じられ、それに気圧されて、返事を吃ってしまった。

セードの方もそれに気付かないようで、自分の立てた作戦を遂行するために、部下に伝えた行動のできる位置へと機体を向かわせるだけだった。

「中尉、聞こえますか？」

セード少佐が目標地点に向かった後、出撃前の罵倒とは違って変わった真剣な声で、自分の上官に通信を入れるハーメル。

『聞こえてる』

返ってきたのは、苛立たしげな、それでいてどこか哀しそうな声だった。

彼の声がそのような声を出した理由も、ハーメルは理解していたため、それ以上のことは追求しない。

「少佐からの命令で、例の新型機を追うことになりました。すぐに合流して向かいましょう」

『解った、すぐに向かう』

普段は無駄な口数の多い中尉らしからぬ、淡泊な返事をもって通信は終了した。

(中尉も本気だということですね。まあ、無理ない……ですよね)

「俺のガンダムで、ミューロの仇、取ってやるか」

出撃前とは全く異なる真剣味を帯びた声で、仲間の仇討ちを誓う中尉。

しかし、その言葉とは対照的に操縦桿を握る手に震えが走り、心なしか汗ばんでいた。

（ミューロがやられた……、アイツがやられる相手だと……）
SRT - Unit 2で最も戦績の良いメンバーが撃墜されたということに、動揺を隠せないのだ。

ミューロはMSの性能を限界まで引き出すことが得意だった。当然、訓練や模擬戦で優秀な結果を出し、ガンダムのパイロット、フォルド・ロムフェロー中尉を相手に互角の戦いを繰り広げたという噂もあった。

MSの消耗率の高さが玉に傷だったものの、優秀なパイロットであることに変わりはない。

（消耗率の高さ故に、パーツの少ないガンダムのパイロット候補から外されたという事情もあるのだが、それはまた別の話。）

ともあれ、ガンダムを駆る彼以上に優秀なパイロットである可能性は、十分にあった。

そんな仲間を倒した相手に、自分は勝てるのだろうか。

中尉の中にはそんな疑念が渦巻き始めたが、結論は出ない。

（考えるだけ無駄か）

中尉がそういう結論に達したのには理由があった。

まず、状況が大きく違うこと。

ミューロは1対3という数的にかなり不利な戦いを強いられたが、自分はハーメルと合流して敵を追うことになっている。

それに加えて、自分達とは別の部隊のGMが2機、主戦場に向かっているのだ。

（ま、これなら大丈夫だろ。隊長の援護もあるんだし……）

リーダーの隊長機を表すアイコンを見ながら中尉がそんな風に考え

ていた頃

セード少佐は、窮地に立たされていた。

（敵の本陣は中央ではなかったのか……！）

機体を移動させたことにより、レーダーが映す範囲も変わる。

そして、新たにレーダーが映した範囲には、多くの敵が存在した。

総数にして5機。その機体が全てザクであったとしても、勝利を収めるのには困難を極めるだろう。

さらに悪いことに、5機ともザクであるというのは、都合のよい希望的観測でしかないことを彼は知っていた。

（最低でも、1機は新型機だろうな。このRX-79「G」1機でどこまでやれるか……）

彼の機体はキャノン砲に巻きつけられていた物を、ワイヤーを引きちぎる形で強引に外して少し離れた場所に置く。

それから背部のウェポンラックからコンテナを降ろし、レーダーに敵が映っている方向に向けて、盾を突き立てる。

全ての準備を終えると、敵機の方角に向き直り、キャノン砲の射撃態勢を取る。

敵もこちらに気付いたのか、レーダーに表示された赤いアイコンが2つ、急速に中央へと向かう。

その速さは、二足歩行をするMSを走らせて出せるスピードではない。

（ドムが2機か。それ以外の奴らは……）

そこまで考えて、彼の思考回路は硬直した。

彼の目の前にあるレーダーには、

中央に向かって走る2つの赤。

中央に位置する自機を示す三角マーク。

逃げる赤と追う青、それぞれ2つずつ。

そしてその追走劇に混ざろうとでもいうのか、3つの赤が、それら

に引き寄せられるように動いていた。
危機を伝えるべく部下に通信を入れる。

「中尉、曹長、敵の本隊が……うわっ！」

が、正面モニターに現れた2つの黒がそれを許さない。

「クソッ、邪魔をするな！」

そうやってセードは、画面の中でだんだんと大きさを増していく黒い機体、ドムに、自機の手にあるキャノンに向けて。

直後、鈍い発射音と共に人間の頭ほどもある砲弾が発射され、それは直進してきたドムの1機を正確に捉えた。

その砲弾の着弾とほぼ同時にもう1機のドムが、手にした得物、ジャイアント・バズを反撃に撃つ。

セードは自機に装備されたキャノンを放棄すると、バックブーストまで行って、できる限り後方へと退避する。

1秒も経たない内に、彼の前方で大きな爆発が起きる。

キャノンか、もしくは懸架台として使っていたシールドに、ジャイアント・バズが命中したのだろう。

セードがそんなことを考える間もなく、彼の機体へと迫るドム。

もう一度、ドムが肩に抱えたジャイアント・バズが火を噴く。

放たれた砲弾は、今度は目標のコクピットへと一直線に迫る。

「くっ……」

回避が間に合わないと判断したセードは、機体の胸部に装備されたバルカンを乱射し、自身へと迫る凶弾を迎撃する。

バズーカの弾頭は、彼の機体に命中こそしなかったものの、機体に影響を与えるには十分な距離で爆ぜた。

激しい衝撃が彼の体を襲い一瞬判断が遅れるが、生存本能の為せる業か、ほとんど何も考えぬままフットペダルを踏み込む。

衝撃で揺さぶられた状態のパイロットを乗せたまま機体は飛び上がり、直後、またしても爆発が起こる。

(今度は下か)

真下、先ほどまで機体があった場所で起こった爆発は、陸戦型ガン

ダムバランスを崩し、その機体はバランスを崩した状態のまま、重力によって地面に叩きつけられる。

尋常ではない衝撃とGが、幾度となくセードを襲う。

セードは吐き気と痛みの両方をなんとか堪えて意識を繋ぎとめ、機体の体勢を立て直そうとする。

（丸腰ではどうにもならん、何か武器は……）

体勢を立て直しつつ、機体周辺をカメラで見回すが、武器らしい物はモニターに映らない。

唯一見つかったのが、近くにあった破壊されたキャノン砲と焼け焦げたシールド、それから焦げているもの破損してはいないウエポンコンテナ。

（ウエポンコンテナにはロケットランチャーがあるが、組み立てる暇など無いし、これではどうにもなら……！）

何かに気付いたセードは、機体のコンソールに対して、ある操作を素早く入力した。

そして

『中尉、曹長、敵の本隊が……うわっ！』

「隊長？隊長！どうしたってんだよ！？」

中尉は突然入ってきた通信が、隊長の危機を伝える物であったことに困惑していた。

「おい、隊長！セード隊長！」

通信の相手を何度も呼び返すが、見なれた映像も聞き慣れた音声も無く、代わりに返事をしたのはノイズだけだった。

「クソッ、隊長が……」

「まだやられた訳じゃない！」

中尉の弱気な発言に、すかさずハーメルが喝を入れる。

「だから、そんなことにならないためにも、早くここを突破して、助けに行かないと……」

焦っているようなハーマルの声に、中尉は冷静な意見を返す。

「しかしな、味方のGMは瞬殺されたし、敵に支援機がいたら目も当てられないような悪い状況に跳び込むことになるぜ」

「かといって、隊長を残して撤退なんてできませんよ！それこそ、ミューロに顔向けできない……」

ハーマルはそう言うと、自機のスラスターを使い、一気に主戦場へと突き進む。

中尉もそのあとに続かざるを得ない。

すると、中尉の予想に反して、ハーマルの予想通りに、敵部隊は後退を開始した。

「通してくれるのか？なら、ご厚意に甘えさせてもらって……」

「そんなことあるはず無いじゃないですか！合流するつもりなんですよ！」

敵を目の前の外的外れなことを言う中尉に、ハーマルは呆れつつもその間違いを指摘する。

「合流されると厄介ですから、すぐに撃破しないと」

ハーマルはそう言うと、乗機であるGMライトアーマーにビームガンを構えさせ、追撃にかかる。

中尉のガンダムもその後につき、シールドを前に構えて機体を守りつつ敵機へと迫る。

ザクや新型機の牽制射を器用に避けつつ、徐々にジオン軍のMSとの距離を詰めていく2機の連邦製MS。

(もう少して追い付く！)

2人がそう考え、実際にザクをレンジに捉えたとき
新型機が反撃に転じてきた。

新

右手に赤熱した刃を持ち、中尉のガンダムに切り掛かる新型機。

その一撃は、ガンダムに装備されていたシールドを一刀両断にし、その面積を狭めた。

「くそっ……、こんの野郎！」

中尉のその言葉と共に、ガンダムに装備されたビームライフルがそ

の力を行使すべく光を宿す。

それより一瞬早く、連邦製のマシンガンを持った新型機の左手が、ビームライフルの銃身を押し上げる。

1本の光の道筋が描かれ、その光は破壊という最も分かり易いやり方でその力を示す。

もつとも、人間に見ることができたのは、新型のパイロットが見た銃身の中に一瞬だけ点った光と、放たれた光線の熱で溶けていく新型機の肩の装甲だけだったが……。

新型機は至近距離からの射撃にも動じる事なく、反撃にもう一撃、ヒートソードを薙ぐ。

ヒートソードの切っ先がビームライフルに当たり、その銃身を熱で溶かして切り裂く。

新型は、ガンダムの主要な射撃兵装を全て奪うと、後ろに飛びのきつつ、左手のマシンガンと頭部のバルカンでガンダムを撃とうとするが

「中尉！」

ハーメルはその行動を妨害すべく、GMのビームガンを牽制として撃つ。

発射された3発のビームの1発が敵機のマシンガンに命中し、その銃口を溶かして、使い物にならなくした。

しかし、敵の新型のパイロットは使い物にならなくなったマシンガンでさえも、投擲することで武器へと変える。

「くっ……！」

ハーメルはメインカメラに向かって投げ付けられたスクラップを、ビームガンを持たない方の腕で防ぐが、それは敵の思っ壺だった。直後、大型の剣が、ハーメルのGMの目前に現れる。

「しまっ……！」

ハーメルがその一言を言い切る前に、彼の機体に衝撃が走り、言葉が途中で途切れる。

投げられた剣は、GMライトアーマーの大腿部に深々と突き刺さり、

MSとしての機能を失わせた。

「ハーマル！」

中尉は叫び、モニター越しに新型を睨みつけるが、主要な射撃兵装であるビームライフルが無い状態では追撃も満足にできず、ただ見送ることしかできなかった。

新型機が後退し、再度攻撃を仕掛けてこないことを確認すると、大破状態で擱座するGMライトアーマーに近寄り、ハーマル曹長の安否を確認する。

「う……っ……中尉、自分は無事です」

ハーマルがそう言うと、GMのコクピットハッチがパージされ、中からパイロットスーツを着込んだ人影が出てくる。

「これだけ機体が損傷したのに自分は無傷。融合炉も誘爆してませんし、奇跡以外の何物でもないですね」

ケロツとした様子で言うハーマルに対し、中尉はただただ絶句するだけだった。

ハーマルはそんな彼の様子など気に留めることなく、話を進める。

「中尉、もはや作戦は続行不可能です。隊長を救出して撤退することを進言します」

真剣な表情に戻って、上官に意見を具申するハーマル。

「わかっている。ビームガンを借りていくぞ」

そう言ってガンダムにGMの持っている銃を取らせる。

そして、レーダーで隊長機のある方向を確認しようとするが……

中尉は、そこで初めて隊長機のアイコンが消失していることに気付いた。

数分前

「うぬうううああ！」

操縦者の奇声と共に、疾走する陸戦型ガンダム。

その手には何も持っておらず、MSとして戦える状態とは言い難い。それでも敵機に対して、果敢に突撃を仕掛ける。そのスピードと勢いは相手パイロットの予想を上回ったようで、そのまま敵機の懐に入ることができた。

（近接戦闘用の武装であるビームサーベルを抜いている暇は無い）そう判断したセードは、自機の拳で相手が装備する飛び道具を殴りつける。

リミッターを外した陸戦型ガンダムのパンチの威力は、ドムの武装1つを奪うのに十分有効だった。

砲身をガンダムのパンチによってへし折られ、スクラップと化すジヤイアント・バズ。

敵は飛び道具を失ったことで怯み、さらにガンダムが打ち放った拳に気を取られていた。

それをセードが予想していたかはわからないが、セードはさらに追い撃ちを掛けるべく、膝のスパイクを利用した蹴りをドムにお見舞いする。

ドムはよろめきながらも、倒れることなく滑らかな動きで大きく後ろへと退く。

他のMSであれば確実に転倒していたであろう蹴りを、ドムはホバークラフトという特性を活かし、運動エネルギーを後ろに受け流すことによって対処した。

ドムが後退したことにより、2機の距離が開く。

両機共に主要な射撃兵装を失っているため、開いた距離は攻撃を遮断する壁となっていた。

壁を乗り越えれば攻撃が可能となるが、相手の攻撃もこちらに届くようになる。

持久戦

奇しくも、対峙する2機のパイロットの頭に同じ言葉が過ぎる。

しかし、セードは一瞬でその考えを切り捨て、陸戦型ガンダムのブーストを吹かす。

その行動に対してドムも向かってくるであろうガンダムを迎撃しようと身構えるが、その行動は無駄なものとなる。

ガンダムはその推力で後ろへと飛びすさり、『ある物』を取ろうと手を伸ばす。

地表に置かれていた『それ』を取るには、どうしても不自然な体制にならざるを得ず、仰向けの状態で地上を滑走するというおかしな行動に出ることになった。

それをバツクブーストに失敗したのだと判断したのか、ドムが仰向けの状態で止まったガンダムに対し、そのスピードを以て一気に距離を詰めようとする。

しかし、寝転がったガンダムの手に握られている『ある物』に気づき、慌てて機体を制動しようとするが、時既に遅く……

陸戦型ガンダムが手にしたマシンガンが火を噴き、その弾丸はドムの上半身を撃ち抜いた。

「なんとか……間に合ったか」

セードはモニター表示や照明の類が全て消えたコクピットの中で言う。

現在、コクピット内に一切の光が無いのは、陸戦型ガンダムが限界稼働を行った代償である。

「リミッターを切ったらこうなることは判ってはいたが……」

誰が聞いている訳でもないのに、言い訳のように『仕方がなかった』ということを弁明するセード。

そんな中でくだらない考えが彼の頭を過ぎり、その考えを払拭するために、前屈みになって上に手を伸ばす。

案の定、硬い感触があり、そこから手探りでコクピットハッチの緊急開放スイッチを見つけだす。

(一瞬、本物の地獄とやらにでも来たのかとも思ったが……)

電力の通っていない状態で、無理矢理コクピットハッチを開くと、11月の寒さと雲が一面に広がった白い空があった。

辺りを見渡すと、そこにあるのは先程までモニター越しに見ていた世界であった。

セードの足元には、自機である陸戦型ガンダムが片腕で上半身を少し持ち上げた状態で存在していた。

さらにそのガンダムに足の裏を合わせるように、仰向けに倒れた状態で燃え盛るドムがあった。

そのどれもが、彼が先程まで戦っていた舞台、戦場であることを如実に示していた。

「ミューロ、次に会うのはもう少し先になるな……、悪い……」

生き残った実感を得た彼は、そう言っただけで声も無く涙を零した。

そして彼は涙目のまま振り返り、自分の機体を見た。

「お前にも、無茶をさせてしまったな、ガンダム」

巨大なマシンガンが銃口から吐き出す硝煙が、一層哀愁を醸し出す。見た目にこそ大きな損傷は顕れないが、その中身はもはやまともに戦える状態ではないことは、そんな状態にした張本人である彼が一番良く理解していた。

そんな風に感傷に浸っていた彼の耳に、乾いた音が響く。

乾いた音の音源から、音と共に放たれたそれは、彼の身体を中心に貫いた。

(ミューロ、これ……お前に……える……)

彼は最期にそんなことを思いながら果てた。

尤も、彼はすぐに愛しい息子に会うことはできなかったが

「……いってえ。痛い。軍人になってから一番痛い経験したな、今日」

割れたヘルメットのバイザーで切った頭からは血が流れ、左腕は身体に繋がってぶら下がっている状態で、当然動かない。

そんな状態ながらも、ミューロは生きていた。

幸い出血量はそれほど多くなく、止血さえすれば命は助かるという状況だった。

「それにしても、迂闊過ぎるだろ2人とも。敵の追撃に夢中で、俺の機体に見向きもしないで……、生命反応ぐらい確認しろっての」「痛みを紛らわせるために、この場にいない者達を罵ってみるが、効果は薄い。」

そんな彼に、救いの手が差し延べられる。

「おっ、あれってGMじゃん」

味方の機体を見た彼は、右手に持っていた発煙筒を使用する。

GMもすぐにその煙に気がついたようで、ミューロはそのまま味方の陣地へと運ばれた。

「どっなつてんだよ、コイツあ？」

ガンダムを操り、敵の新型機を追ってきた中尉だったが、その頭は疑問符で一杯だった。

彼の前行われていたのは、俗に言う仲間割れというものだった。

これまで多くの連邦軍機を多く葬ってきた『無慈悲な鬼神』が、ジオンの機体であるザク？を焼き払おうとその強大な火力を向けて撃つ。

さらに、もう1機現れた敵の新型機が、見慣れない装備を施したザクのコクピットを刺し貫く。

かと思うと、その新型に対して先程ビームを回避したザクがマシンガンを撃つ。

「俺は無視かよ……ま、無視されているならば、それも良いか」

言いつつ、ハーメルから借りたビームガンの照準を動きが止まって

いた『無慈悲な鬼神』に合わせ、その引き金を引く。

「隊長やミューロを殺った奴らなんだ……。だったら、全員潰さねえと」

相手からビームライフルによる反撃が返ってくるが、中尉はそれをものともせず、簡単にかわす。

その撃ち合いの直後、ザク？が突然、あさつての方向へと飛翔する。すぐに『無慈悲な鬼神』もその後を追い、この場を後にする。

残った3機は、迂闊に動くことができないでいた。

それでも1機が動くと、他の2機も動かざるを得ない。

結局その3機ともが、先行した2機を追うことになった。

ミューロがGMに運ばれて陣地に到着した時、そこでは剣呑とした雰囲気言い争いが起こっていた。

「隊長とハーメル曹長は行方不明ですし、中尉はまだ戦っているんですよ！」

ミューロも何度が聞いたことのある、女性の声。

セード隊長の副官であるフィリス少尉だと、ミューロはすぐに認識する。

「すぐに呼び戻せ。戦力は多い方がいい」

そんな会話を聞く内に、口論の内容を理解していくミューロ。

要は隊長達の搜索か、撤退かで揉めているのだ。

「我々の現在の戦力は、GMが1機あるだけだ。新型機の奪取どころか、こんな程度では自衛もままならんのだよ」

ミューロの見覚えのない太った男は、比較的落ち着いた表情で言う。

「今、別の敵部隊に遭遇したら、全滅か投降かだ。それは貴官も理解しているだろう」

「それは……」

フィリス少尉は反論することができずに、視線を落としてしまう。

「すぐにイーハ中尉を呼び戻せ。GMが1機じゃ護衛の戦力として不足だ」

太った男、ベルナルド大尉は既にフィリス少尉から視線を外し、オペレーターにそう指示を出す。

「敵機との位置関係から、交戦しているようですが……」

「構わん、今はこの場を脱出するのが最優先だ」

そう言われるとオペレーターは逆らうことができず、ガンダムに対して通信を送る。

「ガンダム、イーハ中尉、応答してください。イーハ中尉」

『現在、敵を追撃中だ。通信は控える』

通信が通じてすぐに、中尉はその一言だけで強引に通信を切る。

その通信内容を聞いたミューロは、通信用のインカムを無理矢理オペレーターから奪うと、もう一度中尉に通信を入れる。

「おい、馬鹿ファレル！応答しろ！」

『んなつ！……その声、ミューロか？』

中尉はかなり驚いていたが、ミューロはそんなことは意にも介さずに通信を続ける。

「そうだよ。それよりも撤退命令が出たんだ、すぐに帰投しろ」

ミューロは通信を切られる前に、手早く用件だけを伝える。

しかし、中尉の返事は拒否に近いものだった。

『隊長の仇を取ったら、すぐに戻るさ』

普段の彼にはない、真剣味を帯びた声。

ミューロは、彼が本気であることを一瞬で理解し、だからこそ可能なことを真剣に実行しようとしている彼をなんとか呼び止めようとした。

「いくらガンダムとはいえ、新型を2機相手するなんて無理だ」

『ガンダムに不可能は無い！』

無茶苦茶な、もはや精神論に近い言葉で返され、理屈が通じないところまできていることを知った。

だが、ミューロは諦めない。

「第一、お前のガンダムは本当のガンダムじゃない、プロトタイプだろうが！」

『プロトタイプだけでもガンダムはガンダムだ！』

そんな切りが無い会話を横で聞いていて、我慢できなくなったベルナルドは、ミューロからインカムを取り上げて、通信の相手である中尉に怒鳴りつける。

「中尉、すぐに戻れ！これは命令だ！」

『ああ？大尉殿ですか？お言葉ですが、その命令は実行は不可能であります』

慇懃無礼な態度で通信に応じた中尉は、撤退が困難だという現在の状況を伝える。

『現在、自分のMSは2機の新型に発見された可能性があります。早い話が撤退は困難なんですよ。はつきり言って無理。じゃ、そういうことで』

「待たんか、イーハ中尉！これは、命令違反だぞ！」

先ほどの言葉を最後に中尉は通信を切るつもりだったが、『命令違反』という言葉に反応して、もう少しだけ通信を続けることにした。『では、このまま撤退しましょう。敵軍の新型機2機をそちらに連れていくことになるかも知れませんが、それは命令を下したあなたの責任ということで宜しいな？』

中尉との通信は、その言葉を最後に、これ以降行われることは無かった。

「やっと見つけたぜ、隊長の仇！」

中尉はジオン軍の2機の新型をモニターに点として捉えると、その点に向けて自機を全速力で直進させる。

機体同士の距離が急速に縮まることによって、モニターに映る点だった物は、その本来の形を表していく。

ジオンのMSも急速に接近してくる中尉のガンダムに気付いたのか、開いていたコクピットハッチを急いで閉じた。

「コイツはラッキー！」

新型は2機ともコクピットハッチを開き、会話でもしていたのだから。

そのため、中尉のガンダムが現れたことに対して対応が遅れ、先制攻撃を許してしまう。

「喰らえ！」

操縦者のその一言とともに、黒いガンダムは半壊したシールドをビームライフルを装備した新型に向かって投げ付ける。

その一撃はパイロットの不意をついたらしく、シールドを喰らった新型機は後方へと転倒してしまう。

「プロトタイプガンダムのパワーを見せてやる！」

ガンダムはもう1機の新型機に向かって距離を詰めながら、ビームサーベルを抜刀して斬り掛かる。

新型はその一撃を手にしたばかりの日本刀で受け止める。

さらに反撃として、もう片方の手にあるナイフで胴体を刺そうとする。

「させるか！」

ガンダムはそのナイフを持った腕を押さえることで、これを防ごうとした。

新型機の左腕が拘束され、その動きが止まる。

しかし、その手にあつた刃は止まることはなく

その勢いを携えたまま、ガンダムの中枢とも言える部分を、完全に破壊した。

「RX-78-1 プロトタイプガンダム、シグナルロスト機体識別信号消失」

ガンペリーに搭乗するオペレーターが、消え入りそうな声で言う。

「嘘……だろ？」

ミューロはあまりの出来事に、それ以上の言葉が出ない。

それは、S R T - Unit 2の隊員全員に共通する思いのようで、ガンペリー内の空気は重厚なものになっていく。

そんな中、場の空気を読めない人間が1つの指示を口にする。

「発進させる、これ以上ここに留まることはできない」

ベルナルド大尉は淡々と指示を下し、その表情に人間らしさは微塵も無い。

当然、下した命令もS R T - Unit 2のことを考慮した意見ではなかった。

そんな命令に彼らが反発しないはずもなく、機内は険悪な空気に包まれる。

「その命令は実行できません」

そう言ったのはガンペリーの機長だった。

「せめて、脱出したと報告があつたハーメル曹長が戻るまで

」

カチャリ

その音は、ガンペリーの操縦室内によく響き、同時に機長の言葉を途切れさせる。

「命令だ、貴官の意見は聞いておらん」

ベルナルド大尉は右手に拳銃を持ちながら、もう一度命令を発する。

「今すぐこの場を離脱する。ガンペリーを発進させる」

「お断りします」

機長は拳銃に怯むことなく即答し、そして

銃声が機内に響いた。

「ゲアッ……」

呻き声を漏らして、その場に跪くベルナルド大尉。

その後ろには、硝煙を上げる拳銃を持ったミューロが立っていた。

「き、貴様……」

「拘束しろ！」

ベルナルドが抗議する言葉を遮るかのように、部下へ命令するフィリス少尉。

「な、なんだと！」

彼女はその言葉も無視し、彼女の部下達は手際良く手錠でベルナルドを拘束する。

「き、貴様ら、これは軍法会議モノだぞ！」

そう言つてUnit2の面々を脅そうとするベルナルド。

だが、弱腰で放たれたその言葉に屈する物はおらず、逆に脅される結果となる。

「軍法会議かあ、怖いなあ。証拠隠滅すれば、免れられるかな？」

ミューロはそう言つてもう一度銃をベルナルドに向ける。

「ひっ！」

ベルナルドは怯えながら後退り、その背中をガンペリーの壁にぶつける。

なんとか手を拘束された状態で逃げようとするが、上手くいかない。しかし、そこに彼にとっての救いの声が訪れる。

「ハーメル曹長が帰還しました！無事です！」

その後、彼らは無事に連邦軍の奪還したオデッサ基地まで撤退できた。

彼らの顛末については……

SRT - Unit2は解散となった。

スオン・セード大佐

ファレル・イーハ少佐

その2つの名前は戦死者リストに載ることになった。

ミューロ・トリエル曹長は、傷痍軍人として除隊。

MSパイロットの半分以上を失ったSRT - Unit 2の存続は、不可能であった。

ベルナルド大尉は、SRT - Unit 2の数名を軍法会議に懸けた。しかし、あの時に操縦室にいた者に大尉の味方はおらず、彼の妄言として処理されてしまう。

そして、その影響と銃傷によって職務復帰が終戦以降となったため、手柄を上げることができずに左遷されてしまった。

終戦後は、アフリカ辺境の基地、ハルツーム基地の副司令となったが、それは辞職に程近い閑職であった。

0084年に基地司令であったノーマン大佐が不祥事を起こして更迭され、基地司令に繰り上げられたものの、彼がこれ以上出世を果たすことは無いだろう。

なお今回の事件で、彼はエリートという人種を忌み嫌うようになり、後にハルツーム基地に降りるテイターズの人間がその弊害を受けることになる。

唯一、パイロットとして軍に残った彼は……

宇宙世紀0079 11月30日 連邦軍基地 屋外

「そうか、父さんは……」

悲しそうな表情で、涙を堪えるミューロ。

その隣で、あの日、ミューロの機体が撃墜された後にあったことを伝えたハーメルは、険しい表情で地面を睨みつけている。

「ごめん、父さん、気付けなくて……」

そう言うとミューロは、ポケットから何かの紙を取り出して地面に置くと、それにライターで火を着けた。

燃える紙を見ながら、ハーメルは言う。

「ミューロ、僕は宇宙そらに上がります。隊長達の仇討ちは任せてください」

それ以降、2人が出会うことは無かった。

「ハーメル、お前は死ぬなよ」

ミューロのその願いは、叶うことはなかったのである。

十七話、十八話接続話：クローディアの最期、エーリツヒの拾い物（前書き）

エーリツヒがどこからガンダムを持ってきたのか？
クローディアは最終的にどうなったのか？

そんな疑問への回答です。

プロローグ並みに短いのは御愛嬌

時系列的には、第十八話、セード少佐が撃たれたあたりからです

十七話、十八話接続話：クローディアの最期、エーリツヒの拾い物

「ちっ、動け、動けよ！このクソマシン！」

口汚い言葉を吐きながら、陸戦型ガンダムのコクピットで操縦桿をガチャガチャと動かすクローディア。

コンソールを弄ったり、前面のモニターを蹴ってみたりするが全く動く気配は無い。

クローディアはこの機体に自分の機体を撃破され、脱出した。

しかし、この機体も何らかのトラブルがあったらしく、パイロットが脱出してきたところを射殺したのだ。

結果として、殺した人間の持ち物を奪う形で、クローディアはこのシートに座っていたが

「動かないんじゃない意味が無い！」

彼女はそう言っただけでその機体を諦め、コクピットから降りた。

「やあ、クローディア。久しぶり。クロードは元気かい？」

彼女がその声を聞いたのは、陸戦型ガンダムを降りてすぐのことだった。

「だ」「……」

パン

クローディアは『誰だ！』と言いながら勢いよく振り返ろうとしたが、1発の銃弾がそれを許さない。

彼女の身体はその場に落ち、その間に声の主は接近してくる。

銃傷で痛む身体をなんとか向き直らせると、そこには彼女が予想していなかった人物がいた。

「エーリツヒ……！」

「屍食鬼隊がいてくれて、正直助かったよ。連邦軍を潰すのに利用

できた」

淡々と語るエーリツヒに、クローディアは怒りを禁じえなかった。「キシリア様選ばれた我々に刃向かって、只で済むと思うなよ」「クローディアは静かな怒りを宿した声で言うが、エーリツヒは全く動じていない。

それどころかその表情は、嘲るようなものに変わっていた。

クローディアは、その理由を次のエーリツヒの言葉で理解する。

「キシリアに選ばれた？モルモットの廃品利用風情が、まだそんな妄執を信じていたのかい？」

その言葉はクローディアにとって、否、屍食鬼隊にとって最も屈辱的な言葉だった。

倒れ伏した状態から銃傷が痛むのも構わずに、銃を抜いてエーリツヒを撃とうとする。

しかし、銃を掴んだ方の手の手首を踏みつけられ、動きを止められる。

「酷いなあ。同じフラナガン機関の出身じゃないか。仲良く……、する気は無いけどね」

そう言つてエーリツヒはもう一度引き金を引いた。

銃口を彼女の顔に向けて

それからエーリツヒは何事も無かったかのように、陸戦型ガンダムを見る。

（良さそうな機体だ。なんとか直せないものかな？）

エーリツヒはそんなことを考えながら、すぐにその機体の損傷箇所をチェックする。

（難しいな。ジオン機には使われていない部品が多い）

更年期障害

突然、そんな言葉がエーリツヒの頭の中に浮かんだ。

見た目からは損傷しているように見えないが、内部機構に深刻なダメージがある機体のことを、こう表現した整備士仲間が居たのだ。

「難病だな。ま、部品が無いのであれば、薬が無い時の医者と同じだ。できる仕事は大いに減る」

誰に言うでもなくエーリツヒは呟く。

（ま、医者と比べて1つ厄介なのは、患者次第で必要な薬が全然違うことだね）

それでもエーリツヒはなんとか直せないものかと頭を捻るが、答えが出る気配は無い。

（仕方が無い、一度サムソンに戻って隊長と合流しよう。戻るまでに答えが出なかったら……諦めるか）

そんなことを思いながら、全く問題解決の為にはなりそうにない一歩を踏み出すエーリツヒ。

その行動がしつかりとガンダムの整備という問題を解決してしまうことを、彼はまだ知らない。

第十九話：過去の問題、現在の課題（前書き）

更新間隔の空きの長さが異常であります。

一個しか作品無いのに、この遅さは絶望的ですね。

もうちょっとガンバラナイト

第十九話：過去の問題、現在の課題

宇宙世紀0079 11月20日

ロウとエーリツヒ、たった2人の部隊とも言えない部隊は、しばしの休息をとっていた。

エルズルム市街地 ホテル内

もつとも、そこは休息ぐらいしかできることのない場所だったのかもしれない。

部屋全体が微妙にカビ臭く、電気といえば天井の電球が3つほど、他に電気を必要とする道具はこの部屋には置かれていなかった。風呂場こそあるものの当然のようにシャワーしか無く、それすらも満足に働かないのかお湯を浴びていても突然水が降ってくる始末。多少カビ臭くとも車内のシートやMSのコクピットとは比べ物にならない寝心地のベッドがあることが、彼らにとって唯一この場に留まる理由だった。

「民間の安宿とはいえ、シャワーがあるのは有り難い」
瘦せ我慢か本音が、そんなことを言うロウの格好は、普段着慣れた軍服を脱ぎ、バスタオル1枚を肩に掛け、下半身には下着だけという非常にラフなものだった。

「とりあえず、服を着たらどうです？せっかく買ってきたんですから」
エーリツヒはベッドに座ったままロウに袋を投げ渡す。

そういうエーリツヒは、既に街で若者が着るような格好（といっても、Tシャツとジーンズというとりあえず街を歩くのに

差し障りのない程度のもだったが）に身を包んでいた。投げ渡された袋をキャッチしながら、ロウは素早い動きで脱衣所へと戻る。

屋内とはいえ下着とタオルだけでは、11月下旬の寒さは人が耐えられるものではなかったのだ。

ある程度環境が調整される月面都市で育ったロウのような人間であれば、尚更だった。

（軍服以外の服を着るのは、かなり久しぶりだな）

ロウはエーリツヒが買ってきた私服に袖を通してながら、そんなことを考えていた。

若者が着るにしては地味で飾り気の少ない服装だが、動きやすく機能的で、何より値段が値札の上からシールで何度も上書きされていた。

（戦時中なのに、何で安売り……ここには戦火が及んでいないのか？にしても……）

ロウはそこで寒さに負けて思考を停止させ、素早くエーリツヒの選んできた服に腕を通す。

気温が冷たければ服も冷たい。ロウは腕や胴体などの服に触れた部分から、忘れていた当然のことを強制的に思い出させられる。

「やはりジオンは……、地球侵攻などすべきではなかった……」
ロウの言葉は、後悔というよりも呪詛に近いものだった。

その矛先は何処に向けられていたのか……、彼自身もよく分かっていた。いなかったらどう。

「大体、地球に降りた者の中に地球の環境に慣れた者がどれほどいたというのか……」

ロウは独り言の続きとなるジオン軍上層部への恨み言を言いながら、脱衣所から姿を現した。

私服に着替え終わった彼の目に最初に留まったのは、Tシャツ姿の

エーリツヒだった。

「エーリツヒ、そんな姿で寒くないのか？」

当然といえば当然の疑問を口にするロウに、エーリツヒは淡々と答えを返す。

「問題無いです。部屋にいるときは布団を、外に出るときは上着を着ますから」

「……結局、寒いんじゃないか」

ロウはエーリツヒの返答が意味する本質を汲み、その問題を解消すべく行動を起こすことにした。

「もう一度出かけるぞ、エーリツヒ」

「はい。……え？」

エーリツヒは条件反射的に同意してしまったものの、ロウの提案の意図を汲み取れず、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「不要な外出は避けるべきです。ここはジオ……我々の管轄では無いのですから」

盗聴でも気になっているのか、ジオンという単語を意図的に言い直したエーリツヒ。

彼はこのエルズルムに入ってから、些か神経過敏になっているとロウは考えていた。

外出のこと然り、盗聴を気にしていること然りだ。

「大丈夫だろう。こんな安宿の一部屋にまで盗聴器は無いさ。それに外出にしても、部屋に引き込みもろうとする方が不自然だしな」

そう言つてロウは、エーリツヒを安心させようとするが、彼の次の言葉から効果は無かつたようだ。

「外に連邦軍の調査員がいるかもしれないじゃないですか」
多少声を荒げて非難するように言うエーリツヒ。

「ならば用を済ませて、さっさとここから出る。それで良いか？」
その非難に対するロウの言葉は、疑問の形を取りながらも、有無を言わさぬ押しもの強いのだった。

「……了解です」

売り言葉に買い言葉という感じで不承不承ながら承服するエーリツヒ。

明らかに険悪になった2人の間の空気に、ロウは気まずそうに口を開く。

「あー……、勘違いするなよ？」

ロウは軽く咳払いなどをしつつ、エーリツヒに背を向けつつ言葉を続ける。

「我々はいつ、戦闘に身を曝すか分からんからな。無用なストレスは避けるべきだ」

「たとえ、寒さなどといった些細なことでもな」

そのロウの言葉を聞いたエーリツヒは、苦笑、もしくは失笑のようによく分からない表情をしていた。

ただ一つ確かなことは、その表情に嫌悪感が含まれていなかったということだ。

先程までの重たい空気は、見事に払拭されていた。

「服と言われても、正直ピンとこないですね。今まで軍服と整備班用のつなぎしかまともに着たことないので」

古着を扱う店に入った若者2人は、その年齢からは想像できないほどファッションに疎かった。

「他に何か着たことは無いか？自分はここ数年は学校の制服が殆どだったからな」

そんな彼らは、古着屋に入るには明らかにスキルが不足しているように思われたが、彼らがこのような店に入ったのは別に理由があった。

その辺りにあったハンガーで懸けられた服を手に取り、それを難しい顔で見るエーリツヒ。

「やはり古着というだけあって安価ですね」

エーリツヒのその言葉に、場違いながらも2人がこのような店を選んだ理由の全てがあった。

「全ての古着が安価という訳ではないと思うが……まあ、ここはそういう店だしな」

そう言いながらロウは、当たり前障りのない地味な色のチェックのシヤツを手取る。

（そういえば彼も、こういう古着とか好きだったな）

そんなことを思い出し、過去へと思いを馳せていくロウ。

宇宙世紀0076 12月22日

サイド3 ジオン公国 ジオン軍士官学校

「あのヴィンテージあるじゃないか、お前が欲しがってたの。あれ、570から530まで値下げしてたぜ」

「本当かよ！？すぐに買いに行かねえと！」

ロウはそんな会話を遠くに聞きながら、校舎の窓から顔を出してMSの演習場を眺めていた。

彼の視線の先にあるのは、紅に染まる演習場の無機質なコンクリートの壁とやはり無機質な緑色の巨人だった。

そんな彼に歩み寄る人影が1つ。

「あのヴィンテージジーンズ……、俺も狙ってたんだけど、先を越されちゃったか」

独り言のようなことを言いながら近づいてくる青年。

ロウはその口調や声質が長い付き合いである友人のものだと解り、彼の名を呼びながら振り返った。

「マレットか」

「何を見てたんだ？」

マレットと呼ばれた青年は、無遠慮にロウのいる窓に肘をつき、口

ウと同じ視点で窓の外を眺める。

「もしかして、緑色の恋人か？ピンクの一つ目がチャームポイントの」

マレットはその窓から見えた物の中から、一番印象に残った物を冗談めかして言ってみる。

ロウはその問いに言葉は返さず、ただ首を横に振った。

「じゃあ……何だ？……解らん！」

マレットはもう一度窓に目を戻して再びロウの目的物を探すが、それらしきめぼしい物は見つからず、すぐに諦めの声を挙げた。

「答えは？」

マレットは期待の色がはつきりと見てとれる瞳をロウに向けながら問う。

「ただ、ぼんやりと外を眺めていた。それだけだ」

「なんだよ」

すっかり落胆し、その心境をうなだれることで表現したマレット。彼は途端にロウとの会話への興味を失い、それをきっかけとして会話が途切れる。

人工太陽と『河』からの光が作りだした夕陽を模した紅い光が、沈黙の空間を照らしていた。

「隊長？」

エーリツヒは、どこか上の空なロウに訝しげな視線と共に呼びかける。

ロウはその呼びかけでやっと我に返ったのか、少し驚いた様子でエーリツヒを見る。

「ああ、なんでもない」

「どうしたんです？なんだか上の空でしたよ？」

エーリツヒは心配そうにロウの様子を窺うが、対するロウの返事は

要領を得ないものだった。

「少し、昔のことをな……」

「昔のこと……ですか」

ロウのその言葉に対して、無自覚に声のトーンを落としたエーリツヒ。

察しが良いロウは、これ以上過去に踏み込むことはお互いの為にならないことだと理解し、話題を変えようとする。

「まあ、過去の話は戦争が終わってからでもできる。

問題は、これからどう生き残るか、具体的に言えば、どうやって宇宙に上がるか、だ」

過去から無理矢理目を反らし、目の前の現実へと逃避するロウ。

尤も、逃げ出した先も逃げ出す前にいた場所と同等かそれ以上に過酷なものだった。

何時尽きるとも知れない食料を始めとした日用品。

稼働率が下がる一方のMSや、燃料が心許なくなってきたサムソン。友軍との連絡はつかず、補給も自前で行わなければいけない。

更なる悪条件として、連邦軍の追撃部隊がある。

（コーカサスやヴォルゴグラードも時間の問題……、いやもう陥ちたかもしれないな）

（ここもそんなに安全ではない。やはりさっさと出て行くのが得策だな）

頭の中でそのように考えを纏めたロウは、適当に漁った服の中から1着を選び、それ以外を元に戻すとすぐにエーリツヒに声をかける。

「選んだか？」

「え？あ、はい。これで」

そう言つてエーリツヒがロウに渡したのは、ジーン生地の作業着だった。

（エーリツヒ、他に服を知らないのか？）

喉元まで出かかったその言葉を、寸でのところで飲み込んだロウは、

何も言わずにその作業着を受け取って会計へと向かった。

ロウは自分用の着替えとエーリツヒの作業着、それと会計へと向かう途中で目に入ったコートを店員に渡し、懐に入れていた『あるもの』を探す。

「……あつた」

そういつたロウが懐から手を出す。そこにあつたのは、数枚の紙。その紙が描く機械的な長方形は、『会計』という場所もあつてあるものを連想させる。

紙幣

かつて人類が流通を電子ネットワークに任せきっていなかった時代に使用されていた物で、西暦から宇宙世紀に移ろいく中で、あるいはそれよりも以前に、完全に過去の遺物となつた代物、を想起させた。

しかし、ロウの取り出したそれは、紙幣とは少々趣を異にしていた。Earth Federation Forthと中央に大きく描かれたそれは、本来ロウが持っているはずのない物だった。

「軍票……ですか」

会計をしていた店員が、落胆したような声と表情で言う。

ロウが持ち出した物は、確かに軍票だった。

しかもそれは、ロウ達の敵である地球連邦軍の物だったのだ。

「お客さん、軍人さんですか？連邦軍の」

「違うな」

店員の問いを即座に否定するロウ。

「え？」

「自分は連邦軍の軍人なんかじゃない」

頭の中に疑問譜を浮かべる店員に対して、ロウは服のポケットの中に手を入れると、とんでもないことを言いはじめた。

「もつと賤しい者だよ。少し前までは物乞いだったな。その軍票は軍人さんから貰ったんだ」

カチリ

ロウがそこまで言った後、唐突に何かの音が響いた。しかし、ロウはそんな音など聞こえなかったかのように自然に会話を続ける。

「その軍人さんからは、もう1つ貰った物があるんだ。何だと思う？」

店員は、自身の聞き間違いでなければ、先ほどの音は、客である青年のポケットに入れた手の方から聞こえたような気がした。そして彼は、聞き間違いなどしていなかった。

「さて、払う物は払ったし……、もう自分も行っても良いよな？」
店員は慌てて軍票を懐にしまうと、それを見届けたロウは満足そうに頷き、会計場を後にした。

ロウ達が店を出た後、会計の店員が悪態をついていたことは言うまでもない。

「……一般市民相手に何をやっているんですか」

店を出たエーリツヒの第一声は、そんな呆れ声だった。

「古い友人が使った手だな……」

「そんなことは聞いていません」

エーリツヒは説明を始めて誤魔化そうとしたロウを遮り、鋭い返しを叩き込む。

「ま、良いですけどね。多分、もうこの町に来ることも無いでしょうし」

もはや慣れているのか、彼の声には諦めの色が混じっていた。

「お前のやることには、いつも肝を冷やされる」

「それは……、お互い様だ」

そんな会話が交わされている場所は、工場が多く建ち並ぶコロニーの一角だった。

目が慣れないと1歩踏み出すことすらも覚束ない暗闇の中、会話を交わす2人は確かに相手の存在と位置を認識していた。

「まさかあんなところで、モデルガンを持ち出すとはな」

「形状や重量はもちろん、発砲音まで本物に瓜二つだって触れ込みだったからな」

そう言つて彼は、話題に上つた右手に握られたそれを示す。

「先に撃鉄を鳴らしておいたのが、効果的だったか」

興奮しているのか、荒くなつた息を整えながら小声で話す2人。

彼らの近辺では、彼らに対する追手の慌ただしい足音が響いていた。

「そういえば、エーリツヒ。あの軍票は一体どこで入手したんだ？」

嫌な思い出を思い出しそうになつたロウは、それを阻止する手段として、突然、脈絡のない疑問をエーリツヒにぶつける。

エーリツヒは突然の問いに驚くこともなく、皮肉を交えて応える。

「そういうことを気に掛けるんでしたら、あんなことに躊躇いなく使つたりしないと思うんですが……」

呆れた声で返しつつ話を濁そうとするが、心理戦に長けたロウ相手には詮無きことと思ひ直し、正直に答える。

「ある連邦軍の兵隊さんから譲っていたんですよ、あのガンダムと一緒に」

その答えと共にエーリツヒは嫌な過去を思い出し、黙ってしまった。
(屍食鬼隊、もう既に別のところに逝つたというのに……、僕は未だに彼らの呪縛に囚われている……)

彼らの間に訪れた沈黙は重く、それ以後彼らはサムソンに到着する

まで口を開かなかった。

エルズルム郊外　ゴーストタウン

人の気配が一切無く、建物だけが取り残された元市街地。

開戦から10ヶ月が経過した現在、この場所のような人に見捨てられた街は多かった。

開戦直後に地球へと叩き込まれた、スペースコロニーという巨大な質量。

それがもたらした災いは人類史上、他に類を見ないものであり、その影響は地球の各所に出ていた。

地球のどの場所が安全ということはなく、生活が成り立たなくなつた場所も100や200ではなかった。

この場所もそうした事情で棄てられたのだろうか、もしくは戦前からゴーストタウンだったのか。

しかし、現在の住人達モビルスーツ追加された2つの人の気配や、無機質で巨大な人形達モビルスーツは、この場所が廃墟になつた理由

に興味を示すことはなかった。

彼らがこの街に求めることは廃墟であること、正確に言い直せば人が全くと言っていいほど寄りつかないこととある程度の大きさのある遮蔽物があることであり、その経緯は考慮の対象に入っていなかった。

そして、この場所のことを考えていた彼らも、次の考え事、彼ら自身の先の事へと頭をシフトさせていた。

「アデン基地までもう少し。その間に敵襲が無ければ、何も問題は無い……」

彼の声の他には風の音ぐらいしか音源が無いせい、ゴーストタウン

ンにロウの声はよく響いた。

「連邦軍の追撃部隊の進撃速度、どれほどのものでしょうか？」

コートと作業着というミスマッチな格好とは対照的に、深刻そうな
声音で話すエーリツヒ。

彼はデザートカラーに塗装されたサムソンのドアに手を掛けながら、
その荷台に鎮座する2機のMSを見る。

直後、彼は漏れ出そうになった溜息を飲み込むと、さっさとサムソ
ンに乗り込みエンジンを始動させた。

「それだな、問題は。連邦軍さえ来ないなら、アデン基地へは5日
ほどで到着するだろうが……」

先ほどの話の続きとなる言葉を、後からサムソンに乗り込んだロウ
が言う。

対して運転席に座ったエーリツヒは上着を脱ぎつつ、最初から車に
載せられていた地図を彼に手渡した。

「？」

脳内に疑問符を浮かべながらも地図を受け取るロウ。

その反応を察したのか、地図を手渡し、現在はハンドルを握ってい
るエーリツヒが自身の意図を話す。

「ベイルート航空基地に向かえば、空路を使うことで時間短縮にな
るかもしれませんが」

その言葉を聞いたロウは、考え込むような仕種を見せた後で自分が
隊長として出した結論を言う。

「これはある意味、ギャンブルだな」

「え？」

エーリツヒは、その言葉の意図を掴みかねたようで、今度は彼が頭
に疑問符を浮かべることになる。

「エーリツヒ、君は1つ大事なことを忘れてるようだが……」

それを先読みしているかのようになり、ロウは言葉を付け足しはじめる。

「我々が正規軍と同様の扱いを受けられる可能性は高くない」

「！」

エーリツヒはそのことを完全に失念していたようで、バツの悪そうな表情を相手に見せないように前を向き直す。

「……そうでしたね」

彼は短く言葉を切ると、小さく溜息をついた後、黙ってしまった。その後、しばらく車内を沈黙が支配したのは言うまでもない。

「やはりベイルートへ向かおう」

長きに亘る沈黙を破ったのは、ロウの唐突なその一言だった。

「……？ 了解です」

しかし、エーリツヒは一瞬反応が遅れたものの、特に何も言わずに道程の変更を受け入れる。

流石にロウもエーリツヒが無反応だったことは予想外なようで、視線をそれとなくエーリツヒに向けている。

「？ どうかしました？」

彼もその視線に気づいたようで、今度は素直にロウに疑問を投げかける。

「いや、疑問とか無いのか？」

「？ ですから、先ほどからこちらを見ている理由を聞いているのですが」

「……そうじゃなくてだな」

今度はロウが決まりの悪そうな表情で頭を掻きながら、気になっていることを問う。

「進路変更について、だ」

「ああ、そのことですか」

エーリツヒは合点がいったようで、そのことに関して簡潔に説明した。

「ちょっとした仕返しです」

そう言ったエーリツヒの顔には、悪戯っぽい微笑があった。

「ベイルートでMSだけでも整備させてもらおうと思っただけで、突然の進路変更の理由を簡単にエーリツヒに告げる。」

「そうですね。ガンダムもそこで降ろしてしまえば……」

「そうか。そういえばあつたな、そんな物も」

言いながらロウは後ろを振り返り、座席の後ろに付けられた窓から『それ』を見る。

RX-79「G」 陸戦型ガンダム

以前の戦闘でロウ達が鹵獲した地球連邦軍のMSである。

戦闘によるオーバーヒート等が原因で稼働できない状態だった物を、エーリツヒがその場で撃破した他の連邦軍MSのパーツを使い、修復した機体だ。

故にオリジナルの機体とは中身が少々異なっており、さらに正規部品の調達が不可能に近い状態である本機は、パーツの寿命が機体の寿命と違って差し支えない。

悪条件とは重なるもので、整備後はサムソンの荷台に座らせる時、しか動かせなかったため、不慣れなパイロットしかいないことも問題に挙げられる。

重量を可能な限り少なくするため、マシンガンやシールドもシンフエロポリに捨て置かれ、武装は固有兵装のみ。

そんな状態であるから、戦力として数えられていないのが現状である。

ロウはその戦力外のガンダムを見て、1つの考えが頭を巡った。

（ガンダム、か。これを奪取した手柄を手土産として、ベイルート基地と交渉するのはどうだろうか？）

ガンダムとは稀少な機体である。

それはRX-79「G」 陸戦型ガンダムとて例外ではない。

余り物や型落ち品とはいえ、RX-78シリーズの部品をも使用して造られた高性能な機体なのだ。

本国（サイド3）やグラナダの技術研究所に持ち込めれば、かなり有効なデータが得られるだろう。

(これを渡せば、エーリツヒの席ぐらいは確保できるか)
ロウはふと、運転席のエーリツヒを見る。

エーリツヒはその視線に気付かず、運転を続けている。

ロウはその後もしばらくエーリツヒを見ていたが、一向に気付く気配が無いので、前を向き直して別のことを考え始めた。

(今、襲撃を受けたら自分一人で迎撃しなければならぬのか)

(囿となって敵を引き付け、サムソンから注意を反らしつつ敵機を迎撃……。正直自信が無い)

彼が考えている通り、もしも敵襲があった場合、彼は相当無茶をすることを覚悟する必要がある。

エーリツヒもMSを扱えるとはいえ、慣れない連邦軍のMSで正規のパイロットでない彼にやれることはかなり限られている。

そしてエーリツヒをもMSに乗せると、今度はサムソンの運転席に就く者がいなくなる。連邦軍から鹵獲したガンダムを使うことは、はつきりいって不可能だった。

仕方なくロウは敵襲があったときに備えて、頭の中で戦闘シュミレーションを行う。

(この辺りに進出してくるなら、戦車だけということはないな)

ロウは周囲の起伏の激しい地形を見ながら、そんな風に考える。

(空軍は……遭遇したとしても、それほど大規模な部隊ではないだろう、多くて3機ぐらいか)

起伏の多い地形に、大きな飛行場は基本的に造られない。ならば、運用できる航空機部隊の規模も限られてくる。

(MS単機……有り得ない)

MSは複数で動く。これは開戦以来破られていないMSを運用する際の鉄則といって差し支えないものだ。

ロウが思案した結果、襲撃があった場合の敵戦力は最低でもMS2機以上もしくは航空機部隊という結論に至った。

早速、想定した敵部隊を迎撃する方法を脳内のシュミレートから探し始めたロウ。

航空戦力に対しての迎撃は、このサムソンに装備された機銃と、もう1機の搭載MS、イフリートの頭部バルカンで弾幕を展開することで対抗するという手段があっさりと思ひ浮かんだ。

しかし、対照的に地上兵力による敵襲への対策は、一向に考えつかない。

ロウがイフリートでどのように動こうとも、MSを載せたサムソンの方が遥かに撃破し易いため、真っ先に敵に狙われる目標となるからだ。

(どうしたものか……)

ロウはサムソンが次の目的地に到着するまでの間、ずっとそのことを考えていたが、ついに答えが出ることはなかった。

「着きましたよ」

ロウはエーリツヒのその言葉で、初めて車が止まっていることに気が付いた。

ロウは意識を考え事から現実へとシフトし、現状の把握を始める。

「ここは……どこだ？」

「ベイルートの北々東、約400キロ。人里があつたので時間との兼ね合いで停まりました……地図には載ってないようです」

地図に載っていない。

その言葉にロウはある種の危機感を覚え、1つの疑念を口にする。

「ゲリラの活動拠点じゃないだろうか？」

「確認はしていませんので、可能性が無いとは言い切れません」

「……」

ロウはエーリツヒのその言葉に黙ってしまい、手を首の側面にあてながらその村を見る。

「暗い……な」

思いついたように口を開くロウ。

「もうすぐ夜ですからね」

そんなロウの独り言のような呟きに、的確な返答を返すエーリツヒ。だが、彼はその言葉の真意に気付いていなかった。

「民家の近くなのにか？」

「言われてみれば……、怪しいですね」

エーリツヒも違和感に気付いたのか、村に向かって訝しげな視線を投げかけるようになった。

「十中八九、不法滞在者だろうな。まだ、ゲリラとは断定できないが」

ロウはそう結論付けると、村から離れてサムソンへと戻っていく。エーリツヒはサムソンへと戻るロウに気付き、そちらを振り向くが、何と声をかけて呼び止めるべきか解らずに呆然と立っていた。

「ここから離れるぞ、エーリツヒ」

ただ立っているだけで一向にサムソンに乗る気配のないエーリツヒに対して、ロウは彼へと行動を示唆する。

「どうしてですか？まだ、ゲリラの村と決まった訳じゃ……」

エーリツヒは疑問を抱きながらも、ロウの言葉に従ってサムソンの方向へと向かう。

「嫌な予感がするからだ」

ロウはエーリツヒがサムソンに乗り込み、彼がドアを閉めたのを確認すると、すぐにアクセルを踏み込み車を発進させた。

夜の空をジェットエンジンが切り裂く音がしたのは、それとほぼ同時だった。

それはロウ達が乗るサムソンを、文字通りに飛び越えていった。

「発見されたか！？」

ロウのその叫びが正しいことを証明するように、旋回を始める航空機隊。

「暗くて機種はよく判りません。数は3」

航空機隊は旋回のために減速したため、エーリツヒは何とかそれら

を視認できた。

「迎撃準備を行う。運転を任せる」

ロウはその言葉と共にサムソンを急停止させると、素早くドアを開き外に出る。

「御武運を……」

エーリツヒのその言葉は、一瞬早く閉じられたドアによって遮られた。

サムソンから飛び降りるように外に出たロウは、すぐにその荷台に上り、そこにあるMS、イフリートの側へと駆け寄る。

そして、ロウがそのコクピットに取りつくのと同時に、車が再び走り出す。

ロウは特に気に留めることもなくコクピットハッチを開き、その中へと自身を滑り込ませる。

その間の僅かな時間に、彼の視覚と聴覚が『異変』を捉える。

視覚が捉えた異変は、周囲が少し明るくなったように感じたこと。

聴覚が捉えたのは、彼の後ろで響く耳が痛くなりそうな轟音だった。

「くっ……」

後ろからの不自然な熱風を感じながら、ロウはコクピットに乗り込んだ。

戦闘は、ロウがこれまでに経験した戦い、そのどれよりも呆気なく終わった。

以前の戦闘で撃破した友軍機、イフリート・ナハトから移植した右腕、その付録である3連装ガトリング。

ロウは敵編隊に向かって、それを2度斉射しただけであった。

航空機3機のみ編隊は、1度目の斉射で機体を2機失い、2度目の斉射によって残る1機を地に墜とされた。

爆炎をあげる機体からパイロットが脱出する様子もなく、ロウは3機目が地についた時点でMSのカメラ視点を別の場所へと移した。

航空機が夜闇によく映える煌々と輝く炎を上げていたのに対して、そこは夜には気付かれることすら稀な黒煙を上げていた。

「不法居住者狩り……でしようか？」

エーリツヒが焼き尽くされた人の生活の跡を見ながら、深刻そうな表情で呟く。

ロウはそれには答えず、サムソンのエンジンを始動させるだけだった。

村から離れようとする2人が、村の側を通り過ぎようとした時、サムソンのヘッドライトが何かを映し出した。

そのシルエットに驚いて、車を急停車させるロウ。

しかし、制動距離が桁違いに大きなサムソンでは、そのブレーキは遅すぎた。

衝撃

そして、フロントガラスに飛び散る赤い液体。

それがどのような事態であるかを理解し、先に行動を起こしたのはエーリツヒだった。

ロウもエーリツヒの行動につられるように、車から飛び出す。

「キミ！大丈夫か!？」

ロウはその問いが無意味なことを頭では理解していたが、聞かずにはいられなかった。

先ほどヘッドライトに映された『彼』は、全身が自らの体液で赤黒く染まっており、顔は死人と同様に蒼白であった。

「おとうさ……おかあさん……」

その言葉を最後に、彼に残された身体の最後の部分である頭が、重
力に逆らうことを止めた。

宇宙世紀0077 1月3日

サイド3 住宅街

「父さん……母さん……」

彼はそう言つて、力なくその場に倒れ伏した。

その後ろから、彼の友人が駆け寄ってくる。

「マレット……」

気を失つた友人に対して呼びかける彼は、しかし何を言うべきか全
く分からず、黙ってしまう。

彼らの目前では、一戸建ての住宅が1つ、真っ赤に輝いていた。

「マレット……」

「? 隊長?」

エーリツヒの呼ぶ声に耳を貸すことなく、思考の深みへと向かう口
ウ。

（あの事件を境に、マレットは変わってしまった。いや、自分を捨
てたんだ。家の名前と一緒に……）

「隊長!」

強めな呼び声と共に揺さぶられることで、やっと現実へと戻ってき
た口ウ。

「えっ……、ああ……」

「この場を離れます。早く乗ってください」

不明瞭な返事しか寄越さないロウに対して、エーリツヒは無言を言わずに、ロウをサムソンへと押しこむ。

「今の貴方じゃ、運転は無理でしょう」

エーリツヒはロウを座席に寝かせて運転席に就き、一刻も早くこの場を離れようと車を発進させた。

「マレット……」

完全に生気を失ったロウは、ただかつての友の名前を継るようにつぶただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0929h/>

機動戦士ガンダム ZEON'S SOLDIER

2011年10月5日19時55分発行